
フリーユニオン

霧島卿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フリーユニオン

【Nコード】

N3824M

【作者名】

霧島卿

【あらすじ】

東京都八王子市にある、都立冥栄高等学校。都内屈指の進学校でありながらその実態は、青春の謳歌を第一に掲げる生徒たちの集う爽やかな高校だった。今年もまた希望を胸に抱いた新入生がその校門をくぐる。生徒会長の座を狙う一年生。変人美人の生徒会長。銀髪の中二病。真面目の皮を被った卑怯者。苦労人の爽やかイケメン。天才選挙管理委員長。天才少女に好意を寄せる、考えの読めない優男。彼ら、彼女らが出会い、それぞれの思惑が交わる高校生活が幕を開ける。青春群像劇が始まる。

第一話

午前五時。

まだ外は薄暗く、車が時折通るだけで、人通りはない。そんな時間にも関わらず、二階建ての一軒家から目覚まし時計の音が鳴り響いている。音源は二階の角部屋で、六畳程の洋室には、ベッドや勉強机があり、成人男性の腰ほどの高さの棚には、模造刀が何本も飾られている。

そのベッドから部屋の住人である、朝比奈醍醐が起き上がり、勉強机に置かれている目覚まし時計を止めた。軽く常態を反らし、それから部屋を出て洗面台に向かう。洗顔を済ませ、軽く何度かうがいをしてから着替えた。上下とも黒色のジャージだ。

眠っている両親を起こさないように慎重に階段を降り、玄関に飾ってある演技刀を専用の袋に入れて家を出た。行き先は、徒歩で二十分の川原だが、体を慣らす目的でいつもランニングをしている。五分程すると体が温まり始め、少し息が上がってきたところに川原に到着する。今日もいつも通りの時間だと、時計を確認して素早く次の動作に移る。手首と足首を念入りに回し、一通りのストレッチを終えると、袋から演技刀を取り出す。

鞘から一度刀身を抜き、汚れがないか目を細めて見極める。確認すると、目の前で納刀し、小石が散らばる地面に正座して背筋を正す。両手は膝の上に置き、右手で演技刀を握る。

一瞬の動作で中腰になり、左手は柄に軽く添えられている。顔は正面を向いているが、瞼はきつく閉じられていて、小さな呼吸だけが聞こえる。

刀身が鞘から放たれた。その太刀筋は、曲がったことが大嫌いとも言っているかのように一直線で統一されている。四度振るうたびに一度納刀し、その動作を休むことなく続ける。単純な練習のようだが、一定の動作を間違いなく繰り返すことは簡単ではなく、正

確にできるようになったのは今年の二月で、まだ一ヶ月半ほどしか経っていない。いくら繰り返し返しても飽きることはなく、初めて出来るようになった時の気持ちも今でも残っている。

この動作に疲れたら、次は抜刀速度の鍛錬に移る。抜刀術を近代武道化させた居合道において一番大切なことはそれだと彼は解釈していた。誰にも師事せずに勝手に鍛錬しているだけのアマチュアだが、これだけは自身を持っている。

本来の居合道とは、最初の抜刀で相手の攻撃を受け流して二の太刀で切る、といったものだが、彼からすれば最初の抜刀こそが勝負のように思えてならなかったからだ。

時計を見ると、あと二十数分で六時になろうとしている。そろそろ潮時だ。

一時間足らずの鍛錬の仕上げにかかろうと、腰を低く落とし、無駄な力が入らないように注意しながら演技刀を構えた。先ほどとは違い両目を見開き、真正面を見つめる。端の支柱部分が映る。所々微妙に色が違い、赤色のカラーズプレーで書かれたらしい落書きは、雨風にさらされたのか読み取ることはできず、年季を漂わせている。抜刀は一度だけだ。この一度で満足のいく結果がなくても、二度目は行わない。常に一度で極められるようにと、彼はあえてこの方法を選んでいる。

肩に季節はずれの蚊がとまる。だが血を吸おうとする気配はなく、まるで羽根休めをするかのように大人しくしている。

親指が柄に触れた。次に中指。そして一度に握り、抜刀する。

蚊は驚き、肩を離れる。演技刀を握った左手は、間者を一刀両断した用心棒の姿を書いた絵のように停止している。

結果からすれば満足だった。時計を見ると、あと三分で六時になるところで、二十分以上もあの姿勢で静止していたことになる。だが、苦痛はまったくなかった。彼からすれば数秒にも満たない感覚だった。集中力が高まっていた証拠だ。

その余韻を楽しむことなく、彼は演技刀を袋にしまい、来たとき

と同じ道を今度は歩きながら帰った。六時半に帰宅すればちょうど朝食の時間で、両親と一緒に食事を出来る。九時からは親友との約束がある。それまでは、四月から通うことになる高校から出された課題に時間を割こう、と彼は考えた。

「おかえりなさい、醍醐」

玄関を開けると母親の声が聞こえた。すかさず、ただいま、と返す。

リビングに行くと、すでに朝食が準備されていて、父親の姿もあった。醍醐の姿に気づき、おはよう、と笑顔で軽く片手を挙げた。またすかさず、おはよう、と返す。

「毎日、休まずに走っているのか？ 大変だな」

醍醐が席に着くと、父親は労うような口調で言った。そこに母親がエプロン姿でやって来る。「そうなのよ。雨でも、雪でも走るのよ。いいことだけど、そんなに暗い時間じゃなくてもいいのにな？」

両親には本当のことは教えていない。別に悪いことをしているわけではないので遠慮することはないと思っているが、朝から演技刀とはいえ刀を振り回していることにまだ少しだけ恥ずかしさが残っていたからだ。

「あの時間帯だと車が少ないから安全だから、心配しなくてもいいよ。それに、朝から走っておけば、目覚めが良いから。父さんもどう？」

正面に座る父は苦笑しながら首を振る。

「無理だよ。高校生と中年を同じにしないでくれ」

「そうね。お父さんには無理ね」

そんな母親の一言で食卓はさらに盛り上がる。

四月から高校生である醍醐だが、その年頃の子どもには珍しく彼は両親との時間を大切にしている。九時に約束している親友は、ウザい、と両親を煙たがっているが、醍醐からすれば理解できない考え方だった。

七時を少し過ぎる頃に父親が家を出た。職場は車で三十分程の所

にある製紙会社だ。営業課の主任をしている。一方の母親は専業主婦だ。

自分の食器を台所に運び、ごちそうさま、と一言いい。汗を流すために風呂場に向かった。簡単に体を洗い、タオルで体を適度に拭いてから脱衣所に戻り、筋骨隆々の体をバスタオルで拭く。鏡に映る自分の髪を見ると、一ヶ月でかなり伸びていた。一重で切れ長の目を瞬きさせながら、入学式までには床屋で整えてもらおう、と考えた。

部屋に戻ると、時計は七時半を指していた。指を鳴らしながら椅子に座り、ブックスタンドから課題を取り出し、愛用のシャープペンシルを握る。昨日までに得意教科である社会と国語を済ませたが、苦手としている英語はまだ手をつけていなかった。しばらくはなんとか解けたが、長文の問題になると手が止まった。一行目から知らない単語があり、飛ばそうとしたが、各行に必ず知らない単語がある。中学で習うような単語ではない。仕方なく辞書を引いて調べるが、英語独特の表現がどうしても理解できない。結局、八時を過ぎてもその長文から進むことはなかった。

完全に行き詰った英語に見切りをつけた彼は、数学の課題を取り出し、気分転換するために窓を開いた。新鮮な空気を吸い込み、軽く肩を揉み、そのままにして椅子に戻る。

数学の課題は分野別になっていて、彼は一番得意な方程式の頁を開いた。苦手な証明や図形は後回しだ。

得意な分野だけあって二十分程度で最後まで済ませることができたので、ここで一区切りをつけることにした。立ち上がり、部屋の隅に備え付けられているクローゼットから着替えを取り出す。シャワーを浴びた後に着た紺色のジャージを脱ぎ、茶色の綿パンを穿いて白色のＴシャツの上に同色の上着を羽織る。約束の時間は九時だが、待ち合わせ場所は徒歩で二十分かかるので早めに家を出なければいけない。また、五分前行動が彼の信条だった。

待ち合わせ場所の公園には、幼い子どもを連れた母親たちがいる

だけで人は少ない。それだけに、髪を銀色に染めた男はよく目立っていた。珍しいのだろうか、子どもたちは彼を指差している。高価そうな白色のスーツを着て、脚を組んでベンチに座っている。

「よお、醍醐」

公園の入り口に醍醐の姿が現れると、銀髪の男はベンチから立ち上がった。自分もそのまま歩み寄った。一步踏み出すごとに、腰のチェーンが鳴り、両指に三つずつはめた指輪が太陽光を反射する。

「早いな、光」

醍醐は、中学時代からの親友である銀河光ぎんがひかるの隣に並んだ。二人はそのまま公園から出て、しばらく道なりに歩き、バス停で乗車した。通勤の時間を過ぎていたためか、車内は空いていた。光ひかるは長いすに座り、醍醐は吊り革に掴まった。

しばらくは、高校から出された課題のことなどを話し、それから高校の話に変わった。

「お前は、部活とかどうする？」

「部活か……」

醍醐は唇を噛んだ。中学時代にはソフトテニス部に所属していたが、高校になってもつづける気はなかった。彼が通うことになる冥栄高校は、普通科以外にも体育かを併設していて、本気で部活動に取り組んでいる強豪が殆どだからだ。

返事に困って黙っていると、光ひかるは質問を変える。

「あれだよ　居合道か？　あれなら大丈夫じゃねえ？」

「ああ、そうか……」

確かに、居合道への取り組みには力を入れていた。中学三年生の夏休みから始めて半年以上、天候に関係なく休まず毎朝続けてきた。だが、居合道が部活動として成立しているかどうかは怪しい。それが問題だ。

「剣道ならまだしも、居合道をしている高校生は少ないだろ。多分、剣道部しかないと思う」

「まあ、そうだな。俺も、お前が友達じゃなきゃ、死ぬまで居合道

なんて知らなかったかも」

「だから、部に入るつもりはない。居合道は続けるけどな」
停留所に着き、バスが停車した。目的地は、まだ先だ。

「お前は、どうするつもりだ、光」

今度は醍醐が尋ねた。光は、待っていました、とでも言いたそうな表情で答える。

「俺は、生徒会長に立候補する」

またか、と醍醐はため息をついた。光は中学生時代にも生徒会長に立候補し、その全てにおいて落選していたからだ。落選しても諦めず挑戦する姿勢にはある程度の尊敬の念を抱いていた醍醐だったが、次第に失敗したことを反省せずに同じことを繰り返しているように見えてきて、最後の選挙では別の立候補者に投票した。誰にも応援演説を頼まず、立候補も期限直前に申請をするなど、とても真面目に生徒会長になろうとしているように見えなかった。

そして、今も彼は同じようなことを言う。

「とりあえず、最初の選挙に立候補して、一年生生徒会長を目指す。そしたら、お前を副会長にしてやるよ」

選挙前になると、必ず聞く台詞だ。偉そうに、してやる、と言うのはともかく、とりあえずという言葉を使うのが、醍醐としては個人的に気に食わなかった。

バスがまた停留所に着いた。醍醐は吊り革を離し、光の隣に座った。

「光、お前は、本気で生徒会長になるつもりなのか？」

こうして尋ねるのは初めてだった。表面上は応援するふりをしていたため、一度もその真偽を知ろうとはしなかったが、今回は知らなければならぬ。

「本気なら、俺は応援する。もしも、そうじゃないなら止める。本気で生徒会長になろうとしている人に失礼だ」

「おいおい、ちょっと待てよ！」

畳み掛けるような醍醐に、光は銀に染めた髪をいじりながら声を

荒げた。それに驚いた後部座席の乗客が怪訝な顔で二人を見る。

「悪い、言い方が悪かった。だから、大きな声を出すな」

自分の言葉選びを反省しながら、醍醐は後部座席の乗客に会釈し、それから光の目を見た。

「もちろん、俺はお前がふざけているとは思ってない。俺が言いたいのは、選挙に対する姿勢が杜撰すぎるということだ。準備が甘い、お前は」

「いや、だつてさ……」

「それに、どうしていつも一人で選挙に挑もうとする？ 誰かに手伝ってもらえばいいだろう。俺にも、一度も頼ってないよな？」

「……」

完全に光は沈黙した。視線は床に向き、銀髪に染めた髪を落ち着きなくいじっている。

「それに」

返答を待たずに醍醐はさらに続ける。これが一番言いたいことだった。

「光が、嫌な思いをしていることは、知っているだろう？ 俺ならともかく、自分の妹にまで迷惑をかけるな」

銀河光。銀河光の双子の妹で、彼のせいで不利益を被っている人物だ。

醍醐こそは、親友として光と付き合っているが、一般的に見れば彼は変人だ。銀髪に染めた髪や、周囲を威嚇するかのような装飾品、それらの全てが、中学時代の同級生を彼から遠ざけていた。妹の光にも当然その余波が及び、虐められるとまではいかなくても彼女の周りには人が寄り付かなかった。醍醐を除いては。

「兄妹だろうと、もちろんお前たちは別の人間だ。でもな、一般的には、血のつながりがあるだけで同一視されるだろう？ その親の社会的立場で子ども的人生が決まる、と言っただろう？」

極論だが、醍醐はあえて言った。極論は一見すると無意味で馬鹿馬鹿しいが、極論を知らなければその先に進めないこともある。

光は唸った。

「……あいつは、気にしていない、って言ってたぞ」
「お前に気を使っているに決まっているだろう。光は優しいからな」
バスのアナウンスが次の停留所が迫っていることを告げた。醍醐は降車ボタンを押して、運賃の準備をした。光は立ち上がり、千円札を取り出して両替機に向かった。

土曜日の校舎は静かだった。

運動部の人間が普通校舎で練習することはない。どの部活にも、個別に連取スペースが確保されているからだ。その場所も校舎からは離れていて、声が届くことはない。

その中で唯一人気がある北校舎には、職員室で仕事をする教師以外に、屋上の生徒会室で寛ぐ女子生徒の姿がある。座っているパイプ椅子を傾けて、黒髪を少し低い位置でまとめたポニーテールを揺らしながら、器用にPSPのアナログパッドを動かして、核戦争から世界を救った英雄を操作している。

「ほお、噂には聞いていたが、無限バンダナは反則だな」

何度もプレイして手に入れた隠しアイテムの効果は抜群だった。これまで弾切れに苦しんだことが嘘のように爽快だ。だが、その効果故にゲームバランスが崩れているような気がして、突発的に電源を落とした。青色のPSPを長机の置き、気分転換をしようと外に出た。ゲームは一時間ごとに十分休憩することが、彼女の鉄則だった。

北校舎からの眺めは最高だ。教師の昇降口を兼ねている正面玄関前の庭には人影はなく、そのまま視線をフェンス越しに見える街路に移すと、校門前をバスが通過していった。この高校の生徒が通学に使っているバスだ。停留所は、少しだけ学校から離れている。

両手を広げて深く深呼吸し、間近に迫った入学式のことを考える。

入学式で新入生への挨拶文を読むことが彼女の役目だ。それにも関わらず、まだ肝心の内容は一行も思いついていない。

昨日、教師から催促された際には上手にお茶を濁したが、自身でも危機感があった。

「やれやれ、遊んでいる場合じゃないな……」

生徒会室に戻ろう　踵を返そうとした瞬間、目端に人の姿を捉えた。

「ほお、面白そうだな」

真っ白なスーツを着た銀髪の男を凝視し、隣にいる真面目そうな男と比べた。どう見ても不釣り合いな組み合わせだ。

友達同士なのだろうか　と二人の関係を考えたが、すぐに頭より脚が動いた。

冥栄高校前の停留所で降りた醍醐と光は、しばらく歩いて正面玄関へ着いた。土曜日の校舎は静かで、誰もいないようだが、二人にとっては都合がよかった。まだ正式な入学を済ませていない段階で勝手に　それも私服で　校舎に入っつていいかは怪しい。

「それで、正面から入るのか？」

目の前に聳え立つ校舎を醍醐は一瞥した。

「知らなねえよ」

まだ、バスでの会話を根に持っているのだろうか、光はへひかる
《は自分が言い出したにも関わらず、不機嫌そうに舌打ちした。

「どうせ、誰もいないだろ。勝手に入ろうぜ」

醍醐に続いて光も校舎を眺める。その視線が屋上のフェンスに向けられたとき、人の姿を捉えた。女性だ。二人を見ている。

「おい、醍醐、誰がいるぞ」

桜の木を見ていた醍醐は肩を叩かれて振り返った。光が指差した屋上を見たが誰もいない。

「誰かいた。女だった」

悔しそうに目を凝らす光^{ひかる}だが、やはり誰もいない。不審な二人組みを見つけて職員室に駆け込んだのかも知れない、と不安に思った醍醐は、帰ろう、と耳打ちした。

「はあ？　ここまで来て帰るのか？　なら、お前だけ帰れよ！」

「教師にでも見つかったら厄介だろ。早く帰るぞ！」

光^{ひかる}だけでなく、醍醐も声を荒げた。お互いに不愉快そうな表情で睨み合う。二人の距離は拳が十分に届く距離だ。

死角から何かが近づいてくることに、険悪な雰囲気きんごうの二人は気がつかなかつた。大人が両手でやっと抱えられるほどの大きさのダンボールが歩いてきた。下からズボン穿いた脚が見えているが、やはり二人は気がつかない。そのダンボールは、醍醐の背後で停止した。そこでやっと、光^{ひかる}だけは、その存在に気がついたが、あまりにも不思議な光景に啞然とするだけで声を出そうともしない。

そうしていると、ダンボールから人の声が出た。

「　颯爽登場！」

威勢のいい掛け声と共に、ダンボールは空中に投げ出された。一触即発の雰囲気は一瞬にして破壊され、ダンボールの中から現れた女は、ポーターの黒髪を揺らしながら二人の間に無理やり割り込んだ。そして、二人の鳩尾を押して引き離れた。十字架のような姿勢で静止する。

今度は気まずい空気が漂う。ダンボールが落ちた音が生々しく響いた。

「良くないぞ、喧嘩は。見ている人が驚いてしまうからな」

十字架の姿勢を保ったまま女は二人の顔を交互に見た。それはこちの台詞だ、と言いつつになつた醍醐だが堪えた。

「ホストのような白スーツの男に、カジュアルな格好をした渋い容姿の男か　珍しい組み合わせだな？　君たちはどんな関係だ？」

驚いたぞ、私は。この学校にも、変な連中は多いが、君たちも大概だな。まさか、私を驚かせるために、そんな格好をしてきたのか？」

「いや……どう考えても、貴方が一番辺ですよ……」

「ははは、そうだな！ すまない、つつい興奮してしまったよ」

女は、体の力を抜くように十字架の姿勢を崩し、右手で前髪をかき上げた。

「自己紹介をしよう。私の名前は、あおしまみちる青島満。三年D組所属、出席番号は一番だ。仲良くしてくれ、二人とも」

綺麗に並んだ白い歯を見せながら。青島は両手を差し出した。切れ長の目で握手を促してくる。二人は恐る恐る応じ、二度ほどシエイクした。

「良い子だ。素直な子は好きだぞ」

青島は満足そうに笑った。ズボンを穿いた脚を叩きながら、さらに口を開く。

「それで、君たちの名前を覚えてくれないか？ もちろん、嫌ならばいい。私は、私が考えられる中で最悪のあだ名を君たちの呼び名にするだけだ さて、どうするか」

「朝比奈醍醐です！」

ぎんがひかる「銀河光！」

目を細めて妖艶な表情で考える素振りをする青島に、二人は反射的に名乗った。

「ほお、朝比奈くんと銀河くんか もののふそれなら、キャラクター武士君と銀河君でいいな？」

「結局、あだ名かよ、おい！」
光が濁った声で抗議する。銀髪に染められた髪が揺れる。

「キャラクターおや、銀河君、なかなか声をしているな？ その甘い声で、生徒会広報をしないか？」

「えっ、マジ？ 生徒会広報？」

「食いつくなく、生徒会長を指摘すと言っていたのは誰だ！」
まんざらでもない表情で反応した光に、醍醐は釘を刺した。

「む、生徒会長だと？ キャラクター聞き捨てならない単語だな？ 君は生徒会長になりたいのか、銀河君？」

意外にも青島が反応した。表情を硬くして、姿勢も真面目になる。こうして見ると、高校生とは思えないほど大人びた顔立ちだ。

「まあ、そのつもりですけど……」
「気まずそうに光は答える。本気なら堂々としていればいいのに、と醍醐は苛立った。」

「ははは、それは当代の生徒会長に対する下克上というわけだな？」
「できれば内密にお願いします……」

誰もいない周囲を伺いながら、光は蚊の鳴くような声で頼んだ。
呆れた醍醐は隠そうともせず、ため息をついた。

「ああ、それはできないなあ」
「腰に手を当て、部下に指示を下すように左手を光に突き出した。
私は、生徒会長だからな」

一度しか言われなかったにも関わらず、醍醐の脳裏では何度もその台詞が繰り返された。青島は、どや顔で自分の体を抱いている。

「醍醐はゆつくりとした動作で光へと歩み寄り、
……光、とりあえず、生徒会長に立候補しろ」

「え？ 立候補？ だって、お前、さつき……」

「いいから、立候補しろ！ 今すぐやれっ！ いいか！ あんな、変人界の征夷大將軍みたいな女に生徒会長を続けさせてみる！」

「光の肩を揺らしながら、醍醐は聳え立つ校舎にあごをしゃくった。
明日にでも、この学校は消えて無くなるぞ！」

「いや……、落ち着けよ、醍醐……」

「落ち着けるかっ！ これは死活問題だぞ、俺たちの高校生活の！」
「揺らすな、おい……」

「立候補しろ！ お前の方が、まだマシだあ！」
「二重の意味で、滅茶苦茶失礼だろ！ 喧嘩売ってんか！」

「思わぬ一言に激怒した光は、醍醐の両手を肩から振り払い、彼の胸板を強く押した。醍醐の体が後方に傾き、彼の表情がさらに険しくなる。」

「押すな！ 危ないだろ！」

「はあ？ 先に仕掛けたのは、そっちだろ！」

お互いがお互いの胸倉を掴んで、罵り合いが始まる。

「離せ！ 香水が臭いぞ！」

「うるせえ！ この、ニセ侍！」

「何だと！ ホストもどき！ 本物のホストに謝罪しろ！」

「死ね！ 刀オタク！」

「消えろ！ 中二病銀髪！」

中学生さながらの汚い言葉で二人は唾を飛ばした。その光景を見ていた青島は、くすくす、と笑い、ついに噴出した。

「ふっふっ……ははは……。君たちは面白いなあ？ まあ、朝何時に起きるか、くらいのこと喧嘩しなくてもいいだろう？」

ハスキーな声でさらりと言われた馬鹿な言葉に、二人は同時に首を回す。

「してねえ！ どこを、どついう風に解釈すれば、そんなアホなことが言えるんだ！」

「俺は、五時に起きています！」

「お前も、真面目に答えるなあ！」

「はっはは、君たちは仲良しだなあ」

「お前は、黙っている！」

「死ね！」

さらに茶化す青島に、二人は容赦なく暴言を吐いた。相手が年上だということは完全に忘れていた。

すると、意外にも青島は大人しくなり、前髪を掻き分けた。

「ふむ、確かに、私が君たちの友情を邪魔するのはよくないな。よし、名残惜しいが、私はこれで失礼する」

その場で華麗に回転し、器用にもムーンウォークで去っていく。後ろ歩きとは思えない速度で玄関の扉にたどり着き、両手を広げた。

「また会おう！」

そう言い残し、呆然とする二人を置いて消えてしまった。

第二話

駅に程近い市立図書館は、土曜日にも関わらず閑散としている。

現代人の本離れを実感しながら、千石考貴は推理小説のコーナーを歩いていた。目当ての本を見つけて手に取り、机が並べられたエリアへ移動する。

ほとんど誰も座っていない机に、フレームの無い眼鏡をかけた黒スーツの男が座っている。千石は、他の利用者の邪魔にならないように小さな声で話しかけた。

「調子はどうだ、六徳？」

まぶしい笑顔で軽く肩を叩かれると、小鳥遊六徳はゆっくりと振り返った。千石とは違い、その表情は冷たく、愛想の欠片も無い。

「いつも通りだ。特に苦労することもない」

冷たい表情と同じく、その口調も淡々としたものだった。それでも、千石を邪険にすることなく、彼が座るための椅子をさりげなく引いた。ありがとう、と言いながら千石は座った。

「探していた本は見つかったようだな」

千石が置いた本のタイトルを見た小鳥遊は、そっけない口調で言った。シャープペンシルを持った手は止まらずに、入学する高校から出されていた数学の課題を解いている。まるで、漢字の書き取りをしているように解答欄が埋まっていくな。

「恐らく、あと二十分程度で終わるはずだ。その後はどうする」

「ここから出ないか？ 一週間ぶりだと、色々と積もる話もあるだろう？」

「お前が、そう言うなら、そうしよう。お前に、頼みたいことがある」

小鳥遊は、それ以上は言わず、代わりに問題を解く速度を速めた。二十分と見積もっていたが、九分足らずで片付いてしまった。

二人は図書館を出て、近くのコンビニに立ち寄って飲み物を買って、

店前に設置されていたベンチに腰掛けた。

「百四十七円だよな？」

立て替えていた代金を手渡された六徳は、確かに、と答えて小銭をズボンのポケットにしまった。

「それで、お前に頼みたいことだが」

空けたばかりのコーヒー缶の飲み口を見ながら、小鳥遊は少し低い声で切り出した。

「副会長に立候補してくれないか？」

「副会長？ ああ、生徒会のか？」

一瞬だけ言葉の意味が分からなかった千石だが、以前に小鳥遊が中学校で生徒会長をしていたことを思い出し、すぐに納得した。そして、きまりの悪そうな表情になる。

「でも、副会長って、重職だろ？ 俺なんかに務まるかなあ……」

千石は、腕を組んで両脚を伸ばした。この動作が、千石が悩む際の動作だということを小鳥遊は知っていた。人当たりが良く、努力家である彼の欠点は、自分を過小評価しているところだと、小鳥遊は昔から惜しく思っていた。

「心配ない。お前は、いつも通りにしていればいい」

「おいおい、そんなこと言われたら、普通に動けないだろ？」

「大丈夫だ。お前は、いつも悩んで苦しみながら正しい選択をする人間だ。動きにくさを感じている方が、お前らしい」

千石は苦笑した。励ましの言葉をかけているにも関わらず、その表情は仏頂面で、あまりにしっかりと発音されていた。英語のリスニング問題の説明文を聞いているようだ。

「評価してくれるのはうれしいけどさ、期待に添えるかどうかかわからないぜ？ 俺じゃなくても、総一と聖十郎がいるだろ？ あいつらの方が頭いいし」

わかっていない、と小鳥遊は嘆いた。

「適材適所という言葉がある。黒河も戎崎も、副会長には向かない性格だ。根本的に、自分の能力に自信を持っている人間だからな。」

だが、考貴、お前は自分を必要以上に過小評価している。それは、副会長にふさわしい才能だ」

「お前たちといると、嫌でも自分に劣等感を持つさ」

しょうがない、と呟きながら、千石はコーラのペットボトルに口をつけた。炭酸がはじけて、心なしか脳が活性化したような気になる。一度思考をリセットして、それから副会長という役職について考える。

「もしも、俺が副会長になったら、お前は どうする？ 会長になるのか？」

「当然だ」

小鳥遊^{たかなし}は深く頷いた。千石とは正反対に、すでに腹を決めているようだ。その迷いのない態度は、千石の気持ちを変化させた。

「とりあえず、返事は保留していいか？ 総一と聖十郎にも相談してみようぜ」

冷たい表情の下に隠れる決心に触れたことで、この場で断るといふ行為は出来なくなった。強い意志を持っている人間を相手に適当に返事するのは失礼だ。それが、たとえ相手にとって良い返事でも悪い返事でも。

「黒河と戎崎には俺から頼む。お前は、よく考える。そして、いつものように正しい選択をしろ」

二人の会話はそこで途絶えた。小鳥遊^{たかなし}は、空になった缶のブルタブを取り外してポケットにしまった。小銭とぶつかり、ちゃりん、という音がした。

バスが停留所に着いたときには、すでに時間は十二時を過ぎていた。醍醐としてはまだ昼食には早い時間だが、今日は妙に空腹感が強い。久しぶりに腹の底から叫んだためだろうが、半分はあの変人のせいだろう。

「光、金はあるか？」

公園に入ろうとした光を呼び止めると、彼は、ポケットから財布を取り出すことで答えた。

「コンビニ行くか？」

長財布で太ももを叩きながら光は、横断歩道の向こうにあるコンビニを指差した。

「俺、腹減った。お前も、何か食べるか？」

気遣うような台詞に、醍醐は安心した。口論したばかりで、帰りのバスでも一言も交わさなかったので、怒っていると思っていたからだ。それが杞憂だとかわり、行こうか、といつも通りに答えた。

自動ドアをくぐり、醍醐は弁当のコーナーに向かい、光はカップ麺の棚に脚を運んだ。代金は、光が一括して払った。

二人は、朝に待ち合わせた公園で割り箸を割った。

「そうだ、光。さつきは、言い過ぎた。許してくれ」

白いスーツを汚さずにカップ麺を器用に食べていた光は、間抜けな顔で首を傾げた。何故、自分が謝られているかがわからないようだ。

「いや、謝る必要ないだろ。お前の言ったことは、正論だ。普通に考えて、お前が正しいだろ」

「それでも、俺は、お前の生徒会長になりたい気持ちを疑った。それは、さすがに謝らなければいけない」

引こうとしない醍醐の態度に、光は肩をすくめた。誤魔化すように麵をすすり、代わりの話題を考えた。

「あー、そうだ。生徒会長といえば、あの人、変人だったけど、かわいかったよな？」

黒髪のポピーターをした青島満の姿がフラッシュバックした。醍醐は顔をしかめた。

「お前なあ……。顔が良かったら、誰でもいいのか？」

殊勝な態度で謝っていたのが一転、醍醐は呆れた表情になり、親友の好みをたしなめた。人間は顔じゃないという事実は今日はずきりした。

「別に、惚れたわけじゃねえよ。普通に、あの変人はかわいかった
だろ？ 身長も高くて、スタイルも良かったし。お前も、そう思う
だろ？」

「それは、確かにそうだな」

あの変人、外見だけは間違いないく美しい。上面だけが目当てで近づいて玉砕した男も多いに違いない。初対面に相手に対して暴言を吐いたのは、醍醐の人生で初めてだった。彼女のような変人と出会ったことも初めてだったが。

「しかし、あんな変人が生徒会長だったなんて、びっくりだな」
度肝を抜かれるとはまさにあのことだった。あの高校は、本当に大丈夫なのだろうか。偏差値だけは都内でも有数で、さらに東京大
学への進学者を輩出する進学校だが、志望校の出願を最後まで悩んだ二人は、自分が通うことになる学校のことをほとんど知らなかった。今日、学校に行ったことも、それが理由だった。

「あの変人に会っても、絶対に無視しようぜ」
そうだな、と同意しかけて醍醐は止めた。彼女が、自分たちに無視されただけで引き下がるとは到底思えない。無視された場合、それに見合った反応をして、余計に喜ぶだろう。そうなれば、さらに厄介だろう。

ならばどうすればいいか、と醍醐は知恵をしぼった。

「……逃げるか」

最初から考えていたことだが、やはりこの答えにたどり着いた。
女に背を向けることは悔しいが、変人界の征夷大將軍だと言ってしまふほどの相手ならまだ仕方ないだろうか。

しかし、光は頑として受け入れようとしなかった。

「ていうか、無理だろ。あの人、本当に生徒会長だったら、関わらずにはいられないぜ。体育祭とか、文化祭とか、絶対に中心だろ、あの変人」

変人主催の体育祭に文化祭。考えただけでも目眩がしそうだ。自分たちは、カオスな楽しさを楽しめる人間ではない。

「一週間不眠不休で体育祭とか普通にやりそうだけ」

「そんなに長いスポーツの祭典は、オリンピックだけだ。四年に一回でいい」

「文化祭の最後にキャンプファイヤーとかして、火の中に生身で飛び込みとか」

「あの変人なら、無傷で生還できそうだから怖い」

光ひかるの言うことはどれも馬鹿馬鹿しいが、そんなことでもあの変人ならば現実にしてしまいそうで怖い。それどころか、それ以上のことを考えそうだ。それこそ、変人の名に相応しい催し物が披露されそうだ。

「やっぱ、俺が生徒会長になろうかなあ……」

明後日の方向を見た光ひかるが漏らした言葉を、醍醐は聞き逃さなかった。自分の話が彼によって逸らされたことに気づき、軽く肩を叩いた。

「立候補しろ。俺に応援演説させてくれ、お前の力になれるはずだ」
「いや、だって、一年生で生徒会長って……」

真剣な視線と口調に吞まれてしまった光ひかるは、しどろもどろで口を開くが、言い訳を呟くばかりで肝心の返事をぼかす。

「……それに、俺が目立つと、光ひかるが迷惑するだろ？ お前も、あいつが嫌な思いをするのは間違っているって言っただろ？」

正論だと認めたにも関わらず、責められたことをまた掘り返す態度に、醍醐はベンチの背もたれを叩きつけることで怒りを表した。

「いい加減にしないか。そんなに、光ひかるに嫌われたくないのか？ だったら、事前に相談すればいいだろう。男女の双子だと、色々と面倒に違いないが、それは今に始まったことじゃないはずだ。お前が本気なら、わかってくれるかもしれない」

荒々しい行動とは正反対に、その口調は穏やかで、戒めるように聞こえた。彼は返事を待たずに、自分が食べたから揚げ弁当を捨てるためにゴミ箱に向かった。出口に一番近いゴミ箱に空の弁当箱を捨てると、醍醐は踵を返して光ひかるに伝えた。

「お前なら、ちゃんとやれると、俺は信じているぞ」

光は押し黙っていたが、その目は、確かに醜態を見据えていた。

第三話

住み慣れたアパートの一室であるにも関わらず、尻込みしてしまのは、いつもとは違う心持だからだろう。光は、ただいま、とは言わずに家に入った。リビングからテレビの音が聞こえてくる。思わず足が止まりそうになる。

「ただいま、光」

覚悟を決めてリビングに足を踏み入れると、案の定冷たい視線が向けられた。ショートカットの髪は、兄とは対象的に自然の色を保っている。自分とはあまり似ていない、双子といっても、男女ならその程度だ。

「飯、食ったか？」

何を言っているかわからず、当たり障りのない言葉をかける。返事はない。冷たいままの視線は、銀色に染められた髪に向けられている。その一重の目が不機嫌だということを表していた。

「何か、食べる物ないか？ 腹へってさ」

わざとらしく言いながら、冷蔵庫を開けると、昨日の残り物である鳥のから揚げが入っていた。ペットボトルのお茶と一緒に取り出して机に置いた。すると、光は何も言わずに立ち上がった。自分の部屋に戻ろうとしていると気がつき、咄嗟に止めた。

「光！」

自分でも信じられないような大声が出た。しまった、と思ったが、無反応だった光が、今日初めて返事をした。

「……何？」

いきなり大声で名前を呼ばれたことを差し引いても、それは不機嫌な声だった。小さく舌打ちして、壁に体を預けた。

「早く話して。これから、勉強するから」

「ああ、実は……」

促されるままに、自分の決意を述べた。醍醐に協力してもらえ

ことも伝えた。

「それで、立候補してもいいか？」

肝心の光ひかりの気持ちを尋ねた。彼女は、変わらない口調で言った。

「どうして、私に許可してもらおう必要があるの？」

「それは……」

思わず言葉に迷った。元々、光ひかる自身は妹に許可をもらおう必要などないと思っていたからだ。今、低姿勢でお願いしているのも、実際は醍醐から言われたからであって、厳密には彼の意志ではない。

お話にならない、とでもいったように光ひかりはため息をついた。

「結局、お前は、自分で何も決めてないじゃない。全部、朝比奈に言われた通りに動いているだけ。別に立候補するのはいいけど。どうせ、また無理だから」

無駄だとはつきり断言し、そのまま振り返らずに二階に消えてしまった。取り残された光ひかるは悔しそうに悪態をついた。

自分の部屋に戻った光ひかりは、いらいらした気持ちを抑えるために携帯電話を手にして開いた。メールが一件受信されていた。開くと、送信者は朝比奈だった。光ひかるが立候補することを許してほしい、という内容だ。

「余計なことを……」

どうして、男という生き物は絆が固いのだろう。淡泊な彼女には理解できなかった。それでも、返信しなければ不義理だと頭の片隅で思ってしまう。仕方なく、簡潔な文章で返信した。勝手にすれば、と。

しばらくして、着信音がした。お前の同意がないなら諦める、と書かれていた。それを見るなり、すぐに返信した。じゃあ、私が駄目っていったらやめる、と。

認めてもらうまで諦めない、と返ってきた。面倒くさくなり電源を切った。

「おい、光^{ひかる}。メールに返事がこないぞ」

諦めない、と書いたメールを送ってからすでに三十分以上が経過していた。無視されているに違いないと悟った醍醐^{ひがね}は、すぐに光^{ひかる}に電話をかけた。

「あー、お前も駄目かあ……」

「情けない声はやめろ。どうする、無視されてしまったら、打つ手が
ないぞ？」

「そう言われてもなあ。あいつは、頑固だから、当分は俺たちをシ
カトするぞ、絶対」

「兄妹なら、話せ。どこまで、お前たちは仲が悪いんだ」

「悪いさ。めっちゃ、悪いよ。お前には妹がいないからわからない
けどな、小学生高学年からほとんどまともしゃべってない！」

「さりげなく威張るな。確かに、俺には理解できないことも多いか
もしれないが」

「はあ？ 適当なこと言うな！ お前こそ、無視されてるだろ！」

「だからな いや、俺が悪かった」

「うっ、何だよ、いきなり……」

午前の一件といい、今日の醍醐からは叱られて謝られてばかりだ。
気持ち悪さを覚え、思わず口ごもった。

「 いや、随分と勝手なことを言ってしまったからな」

「 ああ、気にするなよ……」

受話器越しに聞こえる声から元気がなくなるにつれ、比例するよ
うにか細い声になる。そこで、会話が途切れた。しばらくして、電
話も切れた。

土曜の夕日は、その姿を隠そうとしていた。時計を見ると、すで
に午後六時を過ぎていた。青島はシャープペンシルを置き、完成し

た挨拶文を読み返した。

「これなら、水瀬教諭も文句はないだろうな。彼らには感謝しなければいけないな」

自画自賛しながら午前に出会った新入生二人の顔を思い出す。凛々しい顔立ちの男と、銀髪の白スーツの男だ。

下校時間を知らせる放送が流れた。広報委員長ここのえしゅん九重俊の声だ。相変わらず声だけは良い。

青島は携帯電話を取り出した。タッチパネルを素手で操作し、行の最後の人物に電話をかけた。五回目のコールでつながった。

「こちら、生徒会室。至急、南波陽平に取り次ぎを頼む」

「こちら、南波陽平。そのハスキーボイスは、青島生徒会長だな？」

おどけた調子には合わない、喉がかれたような低音。

「ふむ、久しぶりだな、陽平。声が聞けてうれしいぞ」

「最後に会ったのは、昨日の午後十時だ。まだ、一日たっていないぜ？」

「おお、そうだった。君は、ローソンでアイスクリームを買っていたな。ハーゲンダッツのバナラだった。妹ちゃんのために買ったそうだな？ このシスターコンプレックスが」

「うるせえ。お前は、メントスのグレープ味を買っていたな」

「ははは、美味しいぞ？」

「そうかい　それで、用件は何だ？」

おどけた口調から一転、かれた声に似合う冷静な語り口になる。

「記憶力の競争をするために電話したわけじゃないだろ？」

「ほう、さすがに聡いな？」

「小学校二年生からの付き合いだからな。それで？」

自分の言いたいことを言わずともわかってくれる友人に感謝しながら、青島は切り出した。

「五月に迫った生徒会長選挙について、君に相談したい」

生徒会室の隅にかけられたカレンダーには、五月の最終日に記しがついている。生徒会長以下の生徒会役員を選出する日だ。

受話器越しの聲がしばらく途絶えた。次に聞こえた声は、あまりにも突き放した口調だった。

「俺は関係ないだろ？ 生徒会長は、お前だ、青島。お前から生徒会長の座を掠め取るうとする馬鹿は、三条くらいだ。お前の敵じゃない」

早口でまくし立てた南波は、切るぞ、と告げた。だが、青島は譲らなかった。

「おいおい、ひどいじゃないか？ そんなに冷たくしなくてもいいだろう？ 冷たい子は、法子に告げ口するぞ？」

「俺が冷たいのは、生徒会に絡む事だけだ。普段は、ナイスガイだ」「ふっ、そうだな。君は、生徒会関係の行事には非協力的だから」

最近の南波の行動を思い出した青島は、彼の徹底的な生徒会嫌いを笑った。スピーカーモードに設定変更し、携帯電話を机に置いた。

「ところで、君は副会長になるつもりはないか？ ちょうど、誰も立候補を予定している生徒がいらないものだからな？」

「お前は、馬鹿か？ 俺は、二度と生徒会に関わるつもりはない。副会長なら、法子が適当だ。俺から頼んでみるよ」

「いじわるをするな、陽平。私は、君に頼んでいるんだ。生徒会長リーダーなど、誰にでも務まる、大事なのは、副会長だ。ナンバーツーこの学校で一番優秀な生徒は、君をおいて他にはいない」

相手が目の前にいないにも関わらず、青島は両手を広げて相手を称えた。受話器越しに咳払いが聞こえた。

「過大評価してくれるのは嬉しいが、俺はそんな器じゃない。俺の功績になっていることも、実際には運がよかったか、周囲に助けられただけだ。俺は、天才じゃない」

「ふふ、君の謙虚なところは大好きだ」

スピーカーモードを解除し、再び携帯電話を耳にあてた。今日はここまでだ、と彼女は心の中で決めた。

「さて、君と話していたら、いつの間にか日が沈んでしまった。綺麗だったのに、残念極まりない」

「電話してきたのは、お前だろう」

呆れたような陽平の声。苦笑しているに違いない。

「私は、これで失礼するよ。あまり暗くなると、怖いお兄さんに恐喝されてしまう」

「俺だったら、金を払ってでも、お前を回避したいけど……」

「む？ 何か言ったか？」

「いや、青島はいつも綺麗だなんて言ったんだ」

「それは嬉しいな。礼を言わせてくれ」

ありがとう、と言われる前に、陽平は電話を切った。最後に聞こえたのは笑い声だった。彼と同じ、乾いた笑い声だ。

第三話（後書き）

次の更新は、三月十八日までに行います。次回もよろしくお願
いいたします。

第四話

市立図書館とコンビニでの会話から五日後の木曜日。小鳥遊と千石は、もう一人を加えた三人で、生徒会長選挙の為の話をするために改めて集まった。

大小さまざまな家屋が立ち並ぶ中で、その家だけは歴然とした所得の差を表しているように豪華だ。豪華といっても、その家は和風のつくりで、一見すると大名屋敷のような趣も兼ね備えている。表札には、小鳥遊たかなしとある。

その家の一室で、三人の男が雀卓を囲んでいる。麻雀の主役であるはずの牌は片隅に追いやられ、手書きの文字がびっしりと書き込まれた書類が彼らの話題をリードしていた。

「その綺麗な人が、今の生徒会長、青島満あおしまみちるさんだ」

まるで賞金首のように、ポニーテールの美人の写真がA4用紙一面に印刷されている。それを取り上げた千石は、眼鏡をかけた二人の男に交互に手渡した。

「……情報源は誰だ？」

写真の人物の容姿のことなどまったく触れずに、事務的な口調で小鳥遊たかなしは尋ねた。隣に座る黒河総一くろかわそういちは何も言わずに、手持ち無沙汰に麻雀の牌をいじっている。

「法子ほつこさんだよ。あの人、文化委員長の前は、生徒会で会計をされていたそうだ。生徒会長とも、入学してからの友達らしい」

「そうか」

縁無し眼鏡を触りながら、小鳥遊たかなしは冷たい口調で頷いた。自分から聞いたにも関わらず傲慢な態度に、黒河は手の中の牌を強く握った。だが、静かに憤る黒河とは対象的に、本来怒るはずの千石は何事もなかったように続ける。

「法子ほつこさん曰く、この生徒会長は相当な変わり者で、誰もやらないようなことをするらしい。去年の文化祭で、最後にいきなり校庭で

キャンプファイヤーをして、火の中に生身で飛び込んだらしい」

「馬鹿馬鹿しい」

「そうだな。普通なら、思いつかないよな」

遠慮なく蔑む黒河に、千石も苦笑しながら同意した。手にしていた牌をA4用紙に印刷されている青島の髪に、髪飾りのように置き、彼女が生徒会長として担当した仕事をまとめた別の用紙に手を伸ばした。手書きの達筆で、十一月以降の出来事が並んでいる。

「……生徒会長選挙は、五月だったな」

十一月以降と限定された内容に違和感を覚えた黒河は、同時にもう一つの違和感に気がついた。五月に生徒会長選挙をすることが腑に落ちなかったのだ。

尋ねられた千石は、彼の言わんとしていることがわかったのか、忘れていたことを突然思いしたような表情で答えた。

「ああ、悪い。そのことだけど、お前には話してなかった。実は、今の生徒会長が選出されたのは去年の十一月らしい。何も、七月に生徒会長になった人が、その」

滑らかだった口調が急にこもりがちになる。小さく深呼吸して、改めて続ける。

「亡くなったそうさ。ほら、ニュースで放送されていただろ？」

学校名は匿名だったけど、間違いない。これも、法子さん情報だ」
暗くならないように言葉を選んだ千石だが、思わぬところで命に関わる話題に転換した影響を拭うことはできなかった。自分がその話題の発端になってしまったと後悔した黒河だったが遅かった。

「千石、続ける」

完全に萎えてしまった二人を尻目に、動じない小鳥遊たかなしは変わらぬ口調で催促する。黒河は苛立ちを隠そうとチタンフレームの眼鏡の位置を直した。

「悪い。話が逸れたな。それで、生徒会長は半年で改選する規則だから、選挙は五月にすることになったらしい。とにかく変則的だから、時間がない。一年生には非常に不利だ。足場を固める時間が足

りない」

どうする、と小鳥遊たかなしに視線を向ける。彼は一度、目を閉じ、ネクタイの結び目を直した。そして、千石と黒河に対し交互に指示した。「時間が無いなら、お前は、早々に返事をする。副会長に立候補するならば、入学式までに俺に言え、千石。黒河、お前は、庶務へ立候補しろ。話は、千石から聞いているはずだ」

気まずそうな千石と、不愉快そうな黒河が順番に答える。

「いや、立候補するのはいいけどな。中途半端な気持ちで務まる役職じゃないだろ？ それに、何度考えても俺は力不足だ。六徳りつとく、お前の足手まといになるのはご免だ」

「俺が庶務にならなければいけない理由を教える」

煮え切らない態度の千石とは対照的に、正面から自分に挑んできた黒河から先に小鳥遊たかなしは返答した。

「お前には、トップの重圧に耐えられるほどの余裕がないからだ。

千石と違って、人望が薄い。戒崎と違って、精神的に脆い。お前は優秀だが、基本的に主体性がないからだ。庶務という役職には、凡庸で努力ができる人間が適役だからだ。それが、適材適所だ」

小鳥遊たかなしの口から発せられる一言はどれも棘があり、徐々に黒河の表情が険しくなった。だが、彼は怒ることもなく黙って聞いていた。小鳥遊たかなしからも遠慮する様子はまったく見られない。千石だけは心の中にすつきりしないものを抱えながら、自分の番がくるのを待っている。

黒河がゆっくりと口を開く。

「……わかった」

短い言葉で肯定した彼は、トイレを借りる、と言い、襖を開いた。戸闕を跨ぐ直前、振り返り、やるからには本気でやる、と呟いた。

千石は、がんばれ、と応じたが。小鳥遊たかなしは何も言わずに、雀卓に置かれた資料に視線を落としている。

「質問がある。この、渉外という役職は、具体的に何をやる？ 渉外というからには、外部との連絡統括役か？」

「ん、ああ」

後ろ姿を見送っていた千石は急いで襖を閉め、小鳥遊たかなしに向き直った。手元から関連する資料を取り出して彼に手渡した。

「ええと、この渉外わつがいって役職は 法子ほしこさん曰く、生徒会以外の校内組織との連携を円滑に進めるために設置されているそうだ。委員会とか、運動部と文化部、それに、先生方も対象らしい。まあ、お前の考え方で問題ないな」

「意外に、骨が折れそうな役職だな」

告げられた詳細に、小鳥遊たかなしは顔をしかめた。誰をその役職に就けるか悩んでいるのだらう、と千石は想像した。

さらに情報を付け加えた。

「この役職は、書記と並んで、立候補者が少ないことで有名な。今年度の生徒会は、この二つの役職に立候補者がいなくなったらしい」
小鳥遊たかなしの表情が 正確には目つきが変わった。縁無し眼鏡の向こうから刺すような視線が千石に向けられる。

「その場合、欠員を補う方法は？」

「別に、全員が揃う必要はないそうだ。副会長と会計以外は兼任も可能で、今年は、渉外を生徒会長が兼任しているらしい」

空いている右手で、写真が印刷されたA4用紙を指差した。

「そうか、兼任が可能か……。だが、千石」

まだ説明されていない半分について催促され、千石はすぐに答えた。

「もしも、選挙が終わって役職に欠員があつた場合は、生徒会長が直接指名できる制度があるらしい。今年度の書記は、この制度を利用して穴埋めしてみたんだ。法子ほしこさん曰く、兼任と直接指名だけが欠員を補う方法として認められているそうだ」

「そうか。それで、選挙自体を管理している組織は、やはり選挙管理委員会か？」

「正解。でも、問題があるそうだ。この高校は、委員会への参加が強制じゃなくて自由で、

部活動みたいに選択できるから、人数に偏りができるそうさ。選挙管理委員会は、事実上の委員が二人しかいないそうさ」

資料に書かれていたことをかい摘まんで説明したが、自分で言っていて冗談のような話だと内心では思っていた。そのせいで、要領が悪い、と最後にうつかりもらしてしまった。

「確かに、要領が悪いな。お前の言う通りだ」

「あ、ああ、そうだな……」

間違いなく、無駄口を叩くな、と咎められると想像していただけない、千石は肩すかしを食らったように口が回らなくなった。

小鳥遊^{たかなし}は一度、会話を中断して立ち上がった。窓を開放し、棧に腰掛け、その状態から大きく息を吐いた。産まれたときからの知己といっても過言ではない千石は、この行動の意味を知っていた。自分の世界で考え事をする際の合図だ。

「その不備を補うための組織を新設する必要があるな。既存の校則を変えることは難しい。遊軍のように、人員が足りない組織にいつでも投入できる組織が欲しい。いや、この場合は組織という形にこだわる必要はない。むしろ、組織という枠にとらわれることは、人員投入という目的の妨げになる可能性が大きい。ならば、問題は二つだ。それをどうやって認可させるか。

投入する人員をどのような方法で確保するか」

隣でまるで呪い^{まじな}のように続けられる独白。だが、千石は動じることなく、平然と資料を読み直している。十五年の付き合いで、小鳥遊^{たかなし}六徳という男に慣れてしまった彼ならではの余裕だった。

独白は、黒河が戻るまでほとんど息継ぎなしで続けられた。

第四話（後書き）

次の更新は、三月二十三日です。次回も、よろしくお願いします。

第五話（前書き）

約束の日に更新できなかったことを、この場を借りてお詫びさせていただきます。大変申し訳あせんでした。今後はこのようなことがないように自分を戒めていきます。

霧島卿

第五話

七時間目になっても、三年A組の士気は衰えることはなく、クラス中を見渡しても舟をこいでいる生徒はいない。最後尾の廊下側に座る南波陽平も熱心に授業を受けていた。

教壇に立つ教師がチョークを持つ手を止めて、南波を名指した。問題を解けという指示だ。去年の国公立前期試験で出題された化学の問題が黒板に書かれている。

それは、南波には見覚えがある問題だった。

「東京工業大学で出題された問題ですね、先生」

教師は何も答えずに口元をゆるめた。南波がすらすらと問題を解く様子が嬉しいようだ。生徒たちからも、すげえ、などの賞賛の声が届く。

「よし、正解だ」

答えを確かめることなく、教師は南波の肩を叩いて彼を褒めた。

「さすが、化学オリンピックの前年度日本代表だ。銀メダルを取った実力は伊達じゃないな」

「そんなに何度も同じ事を言わないでくださいよ。反応に困ります」
ぎこちない動作でメタルフレームの眼鏡をいじりながら、南波は座席に戻った。彼の回答は模範解答と共に校内で出回ることになるだろう。

市内一の新学校で、都内でも有数の新学校である冥栄高校は、毎年数名の東京大学への進学者を輩出する。その中でも、今年之最優秀生徒だと呼ばれることを南波陽平はあまり適当だと思っていなかった。自分の能力を過小評価しているわけではない、世の中には比較にならないほど優秀な人間がいるからだ。いかに全校生徒が都内最大の高校だろうと、所詮は狭い世界だ。

視野が狭いことは大きな欠点だと彼は認識していた。

その後、授業の終わりを告げる放送があり、南波は彼の居場所

ある第三特別校舎へ足を運んだ。運よく掃除当番は彼ではなかった。第三特別校舎は一階から、生物室、物理室、化学室、地学室となっていて、実験などで利用されている。普通科の生徒が学ぶ南校舎とは渡り廊下でつながっていて、科学部の部室としての役割をはたしている。南波は部長だった。

化学室の扉を開き、すぐ傍にかけられていた白衣に手を伸ばす。実験をする際には白衣を着ることがマナーだ。

袖を通した南波は、準備室に向かって呼びかけた。

「法子、もういるのか？」

すぐに返事が返ってきた。準備室から、同じく白衣をきた竜崎法子が姿を見せた。肩まで伸ばした黒髪とやわらかい笑顔が知的な印象を見るものに与える彼女が、科学部の副部長だ。

「今日は早いですね、陽平さん。どうかされましたか？」

見た目だけでなく、その口調もまたやわらかく、南波は微笑んだ。本当に素敵な女性だと、自分の恋人を誇らしく思った。

それでも、旧友から告げられた面倒な予告を打ち消す効果はなかった。

「実は、青島に殴り込みを予告された」

きっかけは、先々週の土曜日だった。青島からの電話で、彼女の要求を断り続けた結果、部室に殴りこむと言われてしまったのだ。実際に暴力沙汰にすることはないと、長年の付き合いで推測できるが、暴力よりも面倒くさいことになることも同時に推測できた。

「あいつは、やると言ったらやる女だからな。俺が首を縦に振るまで、絶対に引かないぞ。ああ、厄介だ」

開いたままの扉に視線を向け、青島の突入を警戒する。足音は聞こえない。

「陽平さん、首を縦に振る、とはどういうことですか？」

「5月の生徒会役員選出選挙だよ。俺に、副会長をさせるつもりらしい。断ったら、これだ」

「選挙ですか……。そうですね、あれからもう半年ですね……」

やわらかかった法子の口調が一転して暗くなる。半年前の思い出したくもない記憶が、彼女の脳内で断片だけ甦ったせいだ。陽平の表情も、青島を迎え撃つために険しくなっているわけではない。

「あいつが中途半端な気持ちで生徒会長になったわけじゃないことはわかっているさ。あんなことがあったからな。だけど、俺は自分の決心は変えない。要求を呑んでもらえれば喜んで協力するさ」

「君も、強情だなあ」

声がしたのは後ろからだ。自分の背後は法子だけだと考えていた陽平は完全に隙をつかれてしまった。

「やあ、陽平。殴り込みだぞ」

少し離れたところで腰に手を当てて立っている青島が、拳を突き出した。

「随分と可愛らしい殴り込みだな」

「ふふ、私は女の子だからな。殴り込みも、女の子らしく、後ろから奇襲をしたいのさ」

「女の子は後ろから人を襲わないだろ。それよりも、どこから入った？ 準備室に隠れていたのか？」

「正解だ。さすがは、前年度化学オリンピック日本代表だな」

「化学でお前の変人的思考は証明できないな」

「おいおい、女の子にそんなことを言うなんて、君はひどいな。私は落ち込んだぞ。泣くぞ。暴れるぞ。駄々をこねるぞ。困らせるぞ。帰るぞ」

「帰れ」

「わーん、陽平に虐められたあ」

うそ泣きを始めた青島はふらふらとその場で体を揺らし、時折指の間から覗き見する。何度となく見てきた光景に、陽平はため息をついた。

その状態がしばらく続き、法子がつないだ。

「満ちゃん、ごめんね。陽平くんがどうしてもやりたくないって言うっているから許してあげて」

「ああ、いいとも」

「早いな、おい」

あまりにも唐突すぎる諦めにつつこんだ陽平だけでなく、法子も面を食らった。青島だけは満足そうにして、その場で回っている。今日はひとまず引くようだ。

「用事がないなら、帰ってくれよ。部員たちがお前を見ると、彼らの士気が下がる」

「ははは、そうだな。彼らは私が苦手なようだな」

「まともな人間ならほとんど嫌いだよ」

「ひどいぞ、陽平」

青島は流れるような足並みで開いたままの扉に進み、一度止まってから振り返った。

「罰として、君には副会長になってもらうぞ！」

「しつこいぞ」

少しだけ言葉に力を入れたが効果はなかった。また会おう、と言い残し青島は消えてしまった。言葉を失った南波はかぶりを振ることで気持ちを切り替えた。

「さ、準備をしよう、法子」

「まだ話は終わっていませんよ、陽平さん」

誤魔化すためにわざと笑顔を作ったが、そんなことは通用しなかった。普段はおっとりしているような法子だが、時折その本性を見せる。

「先ほど、要求という言葉の口にされましたが、何のことでしょうか？」

「いや、それは……」

「答えられませんか？」

表情こそは変わらずやわらかい笑顔だが、雰囲気はまったく違う。醸し出す空気だけで相手を怯ませることは誰にでもできる芸当ではない。生まれつき勉強ができる人間がいるように、世の中には多種多様な才能を持った人間がいる。

「駄目ですよ、隠し事は」

淡々とした口調で、少しずつ距離を詰める法子。恋人になる際にした、隠し事をしないという約束を反故にされて不信感をつのらせているようだ。

ここは踏ん張りどころだと、南波は堪えた。

「悪いが、今は教えられない。一人の人生に関わることだ。それ以上のことは、たとえ法子でも言いたくない。勝手を言っつて、本当にすまない」

今は目をつぶってほしいという旨を真剣に伝えると、法子にいつもの様子が戻ってきた。正視すると、微笑まれた。

「そこまで隠したいなら、認めます。大切な要求ということですね？」

「ああ、これは俺が解決しなければいけない問題だ」

「それなら、私はこれ以上の言及はしません。陽平さんを信じます。一日も早く、その要求が通ることを願っています」

それだけ言っつて満足したのか、法子は話題を切り替えた。早くしないと、部員の皆さんが来てしまいますよ、と口を尖らせた。

化学室から自分の教室である三年D組に戻つた青島は、愛用しているダンボールを小脇に抱えて職員室を目指した。先日提出した入学式で読む挨拶文を返してもらつたためだ。

すれ違つ生徒が彼女の姿を見るたびに笑う。変な行動をする人間を嘲笑う類のものではなく、親しみのある笑いだ。自分が理想としていた生徒会長像へ近づいていることに、青島は内心で小躍りした。

そして、もう一つ嬉しいことがあつた。これから会いに行こうと思つていた相手と鉢合わせたことだ。

「そこにおられるのは、水瀬教諭ではありませんか！」

「うるさいぞ、青島」

生徒会顧問を務める水瀬純子^{みなせすみこ}は短い髪をなでながら応じた。彼女たちは青島の入学以来からの関係だった。変人として一年時から校内をかき回した青島にまともに向き合った唯一の教師で、最も彼女が信頼する大人だ。

「うるさくて申し訳ない。お詫びに、このダンボールをお納めください」

「いらん」

いつもの調子でおどける青島を、水瀬は軽くあしらった。指の関節を鳴らし、早く話せと催促した。

「ああ、度重なる無礼をお許しください、水瀬教諭。先日お渡しした挨拶文についてですが、問題はありましたか？」

「強いて言うなら、全てが問題だ。こんな馬鹿げたことを本当に入学式で読み上げるつもりか？」

私は気にしないが、次の日にでもこの学校は消えてなくなるぞ」

「それは言い過ぎでしょう」

水瀬は面倒くさそうに言葉を訂正した。

「ああ、言い過ぎた。この程度じゃ、お前の首が飛ぶだけで済むな。どの道、私は気にしないが」

「何だ、その程度ですか……」

「落ち込むな。本当に学校を消すつもりか、お前は」

預かっていた挨拶文を丸めて軽く頭を小突いた。青島は大げさに痛がる素振りをして、今日二度目のうそ泣きをした。水瀬は苦笑しながら返した。

「訂正はしなくていいぞ。だが、責任は自分で負え。私は、学年主任から嫌味を言われるだけで済むからな」

それだけのことを素っ気なく言うと、水瀬は南校舎と北校舎をつなく通路に進んでいった。その後姿に、青島は深くお辞儀した。心から感謝して頭を下げる相手は少ない。自分を産んでくれた親、自分を見捨てなかった旧友を除けば、水瀬純子だけだ。

青島は思った。自分は誰かに頭を下げられるような人間なのだろうか。生徒会長ということ差し引けば自分は変人だ。誰かに尊敬されるような人間になれるのだろうか。

第五話（後書き）

次回の更新は、3月29日です。よろしくお願ひします。

第一話

4月7日は入学式だというのに、朝から土砂降りの雨だった。そのため、クラス発表の張り紙は生徒昇降口ではなく、各教室の入り口に掲示されていた。

「俺は、D組だな」

苗字が朝比奈である醍醐はすぐに自分の名前を見つけることができた。自分の名前のすぐ下には、銀河光ぎんがひかるとある。双子の兄弟でさらに同じ漢字である彼らだけが、名前に読み仮名がふられているようだ。

B組のクラス分けで手間取っていた光ひかるが戻ってきた。

「あつたか？」

「ああ、お前と同じだ」

張り紙を軽く撫でながら答えた。後ろに人だかりができはじめていたので、二人は教室に退散した。出席番号が近い数字である二人は座席も近かった。醍醐は廊下側の最前列で、光ひかるはその列の最後尾だ。

「お前の名前を見つけたときは少し驚いたぞ」

自分の座席に腰を下ろした醍醐に続いて、光ひかるは誰も座っていない後ろの席に勝手に座った。

「光ひかるじゃなくて残念だったな」

「からかうな。あいつは、俺たちよりも優秀だっただろ」

「あいつは、B組らしいぞ」

「だから、B組まで行ったのか？」

「そりゃそうだ。俺がB組になるわけがないだろ」

この冥栄高校では、入学時のクラス分けは入試の成績で決められる。中学時代の成績が共に上の下だった二人はやはり同じクラスになった。同じクラスになるのは初めてのことだ。

「それでも、さすがにC組は大丈夫だと思っただけだな」

「確かに、少しだけ残念だな。まあ、そこまで学力に違いがあるわけじゃないだろう。ほんの数点の差だ」

「A組の連中は、二百点満点で九割以上得点しているらしいぜ？」

「それはすごいな。感心だ」

冥栄高校自体も偏差値の高い進学校だが、やはりピンからキリだ。エリート集団のA組があれば、落ちこぼれだと馬鹿にされるF組もある。

醍醐は一つ気になることがあり、それを話題にした。

「あの変人生徒会長は、何組だろうな？」

「E組とかじゃねえ？ いや、あんな人に限って、意外に頭が良かったりするからな……」

あの変人と遭遇してから今日まで、二人は一度も学校には近寄りなかった。およそ二週間ぶりに校門をくぐったが、今日はまだ姿を見ていない。生徒会長だという自称が本当ならば、これから行われる入学式の最終打ち合わせでもしているのだろうか。

「まあ、嫌でもそのうちわかるだろ。校内で会ったら、確実に絡まれるぞ」

「やめてくれ。寒気がする」

冗談ではなく、醍醐はあの変人を苦手としていた。言葉を交わすたびに、まるで違う世界

を見せつけられるような錯覚に陥るからだ。光は、相手が綺麗だというだけで、幾分かは抗体ができていようだ。二人の女性観はそれなりに食い違うものだった。

そういえば、と醍醐は周囲をはばかり小声になった。

「生徒会長に立候補する話はどうした？ あれから、光とは話したか？」

途端に光の勢いが失せる。

「……一度も話していない」

「お前らは、熟年離婚寸前の夫婦か。兄妹が二週間近くも会話をしない家庭があるのか？」

「うるせえよ。完全に、俺をシカトするって決めたらしいから、梃子でも動かないぞ。どうしても話す必要があるときは、筆談だぜ？ 初期の遣隋使か、俺は」

「もしそうなら、今の日本は存在しなかった可能性が大きいな」

「滅べ。妹、滅べ！」

苛立ちを吐き出しはじめた光だが、彼の座っている座席に本来座るべき人がやって来たのでお開きとなった。二人は交互に軽く謝り、そこで分かれた。

入学式が始まった。会場は体育館ではなく、ホールのような場所だった。そこは、教師や保護者を加えれば二千人を超える大所帯を余裕で収容できるほどの広さを備えていた。

新入生は拍手で迎えられ、続いて進行役から挨拶があった。進行役は、広報委員長の九重俊と名乗った。その声は明るくはきはきしていて、とても聞き取りやすい。

その後は、学校長からの挨拶が続いた。新入生の高校生活を激励し、ついでに上級生にあたる二年生と三年生に手本となるように軽い忠告がなされた。PTA会長の挨拶も似たような内容で、ほとんどの生徒がうわの空、もしくは隣と会話をしていた。

大概の生徒からすれば煩わしいだけの挨拶が終わり、再び九重が進行をした。

「次は、生徒会長と新入生代表による対面です。青島生徒会長と新入生代表の」

一度も詰まることがなかった滑らかな口調が一瞬だけ止まった。隣に控えていた教師に何かを相談している。最前列に座る醍醐には、その様子がよく見えた。

しばらくして、九重は定位置に戻った。

「失礼しました。青島生徒会長と新入生代表の小鳥遊六徳たかなしりつとくさんは登

壇してください」

すると見覚えのある相手が登壇する姿が見えた。黒髪をポニーテールにした美人。女子だということにも関わらず、制服はスカートではなくズボン。自称は嘘ではなかったようだ。彼女は華麗に一礼した。少し遅れて登壇した生徒は男だった。ストレートの黒髪とノーフレームの眼鏡が特徴の、ブレザーの制服が似合う真面目そうな男だ。新入生代表ということは、つまり主席で入学したということになる。生徒たちの視線は自然に上向いた。

「新入生が一日も早く、この高校での生活になれることを祈って、握手」

そう促されると、壇上の二人は固く握手した。男女だという遠慮はないように見えた。

「続きまして、生徒会長からの挨拶をお願いします」

早々に握手を終わらせ、壇上にマイクスタンドが用意された。小鳥遊^{かなし}は降壇せずに青島の後ろに下がった。

青島がマイクスタンドからマイクを外した。まるで、野外ライブで歌う歌手のように。

「はじめまして、はじめましてだな」

声の調子を確かめるかのように唐突に挨拶は始まった。九重ほどではないがその声はハスキーながらも聞き取りやすく、なにより快活だ。

「私が、九重広報委員長から紹介にあずかった、青島満だ。君たちの入学を心から祝福させてもらう。しかし、君たちは恐らく誤解をしている」

会場にざわつきがうまれた。教師たちも困惑した表情で見守りながらも、何人かは一箇所に集まって何かを相談している。

「君たちの多くは、自分がスタートラインに立ったと思っっているだろうが、それは残念ながら勘違いだ。君たちは、まだ体を温めている最中だ。そして、これまでの生き方では、スタートラインにすら立つことなく高校生活を終えるだろう」

だから勉強や部活動に励め、と続くのだろうと多くの新入生は想像していた。だが、青島という人間を知っている二年生と三年生は、そんな陳腐な台詞を口にする彼女ではないということをよく理解していた。そして、それは醍醐ひかと光も同じだった。一度だけとはいえど、彼女という変人と関わってしまったために、どれだけ想像の上をいく発言をするのだろうかと興味をそそられていた。

「スタートラインに立ちたければ 能動的になれ。受動的な自分から卒業しろ。今だけでもいい、高校生である三年間だけ、かっこつける行為をやめて、周りの目など気にせず、本当の自分を解放しろ」

能動的。意味はわかる。だが、新入生たちには印象の薄い言葉だ。その証拠に、聞こえないような声で陰口を叩く者がいた。

馬鹿じゃねえ。

意味わかんねえ。

頭おかしいだろ。

誰でも好き勝手にできるわけねえだろ。

「それが、受動的な態度だ。感心しないな」

スピーカーからの声がわずかに怒りを含んでいるように聞こえた。壇上の青島からは笑顔が消えていた。陰口をたたく新入生の一団を侮蔑のまなざしで見ている。

「確かに、受動的な生き方をすれば、周囲との関係は円滑になるだろうな。だが、それだけだ。私に言わせれば、メリットはその一点だ。わずか一点のメリットに君たちは騙されているぞ。少しでも視点を変えれば、それを全て無意味にしてしまおうデメリットが満載だ。大勢の中で埋もれる人生。常に他人の顔色をうかがう人生。凡人として終わる人生。目立つ人間を心の底で妬む人生。それらが、君たちの輝かしい未来か？ 君たちの存在はそれほどまでに安いのか？」

必死な声が会場に木霊する。醍醐は心揺さぶられる感覚に陥った。ほんの五分前には変人だと侮っていた自分がどこか別の次元に飛ば

されたような感覚だ。周りの目など気にするな、という言葉が、隠れて居合の稽古をしている自分に投げかけられたようだった。

その六つ後ろに座っていた光には、受動的な自分から卒業しろ、という言葉が響いた。以前に妹から指摘されたことに酷似していたからだ。全部、朝比奈に言われた通りに動いているだけ。言われたとき以上に、今は深く感じられた。

「さて、これまでに言ったことは、あくまで私個人の意見だ。納得できない者はそれでいい。全ての人間が納得できる意見など存在するはずがないのだからな。あるとすれば、それは誰かが表面上だけ賛同している意見だろう。受動的な誰かが！」

陰口だけでなく、会場からはあらゆる私語が鳴りを潜めた。青島の魂の叫びだけが木霊する。

「ここで、私から提案だ。能動的になるための大きな機会が、5月28日生徒会役員選出選挙だ」

突然の話題転換に、会場から再び動揺がうまれた。こんどは新生からだけではない。その喧騒の中で、小鳥遊だけは冷静に耳を澄ましていた。彼が一番心を砕いている事柄である生徒会役員選出選挙。その中心人物である生徒会長からその話題が切り出されたことで、彼は久しぶりに心躍る自分を感じた。

「学校によっては、会長だけを投票で選出して、その他の役員は会長が自由に指名できるそうだ。馬鹿馬鹿しいことだ。仲良し軍団でまともな生徒会を組織できるはずがない。だが、この冥栄高校では、会長、副会長、書記、会計、広報、渉外、庶務にいたるまで、君たちの清き一票で選出される」

相手を糾弾するかのようには右手を突き出すと、その声はさらにかすれる。息継ぎすることすら煩わしいのか。

「新入生だろうと遠慮する必要はない。年齢も、性別も、学力も、運動神経も、イデオロギーも、全てが関係ない。自ら行動する者に、冥栄高校生徒会は門を開く！」

渾身の力を振り絞って青島は最後の言葉を叫んだ。

「さあ、楽しい高校生活のはじまりだ！」

その放課後。小鳥遊^{たかなし}は、ほとんどの生徒が下校してしまい閑散とした教室で、今日の入学式を振り返っていた。先ほどまで職員室に呼ばれて、満点で合格したことを褒められたが、そんなことなど彼にはどうでもよかった。自分の記録などには瓦礫ほどの感慨も抱かないほど、彼にとって入学式は衝撃的だった。

あの生徒会長には、素晴らしさ以外の評価をつけることができなかつた。自分などが評価してもいいのだろうか、と悩むほどだ。

座席から動こうとしない彼の肩を誰かが叩いた。

「六徳^{りつとく}、考え事か？」

千石だった。慣れていないネクタイを気にしている。

「あの、生徒会長のことか？」

「そうだ」

短く肯定したのはいつものことだが、今回は理由があった。自分が、あの生徒会長へ敬意を払っていることを悟られなくなつたらだ。一年生で生徒会長になると宣言した手前、その感情を知られることは、不利になると防衛本能がそうさせた。

「俺の考え事だ、お前には関係ない。黒河と戎崎はどうした、一緒にじゃなかったのか？」

即座に話題をすり替え、千石の背後に視線を向けた。彼は申し訳なさそうに唇を噛んだ。

「すまない、六徳^{りつとく}。二人には逃げられた」

「気にするな。同じクラスの俺が傍から離れなければよかっただけだ」

「お前は、職員室に呼ばれていたからしょうがないだろ。俺の責任だ」

それでも、千石は頭を下げた。これが彼の性分だと理解している

小鳥遊^{たかなし}だが、自分にはできないことだと改めて感服した。

「お前は、何組だ？」

ちようどいい話題が思いついたので、それを利用して空気の転換を図った。千石も意図を見抜いたのか、すぐに応じた。

「B組だったよ。やっぱり、お前たち三人は賢いな」

「当然だ。この程度で躓いていては、目標は達成できない」

「さすがだ。頭が下がるよ」

違う。頭を下げるべきなのは自分だ。副会長になってくれ、と頭を下げるべきなのだ。だが、小鳥遊^{たかなし}にはそれができなかった。千石考責は頭を下げる相手ではないという、幼少からの彼らの関係が彼の行動に楔をしていた。

「生徒会役員選出選挙についてだが」

「やりやすくなつたな？」

白い歯を見せて千石が笑った。生徒会長自らが公の場で、一年生には必ずついてまわる枷を入学早々に破壊してくれたことに驚きながら、親友にもたらされたアドバンテージを喜んでいるようだ。

「ああ、最初に攻略すべき障害を取り除いてくれたことには感謝しなくてはいけないな。選挙で彼女を解任させることになるのは心苦しいな」

本音だった。それどころか、自分よりも彼女が生徒会長にふさわしい人物ではないかとすら、心のどこかで考えていた。

それでも、自分の目標を達成するためには、越えなければいけない試練だと自分に言い聞かせて無理やり納得させた。

「だが、障害は全て排除する。彼女も例外ではない。お前も、対立候補には容赦するな」

「俺は、まだやるって言つてないぞ」

苦笑しながらブレザーのズボンを叩いた。彼の中では自分の進むべき道に悩んでいるようだが、小鳥遊^{たかなし}にはそれが実際は、決められた道に抗おうとしている人間の動作ではないかと不安に感じられた。「何度も言わせるな、お前より副会長に適任な人間はいない。早く

返事をしろ。選挙までは一ヶ月と少しだ。ぐずぐずと渋っていていれば、すぐに時間は過ぎるぞ」

「……もう少しだけ待ってくれ」

「いい返事を待っているぞ」

冷たい言葉しか口から出ない自分が、こんなにも馬鹿だとは思わなかった。一言だけでも、たとえ素っ気なく、好きにしる、と言うだけでも状況は良くなるだろう。入試で満点を取れるのに、何故こんな単純なことができないのだろうか。

どうしようもなく、自分が情けなく見えてきた。

第一話（後書き）

次回の更新は未定です。申し訳ありませんが、決まり次第に活動報告でお知らせします。

第二話

入学式の翌日の放課後、小鳥遊^{たかなし}は、第三特別教室に向かった。古くからの知り合いである竜崎法子と会うためだ。

少し迷いながらたどり着き、三階にいくと化学室があり、扉は開かれていた。白衣を着た生徒が実験器具を興味深そうに眺めている。小鳥遊^{たかなし}は驚かせないようにするため、すぐには声をかけずに扉を叩くことで存在を知らせた。

法子は首だけを扉に向けた。

「あら、六徳^{りつとく}くん」

目が合おうと、小鳥遊は会釈した。

「お久しぶりです。入学前には、色々とお世話になりました」

入学前から彼女にはこの学校の情報について色々と教えてもらおう機会があった。特に、生徒会についての情報はわかりやすく、非常に助けられた。

「いえいえ、気にしないでください。これから入学する学校のことを知りたいと思うのは、当然ですよ」

「ですが、よかったですか？ 青島さんは、法子さんのご友人だと聞きましたか？」

予てから心残りだったことを尋ねると、法子は平気そうに手を振った。

「満ち^{みち}ちゃん^のは、そんなことで怒ったりしませんよ。本当に怒る必要があるときだけ、本気で怒るのが満ちちゃんですよ」

「そうですか」

あの生徒会長ならそう言うだろうな、と小鳥遊は納得した。能動的になれと新入生を叱咤するほどの人間だ、友達だからといって相手に遠慮するような息苦しい生き方は嫌なのだろう。

「それで、今回は何をすればいいですか？」

長い付き合いである法子は、小鳥遊に他の狙いがあることを見抜

いていた。強制はせずにいつもの口調で問う。

小鳥遊は舌を巻いた。

「いつもながら、法子さんからは、特別な才能を感じます。怖くないはずなのに、なぜか相手を怖がらせる才能があるようですね」

「そんなことはありませんよ。私なんて、とっても地味な存在です。あくまで謙遜する法子。本人にその気がなければ言う必要はない。小鳥遊は話を切り替えた。

「今日来たのは、生徒会役員選出選挙についてです」

「はい、そうだと思います」

「……選挙全体を統括するのは、選挙管理委員だと聞きました。委員は二人だけだという話は本当ですか？」

先日、千石を経由して手に入れた情報だ。間違いはないだろうが、一応確認しておかなければいけない。今の自分に必要なのは正確な情報だ。

「ええ、委員長の白石恵さん、副委員長の灰乃瞳さんですね。お二人とも二年生で、有名な仲良しです」

「有名ですか」

「灰乃さんは、容姿が美しいので人目を惹きますし、白石さんは勝ち負けにこだわることで有名です」

「勝ち負けにこだわるとは、どういう意味ですか？」

顔の話などどうでもよかった、人物を表現するときに見えや性格ではなく、こだわりについて真っ先に言われたことが引っかかった。つまり、それが最大の特徴だということだ。

「言葉通りです。白黒がはっきりしないと気がすまない性格で、白黒つけることを生きがいに行っているような方です。それだけでなく、白黒のつけかたにも厳しくて、正式なルールを守るという前提がなければ選挙を行わないと公言されています。だれよりもこの学校の選挙に詳しい人ですから、彼女がいる限りルールを逆手にとることは不可能です」

「そんな卑怯なことは考えていません」

「そうですね？ それなら、どうしてもそこまで真剣に選挙についてお調べに？」

「新入生である自分が上級生と互角に戦うためには、正確な情報が必要だからです。一か月で地の利を得ることは困難ですが、同じ学校にいる以上は、自ら進んで情報を収集することで差を縮められます」

小鳥遊独自の理論を法子は黙って聞いた。よく内容を考えたうえで、彼女も自らの意見を言う。

「本当にそれだけでしょうか？ それだけでは、絶対に満ちゃんには勝てませんよ？ この学校の生徒は、それなりに満ちゃんを信頼していますから、六徳くんは見向きもされないとします。当選するには、魅力が足りません」

魅力。その抽象的な表現が、小鳥遊は苦手だった。情報のようにかたちあるものならば扱いやすいが、心や肌で感じるかたちのないものは、論理的に行動する彼には天敵以外のなにものでもない。

「法子さんは、青島さんに魅力を感じているのですか？」

「感じていますよ。正直で、遠回しに言ったりしないから好きです」「入学式のことですか？」

校長から、高校生らしい態度で生活しましょうと言われても、それは曖昧でわかりにくく、解釈は個人に委ねられている。だが、それが意に沿わない場合は叱られることになる。対照的に、青島の言ったことは単純でわかりやすく、解釈もほとんど一つしかない。ただ、それを実行することに勇気が必要だ。

「それは一部です。満ちゃんが生徒会長になったことで、この学校が楽しくなったって言っている生徒は多いですよ。常識に縛られずに行動しようと思う心と、それを実行できることが満ちゃんの魅力だと私は思います」

それは確かに、今の自分に欠けている要素だった。小鳥遊は何も言わずに、相槌を打つこともなく耳を傾けた。

その翌日。今日は、一限目から時間割を変更して身体測定が行われた。身長と体重、座高はもちろん、視力、聴力、血圧測定、歯や内臓までも検査する大掛かりなものだ。個人の測定結果を記入するのは、保健委員の役割だった。

いつものように二人で行動していた醍醐と光ひかるだったが、聴力検査をしている教室を出る際に一人の教師が髪の色を咎めてきたため、二人は別れた。一人になった醍醐は迷いながら視力検査が行われている教室にたどり着くと、一番短い列に並んで順番を待った。

それでもなかなか人は減らず、彼は何となく首を捻った。すると偶然、隣の列に並んでいた男子生徒と目が合った。

「あ、どうも」

「あつ、はい」

そのまま目を逸らしてもよかったのだが、この機会に誰かと話しておこうと思い、醍醐は思い切って挨拶した。男子生徒は少しだけ戸惑った様子を見せたがすぐに返事をした。短髪の黒髪が似合う、長身でがっちりした男だ。体操服には、千石と刺繍されている。

「長いですね」

列を指さしながら、醍醐は苦笑した。

「三学年だと、体育科と芸術科もあわせて千五百人以上いるそうですよ。これだけいると、正午までかかりそうですね」

時計を見ると、すでに二限目がはじまっている時刻だった。正午までかかるという予測は恐らく正しい。

「一人ですか？」

「ええ、まあ。そっちは？」

「はぐれましたね。すぐにフラフラと消えちゃう男なんですよ」

「こっちは、先生に連れていかれたんですよ。髪を染めていたのがまずかつたらしいくて」

そんな会話をしていると、しだいに列が短くなり、醍醐の順番に

なった。測定後に振り返ると、千石の列はまだまだ長いままだった。彼は軽くあいさつしてから先に部屋を後にした。

身長と体重の計測が行われる第一体育館に行くと、光とすれ違った。無視して素通りしようとする彼女を醍醐は呼び止めた。

光は不満そうに返事をした。

「……何？」

「いや、あいつと会話してないって聞いて……」

「そんなくだらないことで話しかけたの？」

信じられないといった様子で光は舌打ちした。短パンの体操服の上から自分の脚を叩いている。

「本当に、お前ら暇だね。っていうか、どうして友達になったの？ どう考えても、趣味とか合わないでしょ。いっしょにいと、かなり目立つよ」

「目立つか？」

「白いスーツで銀髪の隣に、朝比奈みたいな真面目そうな男が隣にいたら変じゃない？ それとも、自覚なかったの？ 馬鹿じゃない？」

当然、自覚していなかったわけではない。最初に出会ったときは、友達になれとは思っていなかったのは事実だ。それほどまでに二人には共通点がなかった。

「あらしのよるっていう映画みたいって、話題だよ。入学してから三日目なのに、お前たちけっこう有名になってるけど」

まあ、私には関係ないけど、とさりげなく呟くと彼女はそのまま離れていった。

「羊と狼か……」

悔しいが、それはまさに的確な表現だった。醍醐は息を吐きながら第一体育館に入った。

*

光が醍醐の前に再び現れたのは六限目が終わる直前だった。ふてくされた表情で戻ってきた彼は周囲を威嚇するように席に着いた。授業が終わり、掃除の時間になるとすぐにいなくなってしまった。今週の掃除場所は南校舎の玄関だった。醍醐はすぐに移動して箒を確保した。しばらくすると他の生徒も姿を現した。その中には見覚えのある顔も混ざっていた。

「あれ、視力検査のときの」

「ああ、どうも」

二人は会釈した。

「えっと、千石さんですよな？」

「朝比奈さんでしたか？」

お互いに相手の刺繍を確認していたようで、すでに自己紹介の必要はなかった。千石は、掃除場所が外だというのですぐにいなくなってしまうが、後で話す約束をした。

掃除が終わるなり醍醐は早々に待ち合わせた場所である一年B組に向かった。

「お待たせしました」

「ああ、いいですよ」

千石は律儀にも自分の座席を勧めてきた。それはできないと醍醐が遠慮すると、彼は部屋の隅に立ってかけられていたパイプ椅子を運んできた。

「わざわざすみません」

醍醐が恐縮すると、千石は慌てて手を振った。

「いやいや、気にしないでくださいよ。それに、同級生なんだから、もう少しだけフランクに話さない？」

「そう、ですか……」

まだ知り合っただばかりでどうしてもやりにくいのが、醍醐はあえてその提案にのった。しゃべりにくさを感じていたのも事実だ。

「じゃあ、千石」

「何だ、朝比奈？」

「このクラスに、銀河って女子がいるだろう？」

「ああ、銀河さんか？」

すぐに思い出したようだ。名前の珍しさが印象を濃くしているのは、高校でも変わらないらしい。

「珍しい苗字だから、自己紹介のときに騒がしくなっただろう？」

「なったな。俺はそんなに驚かなかったけど」

意外だった。醍醐がこれまで出会った人間で、あれよりも印象が強い苗字はなかったからだ。不思議に思う彼に、千石は理由を教えにくれた。

「俺の友達に、小鳥遊たかなしっていう男がいるんだよ。ほら、新入生代表で登壇していただく？ 小鳥が遊ぶって書いて小鳥遊。珍しいだろ？」

「ああ、確かに……」

高い梨だと勘違いしていた醍醐は唖った。あの滑らかな口調の広報委員長が言葉に詰まってしまったのも無理ない。知らなければ、普通は読めない。

「朝比奈は、銀河さんとは知り合いだったのか？」

当然ともいえる疑問を千石は投げかけた。それでも、それは相手が女子だから興味をそられたというわけではなさそうで、彼からはおもしろい返事を期待している様子はない。

「兄と友達なんだよ」

「兄？ 上級生か？」

「いや、双子だ」

これは驚くだろうと、反応が楽しみだった。男女の双子はそれなりに珍しいものだ。

だが、千石の反応はまたしても予想外だった。

「俺の友達にもいるぞ、男女の双子」

「えっ？」

むしろ驚いたのは醍醐だった。千石曰く、その双子は黒河という

苗字で、兄は普通科の一年A組に所属していて、妹は体育科の一年A組の所属しているらしい。それも、かなり古くからの付き合いだそうだ。

「かれこれ、十五年だな。さっきの小鳥遊ともそれくらいだな」

「産まれたときからの関係か。家は近いのか？」

「いや、と千石は否定した。」

「親同士が親密なんだよ。他にも、何人かいるぞ。この学校にもけっこういるし、かなり年上にもいるな」

「賑やかだな。友達には苦労しなかっただろう？」

「まあな。でも、色々と大変だぜ？ ずっと一緒にいるから、良いところも嫌なところも全部わかるからな。まっ、みんないい人だから俺は恵まれているよ」

そして、謙虚にも仲良くしてもらっていると付け加えた。気さくで、それでいて腰が低い性格に醍醐は好感を抱いた。彼とは仲良くなれそうだと安堵した。

第二話（後書き）

お久しぶりです。約一か月ぶりの投稿になってしましまして、申し訳ありません。次回の更新は、5月2日を予定しています。

霧島卿

第三話

入学式から一週間が過ぎた4月14日。

この日から、小鳥遊^{たかなし}は生徒会役員選出選挙に向けての準備を開始した。まずは自ら立候補してクラス代表になった。この日は、クラスでの役割を決める日で、委員会への参加についても詳しく説明された。生徒は自由に委員会を選ぶことができ、いつでも入ることができるが最低でも一年以上は続けなくてはならないと教師は言った。昼休みになると小鳥遊は、千石と会うためにB組に訪れた。

「おつ、六徳^{りつとく}」

いつもの調子でさわやかに応じた彼の隣には、知らない男子生徒がいた。真面目そうな顔立ちで、和服が似合いそうな男だ。彼は遠慮したのか自ら席を外した。

「邪魔をしたようだな」

去っていく男子生徒の後ろ姿を目で追いながら小鳥遊は謝った。気にするな、と千石は笑ってから自分も立ち上がった。

二人は南校舎前の中庭に移動した。座れる場所を探すとベンチが空いていた。

「ところで、さっきの男は誰だ？」

ブレザーのポケットからおにぎりを取り出そうとしたところで小鳥遊は言った。何となくだが、大人びた印象を受けたことが気になっただけからだ。

「朝比奈っていう同級生だよ。最初は上級生だと思ったくらい大人に見えたから緊張したけど、話してみるといい人だった。居合道が趣味らしい」

「居合道か……、違和感はないな」

和服を着て、刀を腰に差した姿を思い浮かべると、まるで時代劇に出てくるような武士そのものだった。そうなると実力を知りたくなってきた。

「強いのか、その朝比奈は？」

「どうだろうな……」

顎を撫でながら千石は考え込んだ。そこまでは知らないようだ。

「憶測だけど、一般人よりは強いと思うけどなあ」

「お前となら、どっちが強い？」

「難しいな。それ以前に、俺自体が正直弱いからなんとも言えないな」

馬鹿な、と小鳥遊は鼻を鳴らした。

「趣味程度でお前よりも強いはずがないだろう。一学年でお前より強いのは、戎崎だけだ」

「おいおい、聖十郎と比べるなよ」

やめてくれ、と千石は手を振った。彼は一度視線を下げ、それから神妙な顔つきになった。

「なあ、六徳。副会長の話だけどさ……」

周囲を気にしているのか小声だった。小鳥遊は気を利かせて距離を詰めた。

「気が変わったか？」

「少しだけ興味が湧いてきた」

それははじめての前向きな返事だった。正直に言えば嬉しかった小鳥遊だが、あえて冷静に一言だけ、そうか、といつも通りに言った。

「実は、さっきの朝比奈だけど、生徒会長について話してたんだよ」

「青島さんのことか？」

「朝比奈は、入学式でのあの人の言葉が随分と心に響いたらしい。そんな話を聞いてたら、俺も漠然と興味が湧いてきたんだ」

いい加減だよな、と千石は自嘲した。本気の相手を目の前にして負い目があるようだ。そんなことはない、と励まそうとしたが小鳥遊にはできなかつた。どうすればいいか見当がつかなかつた。代わりに口から出た言葉はいかにも小鳥遊六徳らしいものだった。

「それはいい変化だ。だが、中途半端な気持ちでは絶対に成功しな

い。貫き通せる意志が持てたと確信するまで、俺はしばらく待つ」
「ああ、何度も悪いな。ほんと、俺って優柔不断だな……」
「黒河からは返事をもらった。庶務をやるそうだ」
それだけ言い残して小鳥遊は立ち上った。おにぎりは食べずにそつと千石の膝に乗せた。

*

教室に戻るとそろそろ昼休みが終わる時刻だった。醍醐は慌てて弁当を完食する頃を見計らって光が近づいてきて、放課後時間あるか、と聞いてきた。ある、と答えると彼はすぐに席に戻っていった。放課後に醍醐を待っていたのは、光と青島だった。

「やあ、武士君。久しぶりだな」

待ち合わせ場所に指定されたD組で彼女は楽しそうに手を振っている。隣では光が緊張したような硬い表情をしている。

「青島さん、どうしてここに？」

「ん？ 何だつて？ 君たちが呼び出したんじゃないか？」

「は？」

どうにも話が見えてこない。お互いに何かを勘違いしているようだ。醍醐は光を問い詰めた。悪い、と彼は最初に謝った。

「大切な話があつて呼び出したんだ。聞いてくれるか？」

交互に向けられた視線には真剣味があつた。醍醐も青島もそれを感じ取り、襟を正した。

「俺さ、生徒会長に立候補するの諦めようと思うんだ。入学式の青島さんを見てさ、俺わかつたんだよ。やっぱり、俺はいい加減な気持ちだったんだって。青島さんって、最初は変な人だっと思って馬鹿にしてたけどさ、あんなこと言うんだからほんとに驚いてさ……」
何と言つていいかわからないのか、そこで言葉が詰まった。それでも光は必死にあがいている。落後するつもりはないようだ。

黙っていた青島がため息をついた。

「君は、いったい何をそんなに悩んでいるんだ？」

「だから、俺はいい加減な気持ちで」

「そんなことを言うために私を呼んだのか？ だったら、はっきり言わせてもらおう。迷惑極まりない行為だ。君の不満解消に付き合うほど生徒会長は暇じゃない」

とてつもなくゆつくりとした口調で青島は切り捨てた。その大人びた顔立ちにもっとも似合うであろう真面目な表情をした彼女には最初に会ったときのふざけた気配など微塵もなかった。

「君はどうも勘違いしているようだから教えておく。生徒会長とは学校全体の幸福を考える責務を背負う存在だ。自己嫌悪する生徒を救うよりも、学校をよくするほうが私としては有意義だ。私は、君が思うほどに立派な人間じゃない」

「そう、ですか……」

何かを通り越してしまったのだろうか、光はこんな状況にも関わらず笑いそうになっている。そんな光景を醍醐は見たくなかった。

「青島さん。もういいじゃないですか」

「何がもういいんだ？ 何が済んだ？ 何が解決した？ そもそも君は、彼がどうしてこんなにも悩んでいるかわかっているのか？」

「そ、それは……」

答えることはできなかった。青島はかぶりを振ることで失望をあらわにした。

「どうもおかしいな。私はわかっているかどうかを質問しただけだぞ？ わからないなら、わからないと正直に答えればいい。別に正解を求めているわけじゃないんだぞ？ どうして君たちはいちいち完璧な方向に進もうとするんだ？ 別にいい加減でもいいじゃないか。それを判断するのは投票権がある生徒たちだ。君は勝手な自己評価で自己嫌悪しているだけじゃないか。その人の価値を決めることができるのは、第三者じゃないのか？」

その言葉には重みがあった。誰の言葉でもなく彼女自身の言葉だからだろう。周囲から自分がどう見られているかをよく知っている

人間だからこそ悟ることができる倫理。

「ちなみに」

青島は急に悪戯つばい笑みを浮かべた。

「私という第三者からすれば、君はそんなに悪い人間じゃないぞ」

「そんなこと……」

「いや、君はどちらかといえば良い人間だ！」

何故か彼女は胸を張って断言した。早足で光ひかるに歩み寄ってその背中を渾身の力で叩いた。痛っ、という叫び声があがった。

「君は生徒会長になりたいと思っただろう？ それはいいことだ。自分から立候補する生徒なんて、私が入学したときには一人もいなかったぞ。点数稼ぎのことしか考えないお友達集団が運営する生徒会なんてクソ以外の何物でもなかったな。だが、君はどうだ！ 自ら行動しようとしたじゃないか！ 素晴らしい能動的じゃないか！ こんなに早く能動的な生徒に会えるなんて私はなんて幸福なんだ！」

「能動的……」

入学式で彼女が何度も使っていた単語だ。自ら動く者だけが得られるもの、彼女はそれを得ているのだろうか。

「なあ、私と一緒に戦わないか？ 選挙はもう近いぞ。現行の生徒会は五月中旬には解散するぞ。君が羽ばたくならここじゃないか？」
両手を広げてその場で回ると、青島の顔つきは一転していた。かつて見たふざけていたときと同じ顔だ。

「俺でいいんですか？ 今やってる人がやったほうがいいじゃないですか？」

「それなら心配はいらないぞ。庶務という役職は、会計候補の側面があるから、今の庶務は絶対に会計に立候補するはずだ」

力強く進める青島。心なしか光ひかるに普段の調子が戻ってきたようだ。

俺の出番だな、と醍醐は直感した。

「やるべきだぞ、光ひかる。俺が応援する」

「醍醐……」

照れ隠しだろうか、光は銀色に染めた髪を撫でならきよるきよるしている。

「決まったな」

青島は素早い動作で握手を求めた。醍醐と光は強制的に手を握られて困惑しながらも拒むことはしなかった。

「さて、これで庶務候補は確保した。後は副会長だが」

「一緒に探しましょうか？」

気を利かせたつもりだったが、青島はすぐに断った。

「いや、すでに目星はついているから心配はいらないぞ。交渉は難航しているが、ここが正念場だからな」

そう言って彼女は笑った。困難を楽しんでいるような表情だ。

第三話（後書き）

次回の更新は、5月3日です。よろしくお願いします。

第四話

選挙管理委員会による立候補者受付が開始された。期限は5月7日までと要項には書かれている。入学して間もない一年生からすれば煩わしいことだが、一部の生徒にとってはこれほど重要なことはない。

千石もその一人だった。彼は登校から下校までたった一人で悩み続けた。気さくな彼だが、ここ数日は誰にも話しかけず話しかけられなかった。ほとんどのクラスメイトが心配そうに遠巻きから見ている。

選挙要項に改めて目を通す。副会長の項が目にとまった。主な職務内容の欄には、生徒会長の補佐、とある。

補佐とはいったなんだろう、と考えた。言い換えれば、助ける、という意味。誰もが普段から無意識にやっていることだ。それだけに、意識してやることはなかなか難しい。いつも通りにしていればいい、と小鳥遊から言われたものの、そう上手くいかない。

要項から視線を上げると、肩まで伸びた綺麗な髪が目にとまった。銀河さん、ちよつといい？

ちゃんと聞こえるように声を大きくすると、光は一度で反応した。どうしたの、千石？

「双子なんですよね、銀河さん。朝比奈から聞きましたよ」

そう言つと、光はげげんな顔をした。心なしか、言葉づかいも悪くなる。

「それがどうかした？ どうでもいいんじゃない？」

「まあ、そうですね」

苦笑しながら千石は続けた。嫌われそうだが、彼には大丈夫な予感がした。

「知り合いにいますよ、男女の双子。しかも、この学校の同級生ですよ」

「そうなの？」

わかりやすい反応だった。もうすぐ四限目が開始するというのに、彼女は近づいてきた。ぐっと、顔を近づけて質問してくる。

「普通科の人？」

「兄の方は普通科で、妹の方は体育科。双子なのに趣味趣向や性格が違うなんて、何だか面白いですね」

笑わせようとしたつもりだった。今まででも、こっやって小さな笑いをとってきた。だが、自分も双子である光ひかりからすればそれはあまりにも偏見で、とても聞き流せなかった。

「あなた、馬鹿？」

遠慮容赦ない言葉づかい。今度は、心なしか、ではない。

「双子なんて、同じ人から同じ時間に生まれたこと以外は、まったく別人だけど？ 私の、兄と会えばわかると思うけどさ、あいつ超クソだよ。そもそも、千石って、そんな下品なこと言うんだ？ このクラスの男で一番大人だって思ってたけど、私の勘違いだったみたい」

矢継ぎ早にそれだけ言い、彼女は席に戻ってしまった。まるで教師がやって来るタイムミングがわかっていたかのような流れに、千石は呆然とした後に舌を巻いた。

そうだな、別人だよな　その言葉を脳内で何度か再生した。

*

じゃーん、という間抜けすぎる声^{ひかり}が化学室に響いた。

呆然とする陽平の目の前で、青島は二回転した。靴と床がすれる、きゅっ、という音がした。

「どつだ、私が見つつけてきた庶務候補は？」

指さす先には、髪を銀色に染めた一年生。

「銀河光君ひかりだ。名前からして素晴らしいだろう」

「庶務らしからぬ、派手な名前だな」

相手が目の前にいるにも関わらず、陽平は率直な感想を述べた。これが普通の初対面なら絶対に言わないようなことも、青島からの紹介となると、つい言ってしまう。彼女の存在があるということ、それは普通な初対面ではない。

直接話しかけてみる。

「銀河君さ、こいつが変人だつてことは知ってる？」

「え、はい、知ってます」

「うん、そうか……」

いきなり言葉に詰まってしまった。ちらりと青島に視線を向けると、彼女は両手を広げて身体を捻っていた。準備体操でもしているのだろうか、数字を数える声が聞こえる。

法子、早く来い、と念じながら開けっ放しの扉を凝視する。救いの女神は現れない。

「なあ、陽平。君から見て、彼はどう思う？」

上体を逸らしたまま、青島は聞いてきた。腹筋が伸びているせいか、少し声が変わる。

「とりあえず、髪の色を戻すべきじゃないか？」

最初から気になっていたことを真つ先に挙げた。光は、飛ばされそうな鬘を抑えるように頭を庇い、だらしなく後退りする。腰はまったく据わっていない。

「いや、これは俺のトレードマークみたいなものだから……」

戻す気がないとわかると、陽平は強く睨みを利かせた。さらに光は後退する。

「……涼木は、ちゃんと戻したよな、青島」

「牙宥は関係ないだろう。これは銀河君が決めることだ。二人は別人だということわすれていないか？」

「お前には言っても無駄か。制服違反をしているからな」

「おいおい、私のズボン合法的だぞ？」

試合前に自分を鼓舞する短距離選手のように自分の脚を叩き、見せつけるように アキレス腱を伸ばした。

陽平はため息をついてから一言。

「個人的には、それは脱法だと思っけどな」

踵を返して実験器具に臨む。ピーカーの底に残っている汚れを見
つけ、水道栓を捻った。

「冷たいじゃないか、陽平。これから共に生徒会役員として苦楽す
る仲間と親睦を深めようじゃないか、副会長」

「何度も言わせるな。俺は、二度と生徒会には関わらつもりはない
使い古したスポンジで丁寧^{ていねい}にピーカーを磨きながらも、その口調
は素っ気ないものだった。もう帰れ、と背中が語っている。

やれやれ、と青島は大げさに呟いた。

「そろそろ正直になつてほしいよ、陽平には。デレないツンデレは、
ただのツンだぞ？」

「悪いな。生憎、俺に該当する萌え属性はない」

「何を言う、妹萌えがあるじゃないか」

けらけら、と楽しそうに笑う青島。

「楽しそうだな、お前は。どうでもいいけど、自分の心配もしろよ
？ 生徒会長に立候補しようとしている一年生がいるって、法子か
ら聞いたぞ」

笑い声が止んだ。腰に手を当てた青島の表情からは余計な感情が
すべて疎外されている。あの時の顔だ 光は身体を縮めた。

「ほう、誰だ？」

「新入生代表」

えっ、と思わず耳を疑う光。自分と醍醐以外にもそんなことを考
えている新入生がいたことが信じられなかった。

「ああ、小鳥遊君か。それは面白いな」

「果たして、そんなにどっしり構えていられる余裕があるかな」

何かをほのめかすような言い方。青島は大腿で近づき、白衣の裾
を思い切り引いた。

「どういう意味だ？ 隠し事はよくないぞ、陽平？」

「隠すつもりはないさ。法子曰く、その小鳥遊君は、相当に本気だ

そつだ。入学前からこの学校のことを調べていて、お前のこともよく知っているらしいぞ」

「ほお、それで？」

「さずがに、お前が生徒会長になった経緯までは伏せたそつだが、法子は知っていることはほとんどしゃべってしまったよつだ」

「ははは、法子なら許す」

「それと」

言いかけて、陽平は口をつぐんだ。少しだけ顔を傾けて、青島の様子を伺いながら話すタイミングを見計らっているよつだ。

「小鳥遊君には、優秀な配下がいるそつだ」

自分で言ったことだが、とてつもなく馬鹿なことを言ってしまった気がした。青島を見ると、彼女はつつむいていた。

「あの……、青島さん？」

いきなり大人しくなつたことに動揺した光がゆつくりと近寄る。

腰が引けたままの彼を、陽平は片手を突き出すことで静止した。

「ふつ」

静かになつた物理室に小さな笑い声が出た。それは徐々に大きくなり、青島の声であることがわかつた。彼女は必死に堪えていたのだ。

「ば、馬鹿馬鹿しいぞ、陽平。ふふつ、ふふ、高校生に配下なんてくくつ、フィクションの世界だけのお楽しみ設定だらう、ははは。

冗談が面白すぎるといふのも、ははは、正直なところ問題だな」

「冗談じゃないぞ。これも法子情報だ。千石、戎崎、黒河、尾崎、

竜崎の五人が、小鳥遊君の配下らしい」

「ああ、そつか、そつか、そつか、そつか、それは素晴らしいぞ。

特に、尾崎つてところが面白いぞ。二年生のスリートップの尾崎が配下なんて、ずいぶんと小鳥遊君はお偉いさんだなあ。私なんて、霞んでしまつよ」

「いや、だからな……」

信じようとしなない青島に説明しようとしたが、彼女は一人で笑う

だけで耳を貸そうとしない。

「いやはや、いやいや、驚いたぞ。さすがは、陽平だな。冗談がそこまで冴えるなんて、今日の君はゴールデングラブ賞　まさにシヨートにコンバードしてあげたいくらいにとてつもないぞ。ハンカチ王子じゃなくて、君には白衣王子の称号を個人的に授与したいくらいだ。それで、胴上げして、せっかくだから屋上から飛び降りてもらおうぞ。ふむ、ふむ、ふむ、ふむ、素晴らしいことは美しすぎるな」

何とか聞き取れる寸前の早口でまくしたてる青島。彼女は、ムーンウォークで物理室の扉にまで下がった。

「どうやら、今日も私の負けのようだ。だが、今日は退くが、明日は必ず首を縦に振らせてみせるぞ！」

去り際に、また会おう、と付け足した。段ボールが壁にぶつかる音がした。

完全に置き去りにされた光は慌てて後を追おうとしたが、寸前で陽平に呼び止められた。

「君は、青島についていくんだな？」

「えっ、あ、はい、まあ一応」

切羽詰っていた光には、どれだけ陽平が真剣な表情をしていたか気が付けずに、失礼で適当な返事をした。そして、さらに何かを言うとしていたにも関わらず、挨拶すらせずそのまま物理室から走り去ってしまった。

残された陽平はすぐにビーカーの掃除に戻った。流したままの水道栓を閉め、少し汚れた雑巾で手を拭いた。

「根性があるんだよ、青島と一緒にだな」

腹立ちを抑えるために、思い切り振りかぶって雑巾を投げた。壁にぶつかり、ぺちゃ、という潰れたような音がした。

第四話（後書き）

次回の更新は、5月4日です。よろしくお願ひします。

第五話

イカのような形をした雲が空に浮かでいる。

帰宅途中に何気なく空を見上げて見えた風景だが、何かが違うと黒河は凝視した。歩道で立ち止まる彼の姿を、通行人は不思議そうに笑った。

しばらくして、違和感に気付いた。腕が一本少ないのだ。食腕と呼ばれている、長い腕が欠けている。何度数えても、どうしても足りない。

チタンフレームの眼鏡が曇っていることを思い出した。今まで気にならなかったことが、どうしてか今になって我慢できなくなった。通学用のバックから眼鏡ふきを取り出そうとすると、選挙要項が目に入った。それも、偶然にも副会長の欄が。

眼鏡ふきを後回しにして、周囲に気を配りながら要項を開く。どの役職を見比べても、名称や仕事内容などは違うが、一つだけ共通事項がある。立候補するための条件が設けられていないことだ。そこには、学年という壁は存在しない。

あの生徒会長も上手いことを言うじゃないか、と黒河は感心した。破天荒な変人だという前評判は伊達ではなかったが、それ以上に優秀な人だ。全校生徒の前で、それも入学式という大切な行事であれだけのことを堂々とやってのける才能が、彼女にはある。

これまでの人生で常に傍にいたと言っているいい人間である、小鳥遊たかなしという男の存在は黒河にとっては煩わしいものであると同時に、悔しいものだった。これまで、何をしても勝てた例がなかった。それどころか、いつの間にかそれが当たり前になっていて、無意識に受け入れている自分がいた。

考えてもみれば、庶務へ立候補することも強制されたようなものだ。いつまでも迷っている千石を内心では優柔不断だと侮っていたが、結局はそれも自分の情けなさから目を逸らすための言い訳だった。

千石は迷っているのではなく、悩んでいるのだ。どうして自分が副会長になるのか、それを考えているのだろう。

自分は考えることから逃げたという事実には黒河は気付いてしまった。

＊

5月1日。現職に先立ち、小鳥遊^{たかなし}は生徒会長候補へ名乗りを上げた。その放課後には、青島が続投への意志を表明し、庶務には黒河総一と銀河光^{ぎんがひかる}の二名が立候補した。一年生が生徒会役員に自ら志願するという事態が、学校中を賑やかにさせたのは言うまでもない。

廊下に張り出された公示前の人だかりに光^{ひかり}はいた。

「お兄さんが立候補するって、どういう気分ですか？」

「別に」

気さくに話しかける千石を冷たくあしらい、彼女はそのまま教室に帰ろうとした。人だかりから自分の兄を噂する声が聞こえたのが気に入らなかつたからだ。

邪険にされながらも千石は追いつがる。

「あの、上手く言えないですけど……。噂とか陰口とか気にしない方がいいですよ。お兄さんのことを外見だけで判断されて腹が立つのはわかりますけど」

必死に励まそうとしたが、それが逆鱗に触れることになった。

「私が、そんなことで怒ると思ってるの？ 私の兄さんは、本当に冗談抜きでクソだから、どんな風に言われてもしょうがないじゃん。勝手なことばかり言ってるんでないで、あんたもいい加減に腹くくれば？ 副会長頼まれてるんでしょ、小鳥遊に」

「そうですけど……」

「あのさ、ずっと思ってたんだけど、あんたたちの関係って何？」

友達だけど、それ以上でしょ？ 兄さんと朝比奈の関係くらいに不思議なだけけど？」

答えたくない質問だった。どう返事をすればいいかわからず視線を逸らすと、その隙をつかれて教室に入られてしまった。彼女は荷物をまとめ、差し肩のまま帰ってしまった。

普段なら滅多にしない不注意。自分がいつのまにか追いつめられている証拠だ。

小鳥遊の言葉を思い出す　お前は迷いながらも最善の選択をする。改めて思う、自分はそんなに優れた人間ではないと。現に、華奢な同級生の女子一人に言われ放題だ。

副会長には、まだ立候補者はいない。書記、渉外もない。広報には、九重俊（このえしゅん）。会計には、四日市栄（よっかいちさかえ）の名前がある。

背後から声をかけられた。

「あと四日だ」

小鳥遊だった。やっと聞き取れるほどの小さな声だったが、それはどんな怒鳴り声よりも響いた。

「おい、六徳」

すぐに呼び止めようとしたが遅かった。その姿はすでに遠くにあった。廊下を曲がってしまい、見えなくなった。

取り残された千石は、周囲に生徒がいるにも関わらず孤独感に襲われた。物理的な孤独ではない。精神的な孤独は、何かに抗おうとしていることの証。それは、平坦な人生を送るもの　受動的な人間には縁の無い苦しみ。

ゆっくりと教室に戻る。そして考える。

自分が副会長になる理由はある。されど、ならない理由はない。

それは、なるべきであるということなのだろうか。

わからない。考えてもわからないことはある。そんな精神的なことを考えても意味がない。

だが、できることはある。

千石は、ゆっくりとまた廊下に出た。

選挙公示は学校の至る所に張り出された。それは、この第三特別校舎も同じだった。

無断で一階の掲示板から外してきた用紙を机に置き、アルコールランプの火を始末し、微笑みながら座っている法子ほつこに呼びかけた。

「法子は、立候補しないのか？ 副会長なんて、適任だと思うけどな」

「おかしなことを言いますね、陽平さん。満ちゃんが望んでいるのは、あなたじゃありませんか。それに、私は文化委員長ですから」

「そうか、偉いな」

「偉い？ 偉いとはどういうことですか？」

微笑みを絶やさなかった法子が立ち上がった。のんびりとした歩みで陽平に近づいた。彼の喉元に鼻があたるほどの距離で、いい匂いがする息を吹きかけながら表情に似合わない厳しい台詞を浴びせる。

「何を基準に、偉いという評価を下せるのですか？ 肩書ですか？」

その人の気持ちですか？ 成果ですか？ そもそも、私は誰かから評価されるために文化委員長になったわけじゃありません。自分のしたいことをしているだけです」

相手が恋人であることを感じさせないような容赦のない言葉。陽平の顔が苦悶に歪む。

「それは違う……、間違っている。自分のしたいことを好きにしていい人間ばかりじゃないんだ。才能のある人間は嫌でもやらなきゃいけないことがあるんだ。俺は……、俺は天才じゃないから、副会長にならなくていいんだ……」

「何を……、いったい何が言いたいんですか？」

「前に言っただろ、『要求』のことだ。わかったんだよ、青島じゃ無理なんだ。あいつの行動力は確かにすごいさ。だけど、どうしても事務能力に欠ける。官僚タイプじゃないと、俺の『要求』は通らない。現場で動くあいつじゃどうしても、どうしても駄目だ」

「わかりません……、陽平さんの考えがまったくわかりません」

「いいよ、わからなくて。これは俺の問題なんだ」

寂しそくに視線を落とし、陽平は白衣を着た。小さな風がおこり、制服の襟までとどく長さの後ろ髪が乱れる。

「官僚タイプが必要なら、それこそ陽平さんがまた生徒会長になるべきじゃありませんか？」

「一度やってみて嫌というほど身の程を知ったんだよ。合理的にものごとを考えてばかりいる俺には、結局のところ率いる才能がないんだ。何をやっても単調で、型にはまったような楽しさしか演出できない」

それはちょうど、酸性の液体に青色のリトマス紙を浸すと赤色に変色するようなものだ。秀才である彼の最大の悩みは、自ら道を開拓できないことで、それは化学をする上でも致命的な欠点で、かつて生徒会長をしていた際にも足枷となっていた。

「この学校に、俺の『要求』を叶えてくれる奴なんていないよ。勉強ができて、だからといって生徒会長が務まるってわけじゃない」「悲しいです。満ちゃんが知ったら、残念がるでしょうね」

悔しそくに両目をつぶる法子。瞼の裏に、青島の笑顔が浮かんだ。「そんなことで落ち込むようなあいつじゃないさ……」

気遣うような言葉もどこか虚しい。彼自身がそもそも原因だからだろう。

二人の間に会話が消えて数秒。化学室に扉が叩かれた。

「失礼します」

礼儀正しく扉を開けたのは、ノーフレームの眼鏡をかけた男子生徒。陽平の姿を見た途端、はっとしたように動きがとまった。

「これは、お邪魔でしたか」

小さく頷きながら、陽平と法子を交互に確認する彼は少しだけ勘違いをしていた。それにいち早く気が付いた法子はすぐに口を開く。

「うっん、大丈夫ですよ。どうかしましたか、六徳さん」

名前で呼んだことに陽平は引っ掛かった。

「知り合いか？」

「はい、小鳥遊六徳さんです。ほら、生徒会長になりたいっていう」

「ああ、尾崎が配下だとかいうあれか」

改めて陽平は小鳥遊を見据える。入学式で青島と握手をした生徒だ。これまでに何度か法子から話を聞いていたが、想像通りの相手だった。

じつと見られることに抵抗を覚えた小鳥遊は咳払いをした。

「あなたが、南波陽平さんですね。先々代の生徒会長だったと法子さんからはお聞きしています」

「よく情報を集めているね。もつとも、じきに先々々代っていう、語呂の悪い存在になる予定だけどね」

空気を和ませようとしてとばした冗談だったが、笑いの呼び水にはならなかった。まるで自分がつまらないことを言ってしまったように感じ、陽平は恥ずかしさから視線を窓に逸らした。

「南波さんについては、自分としてもいろいろな情報を吟味した結果、優秀な人だと判断しました」

「それは嬉しいね」

「生徒会長当選時の支持率は、脅威の88パーセント。成績は入学時から主席。二年次には、国際化学オリンピックで日本代表として銀メダルを獲得。素晴らしいです」

手放しな褒め言葉。そんな輝かしい成績ながらも、陽平はかぶりを振って謙遜する。

「たいしたことじゃないよ。俺は、所詮は秀才だからその程度だ。去年の金メダルを取った中国人も、俺と同じ。って、それはどうでもいいか」

窓に向けていた視線を戻し、尋ねる。

「それで、小鳥遊くんはどうしてここに？　もしかして、入部希望？」

「いえ、そういうわけではありません」

「私に用事があるんですよね？」

自ら進み出る法子。だが、小鳥遊はそれを制した。

「今日は違います。今回は、南波さんに会いに来ました」

「俺に？」

心当たりがない陽平は首を傾げた。法子という仲介人がいなければ二人は初対面だ。それが、いきなり自分を訪ねてきたというのだから少し驚いた。

「意外だな。君とは、まだ初対面だぞ」

「時間的なことを気にする人だとは思いませんでしたが」

「いや、そう言われると困るね……」

悩むふりをしながらじつくりと小鳥遊を観察する。とにかく冷静な男だ。まるで、どの言葉もあらかじめ用意していたかのように機械的で、それなのに場に即している。頭のいい男だが、それだけではない、と陽平は判断した。

「まあ、話くらいなら聞くよ。外に出ようか？」

「助かります」

どうなるかわからないが、この場はついていくことにした。何か言いたそうな法子に、すぐに戻るから、と断ってから化学室を出た。

第五話（後書き）

次回の更新は、5月5日です。よろしくお願いします。

第六話

副会長へ名乗りを上げる生徒が現れた。

教室に入ろうとした際に目にとまった選挙公示を目にした小鳥遊^{たかなし}は、じつくりとそれを眺め、満足そうに頷いた。改めて教室に入り、黒河に声をかけた。

「千石がやつと覚悟を決めたようだな」

「副会長のことが。結局、あいづらい答えだな」

「それが、千石考貴という男の性分だから当然だ」

とりあえず、これで最低限の準備は整った。小鳥遊は久しぶりに肩の力を抜き、小さく深呼吸した。

「気になっていたんだが、他の役職はどうするつもりだ？」

「他の役職だと？」

千石が副会長に立候補したのはいい。だが、その他の役職を埋めることはまだしていない。慎重な黒河からすれば、今後を考えると不安要素だった。

そんなことが、と小鳥遊は一笑した。

「これ以上は、身内で固めるつもりはない。気心の知れた間柄での生徒会は確かに都合がいいだろうが、それは腐敗を生む。多種多様な生徒が共同で生徒会を運営することに意義がある、と俺は考えている」

「だから、戒崎と尾崎さんは蚊帳の外ということか」

廊下側の座列に視線を向ける。一番前の座席には誰も座っていない。戒崎聖十郎の姿は無い。

「戒崎には、別の指示をしてある。尾崎さんについても同じだ。あの二人は、お前も気付いているだろうが、団体行動には不向きだ。優秀だが、癖がありすぎる」

「それは……そうだな」

反論を試みたが、戒崎と尾崎という人間について一瞬考えただけ

で、それが通りだと納得してしまった。

飄々とした戎崎聖十郎。

神秘的な尾崎匠。

知り合いになっておきたいが、絶対に友達にはなりたくない二人だ。

「そつだよな……」

「ああ、ところで」

何も言えずに迷っていると、小鳥遊が少しだけ話題を転換した。

「昨日、先々代の生徒会長と一対一で話した」

「法子さんの恋人だっという人か？ 確か、南波だったか？」

「南波陽平さんだ」

「それで、何を話したんだ？」

「推薦人だ」

「推薦人だと？」

聞き覚えのある単語だった。思い出そうと頭をかくと、選挙詳細にあった一文を思い出した。急いで、机に中から選挙詳細を取り出して開いた。

そこには、推薦人についての説明が記されていた。各立候補者は、一人だけ推薦人をつけることが認められていて、その生徒は重複しても構わないとある。重複してもかまわない、という規則に引っ掛かりがあった。

「おい、まさか、俺たち全員の推薦人を南波さんに頼むつもりか？」

「そつだ」

さらりと肯定する小鳥遊。だが、その表情は芳しくない。

「だが、交渉が難航している。二度と生徒会には関わりたくないと譲らないところが厄介だ。青島さんは、彼に副会長を打診しているそつだが、やはり渋られているそつだ」

「同級生の頼みでも駄目なら、新入生はもつとだな」

ふと、疑問に思う。これまで、彼らが法子を通じて得ていた情報によると、陽平と青島は幼馴染で比較的良好な関係だとされていた。

にも関わらず、その頼み事を断る理由は何だろう、と。

「恐らく、何か理由があるに違いない」

小鳥遊も同じ考えに至っていたことに黒河は悔しさを覚えたが、それを押し殺して相槌を打った。今は問題解決が先だ。

「心当たりはないのか？ 法子さんは、何かそれらしいことを言っていたかったか？」

「いや、思い当たることはない」

小鳥遊が言うならきつと正しい、と一瞬でも納得してしまった自分を黒河は責めた。

「聞き逃しがあるかもしれないぞ。放課後に、また化学室に行こう」

「いや、その必要はない。今朝、電話で千石に指示を出した」

「ああ、そうか……」

手際でも負けた。どうしても、黒河は小鳥遊に一步遅れてしまう。入学時の成績でも、彼は三位。小鳥遊には勝てなかった。

「法子さんから直接聞き出す方法もあるが、こういうことは千石に任せるに限る。あいつは、相手に警戒心を抱かせない才能があるからな。戒崎と尾崎さん、それにお前や俺には逆立ちしても真似できない芸当だな」

黒河は何も答えようとしなかった。小鳥遊もそれ以上は言わず、そのまま自分の席で自習をはじめた。

*

醍醐と光^{ひかる}は三年D組にいた。召集をかけた青島がいるだけで、教室は閑散としている。進学校である冥栄高校では、部活動に所属していない普通科の生徒はほとんどすぐに帰宅してしまう。受験を控えた三年生ならば尚更だ。

「さあ、時間がないぞ。早々に、選挙活動に取り組もうじゃないか」
教卓には掲示用の模造紙とマジックがある。立候補者が伝えたいことを書くためのものだ。

「これって、どこに掲示するんですか？」

下書きを済ませたばかりの光が腰を上げた。まだ途中だった青島は目を離さずに答える。

「どこでも、いいぞ。玄関でも、教室でも、トイレでも、職員室でも、廊下でも、倉庫でも、保健室でも、北校舎前の庭でも、スリジヤヤワルダナプラコッテでも」

「最後の場所、どう考えても学校施設じゃないっすね」

「スリランカの首都だぞ。素晴らしいだろう」

くだらない冗談を言い、それで自分が笑う。思わず、光も苦笑してしまう。

作業を傍観していた醍醐がはじめて口を挟んだ。

「本当に、自分が推薦人でいいんですか？」

「ははは、当然じゃないか。銀河君の友達が他にいるか？」

「俺に友達いないみたいない方じゃないですか！」

「ああ、すまん、すまない、ごめん。だが、二人の付き合いは中学からだろう。武士君もののふだって、何もしないでいるのは辛いだろう、キツイだろう、酷だろう。人間という生き物は、できることがあるならするべきだ、と私の従妹が雀荘で出会った人の息子の友達が好き。な歌手の唄う歌の歌詞を考えた人が言っていたなっかつたぞ」

「……要するに？」

「君は、是非とも推薦人として銀河君を助けてほしいということだ」

「面倒くさいから、簡潔にお願いします……」

「ははは、申し訳ない、ソーリー、チエソンナムニダ」

陽気というよりもふざけているような調子の青島は、会話が楽しくてしょうがないようだ。満面の笑みは、まるで官軍の指揮官のように爽やかなものだ。

「さてさてさて、そういえば、副会長に立候補者が現れたそうだが、知り合いだと言っていたな？」

「千石のことですね。時々、お互いの教室を行き来してますけど」

「いいね、素晴らしいね。どんな人柄だ？」

少し考えてから醍醐は答えた。

「何というか、警戒心を抱かせない雰囲気がありますね。動物とかにでも、すぐに懐かれそうな感じでしょうか」

腰が低く、それでいて卑屈になりすぎない彼の姿勢からは、まるで誰かを補佐しているような印象を受ける。聞き上手にも、話し上手にもなれるという点は希少価値だ。

「素晴らしいな。それだけの人材なら、あるいは陽平の代わりに務まる可能性があるな」

「本人は、小鳥遊とつながっている様子ですけど。まあ、すごく昔から友達だそうですから、不思議でも」

「ちよつと、待て」

醍醐を制した青島の表情には、驚きの色があった。何かを思い出すかのように目をつぶり、同時に手もとまる。彼女は、少し前に陽平から言われたことを記憶の底から発掘した。

青島は目を見開いた。

「私は用事ができた。すまないが、しばらく二人で作業を続けてくれ」

そのまま教室を出ようとした彼女だったが、一度振り返って指示を付け加えた。

「その模造紙が完成したら、好きな場所に掲示しておくといい。だが、スリジャワルダナプラコッテは駄目だぞ。渡航費諸を勘定すれば建設的じゃないからな」

彼女はいつも通りの調子だった。残された光ひかるは、苦笑いしながらマジックを握った。

「変人すぎるよな、青島さん。まあ、そこがいいんだけどな」

「お前の趣味はわからん。どうしてあんなに変人なのに、あれだけのことが言えるのか不思議だ。さつきは、少し動揺していたけどな」

「はあ？ 動揺なんてしてなかっただろ」

光ひかるには、普段と変わらない様子に見えた。脈絡のない、意味のない、面白くもない、「冗談を言う青島そのものだった。だが、醍醐は

非常に微妙な点において、光とは真逆の印象を受けていた。

「スリランカの首都の名前、スリジャヤワルダナプラコッテだが、一回目は正解だったが、二回目は少しだけ違っていた。青島さんが、冗談を間違っなんて考えにくい」

「そりゃそうだけだよ……」

間違いは誰にでもある、とは言いつらい。青島との関係はまだ一ヶ月弱で、時間的なことを考慮すればすべてを知っている訳ではない。それでも、彼女が自分の冗談 それどころか、自分の言葉に対して責任を持っていることは何となくわかる。そんな彼女が、一般的なでない単語といえども間違っことには違和感がある。

後を追うべきかどうか光は悩んだ。それが必要ないだろうと判断するのにもそれほど時間はかからなかった。

第六話（後書き）

次回の更新は、5月6日です。よろしくお願ひします。

第七話

「ご無沙汰です、法子さん」

化学室に千石が着いたとき、室内には法子だけだった。彼女は雑巾で机を丁寧に拭いているところだった。

「考貴さんでしたか。こちらこそ、お久しぶりです」

「入学前には、色々とお世話になりました」

「いえいえ、お気になさらず」

汚れた雑巾をしつかりと洗い、自分の両手を石鹸で綺麗にして、法子は椅子を引いた。千石もそれに倣った。

「それで、今日はどうされました？ 何か、私に聞きたいことでも？」

「実は、六徳じゅうとくから頼まれましたね。あの、南波さんのことですよ。推薦人をお願いして、断られたんですけど、どうしてかわかりますか？」

小細工などせずにストレートに尋ねた。自分は、小鳥遊とは違い、そういったことに長けていない。ならば、普通にするのが一番だ、と千石は考えていたからだ。

「ええつと、どういうことですか？」

ゆっくりと首を傾げる法子。

「それが、六徳曰く、南波さんが生徒会に関わろうとしないのには何かしらの理由がある、そうです。それが知りたくて……」

「うん、そうね……。六徳さん、さすがですね」

鋭すぎる、と法子は感心するよりも驚いた。一度会話をしただけで、陽平が何でも話すとは考えられない。推測したとすれば、勘の鋭さと洞察力は相当なものだ。長い付き合いだが、ここまで成長しているとは思ってもみなかった。

「私も、すべてを教えてもらっているわけではありませんが、断片的には聞いています。役に立つとは限りませんが、それでもいいで

「しょうか？」

「そんな、こつちが頼んでいるんですから。どうぞ、お願いします」
法子は一呼吸置いてから口を開いた。心の中で、勝手に教えて「めんなさい、と陽平に謝った。

「陽平さんは、生徒会長時代に、何かをしようとしていたんです。本人は、『要求』と呼んでいるので、恐らく、学校側に対して何かを訴えていたのだと思いますが……。どうも、それが棄却されたことで生徒会長を辞したそうです」

少しだけ、法子は猫背になる。自分の上履きのつま先が見えた。

「満ちや 青島さんは、詳しい事情を知っているかもしれないけど、『要求』を通すことには反対しているの。だから、陽平さんは副会長にならないそうだけど」

「青島さんなら、詳しい事情を知っているかもしれない、ということは確かですか？」

「ええ、多分間違いないわ」

「そうですね、と呟き、千石は太ももを叩いた。ならば、青島と会わなければいけないな、と彼は立ち上がるうとした。

その時だった。

「兄弟たちよ！ 待たせたな！」

威勢のいい声とともに、青島が姿を現した。

「えっと……」

呆然として反応に困る千石。対照的に法子は落ち着いた対応をする。

「いらつしゃい、満ちゃん。残念ですけど、陽平さんはいませんか？」

「ほう、陽平め、私に恐れをなして逃げたか。ふむ」

踵を返そうとした青島は、千石の存在に気が付いた。彼女は、わざわざ横歩きで歩み寄り、息遣いが聞こえるほどの至近距離で話かけた。

「ところで、君は誰だろう？ 新入生君だろうか？ それとも、転

校生君だろか？ それとも、卒業生君だろうか？」

「あの、新入生ですけど」

「ほほう、そうだったのか！ それは失敬したようだ。自己紹介しよう、私は、青島満。この学校の生徒会長だ」

明らかにわざと偉ぶった自己紹介。ポニーテールにされた後ろ髪が揺れる。

「はじめまして、千石と申します」

「礼儀正しいなあ　千石？」

「はい？　どうかしましたか？」

青島は一人で何度も頷き、次第に笑顔になる。あまりにも近いので、千石はおもわず怯んでしまった。

「そうか、副会長に立候補したというのは、君だったのか！」

大人しかつたのが一転、青島は一人で盛り上がりだす。

「素晴らしいな、一年生にして副会長を目指すとは。私も素晴らしいが、君はさらに素晴らしいぞ。うん、それに小鳥遊君も素晴らしい。一年生にして、生徒会長になろうとしているくらいだからな。」

ああ、素晴らしいといえば、陽平が珍しく冗談を言っていたんだぞ、法子。君と、千石君が小鳥遊君の配下だって、なんて馬鹿げた冗談だと思わないか？　実在の人物を例にするというところが、あまりにリアリティを追及しているだろう。だから、私は信じているんだ」

笑顔が真顔に変わる。法子と千石も真剣な表情になる。化学室は沈黙する。時計の秒針の音が良く聞こえるほど沈黙する。誰が口火を切るか、三人はそれだけを考える。

実際に口火を切ったのは、やはり青島だった。

「民主主義の日本において、主従関係が成り立っているなど信じられないな。それに、君たちはしがない高校生だ。どういうことだ？

私は、現実と空想の区別はつけているつもりだが、君たちは二次元的な関係を築いているのか？」

その詰問に、法子が自ら進んで答えた。

「違うよ。そこまでしつかりと主従が成り立っているわけじゃないけど、それは本当だよ。そういう設定で遊んでいるわけじゃないんだよ」

「法子さん！ それ以上はマズいです！」

必死に割り込もうとする千石。だが、法子はさせなかつた。人差し指を突き出し、黙っていなさい、と強く言い聞かせた。

「満ちゃん、誰にも言わないって、約束できる？」

「できるとも」

それだけで、二人の約束は成立した。法子は、小鳥遊家を中心とする自分たちの歴史について事細かく説明した。それはまるで小説の中でだけ成立するような、突飛な内容だった。青島ですら、何度か顔色を変えた。

すべてを聞き終えた彼女は、優しい口調で言った。

「そうだったのか、素晴らしいな」

圧倒的すぎる内容にも、混乱することなく、しつかりと法子を見据えている。その姿を見て、この人は絶対に秘密を守る、と千石は直感した。

「安心しろ、法子。私は、この話を墓まで持っていくぞ」

「満ちゃんなら、必ずそう言ってくれると思っていました」

二人の女は、お互いに美しい顔をほころばせた。友情というものだ。いいものが見れた、と感動した。だが、法子がすべてを話した理由がわかり、今度は驚愕することになる。

「ねえ、満ちゃん？ 私たちの秘密は、ちゃんと教えましたよね？

だから……」

恥じらうようにそっぽを向き、媚びるような雰囲気を漂わせる法子。青島は、間の抜けた表情で首を傾げる。

「陽平さんの『要求』について教えてくれませんか？」

「ふっ、等価交換の原則ということか。商売上手さんだな、法子。

素晴らしいお嫁さんになれるだろうな。私の嫁にしたいくらいだ」

「冗談を言っても誤魔化されませんよ？」

有無を言わせない法子の視線。さらに、青島の右腕をがっちりと掴んでいる。おっとりしている彼女からは想像もできないが、その握力はかなり強い。竜崎家の長女として、武術のたしなみがあるからだ。それを知っている千石は助けに入ろうかとしたが、ここは任せることにして諦めた。

痛みを我慢しながら青島は言う。

「誤魔化すつもりじゃないさ。親友の頼みなら、喜んで話そうじゃないか」

無理に笑いながら、自由が利く左手を無意味に動かしながら、『要求』について彼女は説明する。陽平が何を求めているか、それは学校の仕組みを変えるほどのことだった。

それまで黙っていた千石が声を上げた。

「そんなことを考えているのですか！」

「でも、陽平さんなら十分にありえますね」

法子の拘束が解かれた。自由になった青島はゆっくりと化学室を立ち去る。

「失礼したな。私は、私が知りたかったことを知れたし、それで十分だ。陽平には秘密にしてくれ、法子」

「はい、満ちゃんこそ、内密にお願いしますよ」

腕を強くつかまれたことでわだかまりが発生することはなかったようだ。二人はいつもと変わらない挨拶を交わした。

青島の姿が見えなくなったところで、化学室に残った二人は会話を再会する。

「これで、六徳さんが知りたがっていた、『要求』については問題ありませんよね？」

「ええ……、まあ、大丈夫です」

歯切れの悪い千石。古い付き合いなので、法子が怒ると怖いとは知っていた。だが、久しぶりに実際に見ると迫力があつた。余計なことをして堪忍袋の緒を切らせるわけにはいかない、と心に誓った。気を取り直して法子に礼を言う。

「とりあえず、助かりましたよ。本当は、もっと手間取ると思っていたんですけど……」

「時間があまり無いのですから、少しでも力を貸しただけですよ。その代り、ちゃんと選挙活動をしてくださいね？」

「ええ、それはもちろん」

化学室を出た千石は、急いで一年A組に戻った。教室で待っていた小鳥遊に、『要求』に関する正確な情報を伝え、最後に法子を怒らせてはいけないと付け加えた。

第七話（後書き）

次回の更新は、5月9日を予定しています。よろしくお願ひします。

第八話

5月7日。放課後には立候補が締め切られる。

昼休みに、小鳥遊^{たかなし}は三年A組を訪れた。視線が彼に集中する。新入生代表として入学式に登壇したことだけではなく、一年生にして生徒会長に立候補した彼は完全に有名人だった。

廊下側の最後尾に陽平はいた。声をかけると彼は気さくに応じてくれた。

「どうした？」

「お話があります。階段までよろしいですか？」

人通りが少ない階段へ移動し、話を切り出す。予想はしていたが、やはり推薦人についてだった。断ろうとした陽平だったが、小鳥遊の口から予想外の言葉が出たことで表情を変えた。

「どうして、『要求』について知っているんだ！」

「落ち着いてください、南波さん」

おもわず声を荒げてしまった。無理もない。陽平からすれば、『要求』について知っている人間は、青島と法子の二人だけなのだから。

「ああ、悪い……。だが、どうして知っている？ 誰から聞いた？」

「申し訳ありませんが、それは教えられません。守秘義務に関わりませんので」

何が守秘義務だ、と陽平は内心で悪態をついた。

「ですが、知ってしまった以上は、自分としても協力を惜しむ訳にはいきません」

「何だって？」

意外すぎる台詞だった。陽平としては、それをネタとして推薦人を強制させられるのだろうと考えていた。協力を惜しまない、ということとはつまり彼にとって最も望ましい展開だ。

だが、すぐに我に返る。じつくりと、小鳥遊という男の能力を見

定めなくてはいけない。

「つまり、君は俺に協力してくれる、と解釈してもいいんだね？」

「ええ、そうです」

「それは助かるよ。だけどね、具体的に君はどうするつもりだ？ 私がかんなことを言ってしまったては本末転倒だが、新しい学科を新するなんて易々とできることじゃないよ」

南波陽平の『要求』。それは、この冥栄高校に新しい学科を新設することであった。

そもそものはじまりは、彼の妹だった。不登校になってしまった妹を社会復帰させるために、自分が通う高校に新しい学科を新設することを考えたのだ。だからこそ、生徒会長として一人で駆け回った。それでも、やはり挫折した。

だからこそ、この一年生が何をしても無駄だろうと諦めていた。

「気持ちは嬉しいけれど、世の中にはどうしようもないことがあるからな」

教室に戻ろうとした陽平を、小鳥遊は呼び止めた。

「定時制ならば、可能でしょう」

「定時制……だと？」

その考えは斬新だった。妹のために数学科を新設しようと躍起になっていた陽平からすれば、盲点になっていたところを小鳥遊は的確についてきた。

「妹さんは、数学に限るならば、すでに大学レベルすらも凌駕しているそうですね。確かに、それならば数学科を設置することが望ましいでしょうが、それは無理です。大学ならまだしも、ここは高校ですからね」

返す言葉が無かった。できないほどに的を射ている。

「ですが、定時制ならば可能性はあります。自分の考えを聞いていただけますか？」

「ああ……」

腕時計を確認してから返事をする。まだ時間はたっぷりとある。

「大学レベルの数学を理解する才能があるなら、それを活かす方法を考えましょう。特定の分野において長けている者だけを受け入れる学科とします。そうすれば、学校としての株も上昇します」
「特定の分野に長けている者か……。天才って何か？」

「そう考えてもらって結構です。才能がありすぎて周囲とコミュニケーションが取れない高校生なら、都内でもそれなりにいるでしょう。この学校でも、すでに一人、芸術科で孤立している生徒がいるそうですからね」

「八神神次郎やがみしんじろうのことか。確かに、彼は天才といっても遜色ないね」

小鳥遊の考えた方法に対する陽平の評価は、かなり上々だった。

現実的ではないが、それでも可能性は十分にある。学校側にも利益があるならば、それだけでこちらも強気になることができる。

最後に、小鳥遊が詰めの一言。

「ところで、南波さん。自分は手の内を明かしましたが、あなたからはまだ推薦人をするという返事をもらっていません。この方法をそのまま、青島さんと一緒に実行することも可能ですが、どうしますか？」

嫌な質問だ。陽平は苦笑するしかなかった。

*

選挙管理委員によって放課後に張り出された立候補者一覧。今日が最終日であったため、模造紙にもかなり気合が入っている。

三年D組では、青島が何故か嬉しそうにしていた。

「あの、青島さん……」

恐る恐る声をかける光ひかる。副会長を打診していた友人に裏切られたことで、怒り狂ったのだらうと彼は勘違いしていた。

「いやあ、素晴らしいことになったな、銀河君ギャラクシー」

「ええ、はい、まあ……」

反応に困りしどろもどろになる光ひかる。隣にいる醍醐に無言で助けを

求める。

しかたなく、醍醐は応じた。

「青島さん、裏切られたかたちになりましたが、悲観するのは後にしましょう。ひとまず、今後のことを考えましょう」

「ほう、ゴンゴ共和国について考えるのか。それは素晴らしいな」「青島さん！」

声を荒げる醍醐を、青島は片手で制した。自分は大丈夫だ、と彼女は告げた。

「君たちは勘違いしているようだな。私は、裏切られたなど思っていないぞ、そんな被害妄想な女ではないからな。小鳥遊君に少しだけ嫉妬してはいるが、陽平が自分で決めたことなら仕方ないだろう」満面の笑み。恨みなどまったくなく、その表情を見ただけで納得できた。あまりにも広い心に、二人は脱帽した。

「敵いませんね、青島さんには」

「最高っすね」

褒めるとさらに青島は笑う。

「ははは、そうだろう！ 私は最高な生徒会長だぞ！」
そんな彼女が突然真顔になる。

「だが、正直なところ、この選挙
ため息をひとつ。」

「だれが当選してもおかしくないぞ」
負けてもおかしくない、ということだ。彼女の口からもれたのは、弱音だった。

各生徒会役員立候補者

会長 青島満

三条頼人

小鳥遊六徳

副会長 千石考貴

書記 なし

会計 四日市栄

渉外 なし

広報 九重俊

庶務 銀河光
黒河総一

一章 く入学からはじまる出会いく 完

第八話（後書き）

一章が完結しました。次回の更新は、5月13日を予定しています。二章からもよろしくお願ひします。

第一話

選挙結果の掲示は、投票日から二日後にされた。全校生徒が、千六百人を超える眞栄高校の選挙は、小規模な自治体に匹敵するほど大掛かりなものだ。同時に七つの役職を改選するため、投票総数は一万を軽く上回る。それを、たった二人で捌いた選挙管理委員会の働きは褒章に値するものだろう。

一年生にして生徒会長となった小鳥遊も、当然ながらその働きを評価していた。

「千石、相談がある」

隣に座っている副会長　千石考貴は耳を傾ける。

「選挙管理委員会のことだが、人数の補充をしたいと考えている」

「ああ、そういえば、前にそんなこと言ってたな」

小鳥遊邸にての会話を思い出す。遊軍のように、自由に、人材不足をおこなっている委員会へ助っ人できる組織を新設したい　そんなことを小鳥遊は独白していた。

会長席から立つ。

「俺が生徒会長になって最初の仕事だ。新しい組織を編成する」

その声は、生徒会室に響いた。他の役員の視線が集中する。

「それはいいが、誰を組織の構成員にするつもりだ？　面倒な役割を自分から引き受ける生徒はなかなか難しいぞ」

冷静に黒河が問題点を指摘する。

さらに、唯一の三年生で、紅一点である　車椅子に座っている四日市栄が挙手する。

「現状では、新たな組織を編成するための予算がないけど、どうするつもり？　芸術科からも予算が少ないって苦情があるけど」

肩にかかる長さの黒髪を撫でながら、生徒会の帳簿を開き、それを右に回す。最初に目を通した、広報に当選した九重俊が顔をしかめる。

「うわっ、ひどいな」

顔こそは平凡だが、その声は耳の奥に残るほど特徴的で、関心を引き付ける。帳簿は、小鳥遊まで回った。

残金を見た瞬間、それを閉じた。

「……問題ない」

「あのね、強がりはやめてくれない？」

表情一つ変えない小鳥遊に、四日市が抗議する。前回に引き続き、生徒会役員である彼女は、この中の誰よりも内情を把握しているという自負があった。

「君は知らないと思うけど、青島がお金に無頓着だったせいで、生徒会の予算は火の車なの！ そんな余計なことに使う余裕はないの！ これまでだって、選挙管理委員会は不手際なくやってきたから大丈夫なの！」

迫力こそはないが、怒鳴り声は四人の耳に響いた。九重だけが身体を縮ませた。

咳払いをして小鳥遊は言う。

「ならば、青島さんに責任をとってもらいましょう」

「だから」

「今回の選挙で落選した生徒を、生徒会に登用します」

四日市の手のひらが机に叩きつけられた。痺れた自分の手を庇いながら、彼女はため息をつく。

「それって、空席になっっている、書記と渉外についてこと？」

「いえ、それについては、二年生の八神神次郎さんと、尾崎匠やがみしんじろうさんを指名するつもりですので」

「や、八神っ！」

情けない声をあげる九重。二年生である彼には、特に八神の評判は聞こえていた。もちろん、三年生である四日市も同様であり、彼女も顔色を変える。

「ま、また、八神を書記にするつもり！ あんな、札付きの不良が、生徒会役員なんて示しがないじゃない！」

「そ、そうだよ、小鳥遊くん！ あいつは、やばいよ！ F組の涼木と並ぶ、この学校の悪だよっ！」

声を揃えて抗議する上級生を、小鳥遊は冷静すぎる眼差しで見ている。なるほど、こいつらは、体面を気にする人間だったのか、と静かに、千石の肩を叩いた。耳元で、命令を囁く。

「それでいいのか？ 四人で足りるのか？」

「十分だ」

上級生を無視して、彼らは会話する。しばらくして納得した千石は、そのまま生徒会室を後にした。

「ちよつと、勝手に話を進めないで！」

「そうだよ、小鳥遊くん！」

興奮する二人を、黒河が両手を広げて落ち着かせようと試みる。

だが、四日市は脇をすり抜けて、小鳥遊のところまで車輪を転がした。

「心配はいりません、千石に頼んだことは、八神さんとは無関係です。青島さんのところに行かせただけです」

「結局、どうするつもりなの？」

少しだけだが、声の調子が落ち着いた。話題が逸れたことに安心したのかもしれない。

「青島さんを中心に、生徒会傘下の組織を編成します。予算は、なし。必要に応じて、各委員会に助力することを仕事とします」

「それじゃあ、青島が生徒会に関わるじゃない！」

「ご心配なく。その組織の代表は青島さんですが、直轄するのは生徒会です。渉外を通じて、私から指示をするので、彼女には一切権限は残りません」

「渉外って……」

「だから、尾崎を指名するつもりなんだ……」

一瞬にして二人は鎮火した。小鳥遊の考えが、これ以上ないくらいに完璧だったからだ。

青島の影響力は、会長の座から陥落しても衰えることはない。事実、

小鳥遊の支持率は57パーセントで、青島は42パーセントだった。陽平の推薦がなければ、落選は必死だっただろう。

だからこそ、青島の能力を利用しながらも、一切の権限を奪うことが出来る計画には賛成するしかなかった。

完全に反対者を鎮圧したところで、小鳥遊はまた咳払いする。

「さて、納得していただいたところで、もう一つ。八神さんを書記にする方法を考えましようか」

*

翌日、校内の掲示板に生徒会からの勅令が張り出された。

『以下の生徒を、本日付で生徒会特命係に所属するものとする。三年D組青島満。一年D組朝比奈醍醐。一年D組銀河光。一年B組銀河光。冥栄高校生徒会会長 小鳥遊六徳』

さながら懲罰人事だった。今回の選挙で落選した二人に、その推薦人。さらには、落選した男の双子の妹。職員室でもこれは問題になった。

学年主任から問いただされているのは、生徒会顧問である水瀬純子^{みこ}であった。彼女は、事実確認をするまで時間を下さい、と頼み込んでこの場を切り抜けた。

放課後になり、水瀬は小鳥遊を呼び出した。

「特命係の件ですか？ 本人は、すでに了承済みですが」

すでに先手を打たれていた。水瀬は、青島の顔を思い出し、舌打ちした。お前は、そんなに情けない女だったのか、と。

ですが、と小鳥遊は呟いた。

「B組の銀河にはまだ了承してもらっていません」

「あいつは、そもそも選挙に参加していないだろう。懲罰にかかる必要はない」

それ以前に、懲罰が必要ない、とは言えなかった。完全に懲罰と決められないからだ。すでに本人たちが承諾しているという点も

厄介だ。そうになると、こちらからは何もすることができない。

水瀬が手詰まりになったところで、小鳥遊は話題を変えた。

「ところで、芸術科二年A組の八神さんについてお尋ねしたいのですが？」

「八神？ まさか、お前も、あいつを書記に？」

これは意外だった。不良である八神を嫌悪するほど器の小さい水瀬ではないが、小鳥遊が青島と同じ人選をしようとしたことには、やはり違和感があった。

「彼は優秀ですから」

短く、小鳥遊は理由を説明した。

「まあ、指名権はお前にあるから、私は何も言わないが、それで、何が知りたい？」

「前回、彼を書記に指名する際に、どのような交換条件を？」

「誰から、その話を？」

「守秘義務です」

「なら、私も守秘義務だ」

子どもっぽい、と自分でも思ったが、水瀬は口を閉ざした。二人の間に沈黙が生まれ、それがしばらく続いた。

先に諦めたのは小鳥遊であった。それは、本当の諦めだった。

「では、自分はこれで」

そう言い残し、彼は職員室を後にした。

*

敗軍の将である青島はご機嫌だった。

「いやあ、素晴らしい。会長から陥落したときには、これで終わるかと思つたが、また生徒会に参加できるとはな」

傘下だろうと、純粹に生徒会にいられることが嬉しいのだろう。

彼女は放課後の教室で、気まずそうな表情の陽平を前に踊っていた。その姿を見た陽平は、最初こそは自分に気を使っているのか、と

勘違いしたが、すぐに青島という女の行動原理を思い出した。この女は、変人以上にならないために、努力しているのだ、と。

「これで、君にも少しは協力できるぞ、陽平」

「ありがたいな、青島」

笑顔に、笑顔で返した。本当に自分が笑えているのかはわからなかった。どん底に落ちた青島と、望みを叶える目途がついた陽平。

お互いの気分はまるで対照的だった。

「銀河君ギャラクシーと武士君もののぶも、最後まで付き合ってきれるそうだからな。素晴らしい、ありがたい。私は幸せだぞ。陽平」

「よかったな」

何も得することなどないにも関わらず、青島を助けることを選んだ一年生二人に、陽平は、どんな顔をすればいいか悩んだ。そして、心底から青島を羨んだ。

これから卒業まで、自分は沈んだ気持ちで毎日過ごさなければいけない。それが、裏切りの代償だということは納得していた。それ以上に辛いのは、誰も自分を責めなかったことだ。まるで何事もなかったかのようにあっけらかんとしている。いつそ、学年中から村八分にでもされれば、それで罪悪感ざいあくかんは薄らいだらう。

その甘えた考えを、陽平は打ち消した。それは罪滅ざいめつぼしにならない。自己満足の域をでない、愚かな行為だと。

第一話 (後書き)

次回の更新は、5月15日です。よろしくお願ひします。

第二話

生徒会傘下としての特命係は、『生徒会特命係』として正式に認可された。本拠地として、東校舎の屋上倉庫が与えられ、放課後に青島たち三人は掃除に追われていた。

雑巾を絞りながら光ひかるが言う。

「俺たち、これからどうなるんでしょうね？」

特定の誰かに対する発言ではなかった。その独り言に、箸を手にした醍醐が返事をする。

「生徒会の小間使いになるんだろ。渉外の役職が決まったら、その人が指示してくれるそうだ、千石曰く」

「渉外ねえ……。どんなやつがなるかで、俺たちの今後が左右されるんだろ？　なんだか、納得いかないよなあ……」

そう言いながら窓の溝を拭く。硝子に、青島の姿が映る。

「心配性だな、銀河君ギャラクシー。だが、大丈夫だ。きつと、この先に素晴らしいことが待っているぞ。確証はないがな！」

「無いんすか！」

「ああ、当然だろう！」

二人は大笑いする。その姿を醍醐は呆れながら見ていた。

「そんなことだから、光ひかりに逃げられるんですよ」
痛いところを突く発言。馬鹿笑いが一瞬で止む。

「うるせえよ、醍醐。あいつが、簡単に納得するはずねえだろ。二日から、俺のことを完全無視だぞ。親が、めちやくちや気まずそうにしてるんだぞ」

「気の毒だな、親御さん」

「俺だよ！　俺が被害者だよ！」

「根本的には、お前に責任があるけどな」

うつ、と光ひかるは唸る。事実であるために言い訳を見つけないことができなかった。

言い過ぎたか、と醍醐は唇を舐めた。

「まあ、別に悪いことをしたわけじゃないからな。それに、責任と
いうことなら俺たち全員で背負うべきだ」

「わかってるよ……。だから、掃除してんじゃねえか」

照れくさそうに光はそっぽを向く。視線の先に青島が首を傾げて
微笑んでいる。

素晴らしいな、と唇が動いた。

「責任を認め合うとは、素敵だぞ。いいことだ。素晴らしいことだ。
そうやって腐らずに努力していれば、いつか報われるはずだ」

今度は、確証がない、とは言わなかった。二人も何も言わない。

埃まみれになっていた円卓を綺麗に水拭きし、中央に配置できる
ように荷物を部屋の隅に寄せた。それだけで、何となくそれらしい
雰囲気になった。三人分の椅子を用意して、しばらく休憩すること
にした。

ぐったりしていた光が、少しだけ腰を浮かした。

「何か飲まねえ？」

賛成だ、と青島が財布を取り出した。紙幣を取り出して、それを
手渡す。

「ごちそう様です！」

狙いどおりに代金を出してもらった光はご満悦だった。だが、紙
幣に視線を落とした瞬間に表情が曇った。

「二千円札かよ！ 使えるか！」

「何とかしてみせよ！」

「できるかあ！ 何で、俺が、あんたの財布の都合に合わせて自動
販売機と格闘しなきゃならねえんだよ！」

「ならば、企業に相談しようじゃないか！」

「俺たちの都合に合わせて、自動販売機が進化するかあ！」

結局、青島が千円札を取り出して、その場は治まった。光は面倒
くさそうにため息をついてから出て行った。

「あいつ、仕返しに変な飲み物買ってきますよ」

「ほう、それは楽しみだ」

「中学の時に、全力で振ったコーラを渡されて、制服がぐちゃぐちゃになりましたよ」

その後、一撃をお見舞いしたことは伏せた。

半分程度は片付けが済んだ部屋を、醍醐はゆっくりと見渡した。

「今まで、ここは倉庫だったんですね」

「私が入学した時には、すでにそうだったぞ。水瀬教諭曰く、自分が在学中には心霊研究会があったらしい」

「心霊研究会ですか……、ものすごく胡散臭いですね」

馬鹿馬鹿しい、と醍醐は思った。心霊現象の類を、彼は微塵も信じてはいなかった。子どももの頃にも、夜中のトイレが怖かった覚えがない。

ふっ、と青島が思わせぶりに言う。

「そうでもないぞ、武士君^{ものゝぶ}。水瀬教諭曰く、当時の心霊研究会の会長は、夜な夜な悪霊退治に精を出していたらしいぞ」

「……冗談でしょう?」

どうだろうな、と青島はおどけた。本人も、そこまで真剣に信じているわけではなさそうだ。醍醐は席を立った。窓を開けて、外を見ると、北校舎の屋上に生徒会室がある。中の様子を伺おうとしたが、さすがに遠すぎるため無理だった。

しばらく、ゆったりしていると、扉をノックする音がした。最初は、光^{ひかり}が帰ってきたのだろう、と思ったが、実際に入ってきたのは千石だった。

「ちよつと、いいですか?」

彼は青島に尋ねる。いいぞ、という返事。

「その、特命係が出来て早々ですけど、お願いしてもいいですか?」

「ほお、間髪入れずにお仕事か」

決して嫌味な言い方ではなかったが、千石は恐縮したように頭をかいた。申し訳なさそうに彼は説明する。

「実は、空席になっている書記の役職に、芸術科二年A組の八神さ

んを指名することが決定したんですよ。それで、八神さんを説得してほしいのですが……」

「任せろ」

即答する青島。あまりに早すぎる承諾だったので、依頼した千石だけでなく、醍醐も呆然とする。

「あ それじゃあ、自分はこれで失礼します」

歯切れの悪い千石。何度も首を傾げながら生徒会室に戻っていた。

醍醐は青島に問いかける。八神という名前を、彼は何度か耳にしていたが、噂話が好きでなかったので無視していたのだ。

「あの、八神さんとは？」

青島は目を見開いた。知らなかったことが意外だったようだ。

「信じられないな、知らないのか。八神神次郎やがみしんじろうだぞ？ 中学時代には、市外でも名の知れた不良だったそうだが？」

「いや、さっぱりです」

彼の通っていた中学はどちらかといえば真面目な雰囲気で、不良とか風紀を乱す生徒は下級生にも上級生にもいなかった。さらに、他校の友人も少なかったため、そういう情報には呆れるほど疎かった。

「たった四人で、五十人の暴走族を病院送りにしたことがあるとも噂うわさされているぞ。この学校には、もう一人、普通科の二年F組すに涼木ずきがゆう牙宿ゆきやどとう生徒がいて、共に有名人なんだがな」

「はあ、そうですか……」

そう言われても、まったく心に染みない。これまでに、不良と呼ばれる人間と接する機会がなかったからだろう。

「でも、どうして、そんな人を書記に？」

それでも疑問は湧いた。わざわざ、素行の悪い生徒を生徒会に取り込む必要があるのだろうか。むしろ、小鳥遊たかなしとしては不利益しかないだろう、と醍醐は腕を組んだ。

「おいおい、前生徒会でも書記をしていたのは、八神くんだぞ？」

「ということとは、青島さんが指名を？」

「そうだ、と頷く。さらに、わからなくなった。」

「優秀な男だよ、八神くんは。確かに不良として恐れられているが、それでも彫刻技術は全国でも有名くらいだ。上手く付き合えれば、それだけでいい働きをしてくれる」

経験者は語る、であった。自分が実際に、八神を生徒会に引き入れたことがある彼女の言葉は真実味がある。

「よし、^{ギャラクシー}銀河君が戻ってきたら、さっそく対策を練ろう」

その表情は活き活きとしていて、特命係の立場を楽しんでいるようだった。

*

西校舎の二階廊下を、大柄な男が歩いている。すれ違う男子生徒が、別に小さいわけでもないのに、小さく見える。この長身の彼こそが、冥栄高校芸術科が全国にほこる彫刻の達人、八神神次郎である。

オールバックにした髪と、鋭い目つきが、まるでその筋の人間を思わせる。一目で、他人の恐怖心を呼び起こすような迫力がある。

その小脇には、薄いバックが挟まれている。中身は、教科書とノート、彫刻刀。

「八神、ちよつといいか？」

不意に背後から声をかけられた。芸術科には、上級生も含めて彼を呼び捨てにする生徒はいない。誰もが遠慮がちに、八神さん、と呼ぶのだ。それが敬意からの敬称ではなく、畏怖からのものだと気付いている彼だが、すでに慣れていたことだったので何も言わない。

だから、声の主は教師だろうとすぐに検討がついた。

「何ですか」

ぶっきらぼうな口調で返事をする。特に意識して低い声を出しているわけではない。これが地声なのだ。

「小鳥遊は、お前を書記にしたいそうだ」

英語教師である水瀬純子みなせすみこであった。八神を目の敵にする教師陣で、珍しくまともに接してくれる彼女とは、少しであるが会話がある。

「小鳥遊？ ああ、新しい生徒会長のことか。断ってください」

「それは、直接本人に言え」

そのまま、八神の隣をすり抜ける。身体こそは遥かに小さいが、高校時代に剣道でインターハイのベスト16に残った彼女からは、ホワイトカラー事務労働者らしからぬ威厳がある。八神を邪険にしないことも、あるいは、剣道を通じての精神修行が関係しているのだろうか。

それから、八神はしばらく廊下の窓から外を眺めていた。東校舎が見える。

第二話（後書き）

次回の更新は、5月17日です。よろしくお願ひします。

第三話

思い立ったら即行動。それが、青島のポリシーだった。

紙パツクのジューズを抱えて帰ってきた光ひかるに留守番を任せ、青島は醍醐を連れて西校舎二階に向った。

ほとんどの生徒は、すでにそれぞれの活動をしているようで閑散としている。冥栄高校の芸術家には、大きく分けて、美術、文芸、音楽、演劇の四つの分野が設置されている。偏差値がそれほど高くないので、別段芸術に興味もない生徒が在籍していることもあるが、高文連で入賞するほどの実力もいる。

八神神次郎やがみしんじろうは、後者であった。彼の専門は、美術の中でも彫刻であり、その技術は折り紙つきだ。同時に、札付きの不良でもあるが。

四人で五十人を超える暴走族を壊滅させた、という伝説まであるのだが、醍醐はあまり実感が湧かない。本人を目の前にしても。

椅子に腰かけたまま八神は首を振る。

「悪いですけど、興味ありません」

不良というものは、目上の相手でも敬語を使わず、粗暴なものだと考えていた醍醐には意外だった。目の前の男は、目つきこそ悪く、高校生とは思えない体格だが、青島に対しても最低限の言葉づかいをわきまえている。見た目は怖いが、自分から悪の手を染めるような雰囲気はない。

断られても、めげる青島ではない。

「そう言うな、八神くん。生徒会長直々の指名だぞ？」

「推薦人の力で当選したような、実力不明の一年生に使われるほど落ちぶれたつもりはないですよ」

ゆつくりと、八神は立ち上った。醍醐よりも一回り以上大きい、190cmはある長身だ。

「わざわざ出向いてもらって悪いですけど、俺はそんなに暇じゃないですよ。作品にもそろそろ取り掛からないと間に合いませんか

らね」

早口でまくし立て、鞆を小脇に抱えて教室を出て行った。

「俺、追いかけます」

何故か、醍醐は身体が動いてしまった。自分から動かずとも、すぐに青島が動いただろうが、それを待つていてはいけない気がしたので。

一瞬だけ驚いた顔をした青島だったが、すぐに笑顔で、行って来い、と声をかけた。

「素晴らしいぞ、受動的だ」

誰もいなくなつた教室で、青島は呟いた。入学式での自分の言葉を実践してくれている生徒がいることを彼女は嬉しく思った。自意識過剰かもしれないが、それでも嬉しかった。

早足で廊下を走る音が消えると、今度は代わりにゆっくりと歩く音がした。それは少しずつではあるが、確実にこちらに近づいている。

「陽平か？」

「青島？」

足音の主は、陽平だった。制服の上に白衣を羽織つたままの彼は、そのおしゃやかな眼鏡も相俟つてか、教師のように見える。

「まさか、お前も八神をヘッドハンティングか？」

「ほう、すると君もか？」

お互いの目的は同じだった。

いつまでも別の科にいるわけにもいかず、二人は北校舎前の庭に移動した。醍醐と光ひかるが、はじめて青島と顔を合わせた場所だ。

歩きながら、青島は尋ねる。

「しかし、どうして君が、八神くんをヘッドハンティングしようと思んでいる？ 君は、二度と生徒会には関わらないはずじゃなかったのか？」

「嫌味か、それ」

おもわず苦笑する陽平。いつまでも蒸し返す青島ではない、とい

うことはわかっけていても勘ぐってしまふ。罪の意識があるということとはそういうことなのだろうか。

「個人的にやってるんだよ。一応、小鳥遊には重荷を背負わせたから、俺にできることはやらないとな。そうじゃなきゃ、申し訳ないだろ」

誰に、とは限定しない。

「俺さ、学年代表をすることにしたから。もう、水瀬先生には伝えたら」

「ほお、それは素晴らしいな」

青島は腕組みして、歩みをとめた。そよ風に、束ねた後ろ髪が揺られる。

「いつまでも羽休めしている場合じゃないからな。こんなことばかりしていたら、きつと、おいかわ及川は」

「やめろっ!」

鋭い視線が陽平に突き刺さる。誰かを叱るときでも、滅多に声を荒げない青島が、怒りだけで構成された罵声を浴びせた。

しまった、と陽平は自分を責めた。

「い、いや、すまん……」

しどろもどろになりながら弁明を試みるが、唇を噛みしめて何かに耐える青島には無意味だった。その視線は先には、陽平ではなく、空がある。雲を睨んでいるわけでも、その先に広がるすべてに憎悪を抱いているわけでもない。行き場のない怒りを発散するのに、広大な空は適当だったただけだ。

顔を背け、青島は言う。

「一人にしてくれ」

陽平は何も返事をしない。それでも、せめてもの誠意を伝えようと、その背中に頭を下げた。

「八神さん！」

とにかく歩く速度が速かった。まだ、醍醐が校内の地理に疎いことを差し引いても、ここまで息を切らすほどの速度は異常だ。

肩で息をする後輩を見かねて、八神は振り返った。

「……朝比奈だったな？」

「は、はい……」

「お前、どうして青島さんと一緒にいるんだ？ 俺も、あの人の下で書記をしたからわかるけど、楽じゃないだろ？」

「確かに、楽じゃないですね……」

それでも、と醍醐は前を向いた。

「あの人といると、自分を肯定してもらえているような気がするんです。背中を押してくれるような、そんな感じですけど、あの人の場合は自分もついてくるんですよ。それで、時々先輩らしい忠告もしてくれそうですから」

頑張つてことばを紡ぎだす醍醐を、八神はじつと見据えていた。瞬きすることを除けば、常に視線を逸らさない。身体こそは別の方向だが、首から上は真剣に後輩の姿をとらえている。

俺と似ているな、と八神は感じた。特に何かメリットがあったわけでもないのに、半年間も生徒会の役員をしていた彼だが、振り返ってみるとそうでもなかった。入学してから周囲に避けられ、孤独だった彼には、青島という人間は厄介であり、新鮮であった。見た目や経歴で人を差別しないことは、それなりに、難しい。だが、青島は簡単に、まるで当たり前のことのようにやってのけた。

そもそも、意識してやっていることではなかったのだろう。

「なあ、朝比奈」

八神はおもむろに、西校舎の屋上を指さした。

「ちよつと、付き合え」

軽く誘ったつもりだったが、当の醍醐からすれば不良から呼び出しを受けたような緊張感があった。

第三話（後書き）

次回の更新は、5月19日です。よろしくお願ひします。

第四話

西校舎の屋上には、東校舎と同じく倉庫があり、八神はズボンのポケットから取り出した鍵を差し込んだ。しばらくして出てきた彼の手には、年季が入った木刀が握られていた。

それを数回素振りする八神。これから他校に殴り込みでもするかのような風格がある。

「おい、木刀は好きか？」

「ええ……、一応」

訳がわからずに答えると、木刀を投げつけられた。いきなりのことだったので、醍醐は身体を後方に逸らしてしまった。からんと木刀が乾いた音をたてた。

「拾え」

顎をしゃくって催促する、八神は何故か指の関節を鳴らす。骨が折れているかのような豪快な音が響く。

戸惑いながらも、醍醐は木刀を拾い、構えた。いつも通りに、我流の居合だ。

「武道経験者だったのか」

「いえ、真似事です」

図書館で借りた本から技術と練習法を盗んただけで、武道の範疇に入るかもわからないようなお粗末な代物だ。無意識の内に構えてしまったことを、醍醐は後悔した。

ふう、と八神は息を吐いた。

「俺に書記をやらせたいんだろ、お前。だったら、賭けだ」

「か、賭け？」

「お前が、俺に喧嘩で勝てたら、書記をやる。俺が勝ったら、書記のことは綺麗さっぱり諦める」

「は？ 勝負？」

自分の意志とは関係なく、勝手に話が進む。醍醐は慌てて口を挟

む。

「い、いや、そんなことしませんから！」

喧嘩など、絶対にご免であった。居合道の真似事をしているのは、別に護身術を身に付けるためではなく、純粹に興味なのだ。ましてや、入学早々に喧嘩をしたことが知られれば、嚴重注意か、あるいは停学処分もあり得る。そんなくだらないことで、これからの高校生活を棒に振るようなことはするつもりはない。

「喧嘩なんて、勘弁してください」

木刀を返そうとして、八神に近寄る。差し出そうとした瞬間、脇腹すれすれを拳が通過した。予備動作すらない、完全なる不意打ちだった。

本能が、身体を動かした。木刀を上段に構えることで迎撃の姿勢をとり、後退する。

その姿を見ると、八神は満足そうに拳を握り直した。何の変哲もないファイティングポーズだが、木刀を構えている醍醐よりも威圧感がある。

どちらも動かさず、一言も話さない。手のひらに汗かいたら汗が、木刀に付着していた埃を濡らす。

これが、朝比奈醍醐の人生ではじめての実戦になる。

先に攻撃をしかけたのは、素手の八神であった。飛びかかるような勢いで突撃し、右腕を振りあげる。

華麗とは言いがたい動作だが、回避することに成功した醍醐は、仕方ない、正当防衛だ、と自分を説得して木刀を振り上げた。

古くとも、しっかりとしたつくりの木刀だったが、八神はそれを左腕で受け止めた。まったくの無傷だったのは、無意識に手加減をしたためだったが、それが八神の強さがなせる業だと醍醐は錯覚してしまう。

動きが止まった木刀は、その先を握られた。さらに、がら空きになっっている醍醐の腹筋へ鋭い拳を叩きこむ。腹の底から酸素が逆流するかのような衝撃に、膝をつく。

すでに戦意を喪失した醍醐を、八神は執拗に攻める。背中を蹴り、両脚を踏みつけ、脇腹に膝蹴りをする。最後の一撃は、喉元に対する強烈なアッパーであった。

滅多打ちにされても、木刀だけは離さなかった。その点においては、不甲斐なさを嘆いた八神も賛辞を送った。

「木刀は、お前にやる。二度と、俺に関わるな」

倉庫の鍵を閉める音がした。靴音が遠ざかっていく。

呼吸を整え、鈍い痛みのある身体を起こし、醍醐は立ち上った。

幸い、捻挫まではしていないようだった。喧嘩慣れしているということは、手加減することも得意なのだろうか。顔だけ狙わずにいたことも、あるいは自分のためだけではないのだろう。

最後まで手放さなかった木刀をしっかりと握り直し、まだ痛みが残る身体を引きずりながら、東校舎の屋上を目指した。

*

倉庫を改装した特命係の活動場所に戻ると、呑気に紙パツクのジューズを楽しんでいた光が顔色を変えた。目立った外傷はなかったが、制服があまりにも汚れていたのだ。自分で確認した醍醐は、まづいな、と後悔した。

「何だ、何だよ！ 制服、汚れすぎだろ！ ていうか、その木刀、何だよ！ ま、まさか、喧嘩したのか？ 八神神次郎と喧嘩したのかっ！」

「まあ、そうだけど……」

まじかよ、と光は目を丸くした。彼は、醍醐とは違い、噂には敏感であった。八神に関する噂といえば、四人で暴走族を壊滅させたことを皮切りに、他県からの挑戦者を再起不能にしたとか、とにかく物騒なものばかりだった。冥栄高校では、八神神次郎と涼木牙宥（つゆ）の二人とだけは絶対に喧嘩してはいけない、という暗黙の了解がある。全国大会に出場する強豪である、柔道部や剣道部ですらも目す

ら合わせようとしないほどに恐れられているのだ。

鬼より怖いとされる上級生と喧嘩をして、自分に親友が生きて帰ってきたことが信じられなかった。

「お、お前、ちゃんと生きてるよな？ 彷徨える靈魂と化してないだろうな？」

「……成仏する前に、誰が好き好んでむさ苦しい男に会いに来るか、馬鹿」

「冗談を言うほどの余裕を誇示する。大丈夫だと口で告げるよりも、こつした方が効果的だ。現に、血相を変えていた光も落ち着きを取り戻しつつある。」

「そ、それで、どうなった？ どっちが、勝ったんだよ？」

「俺の負けだ。惨敗だよ。八神さんは、完全に手加減をしていて、俺は木刀を使ったのに、数十秒でKOされたよ」

決してねつ造することはなく、真実をそのまま伝えた。本来なら、八神とタイマンをしただけでも勲章もので、少しでも善戦したと嘘をつけば、それだけで周囲からは一目置かれることになる。

だが、醍醐はそんなことでいい思いをしようとするほど愚かではなかった。

「喧嘩が馬鹿みたいに強い人って、本当にいるんだな。テレビドラマだけの空想じゃなかったんだな」

「お前は、噂話に疎すぎるんだよ。一ヶ月も通ってたら、有名な名前くらいは知ってるだろ、普通は」

ぶつぶつ文句を言いながらも、自分が座っていた椅子からわざわざ立ち上がり、さりげなく醍醐に手を貸す。

「でも、すげえよ、お前。八神さん相手に、ちゃんと喧嘩したんだろ。普通なら、即行で逃げるぞ。俺なら、確実に逃げるな」

銀髪を撫でながら感心する表情は、どこか悔しそうに見える。外見ばかり取り繕って、中身が伴わない自分と、質実剛健な醍醐を比べて、軽い自己嫌悪に陥っていたのだ。心配させまいと気丈に振る舞うことなど自分にはできない、と光は内心で自嘲した。

「でもな、多分だけど、八神さんはかなり手加減してくれたと思うんだ。そもそも、喧嘩で勝つことを条件にしてくれたのだから、俺に配慮してくれたんじゃないかな。普通に説得して駄目だったら、俺が怒られるかもしれないけど、喧嘩して負けたっていうなら、簡単に責められることはないだろう？」

「そりゃ、そうだけどさ……」

考え方としては、間違っていないこともないだろう。かなり、八神を美化しているようだが、そういう解釈も可能だ。

よくそんな考え方ができるな、と光は呆れつつも、すごいと思うのであった。

*

久しぶりに人を殴った拳は、しばらくすると痺れてきた。手数が多かったことも原因だろうが、一番の理由は、殴った相手が身体を鍛えていたことだろう。中学時代に柔道部の部員と喧嘩をした後は、しばらく彫刻刀を満足に握れないほどの痛みだった。身体を鍛えていれば強いというわけではないが、筋肉がある相手を殴る際には注意しなければいけないということは本当だ。

趣味で居合道をしていると答えた後輩、朝比奈の顔を思い出す。彫が深い顔立ちは、まるで侍のように凛々しく、印象に残る。今時のもてる男ではないが、選ぶ女は相当の目利きだ。

学校から五分ほどのところにあるコンビニに入ると、棒読みの挨拶が聞こえた。客の人相を見るなり、店員は露骨な動揺をする。大学生だろうか、貧相な男だ。中学生らしき集団が入れ違いに出て行った。

ゼロカロリーのコーラ、出来合いのから揚げ弁当を持ってレジに向かう。代金を手渡し、お釣りを受け取るうとしたが、店員の手が一瞬止まった。彼の視線は、外にあった。先ほどすれ違った中学生らしき集団が、我が物顔で駐車場にたむろしている。

車で来店する客から苦情を受けているのだろう。店員は、おぼつかない手つきでお釣りを手渡し、暗い表情のまま外に向かう。八神はしばらく見守ることにした。

中学生らしき集団は、はじめこそふざけた調子で取り合わなかったが、しつこくする店員に対してついに声を荒げた。店内まで響く大声だが、八神からすれば無理に低い声を出しているようで哀れに聞こえた。

胸にむかつきを覚えたので割って入った。骨のある後輩に出会ったことで少しは気分がよかったのだが、不良もどきに容赦をするつもりはない。

「おい、うるさいぞ」

声はそれほど大きくない。普段の会話で盛り上がったときほどの大きさだ。それでも、恰好だけの連中には十分だった。

あれほど威勢のよかった中学生らしき集団はあっという間に大人しくなる。小声で、どうすんだよ、と相談しているのが聞こえた。やはり、もどきであった。

彼らは、悔しそうな顔を伏せながら帰っていった。あまりにもあつけなく解決してしまったので、店員は呆然としている。

そのまま帰宅しようとした八神だったが、店内の客と目が合った。雑誌のコーナーで漫画雑誌を立ち読みしている、冥栄高校の生徒であった。肩まで届くほどのくせ毛の長髪が特徴的な男だ。顔見知りでもないのに、馴れ馴れしく手を振ってきた。

薄ら笑いが気味悪く、振りかえすことなく八神は踵を返した。

その後ろ姿を見ながら、男は携帯電話を取り出し、サ行の最後の男に電話をかけた。数回のコールでつながった。

「よう、戎崎だ。二年の八神とかいう不良をコンビニで見たんだけどよ」

電話の向こうの千石に事の一部始終を伝えたところには、すでに八神の姿は視界の外であった。

第四話（後書き）

次回の更新は、5月21日です。よろしくお願ひします。

第五話

今日は何かが違った。そんな違和感を、八神は朝から覚えていた。普段は自分から目を逸らす同級生が、今日に限ってチラチラと顔を覗いてくる。露骨に避けられてばかりいたので、こういう態度は気味が悪い。

彼がその理由を知ったのは、放課後になってからだだった。職員室で、引き続き生徒会顧問となった水瀬の口から聞かされたのだ。

「コンビニで不良を追い払った？」

「ああ、校内ではそう囁かれているな」

すると、昨日のことだろう。情報源は誰だ、と八神は眉間にしわを寄せて考えた。あの店員がわざわざ学校に連絡してくるとは考えにくい。ならば、雑誌を立ち読みしていた男だろう。冥栄の生徒だということを加えれば間違いない。

「お前に対するイメージが、学校全体で覆ろうとしているぞ。困っている人を助けるといふ行動が、あまりにもギャップだったということだろうな」

冷静に分析する水瀬に、八神は口を尖らせる。

「俺が悪かったのは、中学までだ。高校に入ってから、大人しくしている」

「だからといって、過去の罪が消えるわけじゃない。罪は消すものじゃない、償うものだ。償うためには、数倍の善行を積む必要がある。わかるだろう？」

返事はしなかったが、それでも八神は納得していた。大人しくしただけでは、誰にも何も伝わることはない。実際に行動してこそ、何かを伝え、変えられるのだ。

「知らないだろうから教えておく。前生徒会でお前が書記をしていたとき、少なくとも教師たちは評価していた。お前に対する印象も随分と良くなった。私は、顧問だったから、断言できる。お前は、

もう悪い奴じゃない」

「どうも」

軽く頭を下げ、そのまま立ち去ろうとしたが、すぐに踵を返して尋ねた。

「まだ、書記の席は空いてますか？」

「さあ、どうだろうな？ 詳しいことは小鳥遊たかなしに聞くといい。まだ、生徒会室にいるだろう」

すぐに職員室を出て、階段を上った。屋上にたどり着き、生徒会室の扉を叩く。

「邪魔するぞ」

返事を待たずに勝手に扉を開くと、会議中であった。九重ここのえと四日市いちが明らかな動揺を見せる。

代表して、小鳥遊が立ち上がる。

「何か？」

「まだ、書記が空席なら。俺を使ってくれ」

「はあ……」

唐突すぎることに、さすがの小鳥遊も顔をしかめる。千石と黒河も何を言えればいいかわからずに押し黙る。

しばらく続いた沈黙を破ったのは、渉外に就任した男だった。

「空いていますよね、小鳥遊くん。誰も、書記なんてやりたがらないですから、歓迎しないといけませんね」

「……そうですね」

何度か頷き、彼は八神の目を見た。ゆっくりと歩み寄り、手を差し出す。八神はそれに応じた。

正式に生徒会が発足した瞬間であった。

*

「失礼します」

丁寧にお辞儀をして東校舎の屋上倉庫

現在の生徒会特係活動

場所に入ってきたのは、人のよさそうな男子生徒だった。耳にかか
るほどの黒髪、後ろ髪は束ねている。

その姿を認めた青島は一言。

「おお、尾崎くんじゃないか!」

「はい、尾崎です」

彼が自分の身分を生徒会渉外であると名乗ると、ようやく合点が
いった。醍醐と光は交互に顔を見て頷く。

選挙の後も渉外と書記が決まらなかったことは知っていた。特命
係にもその件で指示があつたくらいだ。

「その、書記の役職は結局どうなつたんですか?」

遠慮がちに醍醐が尋ねると、何度が瞬きして尾崎は答えた。

「ああ、朝比奈くんですね。千石くんから、よく聞いてますよ。ち
なみに、書記には正式に八神くんが就任しました」

それを聞いて、醍醐は安心した。自分の頑張りは、微々たるもの
とはいえど無駄ではなかったのだ。それだけで、特命係としての意
味があるのだと思えてくる。

背後から、青島が声をかける。

「それで、今日はどうした? 特命係に頼み事か?」

「今は違いますが、将来的にそうなるでしょうね。実は、小鳥遊く
んが生徒会長であることに不満を持っている一派がいますね」

概要はこうだ。一年生で生徒会長を務める彼には、やはりその存
在を快く思わない一派がいて、その不安要素を取り除きたいとい
うのだ。

主要な生徒としては、まず五箇山楓ごかやまかえでの名前が挙がった。体育科の
生徒で、陸上部に所属している彼は、去年のインターハイにおいて
100m走で六位に入賞した実力者であり。体育科のエースと呼ば
れている。

さらには、三条頼人さんじょうよりとみの名前が挙がった。

「ほう、楓ちゃんと三条か……。手ごわい組み合わせだな」

「組み合わせといつても、お二人が協力するとは思えませんが」

勝手に進む会話についていけず、一年生二人は表情を歪ませる。それに気が付いた尾崎は、すかさず話題転換をする。

「ところで、特命係は四人だそうですが、あと一人は？」

「気まずそうに、光ひかるが答える。

「それ、俺の妹っす……」

微塵も協力の姿勢を見せない、と正直に告げると、尾崎は微笑んだ。

「そうでした、銀河くんも男女の双子でしたね。自分は一人っ子ですからわかりませんが、黒河くんからよく苦労話は聞かれますよ。男女だと相当大変でしょうね」

「そりゃ、そうですね。聞いてくださいよ」

尾崎は聞き上手であった。どれもこれも同じような内容の愚痴を、彼は嫌な顔すらせず、ちゃんと相槌をして耳を傾けた。その様子は、醍醐から見ても感心できるものだった。

「銀河くんも、苦労人ですね。そのうち、黒河くんとも話してみるといいですよ。性格は合わなくても、双子トークで盛り上がるかもしれないですよ」

「そうっすね。多分、妹同士でも盛り上がるんじゃないですかね？」
「女の子なら尚更でしょうね。亜紀さんは、少々さはさばしていますから、あまり愚痴ることはないでしょうけど」

尾崎と対面してまだ十分程度だが、彼が渉外ならこの先は明るいだろう。醍醐ひかると光は、わずかだが特命係の今後に希望を見た気がした。

第五話（後書き）

次回の更新は、5月26日です。よろしく願います。

登場人物紹介（前書き）

ある方からの感想で、登場人物が多すぎる、ということ指摘をいただきました。整理するために、この項目を設けました。随時更新する予定です、

登場人物紹介

フリー・ユニオンの登場人物

あおしまみちる
青島満

性別 女 年齢 18歳 生年月日 1990年4月2日

身長 167cm 体重 50kg

クラス 普通科3年D組

所属 無所属 図書委員会 生徒会 無所属 生徒会特命係

役職 無役 図書委員会委員 生徒会副会長 生徒会会長 無役

生徒会特命係代表

冥栄高校がほこる変人。入学前に、朝比奈と銀河に出会い、その後は行動を共にする。生徒会役員選挙での落選後は、生徒会特命係代表に就任。

腰までとどくながさのポニーテールが特徴。目鼻立ちのすっきりした美人。中学時代は、ソフトボール部に所属。

南波陽平とは小学校以前からの長い付き合いであり、お互いに実力を認め合っている。また、根に持たない性格であり、裏切りに等しい南波の行為も笑って許した。竜崎、四日市とは中学時代からの友人。メタルギアシリーズの大ファン。

あさひなだこい
朝比奈醍醐

性別 男 年齢 16歳 生年月日 1992年8月16日

身長 180cm 体重 79kg

クラス 普通科1年D組

所属 無所属 生徒会特命係

役職 無役 生徒会特命係書記

我流居合道を趣味とする真面目な男。青島と行動することで図らずとも、校内の有名人になる。推薦人を務めた生徒会役員選挙後は、

生徒会特命係書記に就任。

短く切った黒髪。彫が深く、侍のような顔をしている。中学時代は、ソフトテニス部に所属。模造刀、演技刀の収取が趣味。

銀河兄妹とは同じ中学の出身であり、特に兄の方とは仲がいい。

えんざきせいしじゅうろう
戒崎聖十郎

性別 男 年齢 16歳 生年月日 1992年12月24日

身長 183cm 体重 77kg

クラス 普通科1年A組

所属 無所属 校風委員会

役職 無役 校風委員会委員

小鳥遊、千石、黒河の友人。

くせ毛の長髪。薄ら笑いが特徴。

おとぎたくみ
尾崎匠

性別 男 年齢 17歳 生年月日 1991年8月13日

身長 175cm 体重 70kg

クラス 普通科2年C組

所属 無所属 生徒会

役職 無役 生徒会渉外

小鳥遊、千石、黒河、戒崎とは長い付き合い。小鳥遊の要請を受けて、生徒会渉外に就任。

耳にかかるほどの黒髪、後ろは束ねている。優しそうな顔立ち。

特に目立ったことはないが、要所で圧倒的な存在感を示すことから、八神と涼木と並んで2年生のトップ3と認識されている。

ぎんがひかり
銀河光

性別 女 年齢 16歳 生年月日 1992年7月10日

身長 153cm 体重 43kg

クラス 普通科1年B組

所属 無所属 生徒会特命係

役職 無役 生徒会特命係会計

銀河光ぎんがひかるの双子の妹。朝比奈とは中学時代の同級生。

ショートカットの黒髪。常に不機嫌そうな顔立ち。中学時代には、帰宅部。

愛想の悪い性格で、友達はほとんどいない。生徒会特命係に配属されるが、完全に無視して幽霊状態である。

銀河光ぎんがひかる

性別 男 年齢 16歳 生年月日 1992年7月10日

身長 173cm 体重 67kg

クラス 普通科1年D組

所属 無所属 生徒会特命係

役職 無役 生徒会特命係副代表

銀河光ぎんがひかりの双子の兄。朝比奈は中学時代からの友人。

銀髪に染めた髪。常に何かを睨んでいる。中学時代には、帰宅部。

俗にいう中二病であり、痛々しい行動が多い。怖い相手だと萎縮してしまう傾向にある。何故か、正反対の朝比奈とは友人。モデルガンなどを収める、拳銃マニア。

黒河総一くろかわそういち

性別 男 年齢 16歳 生年月日 1992年9月14日

身長 172cm 体重 69kg

クラス 普通科1年A組

所属 無所属 生徒会

役職 無役 生徒会庶務

小鳥遊、千石、戒崎の友人。黒河亜紀くろかわあきの双子の兄。小鳥遊から命令されて、生徒会庶務に立候補、当選する。

小鳥遊家がまだ大名であった時代に、お抱えの陰陽師であった一族の末裔。

目にかかるほどの長さの黒髪。チタンフレームの眼鏡。貧弱そうな顔つき。
怒りをため込むタイプであり、上から目線で命令する小鳥遊に対しては反感を抱いている。

こしのえしゅん
九重俊

性別 男 年齢 17歳 生年月日 1992年1月17日

身長 164cm 体重 60kg

クラス 普通科2年C組

所属 無所属 広報委員会 生徒会

役職 無役 広報委員会委員 広報委員会副委員長 広報委員会委員長 生徒会広報員

気弱な性格。放送部部长。

変声が得意技であり、女声すらも出せる。その声を活かして広報委員会で地位を築き、生徒会に入る。陰ではKDI（声だけイケメン）と陰口されている。

不良が苦手であり、八神と涼木を恐れている。

しろいしめい
白石恵

性別 女 年齢 17歳 生年月日 1991年8月11日

身長 166cm 体重 48kg

クラス 普通科2年A組

所属 無所属 選挙管理委員会

役職 無役 選挙管理委員会委員 選挙管理委員会副委員長 選挙管理委員会委員長 選挙管理委員会委員 選挙管理委員会委員長（二期目）

人員不足に喘ぐ選挙管理委員会を切り盛りする苦勞人。

黒髪力チューシャ。不満そうな顔つき。

普段は適当な性格だが、白黒つけることには異常なこだわりがあり、校内で最も公平な生徒とされている。勝ち負けにうるさいが、大切なことは勝敗をはっきりさせることであり、誰が勝って、誰が負け

るかについては興味がうすい。

千石考貴せたいくしうき

性別 男 年齢 16歳 生年月日 1992年9月5日

身長 181cm 体重 76kg

クラス 普通科1年B組

所属 無所属 生徒会

役職 無役 生徒会副会長

小鳥遊、黒河、戒崎の友人。小鳥遊から要求されて、生徒会副会長に立候補、当選する。最高の緩和剤として、小鳥遊と他人の衝突を防ぐ苦勞人。

黒髪の短髪。爽やかな男前。中学時代には、バドミントン部。

小鳥遊家がまだ大名であった時代に、近臣だった一族の末裔。

実家が剣道場であり、自身の段位は弐段。一刀流、二刀流と使いこなせる芸達者。気さくな性格で、同学年では人気者。

小鳥遊六徳たかなしりつとく

性別 男 年齢 16歳 生年月日 1992年8月1日

身長 181cm 体重 76kg

クラス 普通科1年A組

所属 無所属 生徒会

役職 無役 生徒会会長

千石、黒河、戒崎のリーダー格。1年生にして生徒会長なるという前例のない快拳を成し遂げる。大名家の末裔であり、千石たちは当時の家臣の末裔。

耳にかかるていどの長さの黒髪。ノーフレームの眼鏡。やや老け顔。中学時代には、野球部（当時は丸坊主）。

勉強熱心であり、同級生とは一線を越える学力をほこる。また、運動も得意であり、冷たい性格を覗けば欠点は少ない。千石を誰よりも信頼している反面、黒河を顎で使うなど、官僚的な面が目立つ。

姓名とともに難読であり、初対面の相手から正確に呼称されたことがないことを密かに悩んでいる（ことりゆうろくとか、など）。

なんばようへい
南波陽平

性別 男 年齢 18歳 生年月日 1990年11月18日

身長 178cm 体重 73kg

クラス 普通科3年A組

所属 無所属 美化委員会 生徒会 無所属 学年議会

役職 無役 美化委員会委員 生徒会広報 生徒会会長 無役 学

年議会三年生代表

冥栄高校がほこる天才（自称、秀才）。小鳥遊より、三代前の生徒会長。

すつきりとした長さの黒髪。メタルフレームの眼鏡。知性的な顔立ち。中学、高校と続けて科学部（現在は部長）。

来るものは基本的に拒まない性格であり、下級生からの人気もある。国際科学オリンピックで銀メダルを取るほど優秀であるが、本人は天才と呼ばれることを嫌い、自分は秀才だと認識している。青島とは古い付き合いであり、今も交流は深い。同級生の竜崎法子は恋人。数学において天賦の才をもつ、引きこもりの妹がいる。妹を社会復帰させるために、冥栄高校に新しい学科を設置しようと生徒会長になるが、挫折して辞任する。その『要求』を果たすために、推薦人となり、小鳥遊たちの当選に一役買う。その後、学年代表として学年議会に参加する。

みなせすみこ
水瀬純子

性別 女 年齢 26歳 生年月日 1982年6月21日

身長 164cm 体重 48kg

受け持ちクラス 普通科3年D組

担当教科 英語

役職 生徒会顧問

冥栄高校のOGであり、生徒会顧問の英語教師。在学時には、生徒会副会長。

短く整えられた黒髪。目つきの鋭い、そこそこ美人。中学、高校、大学、と連続して剣道部に所属していた。

校内では、数少ない青島の理解者であり、彼女が尊敬するほどの女性。剣道の段位は、四段であり、竹刀もしくは木刀を持たせれば校内最強とされる（南波の見立て）。中学時代には全国三位、高校時代には全国ベスト16だったが、大学では満足な成績を残せず、教職に進む。体育会系の雰囲気だが、英語教師である。

やがみしんじろう
八神神次郎

性別 男 年齢 17歳 生年月日 1991年4月28日

身長 190cm 体重 86kg

クラス 芸術科2年A組

所属 無所属 生徒会

役職 無役 生徒会書記 生徒会書記（2期目）

冥栄高校では希少である不良。普通科2年F組の涼木牙宥との折り合いは悪い。

オールバックの黒髪。強面。中学時代は、帰宅部。

中学時代は筋金入りの不良として恐れられており、たった四人で五十人を超える暴走族を壊滅させたほどの戦闘能力をほこる。高校からは更正して喧嘩から離れたが、木刀をもった醍醐を余裕で倒すなど、強さは健在。

基本的には悪人ではなく、まともに常識的な思考をしている。小鳥遊から書記就任の要請を受けるも返事を渋り、自分への印象が良くなるならと承諾する。

よっかいちさかえ
四日市栄

性別 女 年齢 18歳 生年月日 1991年2月23日

身長 149cm 体重 35kg

クラス 普通科3年B組

所属 無所属 美化委員会 生徒会

役職 無役 美化委員会委員 美化員会副委員長 生徒会庶務 生徒会会計

瘦躯の車椅子少女。青島、竜崎とはは中学時代からの知り合い。

肩にかかる長さの黒髪。実年齢より下に見られる童顔。中学時代は生徒会長。

地味ながらも有能であり、前期の生徒会では庶務ながらも青島の右腕と目されていた。本人は、中学時代に生徒会長をしていた経緯から、現在の地位に満足していないが、これ以上の昇進は不可能だと諦めている。障害者として扱われることを嫌い、上辺だけの善意にはすさまじい拒絶をする。

資格検定マニアであり、日商簿記2級、電卓検定2級、珠算検定2級、ワープロ検定3級、秘書能力検定2級、漢字検定準1級、英語検定準1級、数学検定2級、ハングル能力検定4級、中国語検定4級、色彩検定3級、アマチュア無線技士4級、メイド検定3級、サッカー検定5級、声優検定3級、銭湯検定4級、アニメ検定3級、夜景鑑定士検定2級、会議力検定3級、歌舞伎検定4級、コーヒーインストラクター検定2級、動物検定2級と多種多様なもの取得している（南波曰く、履歴書がとんでもないことになる）。

りゅうせきほうし
竜崎法子

性別 女 年齢 18歳 生年月日 1990年6月12日

身長 161cm 体重 46kg

クラス 普通科3年B組

所属 無所属 文化委員会 生徒会 文化委員会

役職 無役 文化委員会委員 文化委員会副委員長 生徒会庶務
生徒会会計 文化委員会委員長

冥栄高校随一の人格者。青島、四日市とは中学時代からの友人。

肩まで伸ばした黒髪。穏やかな顔立ち。中学時代には、柔道部。現

在は、科学部。

小鳥遊家がその昔大名であった時代に、近衛であった一族の末裔。温和で、物腰の柔らかい姿からは想像もできないが運動神経抜群であり、柔道三段。中学時代には、44?以下の部で全国二位に輝いている。

声を荒げずとも相手を畏怖させる才能があり、青島や南波ですらも彼女には弱い。現在は文化委員会委員長として、文化祭に向けて水面下で行動中。

第一話

それは、六月中旬のことであった。

きつかけは、部活動ごとの予算配分の不均等についての抗議であった。陸上部の予算が、他の部活動に比べて明らかに少なかったことで、体育科が一致団結、学校側はしかるべき処置を行うと約束したが、事態は収束せずに肥大化した。

体育科は、陸上部のエース、五箇山楓ごかやまかえでを中心として、生徒会不信任案を提出したのだ。冥栄高校では、各学科にリコール権があり、それを行使したのだ。

成立からまだ一ヶ月しか経過していない生徒会がリコールされたことで、校内は相応に混乱をした。確実に解散することになったわけではないが、すでに次期生徒会長が下馬評で予測されるほどの事態に発展している。

だが、わずか一ヶ月で生徒会役員が再編されることに抵抗を示す生徒がいた。現職の役員たちではない。選挙管理委員会委員長、白石しらい恵いしめくみであった。

「いや、無理ですから」

両手の人差し指を交差させ、白石はさらに首を横に振る。

「予算的な問題ですよ、わかりますか？ 生徒会役員選挙は、原則として一年間に二回だけと決まっていますから、それ以上になると予算が不足するんです。すでに去年は、三度も選挙を行ったせいで、私たちは赤字なんですよ」

北校舎四階にある、選挙管理委員会の活動室では、青島と白石が机を挟んで打ち合わせをしている。内容は、リコールが正式にされた場合の対策だ。

「ていうか、あり得ないでしょ？ 三年生が、入学したての一年生に生徒会長から引きずり降ろされるなんて？」

「ははは、すまないな、めぐちゃん」

「めぐちゃんって言うな」

青島が引き続き生徒会長ならばこんな面倒にはならなかったのに、というのが白石の本音であった。体育科のリコール請求だが、選挙管理委員会からすれば理由はこじつけ以外の何ものでもない。一年生の生徒会長に対する敵対心が丸見えだ。

それでも、たとえこじつけだろうと、実際にリコールが成立してしまえば、選挙をしなくてはいけない。いくらなんでも、生徒会を有名無実の組織にすることはできないからだ。それこそ、選挙管理委員会の沽券に関わる。

「だけどなあ、それだと困るな」

ここに青島が来たのは、小鳥遊の指示であった。仮にリコールが成立した場合に備えて、最低限の準備をさせるために派遣されたのだ。抜かりないな、と素直に感心した。

だが、選挙管理委員長からは門前払い同前に拒否された。すべては予算の問題だ。部活動と同じく、各委員会にも年間予算が決められている。いかなる場合でも、一度決められた予算が増額することは禁止されている。

「どうにかならないか、めぐちゃん？ 最悪の場合に備えなければならぬことは、わかっているだろう？」

「わかってるけどさあ……。ていうか、青島さん？」
「うん？」

どうして、小鳥遊の命令に従うわけ、と白石は尋ねた。青島は少しだけ困った顔になり、しばらく考えた後に、頷いた。

「一番になることがすべてじゃないぞ、めぐちゃん」

「はあ？ 何それ」

「めぐちゃんなら、よくわかるだろう？ 世の中は勝ち負けじゃない」
「い」

それには同感だった。世の中は勝ち負けではない。だが、白石の場合は少し違う。重要なことは、白黒をつけることであり、誰が勝ち、誰が負けるかなどどうでもいいのだ。彼女が選挙管理委員会と

いう、誰もが敬遠する閑職に甘んじているのにもそういう理由がある。勝ち負けがすっかり決まらないと、許せない性格なのだ。

だからこそ、選挙を中止することなどあつてはならない。

「別に、どうでもいいですよ、青島さんがどうなるうと。それより、今は選挙のことです」

誤魔化すように立ち上がり、棚からファイルを取り出す。目的の頁を探し、それを青島に手渡した。生徒会役員選挙についての詳細が記されている。

その膨大な規則に、青島は舌を巻いた。

「ほう、これは壮大すぎるな……」

選挙の規則が、ここまで細かいものだとは知らなかった。考えてみれば、立候補したことはあつても、自分が選挙を動かした経験は一度もなかった。

その項目の一つを、白石は指さす。

「これです、危うく忘れるところでした」

カチューシャの位置を気にしながら、彼女は暗唱する。

「生徒会選挙規則第6条、特殊な事情で通常選挙運営が困難である場合は、選挙管理委員長の裁量で普通選挙以外の手段を用いることを許可する。まあ、掻い摘んで説明するとこんなところですよ」

しっかりと青島を見据え、白石は自らの考えを述べる。

「このような規則がありますが、はっきり言って、これじゃあ解決しません。五箇山さんならともかく、他の体育科の連中が話し合いをできるわけありません。だから、私なりに、アレンジした方法で選挙の代わりにしようと思います」

「ほお、アレンジとは素晴らしいな」

*

特命係の活動場である、東校舎屋上の倉庫に戻ると、尾崎が待っていた。

「お話はまともりましたか？」

「ああ、ばつちりだ。めぐちゃんには感謝だな」

青島はことの顛末を伝えた。普段通りに選挙を行うことは困難であり、その代わりとして、現行の生徒会と体育科の代表が直接対決をするということをする。

「直接対決とは穏やかではありませんね」

「はは、そう硬くなるな。対決といっても、喧嘩をするわけじゃない。ルールを決めて競うだけだ」

「たとえば、それはスポーツですか？」

「それは殺生だろう、尾崎君。全国レベルの選手が揃う体育科と、今の生徒会じゃ勝負にならないだろう。それとも、千石君だったか？ 彼は運動神経が抜群なのか？」

「得意だとは思いますが、体育科にはかないませんよ」

「だろう。だから、対決の内容については、小鳥遊君こじろゆうに任せるとする。そのくらは、自分でしてほしいな」

すべてを小鳥遊に投げたことを、青島はすぐに後悔することになる。

第一話（後書き）

次回更新は、未定です。しばらくお待ちください。申し訳ありません。

第二話（前書き）

第二話

スポーツで体育科と勝負をするなどあり得ない、と青島は断言した。都内有数の進学率をほこる普通科と並んで、体育科の実力も全国クラスであり、勝てる見込みなどないからだ。

だが、その考えは小鳥遊たかなしによって完全に無視されてしまった。彼は独断で、体育科とのスポーツ対決を約束してしまったのだ。それも、口約束ではなく渉外を通しての正式なものだ。

そのことは翌日にはすでに全校の話題になっていた。生徒会広報である九重が、広報委員会を総動員して対決のことを掲示したためだった。

面白がる生徒が大半だったが、これに肝を冷した生徒たちがいた。現生徒会役員だ。

一ヶ月後に一学期の期末試験を迎える日の放課後。生徒会室では、小鳥遊に対する容赦ない詰問が始まるうとしていた。

「どういうことだよ、小鳥遊。体育科とスポーツで対決なんて、馬鹿かお前は」

車椅子の四日市が口火を切ると、次々に不満が爆発する。

「そうだよ、これはマズイよ。うちの体育科は、全国レベルがうじやうじやいるんだよ。掲示してて、生きてる心地がしなかったんだけど」

「本気でどうするつもりだ。俺はスポーツ経験など無いぞ」

「経験があっても勝てませんよね」

九重、八神、尾崎が順番にため息をついた。そんな様子を見かねた千石が、小鳥遊に代わって返事をする。

「まだ、負けが決まったわけじゃありませんよ。こっちに有利な条件で勝負すれば、勝てるかもしれませんですよ。さすがに、ハンデくらいはつけるよな、六徳りつぐく？」

「ハンデだと？」

腕組みして黙っていた小鳥遊が首を傾げた。

「正々堂々と挑むつもりだが、お前はハンデを期待していたのか？
千石考貴ともあるう男が情けない」

「いやいや、情けないとかの問題じゃないだろう？ 冥栄ごかやまかの五箇山えで楓えでといえ、日本で四番目に早い高校生だぞ。それを筆頭として、
運度神経抜群の人たちが二百人以上も在籍している体育科とスポーツで勝負して、勝てる見込みがあるか？」

「さつきは勝てるかもしれないと言っていましたよね」

「尾崎さん、やめてくださいよ……」

冗談で揚げ足を取る尾崎に、必死だった千石は一瞬にして意気消沈させられた。すると、これまで口を閉ざしていた黒河が自ら後を引き継いだ。

「勝てる見込みが無いことは、俺が一番理解している。何だったら、妹を呼んで、体育科のレベルの高さについて講義してもらってもいいぞ」

黒河総一の妹、亜紀は体育科の一年生で陸上部に所属している。その関係で、彼は毎日のように体育科のレベルについて聞かされていた。

朝練習は、どの部も朝六時から八時まで。授業が終わると早々に練習を開始して、周囲が闇に包まれる二十二時まで続く。何度聞いても、自分には無理だろうと黒河は身震いするのだった。

そんな風に説得をされても、肝心の小鳥遊はまったく動揺する素振りすら見せない。それどころか、自身に溢れた表情で役員達を論破しようと試みる。

「何かを勘違いしているようだが、俺は提案をしてるわけじゃない。これは、すでに決定事項だ。俺たちをリコールしようとする体育科とは交渉を済ませて、選挙管理委員会からも承諾されている。文句を今更言ったところで、俺は決まったことを反故にすることはできない。それこそ、生徒会の沽券に関わるからな」

付け入る隙は見当たらなかった。文句を言うことはできても、これを切り崩すことは至難の業だと、千石以外の役員達は返す言葉を無くしてしまった。

勝機を得た小鳥遊は、一気に王手をかける。

「文句を言う暇はこれでなくなつただろう。体育科との試合は、八月の上旬に予定しているから、それまでの期間、生徒会は放課後に練習を行う。異論は認めん」

さらりと恐ろしいことを告げて、そのまま解散しようとする小鳥遊。当然、役員達はそうはさせない。

「勝手に決めるなよ。八月の上旬まで練習つて、試験はともかく、私は今年受験だぞ！ そんなことに割く時間なんてないからな！」

「そうだよ、二年生だつていろいろと大変なんだよ？ ねえ、尾崎くん達もそうだよね？」

普段は温厚な九重が、珍しく尾崎と八神に堂々と声をかけた。だが、肝心の二人は。

「いや、俺は芸術科だからな。よく分からん」

「サボる口実としては最高ですね」

まったくといって味方にならなかった。

小鳥遊は咳払いをして立ち上がり、ちなみに、と九重と四日市に言った。

「九重さんには、全校生徒に向けてのアナウンスを担当してもらいます。四日市さんは三年生ですので、時間に余裕がある日で構いませんから、手伝いをお願いします」

「う、うん、それならいいけど……」

「まあ、私には運動は無理だから、それくらいはいいけどさ……うん」

自分たちが戦力外だと告げられたにも関わらず、今まで全力で否定していた二人には言い返すことはできなかつた。それどころか、自分にできることを頼まれたが為に、人の良さが祟つて承諾してしまつた。

完全に丸め込むことに成功したことで、小鳥遊は正式に今日の会議を終えると宣言した。

「ああ、小鳥遊くん、ちょっといいですか？」

扉を開けたところで、尾崎が思い出したように言った。小鳥遊が振り返ると、改めて質問する。

「スポーツで対決することについては我慢しますが、肝心の競技は何ですか？ 生徒会で練習するとなると団体競技だとは思いますが、おかしなことに、スポーツ対決することが話題だったにも関わらず、何の競技をするかについては誰も言及することはなかった。発案者である小鳥遊も、ど忘れしていたよいうで、しまった、という表情をしている。

その中で、一人だけ平然としている千石がいた。小鳥遊という男と長く付き合っている彼には、どの競技が選ばれたかについて予想がついていた。

「お前の好きなあれだろ、六徳？」

それを聞いて、黒河と尾崎は同時にある競技の名称が浮かんだ。

「どうせ、野球だろ。お前、好きだからな」

黒河は額を覆って呆れた。

まさかの競技に啞然する八神と九重、四日市を前にして、小鳥遊は楽しそうにピッチングフォームを披露した。

こいつ、意外に子どもだな、と八神は冷静に呟いた。

第二話（後書き）

次回更新は、来週に行います。よろしくお願ひします。

霧島卿

第三話

生徒会と体育科の代表がスポーツ対決をするという決定事項は、広報委員会によって全校の掲示板に掲示されたが、生徒会特命係にはさらに詳しい情報が伝えられた。小鳥遊たかなしから指示をされた、生徒会渉外の尾崎が十分に渡って会議の全貌を話したのだ。

「昔から、小鳥遊くんは野球が好きでしたからね。個人的にも体育科の精鋭たちと勝負したのでしょうか」

古くからの知り合いである尾崎は感慨深そうに頷く。

「いやいや、そんな適当でいいんすか。冥栄の体育科って、強豪の巣窟でしょ？」

しかし、それに対して光ひかるが噛みつく。銀髪に染めた髪を触りながら、落ち着かないのだろうか貧乏ゆすりまでしている。

みつともないぞ、と朝比奈がたしなめる。

「生徒会長の決断なら仕方ないだろう。それに、校内中の話題になってしまってから中止すれば、それこそ生徒会の沽券に関わるぞ」

「だけどよお……、勝ち目なんてあるのか？ 俺、野球なんてしたことないぜ」

「お前は、そもそもスポーツをしたことがないだろう」

「うっせえよ、元軟式テニス部。帰宅部が最強なんだよ。俺には帰る家があるんだよ」

言い返すというよりも、それは拗ねているようだった。単純に走る、泳ぐなどの運動は得な光ひかるだが、球技になると途端に下手くそになるからだ。

それまで静かだった青島が口を挟む。

「銀河君ギヤラクシ、野球経験は無いそうだが、ルールくらいは分かるか？」

「ええ、まあ、親父がテレビで試合とか見てますから……」

「ほう、父上が野球を視聴しているのか。ちなみに、ご贔負の球団はどこだ？」

「名前は知りませんが、何かツバメみたいなマスコットがいるところですよ」

「東京ヤクルトスワローズか、素晴らしいな。ちなみに、私は阪神タイガースを応援しているぞ」

「いや、青島さんは都民でしょう」

隣から突っ込む朝比奈。細かいことは気にするな、と青島は堂々とスイングの真似をした。それを見た尾崎が、おや、と首を傾げる。「随分と綺麗な動きですね。ひよつとして、青島さん」

「そうだ、私は中学時代にソフトボール部に所属していた！」

大したこともないのに、青島は胸を張る。光ひかるが小さく舌打ちした。

「帰宅部じゃなかったのよ、青島さん。尾崎さんは、どうなんですか？ 絶対に帰宅部だったでしょ？」

「サッカー部でしたね」

「あんたもかよ！ しかもサッカーかよ！ 何だよ、モテたかったのかよ！」

偏見に等しい言いがかりをつける光ひかる。理不尽な行動を見かねた朝比奈は、以前八神から貰った木刀で軽く肩を叩いた。

「やめろ、光ひかる。尾崎さんに失礼だぞ」

「ああ、分かってるよ……。尾崎さん、すみません」

文句を言うことなく素直に謝る光ひかる。尾崎はまったく怒る様子を見せずに、いいよ、と言った。

「モテたかったのは事実ですからね」

「俺のフォローを返してください！」

「俺の謝罪も返せ！」

「そろそろ、金を貸せ、尾崎君！」

「便乗かよ、青島さん！」

横から余計なことを言っただけで楽しむ青島。それに対しても律儀につっこむ光ひかる。

「えっと、千円でしたか？」

「本当に借りてたのかよ！」

尾崎が財布から千円を取り出し、それを受け取った青島は腰かけた。戻ったばかりの千円を朝比奈に渡して、飲み物を買ってくるように頼んだ。

若干面倒臭くなっていた朝比奈すぐに応じて、四人分の飲み物を買いに走った。

「さて、いい加減に落ち着いて話をしようじゃないか」

「そうっすね」

青島の一言で、落ち着きの無かった光が大人しく椅子に座った。

その後に尾崎も座り、やっと話し合いの空気となった。

「それで、生徒会と体育科のスポーツ対決には私たちも参加しなければいけないのか？」

「ええ、小鳥遊君はそのつもりです」

ふうん、と呟き、青島は腕組みした。確かに、自分たちは特命係だが、それでも生徒会の傘下組織であって、独立した組織ではない。代表として青島がいるが、実際には尾崎を通しての指示を実行する権利しか保証されていない。勝手な行動は基本的にご法度であり、実態は生徒会の雑用と言っていい。

だからこそ、青島はチャンスだと睨んでいた。ここで勝利に貢献すれば、校内での特命係の評判は上昇して、生徒会に対する発言も少しはできるようになるからだ。

「私たちは一向に構わないが、問題があるだろう」

「問題ですか？」

そう、このスポーツ対決には運動能力差以前に乗り越えなければいけない壁が存在するのだ。人員の確保だ。

生徒会の人数は、会長から庶務まで数えて七人。四日市は身体都合で参加不可能として、六人だ。だが、尾崎曰く、広報である九重のえは試合には参加せず、裏方を担当することになっているので、実際には五人。

そこに、特命係の三人を加えても八人にしかならないのだ。だが、

野球は九人でやるスポーツだ。

「ああ、人数のことですか……。そうですね、足りませんよね」

「ギャラクシー銀河君の妹は完全に幽霊だから、数えないとして、どこから不足を補うつもりだ？」

「小鳥遊くんは特に何も指示はしませんでしたけど、どうするつもりでしょうかね。自分は監督をするつもりだということは分かりませんが」

「つまり、自分はプレイしないということか」

すると、不足人数は二人。青島は自身の友人網を検索するが、野球が出来て暇な人間はいない。運動神経に優れた法子ほしこは、秋に迫った文化祭の準備を始めているだろう。比較的暇である陽平は、運動に関しては全く役に立たない。

同級生にも下級生にもさほど親しい人間がいないことに、青島は時々悩ませられる。こんな時に及川がいてくれれば、と心の底で願ってしまう自分を、青島は叱りつけた。

もうあいつに助けてもらうことはできないぞ、と。

「私の方は駄目だが、君はどうだ、尾崎君」

気を紛らわすために、今度は尾崎に話を振る。すると、尾崎は意外にも色よい返事をした。

「手伝ってくれそうな人はいますよ。それも、運動神経抜群で、野球経験がある人です」

「おお、それは素晴らしいな。そんなことを黙っているなんて、君も人が悪いな。じらされて喜ぶ私じゃないぞ？」

問題の半分を一瞬で解決できる希望を前に、少々大げさに喜ぶ青島。だが、肝心の尾崎は浮かない顔で続ける。

「ですが、根本的な問題があるんですよ。今回の対戦相手は、体育科全体でしょう。自分が推薦した人も、体育科の生徒でして……」

「……無理だろ、尾崎君」

決して偏見をしているわけではないが、体育会系は縦社会で、独自の秩序が築かれている。それが一丸となって生徒会転覆という目

標に向かっている中で、一人が寝返るような行動は許されないう。まして、冥栄高校の体育科は強豪。それ故に、縦社会の傾向はより強いだろうと予想できる。

造反は期待できないだろう、というのが青島と尾崎に共通する見解だった。

「そうですね、無茶ですよ。ですけど、他に手伝ってくれそうな人はいませんか？」

「涼木君はどうだ？ 彼は運動も得意だろう。正確には喧嘩かもしれないが」

「牙宿かゆうくんですか……。無理でしょう。八神くんが生徒会に所属している以上、二人が協力することはあり得ませんよ」

二年生の実力である八神と涼木は共に不良とされているが、その中是非常に悪い。一人で行動することを是とする前者に対して、後者は校内で一つの勢力を築きあげている。

「そうだろうな。私もあの二人をもう一度同時に部下にすることはお断りだ。だが、勿体ないことだな、せっかくの運動神経を無駄にして」

そうなると、多少の関係しかない相手だろうと頼み込まなければいけない。青島は、一定以上の関係のある人間を思い浮かべる。

かつての盟友、さんじょうりつと三條頼人。

正義を貫く男、あらがきおさむ新垣理。

最年長の生徒、はせくろこよみ支倉曆。

三人目以外は定期的に会う程度には親しいが、協力してもらえるかは微妙だ。

八方塞がりだな、と青島はため息をついた。表情こそは穏やかな尾崎も、心の底では今後を憂いている。

「あの、ちよつといいつすか？」

これまで一言も口を出すことがなかった光ひかりが、ここで始めて話し合いに参加する意思を見せた。

「俺、説得しますよ、光のこと。それで、参加させますよ、野球に」

普段は情けない男だが、妹が絡むと少しは精悍な顔つきになる。返事を待たずに、立ち上がる際に椅子に足をぶつけながらもそのまま走り去っていった。光、ひかり今行くぜ、と自分を鼓舞しているかのような叫び声が聞こえた。

入れ違いに戻ってきた朝比奈は、呆然とする二人を見て、首を傾げた。

「あいつ、いきなりおかしくなっただんですか？」

「うん？ さあ、どうだろうなあ、尾崎君」

「ええ、どうでしょうね……」

不安だった。だが、自ら志願した男を止めるわけにもいかず、三人は大人しく結果を待つしかなかった。

第四話

大見得を切った光^{ひかる}だったが、実際には何も考えずに勢いだけだった。放課後だったために妹の光^{ひかり}はすでに帰宅していて、自らは帰路を利用していろいろと模索したのだが、結局有効な手段は何も思い浮かばなかった。

しかし、青島たちにこれ以上かつこ悪い姿を見せるわけにはいかない。腹を決めた光^{ひかる}は、何も策を持たないまま白兵戦に臨んだ。リビングでテレビを見ている光^{ひかり}に気付かれないように近づく。

「よう、面白いか？」

自分でも不自然に思えるほど明るい声で話しかける。だが、ここ最近のように無視される。

「ニュースなんて滅多に見ないからな、って言うか、テレビ自体ほとんど見ないしな。お前はよく見るのか？ やっぱ、勉強になるのか？」

反応は無い。画面に向けられた視線が動くことはない。

「なあ、生徒会と体育科が試合するってこと知ってるか？ あれさ、俺も出るんだよ。何か野球するらしいぜ。でも、人数が足りなくてさあ」

「だから？」

「お、おう！ 実はな」

久しぶりに妹の声を聞いた。選挙が終わってからになる。

「お前にも参加してほしいんだよ。なっ、頼む。あと二人、足りないんだよ」

土下座でもしそうな勢いで頼み込む。相手が妹だとか、そんなつまらないことは考えず、一生のお願いをここで使う。

「別にいいけど」

「マジか！ 本当にいいんだな！」

開始からわずか五分。まさかこれほどまでに都合よく進むとは思

つてもみなかった。

「よっしゃ、助かるぜ。これで俺の面子も守れる」

「ああ、やっぱり」

飛び上がりそうなる寸前、冷め切った光ひかりの声が聞こえた。喜びを噛みしめていた光ひかりだったが、一瞬にして現実に引き戻される。

「お前って、自分の面子ばかり気にしてるよね。私に野球させたいのだから、要するに自分の妹だけがサボって文句言われるのが嫌だからでしょ？ 青島っていう先輩はまだ自分の意志を持って行動してるけど、流されるままだなお前。千石とか朝比奈を見ると、お前なんか兄あにって最悪だよ。本当に死ぬよ」

「いや、だつてさ……」

「ほら、また言い訳する。知ってる？ 無能な奴ほど言い訳するのが早いらしいよ。相手から糾弾されている事実には耐えられないそうだけど、本当にお前は無能の典型だよな」

「お、お前」

「え、何？ もしかして怒った？ うわ、気持ち悪っ」

言い返すことも馬鹿馬鹿しくなり、ため息をついてから光ひかりはそのまま家を出た。制服のままだったが気にせず、携帯だけをポケットに入れた。

しばらく歩き、いつも朝比奈と待ち合わせる公園を素通りして、同じく朝比奈が毎朝稽古をする河原までたどり着いた。橋の下で腰を下すと、ちょうど電車が通り過ぎて轟音がした。耳障りだったが、落ち着いてその音を聞いた。先ほど自分に向けられた鋭い指摘ほど辛くはなかった。

しかしながら、妹からの指摘はもっともだったと冷静になれば納得できる。面子にこだわる小さい男である光ひかりだが、家族からの忠告を無視するほど愚か者でもなかった。確かに、自分は朝比奈や千石と比べて人間として乏しい、と。

「だけどさあ」

だが、譲歩できないこともある。

「自分なんて友達いなくせによお……」

入学当初こそは、その外見の良さから多くの同級生に声をかけられていた光^{ひかり}だったが、次第に愛想のない性格が知られると周囲から孤立^{ひかり}した。兄や両親にはその様な素振りを見せないが、同じ学校に通っている光^{ひかり}からすればすべて分かってしまうのだ。一年B組は、中心となつている千石が人格者であるためにイジメとは程遠い牧歌的な雰囲気だ。だが、その空気がむしろ光^{ひかり}を意固地にさせているのだと。

「身内にだけ偉そうなこと言うのって、人間関係で不満を抱えている奴だけなんだぜ、妹」

先ほど言われたことを参考に、自らも嫌味を一つ。すぐに言い返せばよかったが、今ではやらなくて正解だったと思う。これを言えば、確実に兄妹の縁を切られるだろうから。

「ああ、どうすっかなあ」

「どうするつもりだ、銀髪」

「うおっ！」

不意に背後から声をかけられて、まるで座ろうとした際に椅子を引かれて転ぶかのように光^{ひかり}は斜面を転がり落ちた。前方に人の頭ほどの岩があり、それを回避するために全力で雑草にしがみ付き、速度が緩んだことでやっと止まることができた。

「ごめんな、銀髪。驚かせるつもりはなかったんだ」

申し訳なさそうにしながら自らも降りてきた男は、冥栄の制服を着ていた。メタルフレームの眼鏡をかけたその顔はいかにも理系という雰囲気だ。

「銀髪は、あれだろ。生徒会特命係の奴だろ。ほら、俺だよ、南波陽平。化学室で一度だけ会ってるよな」

「ああ、南波さんっすか……」

選挙前に一度だけ会っていることを思い出した。すっかり忘れていたが、それについては触れない。立ち上がるのを助けてもらい、再びその場に腰を下す。

「汚れるぞ、制服」

「いいんですよ。どうせ、もうぐちゃぐちゃですから」

六月もそろそろ終わり。気温も上昇してきたので、明日からは夏服に換えようと光は決めた。

「それで、何か用ですか？ 世間話するほど親しくないでしょ俺ら」

「はは、鋭いな。伊達に青島に気に入られた新入生じゃないってことか」

満足そうに頷き、通学用の手提げ鞆から取り出したビニール袋を下敷きに南波は腰を下した。適当な距離を保った状態で、さらに鞆から取り出したものを光に見せた。

「これ、誰ですか？」

南波が見せた写真には、彼と少し年下の女が写されていた。

「俺の妹だよ、銀髪。穂花ほのかっていうんだ」

「へえ、妹いたんですね。妹さんは、幾つですか？」

「銀髪と同じ年だよ」

「タメつすか。でも、冥栄じゃないんですね。もしかして、灘とか開成とか？」

兄が賢ければ妹もそうだろう。これまでに何度も言われたことだったので南波は笑って否定した。

「いや、灘でも開成でもないよ。あそこは次元が違うからな」

高校には通ってないんだよ、と南波は神妙な面持ちで呟いた。

「……マジですか？」

「こんな嘘について、俺が得をするとでも？」

口調こそはからかうようなものだった。対照的に表情は堅く、どう見ても話するのが苦痛のようだ。だが、南波は止めない。

「別にイジメが原因で不登校になったわけじゃないよ。あいつ、無愛想で人と接するのが苦手で、学校が大嫌いなんだよ。それに、数学がめちゃくちゃ得意なんだよ」

「数学つすか？」

それがどう関係するのだろうか、と光は首を傾げた。その疑問に

も南波は尋ねられることなく答えてくれた。

「それ以外のことに興味を示さないんだよ。数学の問題を解き始めると、俺や両親が話しかけても返事をしないんだよ。弟のことは時々だけど構ってるけどさ」

「つまり、あれですか？ 社会不適合者ってことですか？」

「ああ、それぞれ。完璧に的を射ているよ」

だから、と南波はさらに続けた。

「社会復帰させるために、新しい学科を作ろうとしたのさ。小鳥遊はそれを手伝う約束をしてくれたから、生徒会役員選挙で協力したんだ」

「それで、青島さんは落選ってことですか」

まさかこんな場所で選挙の裏事情を知ることになるとは思わなかった。それと同時に、小鳥遊が自分とは違い、さまざまな裏工作をしていたことに感心させられた。根本的に気持ちから負けていたのだと思い知らされた。

「だから、妹のことで困っている銀髪が心配になったのさ。まあ、青島から頼まれたから会いにきたっていうのが本当だけど。今の俺は学年代表で、生徒会長に命令される筋合いもないから自由に動けるのさ」

「はあ、それはどうも……」

素直にお礼を言うのも気まずく、簡単に頭を下げた。それでも南波は何も言わずに頷いた。まるで光ひかるの心中を察しているようだった。

第五話

「衣替えか、光？」

朝比奈が他の生徒より少し遅れて教室に入ると、涼しげな夏服を着た光が数学？の教科書を黙読していた。

「ん？ ああ、最近は暑いからな」

「それに期末試験の勉強か。もう一ヶ月もないのか……」

中間試験に関してはすべての教科でかろうじて赤点を上回ったが、それからもさらに難しくなる勉強に対して朝比奈は危機感を覚えていた。中間試験での順位は二百三十九人中の二百位。D組では恐らく最下位の成績だっただろう。

反面、光の成績は上々だった。二百三十九人中の七十二位。B組にも匹敵する成績で、当然ながらD組では最上位だった。外見こそは不真面目な彼が、勉強に対しては真摯に取り組むには理由がある。「お前も勉強しろよ、醍醐。そうじゃないと、就きたい職に就けなくなるぞ」

「言われなくても分かっているさ。俺も高卒は避けたいからな」
そう言ってから自分の席に着く。あと五分程度で担任教師がやって来る時間だ。何気なく廊下に視線を向けると、早足で歩く千石の姿が見えた。

「おはよう、朝比奈」

いつもと変わらない爽やかな声と、笑顔。ここまで嫌味のない男は千石くらいのもだろう、と朝比奈は感心させられた。

「どうした、千石？ もうすぐ、ホームルームだぞ」

「ああ、だから急いで来たんだよ。さつき、銀河さんに話しかけられてさ。野球に参加してくれるらしいぞ」

「本当か！」

バックから取り出した教科書を落としそうになりながら、かろうじて視線を背後に向ける。先ほどと同じく数学？の教科書を黙読し

ている光ひかるがいた。

口だけじゃなかったのか、と朝比奈は口元を緩めた。

「助かったよ。銀河にも伝えてくれ、ありがとう、って」

あと一人はどうするつもりだ、と尋ねると、千石は頭をかきながら首を傾げた。

「それは生徒会おれたちでどうにかするさ。事の発端は小鳥遊たかなしだからな」

「困ったことがあったら、相談してくれ。小鳥遊はともかく、お前なら力を貸すぜ」

頼もしいな、と千石は微笑んだ。

それから放課後まで、朝比奈と光ひかるは一言も言葉を交わさなかった。勉強に専念する後者に、前者が気を遣ったから。

そして放課後。小鳥遊の宣言通りに野球の練習が今日から開始となった。

「さて、今日から体育科との対抗試合に向けての総合練習を始める。野球だけでなく、スポーツ全般における常識だが、最も大切な要素は体力だ」

生徒会室がある北校舎屋上で小鳥遊は指示を与える。野球のユニフォームを着た姿で。

「よって、今日から一週間は走り込みを中心とした練習を行う。だが、鈍った身体に急激な運動は毒だ。走る距離は一回に一キロメートル。それに休憩を挟んで十回だ」

表情こそはいつもと変わらない冷たいものだが、その目は輝いている。生徒会長をしている際には決して見せない素顔に、生徒会役員だけでなく特命係の面々も困惑した。

隣で呆然とする朝比奈に、体操服はまだ長袖の光ひかるが小声で呼びかける。

「どうしてあんなに楽しそうなんだよ、あいつ」

「知らん。野球が好きなんだろう、多分……」

「一人だけユニフォームとか、どれだけ好きなんだよ……」

「いや、正確にはもう一人いるぞ」

野球のユニフォームを着ているのは小鳥遊だけだが、もう一人だけソフトボールのユニフォームを着ている女がいた。当然だが青島だ。

小鳥遊の指示が終わると、今度は主導権がキャプテンに委譲される。

「よし、今しがた小鳥遊監督から指示があったように、今日は走り込みを行う！ 準備運動代わりに、グラウンドまでランニングだ！」

いつの間にか役職が生徒会長から監督にすり替わっているが誰も指摘しない。ついでに言うなら、青島が小鳥遊のことを正確に呼称したのも初めてだった。普段は、ことりゆう、だったのが今回に限っては、たかなし、だった。

一行は一列なつて校内を駆け足で走った。途中で茶化す声が聞こえたが、すべて八神に一睨みで大人しくなった。八神さん、マジ神だな、と光は呟いた。

それなりに広大な冥栄高校のグラウンドで、生徒会チームに今回割り当てられた練習場所は野球部のグラウンドだった。かつては強豪だった野球部だが、ここ数年は低迷を続け、青島が入学した年度に廃部となったのだ。

そのためにグラウンドは荒れ放題で、雑草天国だった。だが、その面影はまったくくない。普段から手入れされていたかのような綺麗なグラウンドが広がっている。

「しばらく見ないうちに随分と綺麗になったな。誰の仕業だ？」

西校舎の芸術科に所属している八神は、その地理的事情からグラウンドを拝む機会が減多にないので特に驚いた。指の関節を鳴らしながら周囲を眺める姿は虎のようだ。

「美化委員会が放課後に前戦力を投入したらいいですよ、八神くん。今の美化委員長は生徒会派ですからね」

「ああ、そうだったのか。よく知っているな、尾崎」

「涉外として頼んだのが自分ですから」

「なるほど、さすがだな」

岩のような握りこぶしで尾崎の胸を軽く叩く。それに対して尾崎も、軽い力で肩を叩き返す。普段は科が違うこともあって交流の薄い二人だったが、生徒会役員となったことでそれなりに仲良くなつたようだ。

これまで黙っていた黒河が青島に呼びかける。

「青島キャプテン、準備運動の号令をお願いします」

「ほう、いいなその響き　よし、やろうじやないか！」

半径十メートルの輪になれ、と半分は意味のない指示がされる。それぞれが返事をして、一応は真面目に準備運動を始める。

「いち、にい、さん、し　ふむ、普通でつまらないな」

アキレス腱の運動で、それまで首を傾げていた青島が突然に妙なことを言い出した。隣にいた副キャプテンである千石が、無視すればいいものを律儀に反応する。

「どうしました、青島キャプテン？」

「うむ、この運動は普通すぎて、効果が薄いとは思わないか？」

意味不明な提案。誰もが呆れて苦笑いした。それでも空気を読まずに同調する馬鹿は必ず現れる。まるで事前に打ち合わせされていたかのように。

「そうですね、自分もそう思います」

まずは尾崎匠。

「確かに、これは前衛的とは言えないな」

まさかの八神次郎。

「音楽に乗ってみればどうっすか？」

とどめに銀河光。ぎんがひかる

「ほう、なかなか鋭い意見じゃないか、銀河君。ギヤラクシー　よし、私が一曲歌おう」

ホームベースの上で発声練習を始める青島。これは止められそう

にない、と朝比奈と黒河、そして千石は諦めた。

「夕日が沈み、町明かり輝く。すべての命が、一つになるの。君がもしも、一人で泣くなら。私が、その涙。拭ってあげる。」
体操には絶対向かない音程。だが、無駄に歌唱力抜群だった。

「上手すぎて反応に困るな」

「下手ならそこで終わらせられたけど、これじゃ無理だよな……」

「才能の無駄遣いということか」

各々の反応をする朝比奈、千石、黒河の三名。青島による独唱だったはずが、尾崎と光ひかるの介入で混成合唱へと変貌を遂げていた。

「どうする、これ……」

「いや、俺に言われても困る」

どうにかしようかと相談する千石と黒河だが有効な解決策は思い浮かばない。同じく途方に暮れる朝比奈だったが、彼の場合はもう一つ気がかりなことがあった。

銀河光ぎんがひかりのことだ。

約束通りに練習に参加するしているが、誰とも言葉を交わさず、青島や尾崎すらも完全に無視して素通りした。昔から無愛想な性格だとは知っていたが、これは少し違つたと朝比奈は心配で仕方なかった。

初日にして暴走した青島たちを見て、光ひかりは、ちっ、と小さく舌打ちした。

用語紹介（前書き）

ここでは『フリー・ユニオン』における用語の紹介をさせていただきます。随時更新させていただきますので、参考になさってください。

用語紹介

名称	冥栄高等学校		
所在地	東京都八王子市		
学科	普通科	体育科	芸術科
偏差値	普通科60	70	体育科43 芸術科47
生徒数	普通科712人	体育科477人	芸術科476人

『生徒会』

冥栄高等学校における生徒自治機関の頂点。会長以下の役員を選挙で選出する。一般的な高校よりも若干ながら自治権が強く、委員会に対しても強い介入権を有する（選挙管理委員会以外）。

第65代生徒会

顧問	水瀬純子 <small>みなせすみこ</small>
会長	青島満 <small>あおしまみちる</small>
副会長	三条頼人 <small>さんじょうよりと</small>
書記	八神神次郎 <small>やがみしんじろう</small>
会計	村木道之 <small>むらぎみちゆき</small>
広報	涼木牙宥 <small>すずきがゆう</small>
渉外	青島満（兼任） <small>あおしまみちる</small>
庶務	四日市栄 <small>よっかいちさかえ</small>

第66代生徒会

顧問	水瀬純子 <small>みなせすみこ</small>
会長	小鳥遊六徳 <small>たかなしりつとく</small>
副会長	千石考貴 <small>せんごくこうき</small>
書記	八神神次郎 <small>やがみしんじろう</small>
会計	四日市栄 <small>よっかいちさかえ</small>
広報	九重俊 <small>ここのえしゅん</small>

渉外 尾崎匠 おざきたくみ
黒河総一 くろかわそういち
庶務

『委員会』

冥栄高等学校における各種雑務を担当する組織の通称。生徒会が内閣ならば、委員会は中央省庁と認識されている。基本的に生徒会の下部組織ではなく独立組織だが、実質は指示に従って動く傾向が強い（選挙管理委員会は除く）。

以下は第66代生徒会時代における各委員会の委員長と副委員長

校風委員会（委員数36人）

校内の風紀維持を担当。現委員長の性格により一段と厳格な傾向にある。

委員長 新垣理 あらがきあさむ

副委員長 世良昭義 せらあきよし

美化委員会（委員数42人）

校内の衛生維持を担当。現委員長の性格により表立った活躍は少ない。

委員長 源桃奈 みなもとももな

副委員長 織部純一郎 おりべじゆんいちろう

広報委員会（委員数28人）

校内の情報管理を担当。実質的には生徒会広報の直轄であり、委員長は没落者の末路とされる。

委員長 三条頼人 さんじょうよりと

副委員長 九重俊 ここのえしゆん

体育委員会（委員数58人）

校内の体育設備管理を担当。体育科の生徒が過半数を占める傾向にあり、生徒会とは代々犬猿の仲である。

委員長 五箇山楓ごがやまかえで

副委員長 帆足華ほあしはな

図書委員会（委員数19人）

校内の書籍管理を担当。選挙管理委員会に次いで委員が少ない。現委員長の支倉は九年以上その地位にいる（留年によるもの）。

委員長 支倉曆はせくらこよみ

副委員長 空席

選挙管理委員長（委員数2人）

校内の選挙運営及び管理を担当。短期に膨大な仕事をこなす必要があるので不人気。校内最大の閑職とまで揶揄されることがある（ただし、選挙期間においては委員長が生徒の最高権力者代行として扱われる）。

委員長 白石恵しらいしめぐみ

副委員長 灰乃瞳はいのひとみ

『生徒会特命係』

第66代生徒会において施行された、生徒会の下部組織。生徒会渉外の直轄であり、様々な雑務を担当する。

代表 青島満あおしまみちる

副代表 銀河光ぎんがひかる

書記 朝比奈醍醐あそひなだいご

会計 銀河光ぎんがひかり

『冥栄高等学校生徒会役員選出選挙規則』

第1条 規則の趣旨

以下は、冥栄高等学校における生徒会役員選出選挙の規則であり、選挙管理委員会によって運営される際の規範として機能させなければならぬ。

第2条 立候補の資格

冥栄高等学校生徒会役員選出選挙における立候補の資格として、本校の生徒であること。但し、留年者には資格を与えない。

第3条 当選の是非

当選の是非は選挙管理委員長の判断で告知する。

第4条 選挙期間中の生徒における秩序

生徒会長不在による秩序維持のため、選挙期間中のみ選挙管理委員長がその役割を代行する。

第5条 再選の禁止 削除

第6条 選挙不可における処置

止むを得ない事情によって選挙運営が困難である場合、選挙管理委員長は独自の判断で通常選挙とは異なる体系で役員を選出する権限を有する。

第7条 現生徒会に対する解職請求

全校生徒の4割、もしくは各学科において9割以上の署名がある場合、現生徒会に対する罷免選挙を行う義務を選挙管理委員長は有する。

第8条 解職請求成立における生徒会運営

生徒会に対する解職要求をした者たちの代表は、次期選挙までその役職を代行する義務を負う。

第9条 選挙管理委員の選挙関与

選挙管理委員会委員には、選挙権及び被選挙権を放棄する。

第10条 推薦人の立場

各立候補者には推薦人の選任を許可する。ただし、同人物による立候補者への推薦は3人までとする。

第11条 不正に関する処分

選挙において立候補者及びその推薦人に不正が発覚した場合、その立候補者を落選とする。なお、その際の処分は選挙管理委員長に一人する。

第12条 生徒会顧問の選任

生徒会顧問の選任は、選挙後に当選した生徒会長が指名権を有する。

第13条 選挙期間中における妨害の禁止

選挙期間においてその運営を妨害する者は、理由に関わらず選挙管理委員長の裁量で処分する。

第14条 選挙結果の守秘義務

選挙結果は、以後10年以上選挙管理委員会が守秘義務を負う。

第15条 役員空席における処置

生徒会役員空席の場合、副会長以外の役員における兼任を認める。

また、生徒会長に独占指名権を与える。

第六話

初日こそは練習として成立しなかったものの、翌日からは見違えるように全員が真面目に取り組み始めた。小鳥遊^{たかなし}が監督として目を光らせていることもあるが、それ以上に野球の面白さを理解してきた者が増えたからだろう。

特に八神は黙々と練習に取り組んでいる。

「彫刻以外のことであいつが真剣な眼差しをしているのは妙な光景だな、尾崎」

生徒会顧問として練習の見学をしていた水瀬が、ちょうど水分補給をするために戻ってきた尾崎に言った。日光の当たらない場所でマネージャ的役割を担当している四日市から清涼飲料水を受け取り、一口飲んでからそれに返事をした。

「自分も同感ですよ。運動神経が特別に優れているわけでもないのに、小鳥遊くんからアドバイスを受けたりして上達していますよ。」

この中では、一番楽しんでいるようですね」

「打ち込めることがあるとはいいいいことだな。昔を思い出す」

「最近では伊勢崎さんとの交流は？」

「お互いに忙しいからな。そう何度も同窓会をするわけにもいかないのさ」

今年で二十六歳になった水瀬だが、今も剣道は続けている。それも高校時代の出会いや出来事が彼女に大きな影響を与えたからだ。

「さて、自分はこれで練習に戻ります」

「ああ、怪我をするなよ」

駆け足でグラウンドに戻った尾崎は、素振りをしている朝比奈に声をかけた。

「どうですか、朝比奈くん。バットと刀は随分と違うでしょう？」

涉外として特命係に出入りすることが多い尾崎には、朝比奈も趣味のことを話す程度には親近感を覚えていた。汗を拭いながら返事

をする。

「同じ金属でも違いますね。まあ、当然ですけど」

「早く慣れるといいですね。ところで、銀河くんはどこですか？
姿が見当たりませんか……」

「あいつなら、小鳥遊と二人で投球練習ですよ」

朝比奈が指さしたのは、サッカー部のグラウンドだった。かなり遠いが、光が投げる球を捕る小鳥遊の姿が見えた。ご丁寧にキャッチャーマスクまで被っている。

「敵の陣地でピッチングとは大胆不敵ですね」

「俺もそう思いますよ。まあ、向こうに行かなくても、ここは丸見えですけどね」

それぞれのグラウンドの境にはネットがされているものの、それでも普通に透けて見える。朝比奈たちも、体育科の選抜メンバーが部活動を終えた後に野球の練習をする姿を目撃したことが何度かある。いずれも、生徒会側が引き上げる間近のことだ。

「練習量こそは自分たちが勝っていますけど、大丈夫でしょうかね？
体育科の人たちは、運動神経の塊のようなエリート揃いですからね」

「どうでしょうかね。そればかりは実際に試合を試合をしてみないと分からないでしょう」

素振りを再開しながらのいい加減な返事だった。それでも尾崎は咎めなかった。適当ではあるが朝比奈の言い分は正しいと思ったからだ。

朝比奈から離れ、次に向かったのは千石と黒河のところだった。

中学時代に野球部だった黒河が、バトミントン部に所属していた千石に指導をしている。

「調子はどうですか、黒河くん、千石くん？」

呼びかけると二人も手を止めて挨拶をした。千石は爽やかな笑顔で、黒河は前髪が目にかかった状態で。

「野球の経験は皆無なので、苦戦していますよ」

「バドミントン部の部長として、団体の部全国大会出場の千石くんでも苦手なことはあるのですね。不謹慎ですけど、少しだけ安心しました」

「昔の話ですよ。と言っても、一年も経っていないですけど。尾崎さんはどうですか？」

「自分はスポーツから退いて二年近く経ちますからね。鈍った感覚を取り戻すのは、中々骨が折れますよ」

和やかに無駄話をする二人。練習を邪魔された形になった黒河は露骨に舌打ちした。

「尾崎さん、今は練習中なので邪魔をしないでください。どうしても喋りたいなら、どこか別の場所をお願いします」

「おいおい、総一。そういう言い方はないだろう」

冷徹すぎる黒河の口調に対して、とりなすように千石が口を挟む。だが、肝心の尾崎はその気遣いに甘えずに自分の非を認めた。

「いえ、悪いのは自分ですから。邪魔をしてしまいましたね、黒河くん。引き続き千石くんに指導をお願いします」

何か言おうとした千石より早く、尾崎はまた移動をした。次に声をかけた相手は、銀河兄妹の妹である光ひかりだった。

「練習は進んでいますか？」

いつも通りに丁寧な口調で呼びかける。

「……普通です」

一応は相手が上級生であるために最低限の礼儀を守った返事だった。それでも無愛想な性格は、十分すぎるほど尾崎に伝わり、彼を不安にさせた。

「あの、もしかや邪魔になってしまいましたか？」

「別に、そんなことはありませんけど」

それならよかった、と尾崎は安堵した。小さな舌打ちを、光ひかりがしたことには気が付くことができなかった。

「それで、私に何か用ですか？ 兄なら向こうで投げてますけど」

「いいえ、違います。単純に、仲間同士の友好を深めておきたいと

考えただけです。だから、少しでもお話できないか、と」

「随分と暇なんですね、生徒会渉外さんも。そうじゃなくて、渉外だからよく喋るんですか」

「そうでもありませんよ。普段はそれほど饒舌でもないのです、学年でも毎日話す相手は少数ですよ。選挙管理委員長の白石さんとか、副委員長の灰乃さんとか」

ふうん、と光は素っ気ない返事をした。それでも尾崎は顔色一つ変えずに、むしろさらに自分のことを教える。

「自分としても生徒会に入ることになったので、色々と気に病むこともあります。小鳥遊くんがいなければ、校内の学生自治に参加することなんて恐らく無かったでしょうからね」

「でも、楽しんでるんですよ」

「ええ、自分なりにですが」

楽しそうに答える尾崎。その表情を見て、自らも半ば強制的に今の立場になってしまった光は身震いしそうになった。他人から押し付けられた地位に甘んじているのではなく、尾崎の場合はそれを逆手にとって楽しんでいるのだと。

「幸せですね、尾崎さん　練習をするのでこれで失礼します」

そう言つと、グリップを短く持つ形でバットを構えた。ここにいては危ない、と考えた尾崎は黙つてその場を後にした。

とりあえず一通りのメンバーと会話を済ませると、最後に青島の元に急いだ。

「そう簡単にまとまりそうではありませんよ、青島さん」

今まで尾崎が練習を放置して会話ばかりしていたのには理由があった。青島から頼まれて、全体の雰囲気を押むためだった。

報告を受けた青島は、やれやれ、と腕を組んだ。

「表面上は取り繕つていても、腹に一物ありそうな奴がいるということか？」

「一物が爆発するタイミングまでは分かりませんが、誰が不安の種かはよく分かりました。一先ず、黒河くんと銀河くんの妹は要注

意ですね」

やはりそうか、と青島は口には出さず納得した。以前からだが、あの二人の姿勢にはどこか不安を覚えていたからだ。真面目に練習に取り組んでいるものの、どこかが欠けているのだ。それが何か分からないという点に関して言えば、余計に不安になる。

「それと、個人的には朝比奈くんも心配ですね」

「何、武士君ものふが心配だと？」

思ってもみなかった名前に、さすがの青島も面食らった。だが、尾崎は冷静に自らの見解を伝える。

「一見すると馴染んでいる様子ですが、自分としては何らかの感情を抱えているように見えるのです。負の感情ではないと思うのですが、よく分かりません」

朝比奈と言葉を交わした際、彼が何かを心配しているように尾崎には映った。それは生徒会の今後のことでも、自分の今後のことでもないだろう。

青島はヘルメットを外して、ポニーテールにまとめた後ろ髪を撫でた。時には先輩らしいこととしてもしてみるか、と彼女は自分を奮い立たせた。

第七話

昼休みに朝比奈は青島に呼び出された。他の校舎とは違い、倉庫すら無い南校舎の屋上は殺風景に見えた。

「珍しいですね、青島さん。放課後以外に顔を合わせるのは久しぶりではないですか？」

「うん？ そう言えばそうだなあ……」

要件を話そうとせずに考え込む青島。食事の時間を確保したい朝比奈は時間を気にするような素振りをしながら問いかける。

「それで要件は？」

「うん？ ああ、そうだったな……」

急かされた青島だが、一向に要件を言おうとせず、ぼんやりとした表情で屋上のフェンスを眺めている。

「なあ、武士君^{ものふ}。知っているか？」

「何がですか？」

「南校舎のフェンスは設置されてから、まだ半年ほどしか経っていないんだぞ」

確かに、そう言われてみると新しい。北校舎や東校舎のフェンスは雨晒しによつて風化して、すでに遠くからでも錆が目立つほどだが、南校舎のものは随分と綺麗だ。

一年生の朝比奈からすれば新しい発見であつたが、今の彼にはどうでもいいことだつた。

「あの、そんなことを伝えるために呼び出したのですか？」

普段から奇行が多い青島だが、こんな下らないことのために時間を割かれては堪らないと朝比奈は抗議するように言った。すると青島は我に返つたように目を見開き、そして大げさに首を振つた。

「はは、すまないな。君にはどうでもいいことだつたな。ああ、それで要件だが」

何か心配事があるようだな、と青島は断定的に尋ねた。心当たり

がない朝比奈はこれに困惑して、何も言わずに苦笑いした。

「だが、尾崎君が気にしていたぞ。自分のことじゃなくても、他人を心配していたりすることはないのか？」

「他人ですか……」

それには少しだけ心当たりがあった。銀河妹　つまり光のことだ。

「実は、ちょっとだけ引つ掛けていました。その、光が素直に協力してくれているのが不思議なんです。あいつは無愛想だけど悪い奴じゃないんです。でも、嫌っている人間に協力するほど優しい性格でもないですから……」

朝比奈なりに言葉選びに苦戦しているのだろう、と青島は彼のことを可愛く思った。知り合いのことを褒めるのは簡単で、貶すのはさらに簡単だ。一番難しいのは、貶さないように欠点を言葉にすることだ。相手のことをよく知っていなければ到底出来ない芸当だ。「こんなことは考えたくないですけど、何か裏がありそうで少し警戒してます」

自己嫌悪の一步手前にいる朝比奈だが、それは決して悪いことではない、と青島は断言した。一般的には友達を疑うなど軽蔑されることがほとんどだが、そうする人間は決まって自らも友達を疑っている。相手の良い面も悪い面も総合して友達なのだ、と青島は小学生の頃から父親に教えられていた。

そんな青島だからこそ、朝比奈の気持ちはよく理解できた。

「なあ、そんなに悲観することはないぞ、武士君^{もののふ}。私も、これまで学校生活で、君のような考えを持ったことは多いからな」

「青島さんがですか？」

意外だった。朝比奈からしてみれば、青島という人間は他人に悪意を向けることが稀な女性だという認識があったからだ。その証拠に、自らを生徒会長の座から引きずりを降ろした小鳥遊^{たかなし}のことも、それに一枚絡んだ南波のことも笑って許していた。そして、今はその下で律儀に命令を聞いているほどだ。

「はは、私はそんなに立派な人間じゃないさ」

朝比奈の自分に対する印象を聞き、あまりにも美化されていることに青島は笑った。そんな人間がいれば私でも惚れるな、と悲しそうな表情で。

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもないさ。それより、君のことだ。君の考え方はむしろ素晴らしいものだ。相手との仲が親密になれば、些細なことが気にならなくなる。だが、君は気になった。それは素晴らしいことだ」

甲子園に出場する球児を激励するかの様に肩を叩く青島。女性にしては力強く、朝比奈は痛みを紛らわすように乾いた笑い声をあげた。

しばらく肩を叩き、それが終わると青島は懐かしそうな目をして言った。

「なあ、君は知っているか？ 今の三年生には、入学当時から頭角を現していた七人がいるんだぞ」

「頭角を現していた七人ですか？」

聞いたことはないが、それでも朝比奈には心当たりがあった。つまりは、現在でも活躍している三年生のことだろう、と。

最初に思い浮かんだのは、あの南波という白衣を着た男のことだった。次は、その傍らにいつもいる竜崎という優しそうな女。

「ああ、その二人は代表格だな。今こそは生徒会から距離を置いているが、陽平は会長、法子は会計をしていたぞ」

「それと、今の会計をしている四日市さんですね。そして 青島さんですか」

「はは、自称しているようで照れくさいな」

謙遜する青島。だが、朝比奈からすれば別に不思議ではない評価に思えた。入学式でのスピーチしかり、これまで交友によって彼女の素晴らしさは十分に理解できていた。奇行の多さは目に余るものの、それが一種の照れ隠しではないかと勘繰ってしまうほどに時折

魅力的な姿を彼女は見せる。

「それで、残りの三人は？」

「ああ、そうだったな」

少しだけ、朝比奈も気が付かなかったが青島の表情が硬くなった。

「その七人には、一人だけ体育科の生徒がいるんだよ。五箇山ごかまかえで楓さ。今回のリコールの中心人物だ」

「五箇山体育委員長のことですね。前年度インターハイで100メートル走六位。今年度のベストタイムでは全国四位の強豪だとか……」

噂話に疎い朝比奈だが、そんな彼でも五箇山のことはある程度は知っていた。それほどまでに校内では有名だということだ。

「それと三条さんじょう頼人よりひとだな。理系科目の差で陽平に後れを取っているが、それでも文系では冥栄で一番優秀だ。全国模試上位の常連で、有名大学の判定はすべてA、偏差値は七十を軽く超える秀才だ。前回の副会長 私の時代のな」

名前だけは朝比奈も知っていた。彼もまた生徒会長に立候補して落選した生徒だ。五箇山と同じく生徒会に対して反抗的だと聞いているが、今は目立つような行動はせずに水面下で大人しくしていると千石が漏らしていた。

「一年時から注目されていただけあって、いずれも劣らぬ面々ですね」

「はは、私が浮いているのは自覚しているさ」

「そんなことはありませんよ。青島さんは立派ですよ 俺よりは」

「なるほど、つまり私は土農工商の時代において、お武家様よりも偉いということか！ 頭が高い、控える！」

時代劇さながらの無駄な演技力でふざける青島。先ほどとは対照的に明るい表情だが、それすらも朝比奈には何かを誤魔化しているように見えていた。痛々しいというわけではないが、まるで何かに耐えているようだ。

一通り似非時代劇が終わったところで、予鈴が鳴った。お昼休み

の終了を告げる合図だ。

「すまないな、武士君。もののふ 昼食を食べ損ねてしまったな」

「いえ、構いませんよ。それは青島さんも同じでしょう」

三年生でも屈指の七人。それを聞けただけでも朝比奈は満足だった。自分の悩みを打ち明けられたこともあるので、青島を恨む気にはなれなかった。

「うん？ 私はすでに昼食は済ませているぞ？」

「……やっぱり、謝ってもらってもいいですか？」

これは一本取られたな、と朝比奈は呆れながら教室に戻った。その途中、彼は気が付いた。

三年生でも屈指の七人だが、一人だけ抜けていた、と。

第八話

一学期における期末試験の最終日。今日ですべての試験が終わったのだが、その満足度にはどうしても個人差が生じる。いかに冥栄高校が進学校の部類に入るとはいえど、内部での学力は差が激しく、A組とD組となればその差は歴然だ。

しかしながら、同じD組であるはずの朝比奈と光^{ひかる}の表情は対照的だった。

「ご機嫌だな、光^{ひかる}。今回のテスト、自信があるのか？」

前回のような壊滅的な結果になることはないだろうが、それでも朝比奈からすれば今回の試験は到底自身がなかった。

試験に向けて真面目に勉強していた光^{ひかる}は頼杖をつきながら余裕の発言をする。

「まあ、自信はあるぜ。日本史Bと現代文はお前に負けるかもしれないけど、英語？と数学？は九十点取れそうだ」

「いや、俺は日本史も現代文も自身がない。多分、それもお前の勝ちだ」

「マジかよ。お前の得意科目だろ」

驚いた光^{ひかる}は頼杖を外して椅子にしっかりと座った。随分と綺麗になった特命係室の窓際で、ぼんやりと外の景色を眺める青島に声をかける。

「青島さんは、テストどうでした？」

「まあまあだな。数学は意味不明だったかな」

冴えない返事だった。青島もD組だが、それでも十分に国立大学や有名私立大に合格できる学力は備えているはずだ。試験のことで悩んでいるのではない、と朝比奈は勘付いた。

「青島さん、この前も様子がおかしかったですけど、何かありましたか？」

試験が始まる前に、朝比奈は南校舎の屋上に呼び出されていた。

考えてみれば、あれから青島の行動が彼女らしくなくなった。ときどきぼんやりと景色を眺めて、まるで恋でもしているかのようにもの思いに沈んでいる時があるのだ。

「えっ、青島さん、何かあつたんですか？」

朝比奈の言葉に触発された光ひかるが彼よりも大きな声で尋ねる。後輩に心配をさせてしまったことに気が付いた青島は即座に振り返り、いつものように陽気に返事をする。

「はは、何もないさ。強いていうなら、生理が近いだけさ」

そう言っつて自身の臀部を軽く叩いた。下品つすね、と光ひかるは笑つた。「さて、試験のことを振り返るのも結構だが、これからは野球に集中しようじゃないか。正式に決定した日程は、七月三十一日。もう一週間を切つたな」

特命係室の壁には、青島が近所の薬局から貰つたカレンダーを掛けている。丸印されているのが試合当日だ。

「肩の調子はどうだ、エース銀河君？」
キャプテン

「それ微妙にかっこいいつすね」

試合に先立つて、すでに全員の守備位置が小鳥遊たかなしにより告げられていた。光ひかるは投手、朝比奈は捕手、青島は遊撃手だ。

「まさか、お前とバッテリーを組むとはなあ。世の中って面白れえよな」

「ああ、そうだなあ……」

未だに青島のこと引つ掛かっている朝比奈だったが、この場は話を合わせることにした。すでに青島はいつもの調子を取り戻していたからだ。

「だが、中々君たちは息があっているじゃないか。千石君と黒河君が褒めていたぞ」

「千石たちがですか？」

練習中は別々なのでほとんど会話をする機会が無かつた二人だ。それでも仲間の練習をしつかりと見ていたことに、自分には観察力が足りないな、と朝比奈と光ひかるは悔しそうに首を捻つた。

「黒河君が二塁手で、千石君は三塁手だったか？ 二人とも随分と上手に野球をするから、驚いたな」

「黒河は中学時代に野球部だったそうです。野球経験は無いそうですけど、千石も中学時代にはバドミントンで全国大会に出場したそうです」

「うえ、体育会系かよ」

専らのインドア系である光は拒否反応でも起こしたかのように顔をしかめる。さすがは中学時代に帰宅部のエースと陰口されていただけのことはあるな、と朝比奈は口元を緩めた。そして、そんな彼を投手に任命した小鳥遊も相当だな、と。

「八神さんが、一塁手。尾崎さんが右翼手。それで、光が左翼手だったな」

「中堅手はどうするんだろな？」

すでに試合を目前にも関わらず、肝心の九人目の選手は未だに顔を表さない。小鳥遊曰く、すでに用意は済ませているそうだが、彼以外は誰もが個人差はあるものの不安だった。

「なんか演出みたいだよな、小鳥遊の」

「演出？ どういうことだ、光」

妙なことを口走った光に、朝比奈が尋ねる。自らは何も言わなかった青島も、窓枠に腰かけて興味深そうにしている。

「ほら、よくあるじゃねえか漫画とかで。最後の仲間が、寸前で助けに来るって展開」

「ふむ、王道だな、少年漫画の」

「そういうものか？」

すぐに理解を示した青島。漫画を読む習慣が身につけていない朝比奈は首を傾げる。普通は逆だろ、と光は呆れて両手を挙げた。

「あいつも野球好きっていう意外な一面があるから、もしかして漫画とか好きだったりするのかな？」

「どうだろうな。千石にでも聞いてみるか」

別にどうでもいいことだが、千石ならば気軽に答えてくれるだろ

うと朝比奈は思った。彼は小鳥遊と相当長い付き合いだと聞いている。

そこにちょうど尾崎が現れた。

「失礼します」

礼儀正しく入室してきた尾崎は、いつもと雰囲気が違った。しばらくその違いに気が付かなかった三人だが、青島が不意に違和感の正体を察知した。

「散髪したのか、尾崎君」

「ええ、もうすぐ試合ですから」

以前は後ろ髪を束ねて、横髪も耳にかかるほど長かったはずが、今は随分とすつきりとしている。千石には及ばないが、短髪の尾崎も中々の好青年だ。

「銀河くんもこの機会に整えてはとうですか？ 自慢の銀髪ですけど、根元が黒くなっていますよ」

「えっ、マジっすか？」

慌てて手鏡を取り出して、明るい窓際で頭部を確認する光^{ひかる}。その隙を見逃さず、尾崎は音を立てずに椅子に座った。青島が窓枠から最後に残された椅子に座ったことで、三つしか用意されていない座席がすべて埋まった。

「って、全然黒くないじゃないですか！」

「そうですね？ どうやら自分が見間違えたようですね」

悪びれもせず誤魔化す尾崎。座席を確保するための戦略だったのか、と朝比奈は舌を巻いた。光は不満そうにしながら、青島が座っていた窓枠に腰かけた。

「それで、今日はどうした、尾崎君？ こんな蒸し暑い部屋に来るなんて、君も大変だな」

「蒸し暑いのは生徒会室も同じですよ。放課後になると、職員室以外は冷房禁止ですからね。まあ、そもそも生徒会室に冷房があるはずがありませんけれど おっと失礼」

与太話に流れそうな自分を制止して、今回の要件を話す。

「小鳥遊くんからの伝言ですが、試合までは練習の内容をこれまでより簡素化して、しっかりと身体を休めるために午後九時には就寝することを義務付けるそうです」

「午後九時？ 小学生じゃないんですよ、俺たち！」

「俺ですら午後十一時就寝ですからね」

自身の生活サイクルを狂わされそうになつて抗議する二人。これには尾崎も困つたような表情で青島に助けを求め。

「そんなに早いかな？ 私は毎日午後八時に就寝して、午前三時に起床するぞ」

「新聞配達人かよ、青島さん」

「海外の通販番組が放送されている時間帯だな」

健康的なはずの生活習慣だが、このご時世の高校生がその生活サイクルというのは違和感がある。光も朝比奈も冷静な返答をしたが、内心では呆れていた。

その三人を見て、尾崎は、仲良しですね、と微笑んだ。

第九話

生徒会の命運を分ける試合まで、あと三日。すでに夏休み期間となり、補習も終了しているが学校はお盆までは自由に出入りが出来る。

小鳥遊^{たかなし}は生徒会室で一人、黙々と野球道具の手入れをしていた。

単独で済ませるには骨の折れる作業ではあるが、これだけは小鳥遊が自分自身でやりたかった。

彼が野球と出会ったのは小学生になる前のことだ。今でこそ誰からも強制されることなく勉学に取り組んでいる小鳥遊だが、幼少期においては外務省の官僚である父から英才教育を施されていた。勉強の毎日の中で、彗星の如く現れて彼を虜にしたのが野球だったのだ。

娯楽にはあまり寛容でなかった父だが、それが息子の勉学においてプラスになるならばと、中学での部活動を許した。今の自分があるのは、野球の力が大きいと小鳥遊は心の底から思っている。

だが、今回の試合で野球を選んだのは決して彼自身の好みではなかった。

「冥栄高校に存在しない部活動で、比較的メジャーな競技か……。よく考えたものだな」

誰にも言わなかったが、恐らく千石だけは気付いているだろう。野球を試合の競技として選んだのは小鳥遊ではなかった。リコール申請が受理された後に、彼がある人物に急遽依頼してプランを練らせたのだ。

その人物に依頼しなければ、ここまで事態はスムーズにいかなくただろう。選挙管理委員会委員長とも個人的なつながりがあり、それでいて水面下で行動できる生徒は非常に少ない。その一人をあらかじめ自らの手元に置いておいたことを、小鳥遊はいまさらながらに良い判断だったと振り返った。

しかし、二つだけ腑に落ちないことがある。

「最後の選手を最後まで伏せる、とはどういうことだ？」

九人目の選手を獲得したのは、練習が始まってからしばらくしてからのことだった。だが、そのことを知らせるとその人物は小鳥遊にきつく口止めをしたのだ。最後まで伏せておくことで大きな武器になる、と。

「動揺を誘うつもりか？」

総合的に状況を判断して、聡い小鳥遊は一つの仮説を立てた。だが、考えの読めない人物のすることなので仮説を実証することができない。

結局は、最後まで分からないのだろう、と小鳥遊は諦めた。

「そして、監督に専念するな、か。訳が分からないな」

いつもながらに、あの人の思考回路は読めない。自分とはまた違う意味で頭が良いのだろう。一度でいいから脳内を覗いてみたい、と小鳥遊は思った。

その日に登校していたのは小鳥遊だけではなかった。試合では選手だけでなく、審判も必要になる。その役目を任されているのが選挙管理委員会で、夏休み返上で作業をしている。

「瞳ちゃん、当日の客席確保は大丈夫？」

委員長である白石が尋ねると、副委員長の灰乃瞳はいのひとみが机上の資料に手を伸ばす。ゆっくりとした動作で目的の情報を探し、おっとりとした口調で伝える。

「はい、客席の確保は校風委員会の皆さんが担当してくださるそうですよ。委員長さんがいらっしゃるので、大きな問題は発生しないと思います」

「試合の流れによっては、体育科の生徒が荒れるかもしれないからな。まあ、新垣が先陣切ってくれるなら大丈夫か……」

一つの憂いを解消して、また別の憂いに挑む。

「グラウンド整備は？」

「そうですね　ああ、美化委員会の皆さんにお願いしているようです」

「情報伝達は？」

「もちろん、広報委員会の皆さんが、九重さんを中心に動いてくださいます」

「ふーん、さすがは天下のKDI」

KDIとは九重の陰口である。背も低く、顔立ちも良くない男だが声だけはイケメンであることが語源だ。つまり、声だけイケメンの略である。

耳が隠れるほどの横髪で、後ろ髪を束ねた灰乃がにこやかにしながら、陰口を言った白石をたしなめる。

「いけませんよ、恵ちゃん。人の悪口を言うのは、めっ、ですよ？」

「人を子ども扱いするな、瞳ちゃん」

不機嫌そうにする白石だが、決して怒られたことが癪に障った訳ではない。彼女は普段から不機嫌そうに見えるのが常で、かつて青島から不機嫌力チューシャとからかわれたこともある。

「あー、それで、図書委員会は何かしてくれるの？」

「もう、話を逸らさないでください　まあ、いいでしょう」

今はそれどころではない、と判断した灰乃はすぐに返答する。

「ええと、当日の後片付けを手伝ってくださいさるそうです」

「ふーん、そう。でも、あの年増委員長は顔出さないんでしょう？」

「支倉さんですか？　ええ、委員を派遣するだけになっていますが

……」

「そうだと思った。どうせ、当日の準備は学年議会でしょ？」

何も見ずに断言する白石。ページをめくった灰乃は、しばらくして口元を緩め、柔和な笑顔で頷いた。

「よく分かりましたね、恵ちゃん」

「当たり前。だって、これ尾崎が手配したんでしょ？」

随分と手際が良いな、と白石は本来なら褒めるところだが呆れたようにため息をついた。別に嫌いではないのだが、彼女は尾崎のことが正直苦手だった。あの飄々として、普段は空気のような存在であるにも関わらず、要所で異常なほど存在感を發揮する人間性がどうしても癪に障るのだ。

だからこそ、そんな白石には灰乃の趣味は理解不能だった。

「さすがは匠さんです。渉外になられた際には、謙虚にも不安な言葉を漏らされていましたが、やはりあの方は違います。体育科が生徒会に牙を剥いた途端に、誰よりも早く選挙管理委員会と連絡を取り、ここまでの段取りを仕上げられた手さばきは、とても高校生とは思えませんでした。私は、また匠さんの素晴らしさに触れることができて幸せです」

「はいはい、それはよかったね」

頬を染める灰乃を、白石は憐れむように横目で見る。どこで間違ったのだろうか、灰乃は尾崎に対して好意を寄せているのだ。

小学校からの馴染みだからこそ分かるが、決して灰乃は軽い女ではない。今時珍しいほど礼儀正しく、おしとやかな性格だ。中学時代には八神や涼木に匹敵する不良を始めとして、白石が知っているだけでも十人以上から告白されている。

対照的にまったく人気の無かった白石だが、それでも尾崎だけは願い下げだった。自分ですら敬遠する男に、まさか自分よりも格段に美人で、性格もおしとやかな灰乃が惚れるとは、まさに青天の霹靂だった。

「でも、最近はお互いに忙しいのでお顔を拝見できません……。ご自宅の電話番号は教えてくださいましたが、それでもご自身の携帯番号やメールアドレスについてはいつもはぐらかされてしまいます……。私は眼中に無いのでしょうか？」

「うーん、好きかどうかはともかく、確実に気が付いていると思うよ。瞳ちゃんの気持ちには」

私は携帯番号もメルアドも知ってるよ、と言えない。無理矢理に

登録されたものだが、これが知られば確実に灰乃から絶交されると白石は身震いした。

「そうでしょうか？ 私は、まだアプローチが足りないと思いますけど」

「いや、それはないでしょ。あれだけやって、それで好意に気付かなかったら病気だよ、病気。隔離病棟に押し込みたくなるよ」

白石が断言するほどに、灰乃の尾崎に対するアプローチは露骨だ。頼まれもしないのに毎日昼食を手作りして、毎日電話をして、休日には必ず遊びに誘う。休み時間ごとに、B組からC組まで灰乃が尾崎に会いに行く際には、彼女のために廊下から生徒が自主的に姿を消すほどだ。A組の白石が二人の恋のキューピットになるのか、などかなり真面目な噂が流れているほどだ。

勘弁してくれよ、と白石は常々思っている。

三年生を代表する七人が青島を除けば実力派ならば、二年生の代表格はいずれも強烈すぎる個性派な生徒が多い。

白黒つけることに異常なほどこだわりを持つ選挙管理委員長、白石恵。

このご時世に正義を掲げる校風委員長、新垣理。

留年経験豊富な図書委員長、支倉曆。

恥ずかしがり屋な美化委員長、源桃奈。

芸術科の一匹狼、八神神次郎。

冥栄高校最大の非公認組織F組組頭、涼木牙宥。

冥栄の広報王、九重俊。

そして、白石が嫌う男、尾崎匠だ。

三年生には劣るもののいずれも一芸に長けている。それだけに、誰もが生徒会長という役職には不適格だ、と白石は考えている。一年生生徒会長のことを認めるわけではないが、それでも、二年生がなるよりはマシだ、と今ではある程度なら納得できる。

「大変だぞ、瞳ちゃん。尾崎は、まったく何を考えているか分からないからな。付き合ってからが苦勞だぞ？」

「そ、そんな、気が早いですよ、恵ちゃん……。学生結婚は、よく話し合ってから決めないと」

聞いているようで聞いていない灰乃。随分と先のことまで考えている彼女は、恐らくすでに新婚旅行のパンフレットでも準備しているのだろう。

やれやれ、と白石はカチューシャの位置を修正してから作業に戻った。

第十話

試合の前夜、朝比奈は心の悩みを晴らすために、思い切つて光を呼び出した。駄目元だったが、意外にも光は承諾してくれた。

朝比奈が制服のまま、いつもの公園に急ぐと、すでに光の姿があった。彼女もまた制服を着ていて、ベンチに腰かけていた。

「呼び出して悪いな」

謝りながら距離を置いて座る。朝比奈が来たというのに、不機嫌そうな光は何も反応を示さない。

少し離れたところに設置された滑り台を睨みつける姿は、行き場を失くした怒りを理不尽に発散しているように見えた。やはり、様子がおかしい、と朝比奈は確信を得た。

「なあ、最近はいつもの増して不機嫌だが、どうした？」

原因は大体想像できたが、あえて自らの口からは言わない。

「光も困っているぞ。兄妹がその調子だと、俺まで不安になるだろう」

それでも反応を示さない光。明日に試合を控えていることもあつて神経質になつている朝比奈は、普段の彼ならば絶対にしないことだが、自ら相手の正面でしゃがんだ。因縁をつけているかのように顔を覗きこみ、強い口調で問いただす。

「いい加減にしる。黙っているだけじゃ分からないだろう」

男性の平均身長を軽く超える大柄な朝比奈、そして小柄な光。第三者が見れば、ここが夜の公園だということもあつて通報されてもおかしくない構図だ。

普通の女子高生ならば少しは恐怖を感じるところだが、それでも光は不機嫌ながらも余裕だけは維持していた。

「別に分かる必要なんてないんじゃない？」

「どういうことだ」

挑発するかのような光の物言い。先ほどまでは鋭かった目つきだ

が、今は朝比奈を小馬鹿にしている。それは彼女が、彼女の兄を見る際の目だった。

「私がどうして不機嫌になったか、その理由が分かったとしても何もできないでしょ。無駄なの、分かる？ 分かったら、さっさと帰って寝たらどう？ まあ、お前がどれだけ体調を万全にしたところで、明日の試合は絶対に負けるけどね」

「適当なことを言うな。勝負はまだ終わっていない。それに、俺たちは今日まで練習を重ねてきた。体育科の生徒がどれだけ優秀でも、そう簡単に負けないさ」

これまでの努力を全否定する暴言に、朝比奈はさらに強い口調で反論する。自身の無さを口にする程度ならば許せるが、人の努力や可能性を否定する行為は、朝比奈にとって許せないものだったからだ。その反応が気に食わなかったのだろうか、再び光の目つきが鋭くなる。

「それって、精神論？ 冗談でしょ？」

あざ笑うかのような口調。まるで子どもの夢を壊す大人のような顔だ。

「世の中は、努力とか可能性なんてどうでもいいのよ。だってそうでしょ？ 中学時代に札付きの不良だった男が、今では芸術科でも一目置かれる生徒で、生徒会書記だよ？ 八神とか見ると、馬鹿馬鹿しくならない？ お前だって、努力すれば夢は叶うなんて幻想だって気付いてるでしょ？ 結局は、無意味なんだよ、無意味」

微塵の疑いも持たない断言。そこにカビの生えたような切り替えしなど通用しない。朝比奈は諦めて腰を上げた。

もう何も言うまい、と。

「夜に悪かったな。お前がそう思うなら、いつまでもそうしていてくれ」

ここまで捻くれた無愛想女に構う暇など、例え親友の妹であろうと無い。世の中を拗ねている人間を助けるようなお人よしは、それこそ漫画の中だけにしか存在しない。現実では、そんな人間は誰か

らも相手にされず、最後には独りでこの世から消えるだけだ。

そう考えれば、この世の中　現実には冷たい。ドラマの主人公のように、単独で大勢の敵を倒したり、複数の女性から好意を寄せられたり、異世界など行きたくはない。だが、見返りを求めずに身近な人を助けるような人間になりたいと思っただことは、朝比奈の人生において数えきれないほどあった。

この現実が仮に虚構だったとして、その作者は誰を主人公にするのだろうか。

青島？　小鳥遊^{たかなし}？　千石？　南波？

主人公などいるべきでない、いつもこの答えに辿りつく。誰もが大きさの違いこそあるが歯車であり、その時々が必要に応じて噛み合いながら生きているのだ。今回の光^{ひかり}との衝突も、よくある歯車同士の錆びつきだろう。

今すぐこの場から立ち去りたい朝比奈は早々に踵を返したが、その直後に声をかけられた。

「でもさ、私はお前みたいに自分より成功している人間に媚びへつらうほど情けなくないから」

情けないのはどっちだ、と朝比奈は無性に腹が立った。怒鳴ろうとする自分を押さえて、振り返らずに立ち止まる。

「小鳥遊に一泡吹かせてあげるよ、明日」

「何をするつもりだ。まさか、暴力を」

「馬鹿じゃないの。私があいつに挑んでも勝てるわけないでしょ」

小鳥遊の背格好は、大柄な朝比奈とほとんど変わらない。制服が似合っていることもあって、普段は余計に大きく見えるほどだ。

「頭を使うのよ、頭を」

そう言っただけ^{ひかり}は自らの頭を軽く叩いた。朝比奈は何も返事をせず、そのまま公園を出た。

その後ろ姿を見て、不機嫌な光^{ひかり}は小さく舌打ちした。

準備は恐らく完璧だ。

「後は本人次第ですね」

誰もいない深夜の校舎。施錠されているはずの校内に、懐中電灯を持った男がいる。生徒会渉外を務める尾崎だ。

こうして校舎に忍び込むのは初めてではなかったが、夜の南校舎は初めて足を踏み入れる。いつもは西校舎を徘徊することが多いからだ。

通いなれた校舎でも、時間帯によって姿を変える。それは昼と夜の違いによって変わるのではなく、校舎自体が周囲に合わせているのだ、と尾崎は考えている。

人間を始めとする動物がそうであるように、本来なら心を持たないはずの校舎も姿を変えるのだ。

こんなことを誰かに言えば笑われるに違いないが、それでも尾崎はそう考えている。

「夜の南校舎は怖いですね」

隣に誰もいないが、その口ぶりはまるで話しかけるようだ。別に幽霊が見えているわけではない。少なくとも三階には幽霊はいない。ゆつくりと階段を上り、三年生の教室がある四階に辿りつく。しばらく歩いて、水瀬が担任を務めるD組の前で立ち止まる。ここには青島の席もある。

律儀に、おじゃまします、と言いながら入室して、青島の席を探す。出席番号によって並べられているので、すぐに発見できた。廊下側の列の一番前だ。

机の中こそは綺麗に持ち帰られているが、横には大きい紙袋がかかっている。覗き込むと体操服だった。

「青島さんの体操服ですか　ここからでもいい匂いがしますね」
デオドラントスプレーの匂いとは違う、青島自身の甘い香りと、彼女の汗の匂い。服ですらこの匂いなのだから、本人と抱き合えばそれこそ理性が崩壊しかねないだろう。

「体操服だけでも男を興奮させる女性を抱くことができる男性は幸福でしょうね。うらやましいですよ　及川さん」

軽口を叩きながら、青島の机に手紙を入れる。彼女は登校可能ならば絶対に教室を訪れるので、見落とすことはないだろう。

体操服の匂いを楽しむのは遠慮して、すぐに教室を出る。何かから逃げるように階段を降りて、こんどは二年A組の教室に入る。目的は白石の席だ。

「白石さんも無精ですね」

探し出した机は、とても優等生クラスのA組にはそぐわないものだった。教科書で満杯の机は、その上にまで荷物がある。もちろん体操服も置きっぱなしだ。

少しだけ顔を近づけてみる。

「……やはり、白石さんの匂が一番興奮しますね」

冷静に変態的な行為をした尾崎だが、あまりにも堂々とした動作に、これでは仮に誰かが見ていたとしても声をかけにくいだろう。しばらく匂いを堪能して、それから先ほどと同じように手紙を取り出す。今度は机の上に置いて教室を出た。

「これで準備は万全ですね」

先に二年生の教室に行けばよかった、と要領の悪さを反省しながら、尾崎は南校舎を出た。堂々と生徒昇降口から。

そして、屋上を見上げる。真新しいフェンスが見えるだけで、それ以上の様子を伺い知ることはいできない。

「文化祭までには何とかしたいですね」

自身に言い聞かせるかのように呟き、進学校のくせに防犯カメラすらも設置していない冥栄高校を後にした。

第十一話

すでに夏休みだということにも関わらず、冥栄高校の野球グラウンドの観客席は生徒で満員になっている。その整理に追われる校風委員を見ながら、この試合の主審を務めることになっている選挙管理委員会委員長の白石は自身の頬を軽く叩いた。

隣に立つ灰乃に言う。

「どいつもこいつも暇なのか。学科も学年も関係なく来てるし」

「千人以上はいますね。同じ学校の生徒でも、すべての学科が揃うなんて入学式とか、卒業式だけですな」

三塁審を務める灰乃は、白石と同様に白と黒のストライプ使用であるTシャツを着用している。下は黒の長ズボンで、どちらも生徒会から至急された代物だ。最初こそは、ダサイとして敬遠していた白石だったが、実際に着てみると存外に様になっていて、誰もが違和感を覚えなかった。

試合開始に先立って、美化委員がグラウンドの整備を行い、広報委員が交代で本日の日程を放送している。

「にしても、ここまで大きな行事になるなんて意外だよな」

「そうですね。校長先生自ら始球式をされるなんて、生徒会の存続が決まる試合とは思えませんね」

この異常な熱気には当然ながら仕掛け人がいる。生徒会広報の九重、そして渉外の尾崎だ。前者が巧みに生徒たちを高揚させ、後者が教職員を童心に返らせるために心血を注いだのだ。

高校生が企画するような学校単位の催し物は、一般的にはたかが知れている。だが、冥栄高校の場合は、異常なほど力が入っている。進学校であるものの、むしろこの学校のウリは行事に対する異常な情熱なのだ。文化祭も、今回は中止となった体育祭も異様な盛り上がりを見せるのだ。

「お祭り学校とか、他校では言われてるからな。血が騒ぐんじゃないな

い？」

「こんなことが何度もあつては、どの委員会も疲労で機能しなくなりそうですね」

そうだな、と白石が同意する。背後から、そんな空気になったのは割と最近だぞ、という声が聞こえた。

「どういふことですか、先生？」

振り返ると水瀬が、白石たちと同様の服装で立っていた。彼女は灰乃の問いに答える。

「こんな空気になったのは、私が在校生だったころだぞ。まあ、その当時の生徒会長で、私の一つ先輩だった人が見事に校風を変えたってことだな」

「確かに、けっこう最近ですね」

水瀬の年齢は、今年で二十六歳。すると冥栄高校が現在の校風に様変わりをした岐路は、おおよそ十年前になる。自分たちがすでに生まれていると考えれば、十分に最近のことだろう、と白石は納得した。

「まあ、その先輩が卒業してからはある程度は普通だったわけだが……。青島たちが入学してから、その当時に似た空気が漂い始めたな。お前たちが入学して、そして小鳥遊^{たかなし}たちだ。自分が生徒だった時には分からなかったが、教師として客観的に見ると、お前たちは本当に変な奴らだな」

「その当時の生徒が未だに現役だということが、よっぽど変でしょ、先生」

「まあ、そうだな」

水瀬は苦笑した。留年を繰り返すことで、すでに十年以上も在学してる生徒がいて、それが自分と同じ年なのだから、これはもう笑うしかなかった。

「どこの学校でも一定の周期で、変な生徒が現れるのかな」

「さあ、それはどうでしょう」

曖昧に返事をする灰乃。水瀬は首を捻りながら、さらに続ける。

「ちなみに、その先輩は、小鳥遊とも知り合いらしい。もしかすると、影響されたのかもしれないな」

「どこ情報ですか、それ」

「少し前に尾崎から教えてもらった話だ」

その名前が水瀬の口から出たことで、白石と灰乃の表情は見事に対照的な変化を見せた。前者は面倒臭そうに唇を噛み、後者は両手を合わせてさらに穏やかな表情をした。

「匠さんは、会長さんとも親しいんですね。だから、渉外として指名されたのでしょうか？」

「相当親しいようだな。家族ぐるみ以上に、先祖から関係が深いらしい」

「まあ、そうですか。会長さんは、随分と皆さんを信頼されていると思っただら、そういう裏事情があったのですね」

感心する灰乃。これからは尾崎と関係の深い小鳥遊とも親しくするつもりだろうな、と彼女と長い付き合いである白石は推測した。城を攻略するには、外堀を埋める。そんな言葉が脳裏に浮かんだ。

「おいおい、観客すげえぞ」

更衣室として用意された生徒会特命係の活動室に、すでにユニフォームに着替えた光ひかるが戻ってきた。屋上から眺めたことで観客の人数に度肝を抜かれたようだ。

それに対して、朝比奈は笑って返事をする。

「エースが緊張してどうするんだ。それで完投できるのか？」

「うるせえよ。だったら、お前も見てこい。絶対に驚くぜ」

クラブをいじりながら、落ち着かない様子を見せる光ひかる。そんな彼の肩を千石が軽く叩く。

「まあ、誰でも人に見られると緊張はするさ。一回と二回までは身体を慣らすような気持ちで投げて、それから気合を入れれば十分じ

やないか。少しずつだ、何事も」

爽やかな笑顔と嫌味の無い口調。千石らしさ全開の言葉に、ひかる光だけでなく朝比奈も気分が良くなった。

「お前は、本当に良い男だな。憧れるぜ」

「何だよ、いきなり。冗談はよせよ」

朝比奈の褒め言葉も、まったく自分に驕っていないのだろうか、千石は軽く受け流した。どこまでも爽やかな彼に、傍で見ている八神も口を挟んだ。

「女からも人気がありそうだな、お前は」

「八神さんまで、何ですか藪から棒に。彼女いない歴が年齢ですよ、自分は。異性からなら、尾崎さんのほうが好かれそうでしょう」

照れくさそうに千石は、矛先を上手に尾崎へ向けた。それもそうだな、と八神は口元を緩めた。

「灰乃とお前のことは西校舎まで噂が広まっているからな」

少し嫌味な言葉を尾崎へ投げかける。初めて耳にする噂に、朝比奈が首を傾げた。

「それは有名なのか、ひかる光？」

「はあ？ 知らねえのかよ、お前。恋愛の噂は青春の華だろうが」
「いや、そう言われても困るな」

それはどういう理論だ、と朝比奈は苦笑させられた。そこまで他人の恋愛に対して興味津々になれるほど、彼は無粋ではなかった。恋愛について興味が無さすぎるのも考えものではあるが。

「まあ、とにかく尾崎さんは女から人気があるってことだよ」

面倒臭くなってきた光は話題を早々に切り上げた。印象を確定された尾崎だが、何も言わずに頷いた。

「そこは否定するところだろう、尾崎」

八神がからかう。尾崎は口元を緩めて、少し嬉しそうに返事をした。

「いいですよ、女性は。最高です」

「碎け散れ、リア充」

野次馬根性むき出しの光は普段よりもしつかりとした発音で、からかうというよりも嫉妬するかのような言葉を口にした。

すっかり緊張がほぐれたところで、小鳥遊が黒河を伴って戻ってきた。

「着替えは済んだようだな」

そう言った小鳥遊も含めて、生徒会チームは全員がお揃いのユニフォームを着ている。一般的な野球部のユニフォームをベースとして、背中には背番号と個人の名前がローマ字で刺繍されている。胸には見慣れないが、それでも十分にスタイリッシュなマークがあり、半袖で季節感もある。今日の朝に小鳥遊が全員に配布したのだ。

女性陣を除いた全員を自らの周囲に集め、小鳥遊は口を開く。

「これから約四十分後に試合が始まる。当初は、生徒会と体育科の争いが発端であったが、最終的には体育祭に代わる学校行事として全校生徒に認知されることとなった。俺としては現行の生徒会の維持するために是非とも勝ちたいが、それ以上に集まった生徒たちに満足してもらいたいという思いが強い」

意外な言葉に朝比奈は戸惑った。小鳥遊自身も今回の試合を単に楽しんでいそうな様子だったが、それでも生徒会のことを第一に考えているだろうと思っていたからだ。生徒にも配慮していたのだと気づき、朝比奈の小鳥遊に対する印象が少し変化した。光も同様に、茶化すように口笛を吹いた。

「それと、恐らく気になっっていることだろうが。最後の一人については最後まで伏せる。試合が始まるまでは誰にも教えん。よって、今ここで打順を発表することはしない」

それについては誰も異論を唱えなかった。ここまでできたのだからもう小鳥遊にすべてを委ねようと誰もが同意見だったからだ。

「では、青島キャプテンと銀河が揃い次第、グラウンドへ向かう。生徒たちの前で公式練習をしなければいけないからな」

それだけ言っただけその場はお開きとなった。八神は椅子に腰かけ、千石は邪魔にならないよう注意して床に寝そべった。小鳥遊は黒河

とプロ野球について細々と話し出した。

「ちょっと下の様子を見てくる」

「おお、行ってこい。マジで、驚くぜ」

特命係活動室から出る朝比奈を、グラブを叩きながら光が見送った。その後を尾崎が追う。

「本当にすごい数ですね、尾崎さん。校風委員会だけで整理できま
すかね」

「大丈夫でしょう。委員長がしっかりしていますから」

まったく不安な表情を見せない尾崎。朝比奈の隣に立って下を除
き、しばらくしてから声を出した。

「あつ、白石さんですよ。朝比奈くん」

尾崎が指さす先は、グラウンドのホームベースだった。白黒のス
トライプTシャツを着た女性が立っている。

「カチューシヤの人ですか？」

確認の意味を込めて聞くと、そうです、と尾崎は答えた。

「いい人ですよ、白石さんは」

「仲が良かったですか？」

「いえ、そこまで仲良くありませんけど。むしろ、向こうは自分を
嫌っているかもしれません。普段の態度からして」

寂しそうな表情だった。いつもはそんな顔をしない尾崎だけに、
朝比奈は不安になる。

「好き嫌いは人それぞれですから、簡単にはいきませんよ。それに、
本当は仲良くしたいと思っているかもしれませんよ、その白石さん
も」

「白石さんがツンデレなんてことはないと思いますけどねえ。まあ、
ありがとうございます、朝比奈くん」

慰められたことに感謝しつつも、それでも尾崎の表情は冴えない。
野球帽を首ばかり捻っている。

第十二話

「それでは、これより公式練習を開始します。体育科の代表選手は、グラウンドへどうぞ」

生徒会広報であり、この野球大会における実況を担当する九重がマイクで呼びかける。美化委員会によって丁寧に整備されたグラウンドに、各部の精鋭が姿を現す。夏季休暇にも関わらず集まった生徒たちが歓声を上げる。

体育科代表の選手たちの動きは機敏だった。キャプテンを務める体育委員会委員長の五箇山が行うノックを華麗に捌いている。金属バットが快音を響かせるたびに、特に体育科の生徒が歓喜の声を上げる。

この体育会系ならではの雰囲気、自軍のベンチで眺めていた生徒会代表の選手一同は全員が硬い表情をしていた。

「さすがは体育会系。いい動きだ」

一番前で凝視していた八神が最後尾に下がった。そこでパイプ椅子に腰かけていた小鳥遊たかなしに一声かける。

「最後の一人はどうした？」

「直前までは明かせません。これも作戦です」

目を閉じたまま、そばにあった打順表に手を置く。これは小鳥遊自らが記入したもので、マネージャー的役割を果たしている四日市ですら一度も目にしたことがなかった。彼以外では、この試合の主審を務める白石だけが知っている。

そして、この日のために暗躍した尾崎だけが知っている。

「尾崎さん、少しよろしいでしょうか？」

「おや、どうしました、小鳥遊くん」

周囲に悟られないように、耳元で言う。最後の選手は本当に大丈夫なのか、と。

「問題ありません。試合開始の挨拶時に登場させて、体育科の動揺

を誘う計画ですから」

やはりそうか、と小鳥遊は頷いた。

「小鳥遊くんは何も心配する必要はありません。今日だけは自分のことを信じて、采配をしてください」

小鳥遊は黙って頷いた。

生徒会代表の公式練習は存外盛り上がりには欠けた。目立った失敗をすることもなかったが、先に体育科の代表が華麗な技術を披露していたために見劣りしたのだ。だが、それでも生徒を沸かす要因は存在した。一人だけ華麗な守備を見せる三塁手の千石と、まだ姿を現さない最後の選手のことだ。

主審の白石が両チームを並ばせる前に、始球式が校長先生の手で行われた。捕手は朝比奈が務めた。生徒会側が後攻だと事前に決められていたからだ。

そして、ついに試合開始となる。

「両チーム、向かい合って礼！」

白石の指示に従い、両チームが互いに深々と礼を交わす。小鳥遊のコネで用意された新品のユニフォームを身に着けた生徒会代表と、すでに廃部となった野球部の着古したユニフォームを纏った体育科代表が睨み合う。

すると一人の選手が不満そうな声を出す。

「おい、生徒会チームは九人揃っていないじゃないか。これって、俺たちの不戦勝になるんじゃないか？」

難癖をつけたのは、五箇山と並ぶ陸上のエース利根川だった。去年、槍投げで全国八位に入賞したほどの実力者だ。この試合では投手を務める。

その言葉に生徒会チームの選手は動揺する。視線は小鳥遊に集中して、観客席の生徒たちからも不満の声が聞こえた。会場の統制を担当する校風委員にも緊張が走った。

会場の視線を一度に受けて、小鳥遊はため息をつく。

「まさか、人数不足の状態ですら試合に臨もうとするほど馬鹿じゃない。

俺は生徒会長だぞ」

そう宣言して、白石が他の審判と連絡を取り合う際に利用する無線を借り、それを媒体として会場全体に聞こえる声で最後の選手の名前を叫んだ。

「生徒会チームの中堅手 体育科一年A組、黒河亜紀！」

あれだけ騒がしかった会場が静まり返る。特に静かになった体育科生徒の観客席から、学校指定のジャージを着た女が平然とした様子でグラウンドに近づいてきた。途中で脱ぎ捨てた上着の下から、生徒会チームのユニフォームが姿を現した。

最後に下も脱ぎ捨てて、完全に生徒会チームと同じ格好になった亜紀は、先輩である五箇山たちに一言。

「すみません、今日は敵同士ということだ」

手刀を斬って断る亜紀。それまで静かだった体育科の観客席から罵声が飛ぶ。

「おい、これはどういうことだ、黒河！ これは裏切りだぞ！」

同じ陸上部の先輩である利根川が飛びかからんばかりの勢いで抗議する。喧嘩腰の行為に、八神が一步前になる。観客席では学科を問わずに罵声が飛び交い、一触即発の雰囲気漂う。

その状況を見て、尾崎は白石に軽く手を振った。振られた白石は気持ち悪そうに舌打ちしたが、どうして手を振られたかについてはおおよそ理解できていた。この場を治められるのは、主審である白石しかないということだ。

小鳥遊から無線を取り返し、うるさいよ、馬鹿、と容赦なく暴言を吐いた。

「なんか勝手に盛り上がってるけどさ、黒河亜紀が出場することは事前から決まってたことだから。ただ単に登場が違っただけで、別にそれは騒ぐほどのことでもないでしょ。体育会系とか偉そうにしてるくせに、その程度のことまでギャーギャー騒ぐなよ。それとも、あんたたちは試合とかで気に入らないことがあると、今みたいに暴れるわけ？」

はばかりることのない暴言。体育科の生徒はこれには何も言い返すことができず、徐々に混乱は治まった。

「はいはい、利根川さんもいつまでも大人気ないこと言ってないで黙れ。試合の進行に支障きたすから」

上級生である利根川すらも適当にあしらい、再び主導権を握る。

一連の白石の動きを見た尾崎は、再び手を振った。白石はすぐに視線を逸らした。

「申し訳ありませんね、五箇山さん。これも作戦ですから」

最後に一言、小鳥遊は謝罪の言葉を口にする。

「本当に切れ者だな、この野郎。お前が引きずりおろされたことも合点がいったぜ」

五箇山の言葉は小鳥遊に向けられたものではなかった。青島に対するものだった。彼女は何も言わずに、意味深な笑みを見せただけだった。

白石が咳払いをする。

「さてと、じゃあ仕切り直していきますか。両者それぞれ準備を

」

今度こそ配置につくよう指示を出そうとした時だった。一人の選手が声を張り上げた。

「最期に私から、いいですか？」

光ひかりだった。白石の無線を奪い、先ほどの二人と同じように何かを発言する。

「生徒会チームは揃ったけど、一人抜ければ不戦敗だよね」

この言葉に朝比奈は戦慄した。昨夜の光ひかりが言っていた、頭を使う、とこのことだったのだ。

「だから、私、生徒チームを抜けます。じゃ、これで」

ゴミ箱にゴミを捨てるかのようになり、まったく抵抗のない宣言だった。ここで彼女が抜ければ、生徒会チームは八人となり、試合が成立しなくなる。つまり、不戦敗となる。

朝比奈は怒り心頭に発した。相手が女であることなど関係なく、

この銀河光ぎんがひかりという人間を殴り飛ばしたい衝動に駆られた。

だが、それ以上の憤怒を抱く者がいた。

「ちよつとまで、このクソ女あ！ こんな子ども染みた真似さらしてんじゃねえぞお！」

兄の光ひかりだった。その場から去ろうとする妹に飛びかかるうとした彼を、直前で千石と八神が背後から羽交い絞めにした。

「手え、避けるお！ あいつ、ぶち殺す！」

抑えられながらも妹に憎悪の感情を向ける光ひかり。その姿を一瞥して、光は愉快そうに口元を緩めた。

「じゃあ殺してみればあ？ そんな度胸ない癖に何言ってるの？」

この言葉に、さらに《ひかる》は激しく暴れる。敵であるはずの体育科チームの選手らも不愉快そうに彼女を見た。それでも光ひかりは何一つ悪びれる素振りも見せず、そのから立ち去ろうとした。

「それで俺に勝ったつもりとは、お前は底抜けの間抜け女だな」

勝ち誇る光ひかりの足を止めたのは、小鳥遊発した一言だった。

「はあ？ それって負け惜しみ？ 気持ち悪いんですけどあ」

自らの勝ちを信じて疑わない光ひかりは余裕の表情で返事をした。その表情を見て、小鳥遊はため息をつく。哀れだな、と。

「その節穴に等しい目で、これをよく見てみる」

バインダーに挟まれていた打順表を放り投げる。それがどうした、と思った光ひかりだったが、最後にもう一度馬鹿にしてやるうと考え直して拾い上げた。

九番目の打者を見た瞬間、彼女は絶句した。

「きゅ、九番打者が、た、たか、小鳥遊！ な、何で、どうしてっ！」

そう、今日まで小鳥遊が一部の人間以外に明かさなかった打順表には、銀河光ぎんがひかりの名前などどこにも無かったのだ。代わりに、監督である小鳥遊の名前がそこにあつた。

「選手兼監督だ。お前など、最初から頭数に入ってたということだ」

バインダーが再び地に落ちた。それに少し遅れて、まるで糸が切れたように光が崩れ落ちた。彼女が必死になって生徒会チームを出し抜こうとして考えた策は、完全に破綻した。それも全校生徒の前での醜態だった。会場から申し訳なさそうな笑いと、単純に彼女を嘲笑するだけの笑いが漏れる。

無線を取り返して、白石は校風委員に呼びかける。

「校風委員の誰が、この人どこかに連れて行って。これ以上邪魔されたら敵わないから」

その要求通りに、女の風紀委員が二人係で光を連行した。その際の彼女は非常に大人しく、先ほどの失敗ですべてを失ったようだった。

「なあ、もう離れてくれよ……」

妹の姿が視界から消えたことで落ち着きを取り戻した光が八神と千石に頼んだ。二人はすぐに手を放した。

「光、お前……」

「うるせえ、黙ってる！」

声をかけようとした朝比奈だが、これまでにないほど威圧感のある光の一言で沈黙させられた。

「あのクソ女。絶対に勝つてやるからな……」

すでに会場から消えた妹に、兄はそう言った。

第十三話

妹の暴拳によって逆に奮起した兄は、体育科の精鋭を相手に気迫の投球を見せた。変化球こそは投げられないものの、直球のみでスリーアウトを取ることができた。

一回表を終えて、生徒会チームはすでに五点を先制された。

「……まあ、いきなりの逆境だがこれから徐々に点差を縮めるとしよう」

前向きな台詞を口にした小鳥遊たかなしだが、その表情は冴えない。ノーフレームの眼鏡を外して、今はコンタクトをしている目は光ひかるに向けてられている。

「まさか、ここまで大炎上するとはな……」

思わず本音を口にする。隣にいた千石が誤魔化すように引きつった笑みを浮かべるが、それに倣うものはいなかった。

背後で金属バットが地面にぶつかる音がした。すでに打席に立つ準備を済ませた青島がいた。

「過ぎたことを言っても仕方がないだろう。安心しろ、私がいきなりの出塁でチャンスを作り出してやるぞ」

いつもの高笑いを響かせ、堂々とした足取りで打席に向かう。そして見事に三振して真顔のまま帰ってきた。

「ははは、簡単には打てないものだな」

「全球振り遅れとか、もはや清々ひかるしいつすよ、青島さん……」

先ほど大炎上したばかりの光ひかるが慰めとも貶しとも取れない言葉をかける。その背後を、二番打者の黒河総一が無言で通り過ぎる。

「利根川の球速は相当なものだぞ、総一君。グリップは短く持つことを心掛ける」

青島が助言を送ったが、総一は返事をせずに打席に向かって行った。

「確か、あいつは経験者だったな」

「ええ、中学時代に同じ野球部に所属していました」

「技術的には上手かったのか？」

八神からの問いに、小鳥遊は眉を動かす。一瞬だけ下を見て、すぐに返事をした。

「お世辞にも上手くはありませんでしたね。三年生になっても補欠で、俺よりも劣っていたことは間違いないでしょう。守備こそは人並みにこなせても、打撃になると話になりません」

その言葉通り、総一もまた三球三振に倒れた。戻ってきた彼に、妹の亜紀が声をかける。

「グリップを短く持って、青島さんが言ってたじゃん。どうしてやらなかったの？」

「……短く持つても当たらないからだ。あの利根川という人の球速は、遅くても120？、最高時速は130？を越えている。それに変化球も、俺が見た限りではフォークとスライダーがある。当てるだけでも一苦労だ」

今しばらくは相手の配給パターンを調べるべきだ、と総一は断言した。それに関しては監督を務める小鳥遊も同様だったようで、まずは急速に慣れる、という作戦でまとまった。

三番打者の朝比奈はその指示通りに打席に立ち、利根川の速球を体感した。光と比較すれば遙かに早い球だった。それでも慣れれば打てないこともない、と確信に近い感覚があった。

そして二回表、体育科の攻撃は一番打者の五箇山から始まる。先ほどの回で九番打者まで打順が回ったので、これが二回目の打席となる。

「お願いします」

わざわざヘルメットを外して坊主頭を下げた五箇山の姿は、すぐそばにいる捕手の朝比奈には実に清々しい印象を与えた。生徒会に反旗を翻すような男なので、今日初めて顔を合わせるまでは荒々しい人物を想像していた。だが、実際の五箇山はスポーツマンの鏡とも言える男だった。百八十五センチの長身には無駄な肉はなく、

日焼けした肌が嬉しい。

先ほどの打席では平凡な当たりながらも、その足で一塁に到達した五箇山に対して投手の光は神経質に成らざるを得なかった。

「ボール、フォアボール！」

主審の白石が宣言する。五箇山は少し物足りなさそうな表情で一塁に向った。二番打者の帆足華が準備を整える間、朝比奈はマウンドで光と配球について話す。

「どうする、次は帆足先輩だぞ」

「ああ、分かっている。今度こそは打たれないさ」

すでに先ほどの回、帆足には単打を許していた。相手が女であることを理由に舐めていた、と光は自分の愚かさを悔やんだ。青島曰く、帆足は陸上部の副部長で、走り幅跳びにおいて全国クラスの選手なのだ。

だが、朝比奈の気がかりは打席に立つ帆足だけではなかった。

「一塁にいる五箇山先輩にも注意しろよ。あの人なら、盗塁なんて朝飯前だろうからな」

「ああ、けん制しながら様子を見るさ」

定位置に戻った朝比奈だが、不安は一向に解消されなかった。むしろ増すばかりだ。一塁に視線を送ると、すでに五箇山はリードを取っている。一塁手の八神はけん制に備えている。

光が振りかぶる。帆足が構える。放たれた球は、ストライクだった。リードを取っている五箇山だったが、盗塁を試みることはなかった。結局帆足はセカンドゴロ。五箇山も刺されてゲッツーとなった。その際の総一の動きは、小鳥遊が言っていた通りに無難なものだった。

三番打者の大城保一は柔道部の主将であることに恥じない立派な体格ながらも、この回にはセンターフライに倒れた。亜紀は無駄のない動きで捕球を済ませた。

ベンチに戻った朝比奈は安堵して息を吐いた。その様子を見た四日市が水を差し出した。それを飲み干し、隣に座る光の肩を叩く。

「ボールを取られるかと思って心配だったぞ」

「ボールって、お前それは心配いらねえだろ。主審でも、あの白石さんはこの日のために野球のルールを急いで詰め込んだだけだろ。ボールの基準なんて知らないだろ」

それもそうか、と朝比奈は納得した。彼自身も野球のルールは完全には熟知していなかったからだ。しかし、その判断に異を唱える者がいた。

「白石さんなら、恐らくルールブックを丸暗記していますよ」

尾崎だった。近くにいた八神も賛同する。

「だろうな。あいつの頭の回転の速さは相当だ。野球のルールなら一晩で覚えられるさ」

「……あの人って、賢いんですか？」

開会の際の言動を見ていると到底賢そうには見えず、むしろ粗野で馬鹿な印象を朝比奈と光は持っていた。それを尾崎は真つ向から否定する。

「入学以来、白石さんはずっと学年一位を死守していますよ。全国模試でも、常に上位。それも普段から勉強はせずに、教科書や参考書を眺めるだけの怠慢な学習で。あの人は天才に近い頭脳の持ち主ですよ」

「天才って……」

グラウンドに視線を向けると、一塁審を務める竜崎法子りゅうさきのこと白石が何かを話している。その際にも白石は面倒臭そうで、傍から見れば聞き流しているようだ。

「あんな様子ですけど、会話は完全に理解していて、間違うことはありませんよ」

尾崎は感心したように頷く。すでに白石の優秀さを知っている青島も、そうだぞ、と相槌を打った。

二回裏、生徒会チームの攻撃は四番打者千石から始まり、六番打者の光ひかるで終わった。一回裏と同じく三者凡退ではあるが、今回は少しだけ収穫があった。

千石は三振ではなく、ライトフライだったのだ。打球そのものは強い当たりだったのだが、不運にも右翼手の真正面だった。続く八神、光は見事な三振だったがバットはしっかりと振れていた。

さすが千石孝貴だ、と小鳥遊はライトフライでありながら労いの言葉をかけた。まぐれだと謙遜する千石だが、彼の打席によって生徒会チームの士気が上昇したことには確実だった。

これからの逆転を誓い、三回表の守備に向った。

生徒会チームが守備に向う直前、主審の白石が一塁審の竜崎と話していた。そこに二塁審を務める水瀬が歩み寄り、生徒会チームを指さした。

「意外にも団結しているようだな。特命係の三人も、不平を言わずに取り組んでいる。これは面白い試合にありそうだな」

「生徒会顧問がそれでいいんですか？」

「そう言うな、白石。私は確かに顧問だが、あいつらに特別な愛着を抱いているわけじゃない。むしろ真剣勝負にそんな感情を持ち込むのは、審判として失格だろう」

体育会系らしい発言に、法子も白石も同意した。この試合によって現生徒会の存続が左右されることになっているものの、今の両者にはそれが二の次となっている。少なくとも白石には、彼らがこの試合そのものを楽しみ、生徒会に関係なく勝ち負けにこだわっているように見受けられた。

その姿勢が白石は好きだった。彼女からすれば誰が勝つかより、一切の反論の余地なく白黒はつきりとする勝負こそ重要だと思っているからだ。この野球対決はそれに違わない勝負だった。

第十四話

三回表、体育科チームの攻撃。一打席目はサードゴロに倒れた剣道部主将の柴田歩しばたあゆむが四番打者としてバットを構える。

(この人には、内角攻めか……)

朝比奈からのサインを受け、制球力を重視した投球を心掛ける光ひかるその狙い通り、柴田は面白いようにバットを振ってくれた。彼はあえなく三振して打席を降りた。

続く五番打者は、空手部の主将である新谷良行しんたによしゆき。フルカウントからファールが五球続き、甘く入った十一球目をセンターに運ばれた。幸い中堅手の頭上を越えることはなかったのでシングルヒットで済んだ。

六番打者、女子バドミントン部部長の遠山若子とやまわかこに対して、朝比奈は外角へのスローボールを選択した。焦らず投球に耐えられなくなった遠山は明らかにストライクゾーンから外れたボールに手を出した。打球は力なく飛び、三塁手の千石に捕球された。

「素晴らしいぞ、銀河君、それでこそエースだ！」
ギャラクシー

遊撃手の青島が親指を立てて激励する。返す光は軽く手を挙げた。
「七番、ピッチャー利根川」

九重の声が拡張機を経由して会場に響く。利根川は一打席目こそ凡退してるが、投げては完全に生徒会チームを押さええている。ここで一矢報いたい、とバッテリーの二人はお互いに打ち合わせしたわけでもなく同じことを考えていた。

(外角低めか……)

サイン通りのコースに投げると、意外にも利根川はセーフティーバントを行った。すでにツアアウトだったこともあって完全に無警戒だった内野陣はこの奇をてらった策に慌てた。左打者である利根川はそれを活かして全力疾走で一塁に向う。阻止しようとした朝比奈は自ら打球を動いた。それが光と重なってしまった。

二人は正面衝突して、それぞれ背後に倒れた。

「チャンスだ！ 走れ、新谷っ！」

思わぬ進塁の機会を得て、利根川は叫んだ。すでに二塁に到達していた新谷はその指示通りに進塁を試みようとした　だが。

「馬鹿野郎っ！」

体育科チームのベンチから怒声がした。その迫力に走者二人はその場で固まった。声の主は、なんと生徒会チームの敵であるはずの五箇山だった。

「あの二人が怪我を負ったかもしれない状況で、馬鹿みたいに進塁する奴があるかっ！ 正々堂々と戦えないのか、お前たちはっ！ フェアプレイの精神を忘れるなっ！」

走者の二人は居心地が悪そうにそれぞれ帰塁した。それを確認して、小鳥遊たかなしが主審の白石にタイムを要求する。血相を変えた救護係の生徒と養護教諭が、衝突した二人の傷を確認する。

タイムの間、会場では五箇山のフェアプレイ精神を称える声援が学科を問わずに聞こえた。しかし五箇山本人は特に誇る様子もなく平然とベンチで成り行きを見守っている。

診断の結果、二人はお互いに額を腫らしただけで済んだ。もつとも朝比奈が捕球の際にキャッチャーマスクを脱がなければ、確実に生身の光ひかるは退場だった、と養護教諭から伝えられ、一同は冷や汗をかいた。

「悪かったな、醍醐。声かけるの忘れてた、本当に悪かった……」

「いや、お互いさまだ。俺もボールを取ろうと必死になって、お前の存在を忘れていた。許してくれ、光ひかる」

怪我の功名。一度の衝突を経験して、このバッテリーの絆はさらに深まった。それだけでなく、生徒会チームには対戦相手に対する新たな意識が芽生えた。あくまでフェアプレイを貫く五箇山の姿に、一同は敬意を抱いたのだ。

咳払いをした小鳥遊が言う。

「さて、そろそろ再開だ。あと一人、確実に打ち取ることを考える。

これ以上の追加点を許せば、せつかくの良い雰囲気が出た。」「

その意見には誰もが賛成だった。

試合が再開され、元気な姿でピッチャーマウンドに登った光ひかるを会場は大きな拍手で迎えた。不屈の男、という声が体育科から聞こえたことに彼は感動した。

(ここで打たれたらかつこ悪いよな……。頼むぜ、醍醐)

八番打者の森菜もりななこ女子に対する配球は、全球直球のストライクだった。シンプルな作戦だが、今の二人にはこれ以外に選択肢が思い浮かばなかった。実際にそれは有効に機能した。打者の森は陸上部所属の競歩選手で全国クラスの実力者だが、致命的に今日は調子が悪かった。一打席目は守備のエラーという幸運に助けられて三塁打を打ったが、今回はバットにかすりもしない。

(よし、最後はど真ん中だな)

わずか二球で追い込み、最後の一球を投じた。制球力、速度とも完璧な球はそのまま朝比奈のミットに収まると誰もが思った。

しかし、非情にも森のバットはそれを完璧に捉えた。

「セ、センターああ！」

金属バットの快音が響き、打球はセンターの頭上を越えてそのまま全校生徒が応援するスタンドに達しようとした。スリーランホームラン。誰もがそう思った。

ボールが柵を越えようとした瞬間、中堅手の亜紀が跳んだ。走り高跳びの背面跳びだった。ボールの下に、確かに亜紀の身体が追いついた。

そして自由落下。最前列で観戦していた生徒が間一髪で避けたため人間同士の衝突は怒らなかった。だが、亜紀は設置されていたパイク椅子の列に背中から落下してしまった。

動かない亜紀に、会場が静まり返る。守る生徒会はそれぞれの定位置を離れて、全速力で現場に向かう。その中でも総一ひかりの速度は異常だった。グラブを投げ捨て、一心不乱に妹の安否を確認する。

「亜紀、大丈夫か！」

普段は冷静を越えて根暗ともいえる総一が珍しく声を荒げた。左翼手の小鳥遊はその様子に特に驚いた。総一とは幼少よりの付き合いであるが、ここまで彼が動揺するのは久しぶりに見たからだ。

総一が再び亜紀の名前を叫んだ。

「聞こえてるって、総一」

平然とした声。まるで何事もなかったのように軽い身のこなしで立ち上がる亜紀。

「無事ならすぐに立て。いい迷惑だ」

照れ隠しなのか、総一は野球用の眼鏡を外して目頭を押さえた。

亜紀は、すみませんね、と生返事をした。

「無事ですか、亜紀さん。それは良かった」

右翼手である尾崎が元気そうな亜紀を見て安堵する。見ればすでに生徒会チームの全員が定位置を離れて亜紀の周囲に集まっていた。「わあ、何かすいませんね。私のためにこんな遠いところまで来てもらって申し訳ないですね」

やっちゃったなあ、と亜紀はグラブを叩いて反省した。特に迷惑だと思っている人間は一人もいなかったが、その中でも千石はさらに亜紀を気遣う一言を口にした。

「かつこよかったぜ、亜紀。久しぶりにお前のハイジャン見たけど、相変わらずキレが違うな。ホームランは気にするな、お前の責任でも、誰の責任でもない。まだ三回だ、これから取り返せば十分だ」

「は？ ホームラン？ 何言ってるの？」

その亜紀の台詞に、一同は一つの奇跡を思い描いた。小鳥遊が恐る恐る、亜紀のグラブを確認すると。

「……アウト、だな」

グラブにはしっかりとボールが納まっていた。

「あつ、これでスリーアウトですね」

遅れてその場にやって来た一塁審の法子が、ハンドサインで主審の白石に状況を伝えた。白石は少し遅れて、正式にアウトのジャッジを下した。

会場はさらなる熱気に包まれた。亜紀が見せた見事なファインプレイによって、すでに白熱の限界だろうと思われた生徒たちがその限界を超えたのだ。

これには敵であり、先ほど事故に付け入ろうとした利根川すらもその場で拍手を送った。同様に他の体育科の選手もそれに倣った。

そして生徒会チームでは。

「ベンチまで亜紀を胴上げだ！ 監督命令だ！」

小鳥遊がそう指示して、自ら誰よりも早く亜紀の身体を持ち上げた。すると全員が応援団のごとき掛け声を発しながら、百七十センチという女としては大柄な亜紀を胴上げした。

「素晴らしい！ 君こそヒーローだあ！」

青島がこっそりと亜紀の尻を触りながら叫ぶ。

「亜紀さんの『あ』は、アボガドの『あ』です！」

「そして胴上げだあああああ！」

尾崎と光が勢いだけで意味不明なことを叫ぶ。しかし、この白熱した会場でそれを咎める生徒、教師はおらず、むしろ一緒になって騒ぎ立てる勢力が大半だった。

三回表を終えて、すでにこの試合は純粋な学校行事だと認識されつつあった。少なくとも、この試合によって生徒会の存続が決まることなど、この場のだれもがどうでもいいと思っていた。そんなことは二の次、三の次であった。

その様子を眺めていた二塁審の水瀬は、自分の現役時代を思い返して若さの素晴らしさを噛みしめていた。

第十五話

三回裏。亜紀のファインプレイで湧いた生徒会チームだったが、亜紀、尾崎、小鳥遊たかなしと三者連続三振に倒れた。利根川の投げる球は、速球、変化球と共に速く、加えて制球力にも優れている。やはり勢いだけで攻略できる相手ではなかったのだ。

その状況を、生徒会チームで最も憂っていたのは朝比奈だった。このままでは負ける、そんな確信めいた不安が彼にはあった。

ならば打開策を設けなければならぬのだが、肝心の監督である小鳥遊は特に何も言わず守備に就く準備をしている。頼みの綱である千石も小鳥遊に対して意見する様子もない。最上級生である青島は少しぼんやりとしている。

現状打破には、自らが動くしかない、と朝比奈は覚悟を決めた。

「小鳥遊、ちよつといいか？」

「何だ、朝比奈？ 早くマスクを被れ、銀河が待っているぞ」

自分と同様に守備に就く準備をさせようと促す小鳥遊。それに従わず、朝比奈はマスクを置いた。

「守備交代してもいいか？」

「守備交代だと。お前がか？」

「できれば三塁手に代わりたいたいんだけど」

「いや、しかしな……」

返事に洩る小鳥遊。現時点で捕手は朝比奈で、初回こそ打ち込まれてしまったがそれ以降は立派に体育科チームの打者を凡退、三振させてきた実績がある。ここで捕手を交代させるということはそれまでのペースを崩すということだ。

「いいじゃないか、六徳りつとく。俺なら構わないぞ」

三塁手である千石が朝比奈の要求に応じた。当事者が納得しているのに自分が許可しないのは問題だ、と小鳥遊は自分に言い聞かせて、守備交代の許可を出した。

四回表が開始される直前、進行を務める九重がアナウンスをした。「生徒会チームから守備交代のお知らせです。キャッチャー朝比奈と、サード千石のポジションチェンジです」

アナウンスと同時にそれぞれの守備に就く二人。いきなり捕手が変わったことで困惑の表情を浮かべた光以外、特に目立った反応は無かった。

投球練習の前に、千石は自ら光に歩み寄る。

「いきなりで悪いな。まあ、朝比奈の代わりにはならないかもしれないが、全力を尽くすさ。銀河も力を貸してくれ」

「ああ、そりゃあ俺だつて全力で投げるけどさ……」

困惑しながらも立て直すつもりだろうが、そう簡単に精神的な回復はできるものではない。

九番打者の荒山史近は初球を捉え、打球は右翼へ。右翼手尾崎の頭上を越えて二塁打となった。

いきなり得点圏に走者を抱えることとなって、生徒会チーム全体に動揺が走る。とくに光は苛立ちを隠さずにグラブを叩いた。

その様子を見かねた朝比奈がタイムを宣言してマウンドに登る。

「おい、どうした。キャッチャーが代わったくらいで動揺してどうする」

「事前に言つてから代われ。いきなり代わられたら、俺じゃなくても動揺するだろ」

荒れる光。その彼の耳元で、朝比奈は誰にも聞こえないように告げる。

「心配するな、俺が何とかする」

「どうすんだよ」

いい加減なこと言うなよ、と間接的に悪態をつく。朝比奈は深く息を吸い、グラブで顔面を覆った。

「気は進まないが、中学時代の俺に戻る」

適当に聞き流すつもりだった光は自分の耳を疑った。冗談だろう、と信じられずに思わず間抜けな顔になってしまう。それでも朝比奈

は自ら言ったことを撤回しようとはしない。それ以上は言わずに三塁に戻ってしまった。

中学時代の朝比奈　　当時を思い出しながら投球を続ける光^{ひかる}。余計なことを考えながらであったが、それでも幸運なことに一番打者五箇山から三振を奪うことができた。

三振ではあったものの明らかに様子がおかしい光^{ひかる}に、千石は声をかける。

「どうした、朝比奈と話してから変だぞ」

「……なあ、千石」

手招きする光^{ひかる}。要領を得ない行動に首を傾げた千石だったが、一先ずマウンドに向かった。

「醍醐が何かやらかすかもしねえけど、まあ、黙ってやらせてやってくれよ」

「どつという意味だ？」

「後で説明するよ、後で……」

自分から呼んだにも関わらず、思わせぶりな態度を取る光^{ひかる}。ますます意味が分からなくなり千石は呆れながらホームベースに戻った。二番打者の帆足が打席に立つ。そしてバントの構えを見せる。三塁まで走者進めるつもりだろう、と千石は判断した。

（送りバントか……。ノーアウトなら怖いけど、これなら大丈夫か）
アウトカウントが一つあるだけでも投手からすれば安心できる。
光^{ひかる}は一球目を投げる。外角高めのストライク。

見逃した帆足は一度バットを振り、もう一度バントの構えを見せた。

（内角、狙ってみるか）

帆足の身体に当たりそうになるほど深いところを抉った球は、当然ながらボール。危険を感じた帆足は露骨にマウンドの光^{ひかる}を睨んだ。（睨むなよ。こっちだってお前らの投手には苦しめられているんだから。お互い様じゃねえかよ）

体育科の利根川は確かに生徒会チームを苦しめてはいる。だが、

それは単純に打てないだけであつて投げる方には責任は無い。

ぶつぶつ言いながら、今度は外角低めに投げる。帆足は焦ったのだらうか、少し早くバットを出した。だがそれが上手く球を捉えることに成功した。

打球は三塁側に転がった。誰が処理するのだろうかと会場の生徒たちは息を呑んだ。動いたのは朝比奈だった。そのカバーのために青島が三塁に入る。

しかし相手は一枚上手だった。一塁に向つて全力疾走する帆足だけはアウトにすることができたが、荒山が三塁を踏むのは阻止できなかった。

すでに三塁に荒山が到達していることを確認して、朝比奈は何回かグラブの中でボールを触った。

「おい、光^{ひかる}」

わざわざマウンドまで行き、直接ボールを手渡そうとする朝比奈。グラブに納めたまま、同じくグラブを差し出す光^{ひかる}にボールを渡さなかった。

（おいおい、本気で中学時代のアレをやらかすつもりかよ）

グラブにボールを隠したままの朝比奈は平然とした顔で三塁に戻った。彼が企んでいること、それは隠し球だった。

手元にボールが無いことを悟られないように、すぐに投球動作に入ろうとせず千石からのサインにも首を振る光^{ひかる}。隠し球を行うにおいて、ある意味一番辛いのはボールを持っているフリをしなければならぬ投手だ。

朝比奈は少し塁から離れた位置で荒山の動きを凝視していた。彼の手元にボールがあることには右翼手の尾崎を除いて、誰も気がついていなかった。審判すらも同様だった。

リードを取るために、荒山の足がベースから離れる。だが、朝比奈はまだ動かない。

さらに離れる荒山。
動かない朝比奈。

(早くしろよ、醍醐っ！)

心の中で叫ぶ光^{ひかる}。その声が届いたのか、朝比奈は怪我を恐れない果敢なダイビングを敢行した。異変に気がついた荒山だったが、すでに時遅し。彼が帰塁するより早く、その足にボールを持った朝比奈のグラブが触れた。

「アウトっ！」

審判のジャッジが会場に響く。体育科の追加点を入れる絶好の機会は、まさか朝比奈の奇策によって潰された。誰もが予想外で、会場からも複雑そうな歓声が聞こえる。

そんなことはお構いなしに朝比奈は清々しい顔で誰よりも早くベンチに戻った。

「何だよ、あれって……」

「はは、やっぱり驚いただろ……」

呆然とした表情で光^{ひかる}に近づく千石。何でチェンジになってしまったのか、まだ頭が上手く整理できていなかった。

「あいつの使い手なんだよ 裏技の」

「う、裏技って……」

「中学時代のあいつの渾名 『裏技の朝比奈』、『ミスター禁止手』、『セコ比奈』 まあ、そういうことだ」

「いや、そういうことって……」

「高校に入ってからには隠していたけど、あれがあいつの本性だよ。

反則じゃなきゃ、何でもする。正直、学校行事で隠し球ってねえだろ……」

「無いな……」

危機を救われたにも関わらず、千石に光^{ひかる}にも朝比奈に対して素直に感謝する気持ちは微塵も生まれなかった。

第十六話

生徒会チームのベンチは何ともいえない雰囲気に含まれていた。ピンチを救った朝比奈に対して誰もが感謝すべきところだが、素直にそうすることができず腫物を触るように全員が咳払いなどをして誤魔化している。

別に悪事を働いたわけでもないのに軽蔑される。まるで学校のトイレで大便をした小学生に対するような風当りだった。

四回裏、生徒会チームの攻撃。

打順が一巡して、一番打者の青島が打席に立つ。二球連続のボール球。その直後に投げられたスライダーに彼女は手を出してしまった。打球は力なく上がり、右翼手のグラブに収まった。

そして二番打者の総一。少しバットを短く持って打席に立つ。利根川の一球目は内角低めのストレートだった。これを見逃してストライク。二球目はまた同じコースへのスライダーだった。三球目はストライクゾーンすれすれ外角へのストレート。見逃し三振となった。

三番打者の朝比奈がベンチから打席に向おうとした時、小鳥遊^{たかなし}が呼び止めた。

「セコ　朝比奈。とりあえず今は当てることを考えろ」

簡単な助言よりも、自分対する変な渾名を口走りそうになったことが朝比奈としては記憶に残った。納得できないまま彼は打席に入る。

とりあえず今は当てることを考える　朝比奈は初球から振っていくことを決めた。

利根川はしばらく捕手のサインに首を振り、やっと納得がいったのか投球動作に入った。内角高めのスライダーだった。

朝比奈は怯むことなくバットを振った。快音が響き、ボールは遊撃手の足元に転がった。

これでチェンジだ、と誰もが思った。しかし予想以上にその打球は早く、遊撃手は持て余した。股抜けこそしなかったが、手元での処理が遅れた。その隙に全力疾走した朝比奈は一塁に辿り着くことができた。

ツーアウトからのランナーに会場は湧いた。その歓声を浴びる格好で千石が打席に立つ。

利根川の投げる球は速い。これまで生徒会チームの誰しもが打ち崩すことができなかった。それを朝比奈が、内野安打といえども見事に出塁した。そのことが千石に十分すぎるほどの自信を産み出していた。

朝比奈を進塁させる　千石は静かに闘志を燃やしていた。

初めての被安打にも関わらず利根川は落ち着きを払った投球を続けようとする。スライダーとフォーク、それら変化球を中心とした投球。カウントはフルカウントとなった。

そして利根川は勝負に出る。打者の手元で落ちる落差のあるフォークをど真ん中になげる。ストレートと誤認させて空振りを誘う。それが狙いだった。

だがその狙いは外れることとなった。ストレートと誤認させるためには相応の球速が必要になる。にも拘わらず、利根川の球は彼がこれまで投げたストレートよりも明らかに遅かった。生徒会チームにおいて誰よりも真剣に投球を観察していた千石は一瞬の判断で利根川の狙いを見抜いていたのだ。

少し力を抜いた状態で、流し打ち気味に千石はバットを振った。

打球は右翼手の真正面に落ちた。ツーアウト一、二塁となった。

この絶好のチャンス。五番打者の八神が打席に入る。

「八神くんは当たれば飛びそうですね」

尾崎が真剣な表情で見守る。彼の言葉には全員が同意見だった。

身長190センチ、体重86キログラム。八神は体型だけならば、あの大リーガー松井秀喜選手にも匹敵する。もちろん松井選手のバツティング技術には遠く及ばないが、それでも彼に対する期待は大

きい。

その期待に八神は彼なりに答えようと努力していた。それでも世の中はそう簡単に努力が報われるほど甘くない。利根川のフォークとスライダーでいきなりツーストライクに追い込まれてしまった。

八神は一度打席を離れ、その場で軽く素振りをした。当てることさえできれば、必ず飛距離は出る。漠然とではあるが彼はそう確信していた。だがボールにはかすりもしない。理想と現実の齟齬に彼は焦りを覚えていた。

それは少し苛立ちへと変化しつつあった。バットを握る力は必要以上に強くなり、それが関節の可動域　とりわけ肩の可動域を狭くしていた。

奥歯を噛みしめてホームベースに近い位置で構える。これに利根川は投げにくさを感じた。外角に投げるつもりだったが、内角へ変更せざるを得なかった。

それが思わぬ結果をもたらした。

内角ストライクゾーンすれすれに投げ込まれたボールは、八神の腹筋をかすってミットに収まった。あわや危険球。これに対して八神は抗議の姿勢を示した。

「おい、これは危険球じゃないのかっ！」

主審の白石に食らいつく八神。自分の腹筋を指し、あれが危険球だったと必死に訴える。それでも白石は判定を覆すことはしなかった。

「今の球はストライクだ。きわどいが危険球じゃない」

「それでも注意はしろ！　お前は主審だろ！」

「ならお前に注意する。さっさとベンチに戻って、守備に就く準備をしろ、この馬鹿野郎！」

退場を宣言せんばかりの怒声で言い返す白石には、八神を恐れる気配は無い。マウンドの利根川は冷や汗をかいて気まずそうにしていることを考えれば相当な度胸だ。

八神はバットを振り上げそうになる自分を抑えて、一度小さく深

呼吸してから静かにベンチへ戻った。わずからではあるが会場から、よく耐えた、と賞賛の声が上がった。

チャンスで凡退したことを、八神は開口一番に詫びた。

「謝る必要はありませんよ、八神くん。むしろこれで次の攻撃が自分たちにとって随分と有利になりました」

「どういうことだ？」

先ほど八神が行った抗議。それが投手である利根川を精神的に動揺させた、と尾崎は淡々とした口調で言った。すでに試合は終盤。体力が消耗したこの局面で精神的な動揺は投球に悪影響をもたらすと彼は推測していたのだ。

その推測に小鳥遊も同意する。

「つまり我々が逆転するには、五回裏でいかに立ち回ることができるかにかかっている。それを逃せば、敗北の可能性はより一層に濃厚となる」

五回裏こそが真の最終回となる　全員がそう悟った。

第十七話

事実上の最終回だと小鳥遊^{たかなし}が宣言した五回裏。そこに辿り着くまでには五回表を乗り切らなければならぬ。捕手は再び朝比奈に戻り、千石も三塁手として下の鞆へ収まった。

打席には体育科チームの三番打者大城が入る。先ほどは朝比奈の隠し球によって三塁走者がタッチアウトとなったことで彼自身はアウトになっただけでなかった。

その雪辱を果たすことに燃えていたのだろうか、大城の打球は左翼手の手前に落ちる安打となった。

いきなりノーアウトで走者を背負うこととなり、マウンドの光^{ひかる}は焦った。このまま一回表の悪夢が再来してしまうのではないだろうか、と。

不安な眼差しで、四番打者の柴田を見る。ああ、打たれるに違いない。光^{ひかる}は身体が重くなっていく感覚に襲われた。ここで打たれれば、すべては自分の責任となる。

兄妹そろって生徒会の敗北に貢献　そんな最悪なビジョンが脳裏に浮かぶ。

(銀河兄妹は無能か……)

それは中学時代に言われたことだった。相手はクラスのリーダー各だった男。目立とうとして空回りする兄^{ひかる}。友達すらいない妹^{ひかり}。その兄妹関係を一言で言い表した暴言だった。

それに対して朝比奈はその男に掴みかかろうとした。だが、肝心の銀河兄妹は一言も言い返すことができなかった。それは真実であって、認めるしかないことだったからだ。

今思い返しても、あれ以上に悔しさを覚えたことはない。

(ああ、だせえ、本当にだせえよ)

悔しければ、言い返せるように努力すればいい。ここで勝てば、自分は英雄。派手すぎる苗字に恥じないほど素敵な存在になれる。

静かに投球動作に入る光。その表情はもはや弱者のものではない。「俺に任せろっ！」

その初球をバントされた。即座に朝比奈がマスクを投げた。このバッテリーは二度と同じ失敗は犯さなかった。二塁への進塁を許したが、一塁は余裕の送球でアウトにできた。

続く五番打者の新谷。二球目を打ち損じて、これを遊撃手の青島が捌いた。走者動かず、ツーアウトランナー二塁。

六番打者遠山に対して、もう光は一步も引こうとしなかった。打球を全力で投げ、最後は空振りの三振に仕留めた。

主審の白石がストライクと宣言した瞬間、会場から歓声が起こった。

「人気者だな」

朝比奈が冷やかす。照れくさそうに光は帽子を深くかぶった。今の彼には、一つの思いがあった。

頑張ればいつか周りが評価してくれる。それを妹に伝えたかった。理解してもらいたかった。一緒にその感動を享受したかった。兄妹で歓声を浴びたかった。

五回裏を前に、小鳥遊は全員に一つだけ指示をした。

「これだと思っ球が来たら、迷わずバットを振れ。振らずに後悔するより、振って後悔しろ。たとえ空振りしても胸を張れ」

これまでの彼のイメージからすれば想像もできない台詞だった。

会場全体が醸し出す、異様な空気によって彼もまたいい意味で毒されてるようだった。

誰も小鳥遊の変貌を茶化すことなく、事実上の最終回に挑む。トップバッターとなるのは、先ほど歓声上がるほどの好投を見せた光だった。

「全力で振るぜ。三振しても文句言っなよ？」

軽い調子で言った彼だが、誰も咎めない。それが気を紛らわすために言ったことだと誰も承知していたからだ。

利根川の初球は、外角高めに大きく外れるボールだった。尾崎と

小鳥遊の推測通り、やはり利根川は動揺から本来の投球ができない状態だった。

その一球が、少し硬くなっていた光ひかるの全身を徐々にほぐした。

「うっしやあ！」

全力のスイングがボールにかする。ボールは三塁側へとゆっくりと転がる。微妙な打球を処理する間、一塁を目指して光ひかるは必死に走った。

「セーフ！」

神が憐憫を垂れてくれた。光ひかるはベース上からベンチに手を振った。朝比奈が親指を立てて労った。

七番打者の亜紀が打席に入る。好守を見せた彼女は、ここでいぶし銀の活躍をする。利根川の初球を迷いなく叩き、それを中堅手の目の前に落とした。

ノーアウト一、二塁。これまでで最高ともいえるチャンスを迎えた生徒会。その打席に立つのは、八番打者尾崎。バットを短く持ち、何度もその場で素振りをした。

尾崎は長打を狙っている、と誰もが錯覚した。しかし実際に彼が行ったのは送りバントだった。一塁側に上手く転がし、ワンアウト二、三塁。

この局面で、利根川が実に分かりやすい動作をした。彼は落ち着きなく周囲に視線を泳がせたのだ。その醜態を目にした小鳥遊は、これならば俺でも打てる、と確信した。

今の利根川には彼本来の投球などできない。小鳥遊は先ほどの亜紀と同じく初球を叩いた。奇しくもそのとんだ先も同じだった。

中堅手が全力のバックホームを行う。そんな努力も虚しく、三塁から光ひかるは悠々とホームを踏んだ。生徒会チーム初の得点は、監督である小鳥遊のバットによってもたらされた。

「あいつ、美味しいとこ持っていきやがった！」

ベンチの千石が悔しそうにしながらも拍手を送った。一塁の小鳥遊は、かつて日本のプロ野球で初めてシーズン200本安打を達成

した際のイチロー選手のように両手を掲げて歓声に応えていた。その姿には千石ならずとも、いいところ取りだ、とチームの誰もが苦笑いさせられた。

その中で一人冷静な女がいた。

「さて、私の出番だな」

最も騒いでいそうな青島は恐ろしいほどに冷静だった。その背中を見送った後で、違和感を覚えた千石が朝比奈に尋ねた。

「今日の青島さんは随分と普通だけど、何かあったのか？」

「ああ、最近ちよつと普通なんだよ」

少し考えた二人だったが、野球に集中してりだけだろう、とすぐに楽観的な判断を下した。それが間違いだったと思い知らされるのは、しばらく先のこととなる。

打席に立った青島は冷静に球を見た。今の利根川ならば確実に打てる球を待てばいい、と彼女は初球から叩くようなことはしなかった。手を出したのは四球目。少し外角に逸れた球だった。これを見事に右翼へと飛ばした。

「よっしゃあ！ 次は誰だああ！」

祭りの主役はすでに生徒会チームだった。最もテンションが最高潮に達している光の隣を、これまで良いところがない総一が通り過ぎる。

総一もまた後悔を残さないために全力でバットを振った。だが世の中は非常。彼は乱調の利根川すら打つことができずに三振を喫した。

心底悔しそうにベンチへ戻ってきた総一の肩を、朝比奈が優しく叩いた。

「気にするな、まだ満塁だ。俺がお前の汚名を返上してみせる」

「……頼む」

一塁には青島。二塁には小鳥遊。三塁には亜紀。絶対に返す、と朝比奈は自分に言利かせた。

もう利根川は敵ではなかった。それでも朝比奈は最大限の敬意を

持って打席に立った。バットを少し短く持ち。侍の刀のようにそれを掲げた。

「醍醐お！ セコいけどかっこいいぞお！」

「いよっ！ セコメン！」

「セコ侍、痺れるぜっ！」

ベンチから販されているようにしか聞こえない声援がした。声の主は、光、千石、尾崎の三人だった。

「応援ありがとよ！」

中指でも立てたいところだが、それは控えた。代わりに皮肉な返事をした。

（そのセコっていう考え方を改めさせてやるよ）

初球打ち。朝比奈はそう決めた。そして実際に行動に移した。

「追加点だああ！」

勇ましい掛け声と共にバットを振った。打球は右翼手の頭上を越える、見事な二塁打となった。亜紀と小鳥遊がホームベースを踏んだ。これで得点差は二点となった。

「次は俺の出番だな」

出番を待ちきれなかった千石がバットを持ってベンチを飛び出た。ここで四番らしい働きをしたい、という気持ちが彼の中で非常に強かった。

そして千石は気持ちの強さにとどまらない活躍をした。じっくりと狙いを絞って、右翼へ流し打ちを試してみせたのだ。ツーアウトながらも再び満塁となった。

静かに瞑想していた男が、ゆっくりと打席に向かう。

「最期の打席だろうな」

バットを構えた八神は、そう呟いた。誰に対するものではない。だが独り言ではなかった。生徒会チームの全員に向けた言葉だと彼は考えていた。

投球動作に入る利根川。それが八神にとっては実に緩慢に見えた。緩慢と言っては語弊があるかもしれない。むしろ達人同士の戦いが

一瞬で決まるように、その瞬間が限界まで引き延ばされたような感覚だった。

一球目は外角低めのスライダーでストライク。八神は一度素振りした。

そして二球目。今度はど真ん中へのストレートと思わせて手元で変化するフォークだった。これを八神は当てた。結果はファール。

三球目はわざと外したボール。

勝負を仕掛けてくると思われた四球目。外へ逃げるスライダーを、八神はしぶとく捉えてファールとした。

この四球すべてを、八神はありがたく思っていた。進学校の生徒としては不釣り合いな不良というレッテルを張られた男。そんな自分に対して真剣に挑んでくれる相手がいることが彼は何よりも嬉しく思った。

運命の五球目。利根川は外角低めに直球を投げた。スピードガンこそ無いため誰も知ることはできなかったが、その球は時速140キロを記録していた。

(感謝します、体育科の先輩方)

松井秀喜選手に匹敵する大柄な身体　それがついに本領を發揮した。

「これはいったあああ！」

司会担当の九重の声が、拡声器を通して会場全体に響いた。八神の打球は芸術的な放物線を描いてスタンドに飛び込んだ。

グラウンドスラム　逆転満塁ホームランだった。

「よかったじゃん」

ダイヤモンドをゆっくりと一周してホームベースを踏んだ八神に、主審の白石がぶっきらぼうな口調で言った。さらに何かを言おうとしたが、それは興奮してベンチから飛び出した生徒会チームの選手たちによってかき消された。

その様子をベンチから眺めていた小鳥遊は、少し離れた場所に座る青島に声をかけた。

「青島さんも行けばどうですか？」

返事は無い。催促はせずに、今度は総一に対して同じことを言った。

「……俺は活躍していないからな」

「ふん、それもそうだな」

本来なら気の利いた言葉をかけるべきだろうが、幼少期から傍にいた総一が相手なだけに小鳥遊も素直に行動できなかつた。つい天邪鬼な台詞を口にしてしまった。

胸上げされそうな勢いに揉まれながら、八神は利根川に呼びかけた。

「利根川さん、いい球でした。あれを打てて、俺は光栄ですよ」

「俺は光栄じゃねえよ。よくも打ってくれたな、この野郎」

意気消沈しているかと思われた利根川だが、意外にも冗談を返すほど元気だった。正しくは、元気になっていたのだ。八神の豪快な一発で、彼は完全に目が覚めていた。

そつという意味では、八神のホームランは逆転につながったものと同時に相手の投手を完全復活させてしまったのだ。

「その調子なら、まだ勝負は分かりませんね」

「当たり前だ、この野郎。そう簡単に負けてたまるか、この」

強くクラブを叩く利根川。踵を返して、中堅手の五箇山に向かって叫ぶ。

「おい、楓！俺はまだ投げろぜ！いいだろ！」

突然の復活に面食らった五箇山は帽子を脱いで、その坊主頭を撫でた。やれやれ、と彼は言いながら利根川より大きな声で返事をした。

「好きに投げやがれ！お前から強肩を取ったら何も残らねえから、仕方ないから好きにさせてやるよ！感謝しろよ！」

「うるせえ、足だけ速いお前に言われたくねえ！」

利根川の続投が決まったことで、会場からはそれを喜ぶ声が聞こえた。もはや学科の違いを越えて全校生徒がこの試合を楽しみ、心

を一つにしていた。

約二年前に青島たちが入学してから一つになるうとしていた冥栄高校が、ついに一つとなった。生徒会と体育科の争いが、すでに嘘だったかのように和やかながらも情熱的な雰囲気会場を包んでいた。

そして試合が再開される。完全復活した利根川の最初の相手は、この逆転劇の火付け役となった光ひかるだった。一回で打者が一巡していたのだ。

噛ませ犬の風格を漂ひかるわせる光が打席に立つ。そして見事に三球三振。

あまりの道化っぷりに会場から失笑がした。

第十八話

六回表、体育科チームの攻撃。このまま生徒会チームが試合を逃げ切るかと思われていたが、そう一筋縄でいかないのが体育科の精鋭たちだった。

気温は三十度を超えている。炎天下により生徒会チーム選手の体力は明らかに奪われているのを尻目に、体育科チーム選手は非常にタフだった。普段からの練習量が、この局面において致命的な差となって表れたのだ。

すると光の投球テンポが目に見えて悪くなった。五対七だった得点^{ひかる}が、七番打者の出塁から始まった猛攻撃によってあっという間に同点とされた。

なんとか二番打者を打ち取りスリーアウトとしたが、その裏も生徒会チームに得点する機会は訪れなかった。七番打者の尾崎がセンター前ヒット、続く亜紀は三振、小鳥遊こそは左翼に打ち返したが青島、総一と三振だった。

最終回となる七回を前に、小鳥遊^{たかなし}は全員を集めた。

「正直なところ、俺はもう体がぼろぼろだ。この暑さでよくここまで粘ったものだと思う。お前たちも、実際のところもう限界だろう？」

その問いかけに対して千石が代表して答える。

「まあ……、ちよつと限界近づいてるよな」

「お前がそうなら、後は全員駄目だろうな。情けないことだが、七回表で一点でも取られればそれで赤信号だ。延長となればもう負けだ」

体力勝負。随分と単純なことだが、結局は人生何でも最終的には体力勝負なのだろうか。

「さて、ここで口ばかり動かしていても仕方がない。今できることは精根尽き果てるまで戦うことだけだからな」

最後に一言、これが終わったら一杯やろう、と小鳥遊は呟いた。それが祝杯となるか否かは誰にも分からない。

三番打者の大城が打席に立つ。光はこれまで以上に真剣に投げた。すでに根気だけで投げているに等しい状態だった。フルカウントからの六球目、外角高めに甘く入った球を右翼に運ばれた。処理が遅れて二塁打となった。

いきなり走者を背負う状況。四番打者の柴田が打席に入る。少し蟹股気味に構えた彼は、明らかに長打を狙っていた。それは光にとつて好都合だった。相手が長打狙いとなれば投げる側は逆に配球が組みやすい。

落ち着きを払い、内角に狙いを定める。予想通りに長打狙いだった柴田は面白いほど豪快に空振りをしてくれた。結果、空振り三振。ほっとしたのもつかの間、五番打者の新谷が打席に入る。これを見た小鳥遊は内野手に前進守備を命じた。送りバントへ対抗するためだ。

首を何度か捻り、二回連続で外角高めの直球を投げる。相手が速球に慣れたところで、極端に力を抜いたスローボールを投げる。やや山なりの球に、つい手が出る荒谷。打球は勢いなく一塁に転がった。これでツーアウト。だがその間に走者が三塁へと進塁していた。最後の一人となったところで、マウンドに朝比奈が近づく。

「最期は遠山さんだ。打ち取れるか？」

ここで安打を許せば点につながる。それだけは何としても避けたかった。

「打ち取るつもりはねえよ。俺が狙ってるのは三振だ、ボケ」

「ボケって言うな。偉そうなこと言うなら、確実に三振だぞ、いいな」

へいへい、と光は面倒臭そうに返事をした。

そして六番打者の遠山が打席に立つ。得点圏に走者がいるために、その表情はこれまでで一番真剣だった。対する朝比奈と光もここにすべてを注ぎ込むことを決めていた。

その一球目。高めに浮いた球だった。遠山はそれを打ちそこなつてファール。まともにあたれば間違いないく安打を許していたところだ。

二球目は先ほどの反省を活かして、わざと外してボールとした。ストライクだと誤認しかけたのか、遠山は一瞬バットを振るような動作を見せた。

そして三球目は続けてボールとなった。今度は故意にではなく、自然と制球が乱れたことによるものだった。

額の冷や汗を拭い、朝比奈から返球されたボールを握る。四球目は内角低めの速球。これを遠山は空振りして、カウントツーワン。

これで決めたい五球目。そうはいかないと粘る遠山は食らいついてファールとした。続く六球目、七球目も同様にファール。

八球目　ストライクかボールか非常に微妙なコース。少しの間を置いて、主審の白石は、ボール、と叫んだ。

九球目。ここで光は少々破天荒な投球を行う。これまで普通の立て投げだったのを。この時に限って横投げにした。すると今までは違う球筋となり、打者の手元で球速が落ちる。まるで変化球のような球筋だった。

「ストライク！　バッターアウトっ！」
判定はストライクだった。機転の利いた小技が幸運を引き寄せたのだ。

だがここで喜ぶのは早い、と誰もが自覚していた。ゆっくりとベンチに戻り、誰もが静寂を保った。その中から、三番打者の朝比奈が打席に立つ。

七回裏。ここで一点でも得点できればサヨナラ勝ちとなる。逆に無得点なら延長となる。すでに体力が限界に近い生徒会チームにとってそれは絶対に避けたいことだった。

それだけに打席に立つ朝比奈の表情は自然と引き締まる。

「これで最後にします、利根川さん」

朝比奈の挑発めいた台詞。それに対して利根川は返事をしなかつ

た。彼は投球を返事代わりとした。初球から直球をど真ん中に投げてきたのだ。

グラブに収まるかと思われたその直球を、朝比奈は果敢に打ち返した。それは右翼手の頭上を越えて二塁打となった。会場からの歓声に、彼は軽く会釈して応えた。

その朝比奈に続こうと四番打者の千石が打席に入る。

「千石、任せたぞ」

小鳥遊が激励の言葉をかける。千石は嫌味の無い清々しい笑顔を返した。

「ストライク！」

初球は外に逃げるスライダーだった。思わず手を出してしまう千石。強く振りすぎたことで身体全体がぐらついた。どうにか倒れそうになったのを立て直してバットを再び構える。

二球目は打者の手元で変化するフォーク。先ほどは打ち返すことができた千石だったが、これまでの疲労によって身体は思うように動かなくなっていた。初球と同様に空振りをして、再び倒れそうになった。

このままではいけない、と自分に言い聞かせた千石は気持ちを切り替える。それが不十分だったことが仇となった。利根川は、二球続けて打者の手元で変化するフォークを選択したのだ。予想外のことにあっけなく三振となった。

その雪辱を果たすために、先に満塁本塁打を打った八神が打席へ入る。会場では再び本塁打を期待する声が出た。それには応えられない、と彼は申し訳なく思った。

本塁打が打てないのではない。そもそも八神はここで打つつもりがなかった。この試合の勝利は、自分の次を打つ男の手によってもたらされるべきだと考えていたからだ。

銀河兄が打てば彼が今日のMVP。そうなれば、試合をぶち壊しにしようとした銀河妹への風当たりも少しは弱くなる。この試合でこれだけの生徒が白熱したのだ。終わった後に誰かに悪意が向けら

れるの我慢できなかった。

そのために八神は送りバントを選んだ。彼に対してリベンジしたいと考えていた利根川は拍子抜けした様子だった。勝ち逃げになってしまったな、と八神は少し心が痛んだ。

送りバントは成功して、ツアーアウト三塁となった。

「銀河、お前の出番だ。最高の舞台を用意してやったぞ。ここで一発かまして、妹の目を覚まさせる」

乱暴ながらも温かみのある言葉。光にとっては何よりも心の支えとなった。

打席に光が立つと、再び声がした。三塁にいる朝比奈だった。

「俺はお前以外のバットでホームインするつもりはないからな。いか、俺がホームベースを踏むにはお前の力が必要なんだ。俺はお前以外のバットで返るつもりはないからな！」

友情に溢れた信頼の言葉。これが光の決意を確たるものとした。

「ああ、分かってるよ。皆まで言うな、ボケ！」

照れ隠しにそう叫び、バットを構える。全神経をバットに伝えるだけでは飽き足らず、彼はもはや一体化したいとまで思っていた。

この勝利だけは友人の朝比奈と二人で決めたかった。この状況をおぜん立てしてくれた仲間たちに報いたかった。

「よっしゃあ！ こいやあああ！」

利根川の初球はど真ん中のストレートだった。すべてをこの打席につき込もうとする下級生に対して、彼は上級生としての真摯な態度で挑もうと考えた。初球だけでなく全球をストレートで挑むつもりだった。

威勢のいい掛け声と共に豪快なスイングをする光。しかし無情にもバットは空を切る。

「まだまだあ！」

「おお、次も振ってこい！」

ここが自分たちの一騎打ちであると自覚する二人は好敵手さながらの会話をする。その光景を会場の生徒たちは固唾を吞んで見守っ

ている。

捕手の荒山から利根川へ返球がされる。グラブで受けた利根川はすぐに後ろを向いた。

それがこの試合の勝敗を決した。

「利根川ああ！ 前を見るお！」

突然叫びだす中堅手の五箇山。気でも狂ったのか、と思いつつ利根川は踵を返した。三塁にいたはずの朝比奈が本塁を目指して疾走していた。

「ホームスチールだとお！」

すぐさま本塁へ向かって送球する利根川。しかしすでに時遅し。

「お、おお せ、セーフ！」

まさかの出来事に動揺しながらも主審の白石はそう宣言した。朝比奈はホームベースの上でうつ伏せ状態のまま両手で地面を叩いて歓喜した。その姿は、2004年度オールスタゲームにおいてホームスチールを決めた新庄剛志元・選手と瓜二つだった。

ただ違うのは、あれだけ打者の光ひかるを信じるような台詞を吐きながら自ら勝手に勝負を終わらせてしまったことだった。

あり得ないことに呆然とする光ひかるを尻目に、生徒会チームのベンチからは選手が雪崩のように飛び出してきた。千石が中心となって朝比奈を胴上げして、興奮によって何を言っているか分からない奇声を上げた。

ベンチに残った小鳥遊、総一、青島はその光景を見てそれぞれ違うことを考えていた。

約三時間に及ぶ激闘は、七対八 生徒会チームの勝利に終わった。これで解散かと思われたが、司会を担当していた九重が突然表彰式を行うと言ったのだ。

最初に勝利チームの監督である小鳥遊のインタビューが行われる。「今日は非常に楽しい試合だった。元々この試合は、体育科と生徒会の争いによつて始まった。だが最後にはこうして全校生徒が白熱する最高の試合となった。今日は俺の人生でも記憶に残る日だ。これからも生徒会を応援してくれると幸いだ」

全校生徒の期待に応えることを明言して、最後に一言。

「もちろん勝負は勝負。約束通りに今後の体育委員会は生徒会の勢力となる。悪いようにはしない。生徒会と体育委員会が結束することで、この冥栄高校はより一層盛り上がるからだ。楽しみにしてくれ、仲間たち」

小鳥遊は表彰台を降りる。続いてMVPが発表される。名前を呼ばれた八神は苦笑いしながら壇上上がった。さらに両チームから最後まで力投を見せた投手が登壇する。

「では、これが賞状です」

九重から三人へ直接手渡された賞状は、芸術科の生徒から有志を募つて作成したものだ。試合が盛り上がりを見せた頃に、気を利かせた九重が密かに準備させたのだ。

壇上の三人は全校生徒の拍手を受けて、それに応じるように利き腕を高く上げた。

その三人が降壇したところで、九重が笑いを堪えながら最後の一人を表彰する。

「ええ、それでは最後にMSPの発表です」

聞きなれない単語に会場がどよめく。MSPとは何か。そんな憶測が囁かれた。

「朝比奈醍醐さん。どうぞ、ご登壇ください」

まさか自分が呼ばれるとは思っていなかった朝比奈はしばらくフリーズした。千石から背中を押されてやっと登壇した。

賞状を受け取った後、朝比奈は九重に尋ねた。

「あの、MSPの『S』って何ですか？」

「何だと思つ？」

しばらく朝比奈は考えた。そしてこれまでの自分の行動を振り返って、一つの答えを導き出した。

「ひよっとして、ストライカーの『S』ですか？」

それは主にサッカーで使用される用語だ。それでも多くの得点を挙げる選手を称える呼び名であるので、間違いないと朝比奈は確信した。

ははは、と九重は笑った。

「残念。正解は、セコイの『S』だよ！」

会場は爆笑の渦に包まれた。朝比奈によって最大の見せ場を奪われた光も腹を抱えて笑った。

これから卒業まで、朝比奈はセコイ奴としてからかわれることになった。

第三章 く生徒会の危機く 完

第一話

公立高校である冥栄高校は、夏季休業が九月の初旬で終わり、生徒たちは休みボケした表情で登校を開始した。しばらくそんな調子の学校生活が続いたが、十月の中旬ごろから変化が訪れた。

生徒たちの表情が晴れやかになった理由。それは十一月中旬に行われる学園祭の存在だった。冥栄高校の学園祭は三日間に渡って開催され、この期間だけは三学科が垣根無く触れ合い、青春を謳歌する。学校行事に命を懸けている、とまで揶揄されるだけあってその気合の入れ方は尋常ではない。

それほどまでに全校生徒が心待ちにしている学校祭で、全指揮権を担うのは生徒会ではない。今回ばかりは、文化委員会が主役となる。

委員長の竜崎法子を中心とした準備は、十一月を目前にして最後の仕上げを残すのみとなっていた。

十月三十一日金曜日。

明日から三連休を迎える、十月最後の日。尾崎匠は二人の女性と放課後のひと時を過ごしていた。場所は北校舎四階の一室、選挙管理委員会室である。

尾崎のティーカップの紅茶が減っていることに気がついた灰乃瞳は、静かな動作で注ぎ足した。尾崎は、ありがとうございます、と軽く会釈した。

無駄に密着する（正確には灰乃が一方的に接近しているだけ）二人を目の前にして白石恵はどう反応すればいいかわからず、頬杖をつきながらクッキーを齧った。

「瞳ちゃんさ、これって手作りなんでしょ？」

食べかけのクッキーを指さす白石。それは確かに手作りだった。灰乃は照れくさそうに感想を求めた。

クッキーはどれもバター風味であり、味について問題はなかった。そのことを率直に伝えられると、今度は尾崎に対して感想を求める灰乃。

「自分としては好きな味ですが、大きさに関してはもう少し小さくてもいいかもしれませんね。それと一工夫されてもいいのではないのでしょうか。例えば、チョコチップを加えてみるとか」

「レーズンを入れても美味しいかもしれませんね、匠さん」

「ええ、自分はレーズン、好きですよ」

色好い返事を貰った灰乃は、今度は用意しますね、と声音を躍らせた。

この二人のやり取りを傍で見える機会が多い白石は、時折こう思う。尾崎匠という人間は、何を考えているのだろう、と。

高校生ならば勉学や運動に差があつたとしても、その思考回路は基本的に単純だ。考えて動いているようで、無意識下で感情が大きく行動に影響する。自他ともに認めるほど頭脳明晰な白石からすれば、同級生と会話をするだけでその性格が大よそ想像できる。そして想像は大概外れることがない。

だが尾崎は、白石ですら何を考えているのか分からないほど不思議な人間だった。神秘的という類の雰囲気ではなく、どちらかといえば不気味な雰囲気帯びている。それでも彼は嫌われることなく、むしろ同級生からは一目置かれていた存在だ。

どんな人生を送ればこのようになれるのか、それだけは考えても答えが出なかった。

「ああ、ところで白石さん」

それまで灰乃の話に耳を傾けていた尾崎だったが、急に口を開いた。白石は突発的に警戒を強めた。

どうしたの、と返事をする、と、尾崎は室内の隅を指さした。過去の選挙の記録が納められている棚の側に、将棋盤と駒がセットで置

かれていた。

「ああ、あれのこと？ 文化祭でちょっとした余興をするの」

「余興？」

「目隠し将棋するの。それで生徒会長さんと勝負ってわけ。まあ、目隠しするのは私だけじゃなく」

学園際における主導権はすべて文化委員会に属している。ここでは生徒会も下に就くしかなく、頼まれてさまざまなかをしなければならぬ。生徒会長と選挙管理委員長の将棋対決は、前者の提案で行われることとなったのだ。

それが何故目隠しとなったかという点、事前にお互いの実力を測るために公平なルールで指したのだが、その場において白石が完勝をしてしまったからである。何度やっても結果は変わらず、最終的には白石がハンデとして目隠しをすることとなったのだ。

「目隠しとは、ずいぶんと余裕ですね」

「まあ、ハンデになるかどうかはわからないけどね」

目隠しをするということは、盤上を目視できないということである。情報としては読み上げられる棋譜を頼りにするしかない。常人ならばそもそも将棋が指せる状況ではない。だが白石からすれば脳内で盤上をイメージすることなど造作もないことである。彼女は負ける気などまったくしなかった。

「恵ちゃんは強いんですよ、将棋」

物知り顔で言う灰乃。彼女は白石と同じ中学校の出身で、当時から交友を持っていたので詳しいのだ。このことは尾崎も以前から知っていたことなので特に質問はせず、簡単な相槌を打っただけだった。

白石は紅茶啜り、食べかけのクッキーを腹に収めると立ち上がった。

「ちよつと散歩してくる」

「それでは自分も」

「来るなよ、邪魔だから」

取りつく島も無く断わられた尾崎は大きく肩を竦めた。二人きりになれることに喜んだ灰乃は、退室する白石の背中にウインクした。前触れもなく部屋を出た白石だったが、それは灰乃に対して気を遣ったわけではなかった。彼女は積極的にアプローチしているものの、肝心の尾崎は興味を示していない。本人から聞いたわけではないが、白石としては実らぬ恋だと確信していた。

何故尾崎などに好意を寄せることができるか、それが白石にとっては理解不能だった。灰乃瞳という人間は女性から見ても魅力的である。実際、中学生時代には多くの異性が彼女に対して好意を持ち、交際を申し込んでいた。そのすべてを断った彼女が、どうしてよりにもよって尾崎を好きになったのか。

色恋沙汰に関しては理屈では片付けられない難しさがある。それは経験によって磨かれる感性であって、未経験の白石がどれだけ知恵を振り絞ってもどうにもならない。

ちなみに恋愛経験がないからといって、別段白石が女性としての魅力に乏しいわけではない。灰乃と比べれば劣るが、身長は百六十六センチとスレンダーであり、常に不機嫌そうにしているだけで顔立ちも悪くない。カチューシャをする以外に手入れをしていない髪を整えれば、十分に美人となりうる素質があるのだ。

原石である自分を磨こうとしない理由。それは白石自身がそもそも男に興味を持ってないからだ。これは彼女が同性愛者であるという意味でなく、心動かされる相手に出会ったことがないということである。卒業した中学は時代遅れの不良が目立つ学校であったので、彼女の男に対する印象が悪くなったということも理由の一つとなっている。

最近の自分は考え方が理屈っぽくなっている、と白石は密かに危機感を覚えていた。表面上は悟られないようにしているが、ついつい何事にも理屈を求めてしまう。幸いなことに彼女は誰からもそのことを指摘されたことはない。ただ、尾崎ならば勘付くかもしれない、と時々身震いさせられるのだ。

尾崎の直感の鋭さに、これまで同級生たちは何度も舌を巻いていた。その中でも特記するとすれば、彼が競馬の予想を的中させたことだ。高校生なので馬券は購入していなかったことが悔やまれるほどの高額当選だったのだ。白石の記憶が正しければ、三百十六万七千円が懐に転がり込むはずだったらしい。

この他にも、マークシート試験を勘だけで九割正解、地図も標識も見ずに目的に到着、試験問題の予想を的中、と気味が悪いほど直感に富んでいる。

この男には靈感でもあって、常人には見えないものが見えているのか、と白石はそんな現実離れたことを本気で考えさせられる。

「って、靈感とか私はアホか……」

非現実的な考え方を止め、頭を冷やす為に窓を開く。秋と冬の境目となるこの頃、今日の天気は良かった。太陽も顔を出していて、気温も高い。心地よい風が白石の頬を撫でた。

学園祭当日も晴れてよね、と白石は祈った。

第二話

十一月一日土曜日。

八王子駅から乗車した尾崎匠は、しばらく電車で揺られて相模湖駅で下車した。ここは彼が少年時代をすごした場所で、訪れるのは川崎市に引越してから約三年ぶりだった。自分の記憶に残っていた景色と実際の景色を比較すると、人間の記憶など存外当てにならず、相模湖を目指す途中で一度迷ってしまった。

かつて通った相模湖近くの小学校の側を通った後は、もう迷うことはなかった。坂道を下り、道路を挟んだ向こうに公園が見えた。懐かしの相模湖を目の前にして尾崎は柄にもなく心が落ち着かなかった。

公園に入り、湖の傍まで寄ると以外にもゴミが浮いていることに気分が悪くなった。地元の間人だろうか、それとも観光客の仕業だろうか、どちらにせよ尾崎はこれを見過ごすつもりはなかった。

近くで営業していたコンビニで可燃物と不燃物のゴミ袋を購入して、手が届く範囲の浮遊物を回収した。中には明らかに不法投棄と一目で分かるようなものまであり、その悪臭に尾崎は顔をしかめた。そうしていると周囲の間人は次第に尾崎から距離を置き始めた。構わずに続けることができたのは、元々彼が他人の目など気にしない性格だったのと、別に悪事を働いているわけではない、という自身からだった。

ある程度拾ったところで尾崎は作業を止めた。これ以上続けても一人では限界があり、何よりゴミ袋がすでに底をついていた。さらにゴミが増えれば彼一人で持ち運ぶこともできない。これが自分の限界ですか、と彼は歯痒く思った。

最終的な処分は公園の管理事務所に任せた。五十路の管理人は、変わった人だね、と驚いていたがゴミの処分に関しては快く引き受けてくれた。尾崎は一礼して事務所を後にした。

尾崎は服の袖を元に戻し（長袖の青いカッターシャツと白色のチノ・パンツが今日の服装だった）、再び公園の内部を散策する。遊興施設、飲食店がいくつもあり、まだ午前中ながらも若者の姿が見受けられた。

その中の二人組に尾崎は視線を向けた。恐らく恋人同士なのだろう、その男女は穏やかな表情で湖を見つめ、少しぎこちない動作でお互いの手を握っていた。

これまでの人生で異性と之交際をしたことがない尾崎の心に小さな嫉妬心が生まれた。

彼も年頃の男であり、その世代の人間らしく異性への興味は十分にある。今現在では同級生の女子生徒へ思慕の念を抱いている。相手は自分のことを煙たがっている様子だが、それでも彼の気持ちが揺らぐことはない。これこそが恋だ、と胸を張って言えるほどその気持ちは強い。

白石恵について色々と考えていると、不意に目の前のカップルと視線が合った。男は軽く会釈してから、写真いいですか、と尾崎に尋ねた。それが撮影を頼まれたのだということに気がつくまで少々時間を要した。

「ええ、自分でよろしければ」

断る理由もなく、二人を凝視していたことの負い目もあって尾崎は快諾した。赤色のデジタルカメラを受け取り、シャッターを二度押した。

デジタルカメラを返す際に尾崎は思い切って尋ねた。

「お二人はどのような過程で恋人になったのですか？」

口に出してから後悔した。それは初対面の相手に尋ねるようなことではなかった。案の定カップルは困惑の表情を見せている。対人関係においてこのような無粋なことを話題にするのは自分らしくない、と尾崎は我に返って、すいません、と頭を下げた。

「あの、別に気にしなくてもいいですよ……」

哀れに思ったのか、女は簡単に自分たちの馴初めを教えてくれた。

同じ大学の先輩後輩で、新入生歓迎会の席で知り合い意気投合した健全すぎる恋愛関係だった。

「あなたは高校生？」

「ええ、東京の高校に通っています。今日はちよつとした旅行です」お互いの気分を良くするために無難な会話をしたが一度気まずくなった関係は修復できなかった。尾崎は珍しく顔を赤くしてその場から逃げるように立ち去った。

カップルの姿が見えなくなるまで早足で歩き、日陰になっていて人目に付きにくいベンチに腰かけた。しばらくして気持ちが落ち着いていたが、それでも尾崎の脳裏には恋愛のことで一杯だった。

いつもの自分に戻ろうとして両手で顔を覆った。これは尾崎が精神を制御する際に行う癖のようなものだった。

しばらくそうしていると、突然携帯電話の着信音がした。液晶画面には、千石考貴と表示されていた。

「どうかしましたか千石くん」

いつも通りの自分を演じて応答したが反応がなかった。電話越しにでも只ならぬ気配を感じ、尾崎は立ち上った。

「何か面倒なことになった　そんなところですか？」

「ええ、まあ、そんなところですよ……」

尾崎は生まれつき異様に直感に富んでいる。特に当たるのは悪い予感だ。

「今は学校ですね。自分はすぐにそっちに行くことができないので、その間に詳しい話を聞きましょう」

電話越しの千石は、ありがとございませう、と申し訳なさそうに言った。

冥栄高校は都内でも有数の進学校であり、普通科からは東大合格者を毎年輩出し、併設されている体育科と芸術科もその道で活躍す

る生徒が多く在籍している。

青春を謳歌する者たちの集まりのようなこの高校は一見して完璧のようだが、その実外部からは分からない問題を抱えている。生徒による自治意識が強いことが災いして、先の体育科による生徒会役員解任事件などが時折起きてしまうのだ（もつともそれは前例がなほほど大きな事件だったのだが）。

とは言っても、それはすべて学校内で正式に認可された組織同士の争いであって、最終的には選挙管理委員会が仲裁に入って何らかの妥協点に落ち着く。真に問題視すべきは、非公認組織が勢力を拡大していることである。

冥栄高校における非公認組織はいくつか数があるが、その中でも最大の勢力を誇るのが『F組』である。普通科においては試験の成績で毎年クラス分けを行うため、どのクラスかによって一目でその生徒の学力の程度が知られてしまうのだ。その中でも最低クラスとなっているのが『F組』であり、自主退学、不登校となる生徒の大半がこの所属である。いつしか自分に自信を持てなくなった生徒は、自然に不真面目になり学校に対して半ば左翼的な行動を取るようになるのだ。

生徒会としても『F組』の勢力は無視できないもので、先の野球対決で体育委員会を支配下に治めたことで、当面の目の上のたんこぶとなる存在だった。

どちらが先に行動するかと生徒も教師も密かに気にかけていた。そして先手を取ったのは『F組』だった。

八王子駅に降り、着替えることなく学校へ直行した尾崎を待っていたのは、完全に制圧された南校舎の姿だった。

覗かれることを防ぐためだろう、すべての窓には内部から段ボールで覆いがされている。玄関には机と椅子でバリケードが設置され

ていて、奥からは横断幕が掲げられていた。

「『F組』は、生徒会役員の辞任を要求する」

予想以上の惨状にさすがの尾崎もその場に立ち尽くした。電車内で千石から事の成り行きは聞いていたが（通話禁止だったのでトイレに籠って運転手をやり過ぎた）、まさかここまで大掛かりな行動に出たとは思わなかった。これに比べれば、体育科が生徒会に対してしたことなど可愛いものだ。

南校舎の前で立ち尽くす尾崎の前に、息を切らした千石が現れた。尾崎さん、わざわざすみません」

「いえ、気にしないでください。自分も生徒会の一員ですから、事態の收拾に力は惜しみませんよ。詳しい話を聞かせてください」

「ありがとうございます。じゃあ、ここではちよっと場所が悪いので生徒会室に行きましょう。六徳りつとくもいますから」

二人は並んで生徒会室がある北校舎屋上へ向かった。途中の職員室を外から見た様子だと教師たちはいるようで、南校舎、『F組』などの単語が聞こえたことからすでに事態は把握しているようだった。

生徒会室に入ると、一番奥にある生徒会長の席に座っていた小鳥遊六徳しりつとくが視線を上げた。尾崎の姿を認めると早々に切り出した。

「ご覧になりましたか、南校舎は」

「ええ、見ましたよ。驚きました、まさか『F組』があそこまで大胆な行動に及ぶとは……」

三人はそれぞれ自分の席に座り、現時点で判明していることを再確認する。

まず小鳥遊はこのことを校外に漏らさないようにと厳命した。さらにはこの問題を生徒の力だけで解決すると言い出した。

これに尾崎が異を唱える。生徒じがんだちには手に余る問題です、と。

「何を弱気なことを。生徒間の問題を生徒で解決せずして、何が生徒による学校自治ですか。教師たちに任せて、それで警察沙汰にでもなれば冥栄の評判は地に落ちます。そうなれば学園祭は中止です。」

竜崎さんに申し訳が立たないでしょう」

小鳥遊はあくまで自分たちの手で問題を解決するつもりだった。建前として今月の中旬に開催される学園祭を大義名分としているが、それは詭弁だと尾崎は思った。

この機会に最大の非公認組織である『F組』を粛清し、生徒会の勢力を拡大する。それこそが小鳥遊の目的だろう、と尾崎は踏んだ。

それを踏まえた上で尾崎は提案をする。

「仮に自分たちの手で解決するとして、そうならば生徒の皆さんにも緘口令を敷かなければなりません。先生方を説得して警察への連絡を堪えてもらう必要もあります。その他にも、向こうと交渉しなければなりません。それについてはどう考えていますか、小鳥遊くん？」

温厚な尾崎には似合わない厳しい口調。小鳥遊は腕を組み、しばらく瞑想に耽った。

「それについては俺としてもプランがあります。ですがここで明かすわけにはいきません。問題の解決をどうするかについては、生徒会役員の意見を聞きましょう」

尾崎は生徒会による問題解決に否定的である。彼を説得することが難しいと考えた小鳥遊は、一先ずそれを諦め、生徒会役員を味方に付ける策を講じた。

「なるほど、確かにそうですね。では、明日に生徒会室でよろしいでしょうか？」

「ここにいない役員たちには俺から連絡をします。千石、お前は竜崎さんへこのことを伝える」

命令された千石は二つ返事で引き受けた。早速携帯電話を取り出して電話帳を開いた。

尾崎は生徒会室を出た。そして北校舎の屋上から南校舎を見渡す。文化委員会室は南校舎の一階にある。つまりそこも『F組』の暫定支配下に置かれているということになる。このままこの状況が続け

ば学園祭の開催に支障をきたす。それだけは彼としても避けたかった。

明日生徒会役員を招集すれば、確実に生徒の手によってこの問題を解決しなければならなくなる。尾崎は恐らく小鳥遊の思い通りになるだろうと考えていた。先の体育科とスポーツ対決によって小鳥遊の生徒会長としての評判は高まり、生徒からも当選時以上の支持を受けている。その彼が学園祭開催の危機だと言えば、自分たちの手で解決したいと考える生徒がほとんどだろう。そのことは尾崎だけでなく、他の生徒会役員も理解している。ならばどうなるかは押し知るべし。

いざとなれば生徒会の力だけではどうにもならない。特命係の銀河と朝比奈、校風委員長の新垣、その他にも助力を求めなければならぬ。それらの交渉は、生徒会渉外である尾崎の役割となる。事態が膠着すれば受験を控えた三年生にも頭を下げなければならなくなるだろう。

「そうになるとまた面倒なことになりますね……」

厄介事や面倒事を楽しむような性質の人間でない尾崎にとってそれは苦痛でしかない。だがやらなければならない。邪なことだが、彼はここで活躍することによって白石を自分に振り向かせることができるかもしれない、と考えた。

南校舎の内部はやはり窺い知ることができない。幸いなことに日曜日と祝日は登校が禁止されているので生徒に知られることはない（運動部が練習するグラウンド及び体育館からは南校舎は見えない）。

学園祭ぐらい楽しみたいものですね、と尾崎は踵を返して屋上を後にした。

第三話

十一月二日日曜日。

前日の小鳥遊たかなしの提案に従って本来なら登校が禁止されている日曜日にも関わらず生徒会役員が揃った。十月上旬をもって会計の地位を退いた四日市栄よっかいちさかえを除いた六人はそれぞれの席に座り小鳥遊の開口を待った。

「休日に呼び出してすまない。すでに議案については知っていると思うが、改めて確認する。千石、説明を頼む」

指名された千石はあらかじめ用意していた南校舎の見取り図を、磁石を使ってホワイトボードに張り付けた。全員の視線が集まると、彼は事の経緯について話し始めた。

「事件が発覚した日時は、十一月二日の午前九時ごろです。おそらく『F組』はそれ以前から準備を始め、籠城のために食料の確保を済ませていると考えられます。校内にある南校舎玄関の鍵は予備まですべて回収され、さらには玄関にバリケードを設けているため、まともな侵入は不可能となっています」

そして現段階で判明している『F組』の要求について説明をする千石。要求はただ一つ、現生徒会役員の辞任です、と彼は言った。

辞任という単語に黒河総一が反応した。

「解任じゃないってことか、千石」

「まあ、そうだな。基本的には辞任は役員個人の権限であって、強制できるものじゃない。その代わり、役員個人が辞任権を行使した場合にはたとえ生徒会長であっても止めることはできないから、確実に生徒会から追い出すことができるぜ。多分、それが向こうの狙いじゃないか？」

「俺も千石と同意見だ。解任するには選挙管理委員会を通じなければならぬ。辞任ならば役員個人の意思で十分。それが外部からの圧力だろうと関係ない」

「考えたね、涼木くんも」

広報の九重俊も頷いた。その隣に座る書記の八神神次郎は対照的に何も言わなかった。ただ腕組みをしたまま納得できないといった表情をしている。

八神の表情を見た尾崎は、何か引つかかっていますね、と瞬時に判断した。その真意を尋ねようとして口を開こうとした彼だが、直前で小鳥遊に邪魔されてしまった。

「今回の議案は、この『F組』の反乱をどうやって鎮めるか、だ。俺としては生徒による校内自治をより強固なものとするために、生徒会が中心となって解決に当たるべきだと考えている。教師たちに任せるという意見もあるので、ここで多数決を採用したい」

早々に採決に持ち込む小鳥遊。反対派の尾崎に説得の機会を与えないための選択だった。この場で挙手するように全員に伝え、採決が成された。

「賛成五人、反対一人。よってこの問題は生徒会を中心とした生徒の力によつて解決することとする」

反対したのは当然尾崎だった。やはりこうなりましたか、と彼は内心で残念に思いながらも、すぐに気持ちを切り替える。

「まずは事件についての箝口令を敷く。二人一組になって各学科の生徒に連絡をして、ことのあらずじを伝える。八神さんと九重さんは芸術科、尾崎さんと千石で普通科をそれぞれ担当。俺と総一で体育科をカバーする。生徒会顧問、校風委員会、それと特命係にも一応協力要請をしてください、尾崎さん。教師たちの説得は俺がやります」

手短にこれからすべきことを命令する小鳥遊。初動から涉外である尾崎の仕事量は明らかに多く、寸暇を惜しまなければ済ませることはできそうになかった。

それぞれがすべきことを了解した小鳥遊以下の生徒会役員は無言で席を立った。指示された組み合わせで生徒室を後にした。

「尾崎さん、どのように連絡すればいいですかね？」

北校舎から出たところで千石が切り出した。彼と尾崎が割り当てられた普通科は冥栄高校でも最大規模の学科であり、その生徒数は七百人を超える。まともに一人一人連絡をすれば日が暮れてしまう。いかに効率よく立ち回れるかが勝負だった。

「クラスごとに緊急用の連絡網があるので、それを活用しましょう。千石くんなら一年生の各クラスに友達がいるでしょう。今から頼んでください。それと自分の携帯電話に、特命係の二人のアドレスを送っておいてください」

「ああ、分かりました。尾崎さんだけ大変ですね」

「仕方ありませんよ。自分は涉外ですからサボるわけにもいきません」

二人は学校近くのバス停から乗車して、尾崎が一人暮らしをしている賃貸アパートに向った。築四十年の建物の二階の角部屋。そこが尾崎の部屋だ。

室内が閑散としているのは決して風呂がないからだけではない。家具と呼べるものは昔ながらの卓袱台しかなく、他には部屋の隅に布団が折りたたまれていた。パソコンはおるかテレビすらなく、おおよそ高校生の部屋とは思えなかった。

日雇い労働者でももう少しまともな生活をしているだろう、と千石は笑うに笑えなかった。その彼の心境を察したのか、尾崎は布団の下からエロ本を取り出して見せた。

「秘蔵ですよ、自分の。千石くんならお貸ししますよ」

「……はは、結構です」

やんわりと断られた尾崎は残念そうにエロ本を片付けた。その表紙を飾る女性は彼が思いを寄せる女性と似た髪型をしていた。

卓袱台を挟んで座る二人。尾崎は通学用に使っている手提げ鞆からファイルを取り出して開いた。それには全校生徒の連絡先が網羅されていた。

「分かつてるじゃないですか、連絡先……」

さっきの会話は何だったんだ、と千石は虚しくなった。

「時間はかかりますが、あえて一人一人に連絡しましょう。人によつては自分たちが脅し もとい、頼まなければ口を滑らせるでしょうからね。どうせ明日は祝日です、焦らずに片付けましょう」

「え、あ、はい……」

完全に尾崎のペースに飲まれてしまった千石。起死回生を狙って彼は腕時計を見た。ちょうど昼時だった。その前に何か食べませんか、と提案すると尾崎は部屋の隅に置かれた時計に目をやった。時計が頂点にあった。

「カップラーメンでよければありますよ」

「バランスを大切にしておかずも欲しいですね」

一度部屋から出て気分をリフレッシュしたい千石は食い下がった。すると尾崎は、そうですか、と了解して腰を上げた。そのまま布団のところへ行つた。

「では、これをどうぞ」

「エロ本はいいですから！ おかず違いじゃないですか、それ！」

やはり尾崎のペースから逃れることはできなかった。千石は観念して携帯電話を開いた。彼の電話帳には百人以上の名前が登録されている。それを除いた尾崎は、壮観ですね、と感嘆の声を上げた。

「尾崎さんはどうなんですか？」

自宅の電話番号とはいえど全校生徒のものを網羅している尾崎。ならば携帯電話はさらにすごいだろうと思つた千石。だが意外にも彼の電話帳は最低限の相手ばかりだった。

こんなものか、と肩透かしを食らつた千石はすぐに携帯電話を返した。それと引き換えに無数の携帯電話が無造作に入れられた籠を手渡された。

「これって……」

「都道府県ごとに携帯電話を別にしていきます。これは沖縄、それは香川、あつちが青森ですね。各携帯にそれぞれ百人以上」

「いや、もういいですから……」

本当にこの人は分からない、と今更ながら尾崎の性質に下を巻い

た千石。小鳥遊や黒河兄妹と共に、彼とも先祖代々縁が深いが今でも混乱させられることが多々ある。自分が凡俗であることに千石は自信を失いそうだった。

十一月三日月曜日。文化の日。

尾崎匠が目を覚ましたのは、すでに新聞が配達された時刻だった。時計を見ると午前六時十分前を指していた。隣で寝息を立てている千石考責を起こさないように注意しながら部屋を出た。

外気は思いのほか暖かく、ブレザーの上着は邪魔になりそうだった。そのためか、一番近くのコンビニまでの道のりがいつもより億劫に感じられた。

おにぎりやサラダ、お茶など購入して店から出ると、完全に日が昇っていた。今日は一日中晴れになるという予報を思い出し、そんな日に部屋に籠らざるを得ない自分たちが尾崎は惨めに思えてならなかった。

普通科の生徒へ箝口令を敷くための電話は、昨日で半分が終わった。ただ連絡するだけでなく、秘密厳守を守ってもらう必要がある。ただ説得に骨が折れた。学校の評判、進路への影響などより効果的だったのが学園祭の開催についてのことだった。これには尾崎も電話越しに苦笑させられた。

買い出しで朝食を済ませた尾崎の千石は昨日と同じく携帯電話を手に、延々と説得を続けた。絶対に一生分通話したな、と千石は時折持つ手を変えながら根気を保った。

その頑張りもあって正午を迎えるころには一年生と三年生への連絡は完了した。残るは二年生の一部で、それらは応答が無かった生

徒たちだった。

「ラストスパート、残すところ百人と少し。頑張りましょう」

「はい、尾崎さん」

尾崎ファイルに網羅された二年生生徒の自宅の番号を押す二人。

しばらく順調だった尾崎の指が、突然止まった。不思議に思った千石がファイルを覗き込むと、そこには灰乃瞳の氏名があった。

「俺、代わりますよ」

「すみません、お願いします」

相手の心境を瞬時に察することができる。これこそは千石の最大の長所だった。小鳥遊六徳たかなしりつとくが彼を傍に置いているのにはこのような背景がある。

灰乃宅への通話を済ませた千石は、終わりましたよ、と尾崎に言った。

「どうしても苦手ですか、灰乃さんのことが」

「苦手ですねぇ……」

高校入学時から尾崎にアプローチを仕掛けてきた灰乃瞳。中学時代には多くの男の心を射止めただけのことであって、その容姿は美しく、いつも隣にいる白石恵よりも数段上である。そんな美人であるにも関わらず尾崎が苦手とするのは、好き嫌いという感情からではなく漠然とした直感からであった。

「あの人が恋人になると悪いことが起こりそうな予感がしましてね。とても良い女性なのに、何故自分がそう感じたのか理由が分からないのですよ」

「いつもの直感ですか」

そんなことで自分に好意を寄せる女性を遠ざけるなど、普通ならば言語道断だろう。しかし尾崎をよく知る千石は、彼の直感的の中心率が高いことを知っていた。一族の血が成せる技なので無視することはできなかつた。

「おっと、サボってはいけませんね。さあ、続けましょう」

しばらく気の抜けた顔をしていた尾崎だったがすぐに立ち直り、

何事もなかったかのように作業を再開した。

千石も尾崎に習って止まっていた手を動かした。作業を続ける彼の脳裏からは先ほどの会話が離れなかった。避けなければならぬ、と尾崎が直感した灰乃瞳という女。ならば何故彼はそうしないのだろうか。

（尾崎さんがその気になれば、あしらうなんて容易いはずなのに）
あえてそうしない思惑、もしくはできない事情でもあるのだろうか。尾崎とは長く交流している千石でも彼の性質には慣れていない。だから彼にはその考えがまったく読めなかった。

それから二人の間に会話は生まれなかった。時折作業に必要なことを確認するだけで、お互いがそれぞれ没頭してた。結局、すべての普通科生徒に箝口令を敷く作業が終わった時間は午前十一時をすこし過ぎた頃だった。

帰宅する千石を玄関で見送った尾崎は、ごくろつさまです、と労いの言葉をかけた。

「まあ、忙しくなるのは明日からですがね」

「よろしく願いますよ、渉外さん」

第四話

十一月四日火曜日。

南校舎が『F組』に占領されたことによつて様々な弊害が発生した。その中でも最たるものが、教室を奪われた普通科生徒だった。普通科の教室はすべて南校舎であるために通常通に授業を進めることが難しくなつてしまったからだ。

小鳥遊たかなしによつて事前に練られていた対策は、特別教室の第一練から第三連までを使用することだった。だがこの三つだけでは七百人を超える生徒を収容できず、最終的には東校舎、西校舎の空き教室を利用することとなった。

そのようにして変則的な授業がされた初日は特に不満を漏らす生徒もおらず、生徒会役員一同は胸を撫で下ろした。

生徒会長として小鳥遊は事態の早期解決策を模索していた。生徒会を中心として解決する、と大見を切つたのだからここで引き下がることはできない。できませんでした、と教師に泣きつくことなど論外である。

「尾崎さん、特命係、校風委員会との交渉はどうですか」

「校風委員会については、昨夜委員長の新垣くんから色好い返事を貰いました。特命係とはこれから直接交渉する予定です」

特命係との約束は今日の放課後となっている。これから交渉の席に向う尾崎は手元に必要な資料を集めている最中だった。八神以外の全役員が彼の背中に期待の眼差しを向けている。

「それでは行つてきます。まあ、自分にできることをするだけですけれどね」

人の良さそうな笑みを浮かべて生徒会室を後にする尾崎。北校舎

屋上から降り、選挙管理委員会室を横切り、一度校舎から出る。グラウンドを横切る際に運動部の掛け声が聞こえた以外に生徒の声はしなかった。箆口令が敷かれ、さらに今日即時下校が命じられたのだ（対象となるのは運動部、文化部などに所属していない生徒のみ）。

東校舎屋上。そこが生徒会特命係の本拠地である。屋上の片隅に立てたられた倉庫の扉を叩き、失礼します、と告げてから尾崎は入室した。

「おや、青島さんがいませんね？」

部屋の中にいたのは、一年生の朝比奈醍醐あそひなたいしと銀河光ぎんがひかるだけだった。

特命係の代表である三年生の青島満あおしまみちるの姿はどこにもなかった。

銀髪を撫でながらヒカルが尾崎の疑問に答えた。

「いや、それが見当たらないんすよ。昼休みに会ったときは、屋上で会おう、なんて言ってたくせに」

「あの人は変人ですからね。勝手に動いているんじゃないですか？」
少し苛立った口調のヒカルに対して、その正面に座っている朝比奈は楽観的だった。ここで無駄話をしていても仕方がないと判断した尾崎は早々に席についた。いない人間に振り回されるなど時間の無駄でしかない。

すでに『F組』についての情報がある程度教えられていた朝比奈とヒカルは、協力してもいい、と同時に首肯した。その代り特命係の独立を認可してほしい、と。

やはりそうなりますか、と尾崎は、想像通りだった二人の条件提示に一先ず返事を保留した。特命係の独立を許すということは校内に公認組織を新設するということであり、そうなると年間予算など様々な手続きが必要になる。手間がかかるだけでなく金も必要となるのだ。

話を逸らそうとする尾崎に、そうはさせないとヒカルが食らい付く。

「はつきり言いますけど、この条件が呑めないんだったら協力しな

「いつすよ？」

「では、生徒会としてはここで特命係が非協力的なら永遠に独立を認めしませんよ」

「ちよ、それ卑怯じゃないっすか」

なるほどこの男は交渉には向いていない、と尾崎は判断した。それは交渉が下手ということだけでなく、妥協点を弁えられないという意味で向いていない。ヒカルくと話しても無駄ですね、と交渉の相手を朝比奈へと移す。

「朝比奈くん、君はどう思いますか？　ここで特命係が事件解決に大きな功績を残せば、それだけ独立が容易くなりますよ。自分としては独立そのものを交換条件として呑むことはできませんが、便宜を図ることならなんとか」

「……最終的に決めるのは小鳥遊ですよね」

朝比奈としては尾崎のことを信用できても、同じように小鳥遊を扱うことはできなかった。共に体育科に対して野球対決を挑んだ仲ではあるが、あの男は味方と敵を状況によって判断する人間で、今の自分たちは好意的に見られていないという予感があった。

— 先ずここは生徒会に対して協力的な姿勢を見せ、水面下で独立の機会を待つべきだろう　これが朝比奈の妥協点だった。

「ヒカル、ここは大人しく従っておこう。小鳥遊が俺たち抜きで解決したら、それこそ俺たちの立つ瀬が無いだろ」

「いや、だけどさ……」

ヒカルとしても朝比奈の考えが間違っているとは思えなかった。ただ彼には気がかりがあったのだ。特命係代表の青島の許可を待たずして即決してもいいのだろうか、という不安だった。

二人のやり取りから事情を察した尾崎は、返事はしばらく待ちますよ、と念を押しした。ここで無理に首を縦に振らせるよりも、特命係代表から返事を貰いたかった。そうすれば後々の厄介が解消できると考えたからだ。

尾崎は持ち込んだ資料の一部を朝比奈とヒカル、それぞれに手渡

し、「ご検討ください、とセールスマンのような捨て台詞を口にした。

そのまま生徒会室に戻り経過を報告しなければならぬ尾崎だったが、北校舎四階で彼は立ち止った。選挙管理委員会室の扉を叩き、返事を待った。開いてるよ、と声がした。

「失礼します」

「げっ、お前かよ」

机に将棋盤を広げて遊んでいた白石は、尾崎の顔を見るなり手元の駒を落とした。尾崎はそれを拾い上げて、そう邪険にしないでくださいよ、と笑いかけた。

「何の用だよ」

「特に用事はありません 強いて言うなら、下校指示に従わない生徒へ警告ですかね」

白石は面倒臭そうにそっぽを向いて舌打ちした。下校指示は学校側から出ているので、この場合には尾崎に義があったからだ。

尾崎は白石が言い返さないのをいいことに彼女の正面に座った。拾った駒を指し出し、一局どうですか、と持ちかけた。

「自分に勝てたら不問にします」

「お前が勝ったら？」

「一緒に学園祭を回って下さい」

「死んだ方がマシ」

悪態をつきながらも駒を正しい配置に戻す白石。言いなりに勝負するのは癪だったが、ここで負かしてしまえば気分が良いだろう、と彼女は考えた。

「どうする、飛車角落ち、それと金銀も落とそうか？ なんなら目隠してもいいけど」

余裕の白石。初めて将棋を指したのが六歳の頃。経済学部教授の父親を相手に勝利して以来、彼女は負け知らずだった。オックスフ

オード大学に留学中の兄ですらも彼女には手も足も出ない。相手がプロの棋士ならともかく、そこらへんの高校生に負ける気などまったくしなかった。

「ハンデはいいですよ。負けた言い訳にされたくありませんから」「あ？ なら全力でやってやるよ。お前が負けたら二度と話しかけるなよ」

歩の駒を五つ振り、その内の三つが表になったので尾崎の先行となった。時間無制限一本勝負の始まり。尾崎は飛車側の香車を前進させた。

「いきなり香車、動かすとか……」

戦略的には考えて尾崎の第一手は意味不明だった。白石は無難に角の通り道を開くため、歩を前進させた。

尾崎の第二手。彼は迷うことなく玉将を右斜めに動かした。攻める意思は皆無だった。

「お前、何がしたいわけ？」

理解不能、とばかりに首を振り、白石は飛車の前の歩を前進させた。守りは金銀に任せて、飛車角、それと桂馬と歩で早々に攻め立てる作戦だった。

「何がしたいんでしょうかね。賢い白石さんなら当ててくださいよ」からかうように言う尾崎。その第三手では、先ほど動かした玉将を元に戻した。

「あのさ、真面目に指すつもりじゃないでしょ」

「そんなことはありませんよ。これは対白石さん用の作戦ですから」作戦と言われては白石も文句をつけられなかった。賢すぎる彼女の欠点は、何事にも意味を求めたがることであった。それも無意識で求めてしまうので始末が悪い。尾崎はこれを逆手に取った作戦を立案したのだ。

（まあ、駒の動かし方に意味なんてないんですけどね）

尾崎の作戦。それは無意味な作戦で白石を振り回すことだった。今の彼女は尾崎の行動に何らかの意図があると思っ込んでいる。な

らばそれを利用して錯乱させればいい。これ以外に勝てる見込みは無かった。

「どうしてそこで桂馬を動かすんだよ……」

「さあ、どうしてでしょうかね？」

中間結果ではあるが、尾崎の作戦は上々だった。一向に尾崎の狙いを読み取れない白石は、やはり苛立つてきたのだろう小さなミスを犯すようになった。これまで将棋を指してきて苦戦らしい苦戦をしたことがない彼女からすれば、考えの読めない尾崎は最悪の相手だった。

小さなミスは徐々に増え、それによって白石の指し筋は乱れる。

もはや勝負にならない。まともに指せば敗北必死であった尾崎ですらも、勝ちましたね、と確信した。

白石の第二十三手。

「投了……」

もはや自分が勝てる見込みはない、と白石は踏んだ。普通の人間が見ればまだ逆転の機会はありそうだが、彼女からすれば自分が負けるビジョンしか思い浮かばなかった。このまま無様に指し続けるよりも素直に負けを認める方が潔いと彼女は思った。

投了の言葉を聞いた尾崎は、まるで勝利宣言するように白石の王将を指で挟んだ。

「では、学園祭は三日間とも自分と回ってくださいな」

「その約束本気だったのかよ！」

「もちろん。自分も恋人がほしいので」

「瞳ちゃんがいるだろ、瞳ちゃん！ あいつなら喜んでお前の恋人になるから！」

お前は私たちの友情を破壊したいのか、と抗議する白石。友達が少ない彼女としては灰乃瞳との関係だけは壊したくなかった。それだけ特別な存在だった。

「でも勝ったのは自分ですよ？」

「なら、三人で回ろう。それならいいだろ」

精一杯の譲歩。尾崎はしばらく考え込み、まあそれなら、と渋々頷いた。

私は適当なところで逃げよう、と白石は今からそのプランを練った。その彼女を尻目に、尾崎は当日の計画を楽しそうに立てている。「学園祭は必ず開催させますよ。自分が『F組』を説得します。これも世界平和のためですから」

「最期のところは意味分からないけど、まあ頑張れ。私も学園祭くらいは普通に楽しみたいからな」

「そんなに自分と回るのが楽しみですか。光栄です」

「死ね」

そんなやり取りをしばらく続け、尾崎は席を立った。去り際に、また来ます、とだけ言い言い残して。

第五話

十一月五日水曜日。

この日の尾崎匠は上機嫌だった。生徒会長の代理として『F組』との交渉に臨む直前でも、彼は時々何かを思い出したかのように口元を緩めた。その様子を見た生徒会役員たちは、ついにおかしくなったか、と揃って手を合わせた。

「それでは、これから『F組』との第一回目の交渉に行ってきます！」

遠足にでも出かけるかのような言い方。その口調に一抹の不安を覚えた小鳥遊六徳は、くれぐれも油断なならないように、と警告した。「はは、大丈夫ですよ。ここは自分の見せ場ですからねっ」

今度は気持ち悪い口調。微妙に裏声を使っていた。変声上手の九重俊が頬を引きつらせた。気色悪い、と。

スキップしながら生徒会室を出る尾崎。その姿が消えたことを確認してから生徒会役員一同は小鳥遊を中心として、尾崎の奇妙なデモンションについて互いに言及した。

「九重、尾崎が気持ち悪いぞ。何があった」

「知らないよ。いきなり気持ち悪くなってたんだよ、今朝。黒河君は？」

「尾崎さんとは長い付き合いですが、あそこまで気持ち悪いのは初めてです。俺にも原因不明です。千石、お前はどうか」

「いや、俺もちよっと……。気持ち悪すぎて目のやり場に困ったくらいだ。六徳、心当たりはあるか？」

最後の頼みの綱、小鳥遊へ視線が集まる。

「……分かつていることが一つだけある」

口調を整え、深くため息をついた小鳥遊。生徒会役員の期待を受けて、彼は言った。

「今の尾崎さんは 笑えないほど気持ち悪いということだ」

ハイテンションの原因は不明。されど尾崎が気持ち悪いということとは誰の目から見ても明らかだった。

生徒会室の扉が開く。特命係の銀河光ぎんがひかるだった。

「い、今、廊下で尾崎さん、見た！ 気持ち悪すぎるだろ！」

昨日の返事をしに来た途中でスキップする尾崎を見た、ヒカルは説明した。すれ違った際に、世界平和のために頑張りましょう、と彼は言われたのだ。

身内の恥を弁明する気力も起きず、千石はただ笑うしかなかった。「まあ、あれだ……。寒くなると変な奴が出てくるってことだろ。はは……」

力ない笑いが虚しく生徒会室に響いた。

生徒会渉外として『F組』との交渉を担うこととなった尾崎は、事前に相手側から指示を受けていた。

それは具体的な交渉の方法についてだった。直接交渉ではなく電話による交渉。それが『F組』組頭の涼木すずきがゆう牙宥からの指示だった。

尾崎には職員室の電話を使え、と。

「失礼します」

丁寧にお辞儀をして職員室に入る尾崎。生徒会顧問の水瀬みなせすみこ純子の机に向かうと、彼女はすでに受話器を持っていた。涼木がお待ちかねだ、と急かした。

お礼を言ってから受話器を受け取り、尾崎です、と言った。

「遅い。時間を過ぎているぞ」

「申し訳ありません、涼木くん。いろいろと準備をしていたので遅れてしまいました」

簡単に謝罪をして話を進める。まず尾崎は南校舎解放の条件について切り出した。

「生徒会役員の辞任が条件でしたが、今現在においてそれを呑むこ

とはできません。それ以外の条件なら検討します」

生徒会渉外としてはもう少し強気で当たるべきだろうが、あえて尾崎はそれを避けた。相手が南校舎を占拠している状態で下手に挑発することで交渉が決裂してしまうことを恐れたのだ。学園祭を開催するには南校舎の解放が絶対条件であり、それを果たせなければ生徒会はいい笑いものになってしまう。

尾崎の提案に対して涼木はしばらく返事をしなかった。受話器の向こうで紙をめくるかのような音がした。

「駄目だ、俺たちは生徒会役員の辞任をそっちが呑まない限り、絶対に南校舎を明け渡さない」

「そうですね。では、自分たちが仮に総辞任したとして、後釜は誰が引き受けるつもりですか。涼木くんたちが次の選挙まで代行するつもりですか？」

生徒会役員は半年ごとに改選される。その選挙は十二月中旬となっている（本来ならば十一月中旬だが、学園祭を優先させるために延期された）。それ以前に生徒会役員が総辞任した場合、辞任を要求した側が次期選挙まで代行を義務付けられる。

「失礼ながら、そうなるかと生徒たちが納得するかどうか」

遠慮して語尾を濁した尾崎だが、本音を言ってしまうえば代行など不可能だと思っていた。生徒会の存在は生徒からの支持によって成り立っている。その地位は絶対的なものではなく、相対的なものである。正規の手続きを踏んで当選した小鳥遊たちだからこそ認められているのであって、校舎を不法占拠するという行為によって成立した生徒会など、それが代行であろうと認められるはずがないのだ。

「その点については、涼木くんも了解していると思いますか」

「何が言いたい、尾崎。論点を反らすな。条件を呑まないのか、呑むのか」

「それについては先ほどお答えしました。生徒会としては総辞任するつもりなど毛頭ありません」

「……今日はここまでだ。次の日時はこっちから伝える」

強気な姿勢を見せた途端、涼木は通話を止めてしまった。油断した、と尾崎は後悔した。最初からこの調子では後々差し支える。何故細心の注意を払わなかったのか、と彼は自分を責めた。

すでに切れてしまった受話器を置き、水瀬に一礼してから職員室を出た尾崎。そのまま生徒会室に戻る気になれず、昨日と同じように選挙管理委員会室の扉を叩いた。

「尾崎です。白石さん、いますか？」

返事は無かった。扉を開こうと手をかけたが鍵がかけられていた。室内から施錠はできないので、誰もいないということになる。尾崎はあきらめて階段を降りた。

三階の図書室に入り、一番奥の死角となる席へ座る。一人で考え事をする際、必ず尾崎はこの場所を使う。入学以来からの彼のこだわりだった。

今日の自分はどうにも調子がおかしい、と尾崎は首を叩いた。原因は恐らく昨日の白石との会話だろう。すぐに検討はついたものの、それだけのことで自分が調子を乱してしまうとは信じられなかった。もしも尾崎が誰かにこのことを相談していれば、それが恋つてことだろ、と当たり前前の答えが返ってきたに違いない。だが他人に弱みを見せないことを信条とする彼にそんなことを打ち明けられる相手などいるはずがなかった。さらに白石への気持ちがそこまで強いと自覚していないことも災いした。

しばらく考えた彼が出した結論は、忙しさで疲れたのだろう、という見当違いも甚だしいものだった。

悩みを解決する糸口を見つけたと誤認した尾崎は早々に図書室を出た。去り際に図書委員長が詰める小部屋を軽く叩いて。

第六話

十一月六日水曜日。

この日、『F組』からの連絡は無かった。下校時間寸前まで職員室で粘っていた尾崎は肩透かしを喰らった。

職員室を出るとすでに時刻は午後七時を過ぎていた。急いで生徒会室に戻り、最後まで居残りをしていた小鳥遊たかなしに状況を報告した。彼は、そうですね、とだけ返事をして帰ってしまった。

最後となった尾崎は生徒会室の施錠を済ませてから学校を出た。玄関を出ると、何故か白石が待っていた。彼女は自転車に跨り、参考書を読んでいた。

尾崎はその背後からそつと近づき、両肩に手をかけた。

「セクハラすんな」

参考書の背が尾崎の頭部に落ちた。幸いソフトカバーだったので怪我はしなかった。

「進展はあったの？」

「いえ、今日は連絡がありませんでした」

尾崎の返事を聞くと、白石は参考書を自転車の籠に入れた。荷台を叩き、乗って、と言った。普段の白石からは考えられないような台詞に戸惑った尾崎だったが、好意を寄せる女性と密着できる機会を逃す彼ではなかった。

失礼します、と断ってから荷台に尻を下す尾崎。両腕をしっかりと白石の腰に回す。

「それ以外の場所触ったら、走行中でも叩き落とすから」

そう釘を刺してから白石はペダルをこぎ始めた。この付近は平地が多く、女の白石でも無理なく二人乗りができる。

学校からの坂を下りたところで白石が口を開いた。

「私はあきる野市だけど、お前って家どこ？」

「八王子市内ですよ。駅で降りしてください」

「適当に降ろすから勝手に歩いて帰って。それよりも　涼木の馬鹿は何がしたいわけ？」

「目的は生徒会役員の辞任のようです。やはり気になりますか、中学時代の同級生として」

今回の騒動の首謀者とされている『F組』組頭、涼木牙宥と白石恵は中学時代の同級生であり、当時からそれなりに親交が深かった。だからこそ気がかりなのだろう、と考えた尾崎だったが、その予想は外れた。

「気になってるわけじゃないから。むしろ信じられないんだけど、あいつが校舎占拠するなんてさ。そこまで馬鹿じゃないのに」

「と言うと？」

「あいつは不良扱いされてるけど、平和主義者なんだよ。事なかれ主義っていう方が正しいくらいね。あんな強硬手段じゃなくても、あいつならもつと賢いやり方選ぶんじゃないかって思うんだよ、私」

それについては尾崎も一理あると思った。曲りなりにも進学校であり冥栄高校の普通科に入学しているのだから、涼木もそれなりに頭が回るということだ。そう考えてみると校舎を占拠するという行為がいかに馬鹿馬鹿しく見えてくる。

ならば何故そのような手段を選んだのか。尾崎は考えをめぐらせた。しかしこれという理由は思い浮かばず、かえって混乱してしまつた。白石に知恵を借りようとしたが彼女は応じなかった。

「これ、私の個人的意見だから。まあ、涼木のこと知ってる奴なら誰でも疑問に思うことだから、八神とかも同じこと思ってるんじゃない？」

いい加減な言葉で会話を締めた白石。それ以降の彼女は何も言わなかつた。後は自分で考えろ、と言外に言っているようだった。

会話が無くなつてしまつたことに尾崎は苛立ちを覚えた。普段の彼ならその程度のことと感情を荒立てることなどないにも関わらず、本人の自覚が足りないだけで、彼の中では白石の存在は相当大きくなつていた。

欲求によつて自然と手が動きそうになる。尾崎の両手は今、白石の腰を掴んでいる。すこし上部にずらせばそこには乳房。触りたい。彼はそう思った。

白石が卒業した中学校は生徒の質が悪く、劣等生よりも問題児が多かった。世の中の不良と呼ばれる人種はそういつた行為を早々に済ませてしまふ割合が高い。ならば白石もすでに中学時代に男を経験済みなのだろうか。

様々な妄想が尾崎の脳内で拡散する。気になって仕方がなかった。「お尋ねしてもいいですか、白石さん？」

「ん、いいけど」

「白石さんはまだ処女ですか？」

自転車が急停止する。ブレーキの音が街灯立ち並ぶ住宅街に響く。摩擦熱によつて焦げたような臭いが微かに漂う中、心底呆れかえつた表情で白石が振り返つた。

「そんなことお前に関係ないじゃない。そんなこと女に聞くなんて最低じゃない。何、お前つて処女じゃなきゃ無理つて人種？ 残念だけど私が処女でも非処女でもお前とするつもりはないから。不愉快だからもう降りて。悪いけど歩いて。それと当分話しかけないで。委員会室にも来ないで。A組にも来ないで。学園祭も瞳ちゃんも回つて」

淡々とした口調で尾崎を糾弾する白石。弁解をする間も与えずペダルをこいで走り去つた。尾崎はその衝撃で荷台から転がり落ちた。外気によつて冷やされたアスファルトは尾崎の頭を冷やすのに適していた。あんな馬鹿なことを唐突に聞いてしまうなど、まさに愚の骨頂だった。何故自分があそこまで愚か者になつてしまったのか。尾崎は自分のことがまったく分からなかつた。

ただ一つだけ確かなことは、白石恵の自分に対する評価は地に落ちた、ということだけだった。昨日まで有頂天だった彼は一転、何もかもがどうでもよくなるほどの喪失感に苛まれた。

第七話

十一月七日木曜日。

この日、尾崎匠は無断で学校を欠席した。幸い『F組』からの連絡は無く、彼がいないことよって不利になることはなかった。

しかし生徒会長である小鳥遊^{たかなし}としては翌日も欠席されては困る。放課後になって尾崎の携帯電話に連絡をしたが留守番となっていた（放課後ならば携帯電話の使用は自由とされている）。

「千石、悪いがこれから尾崎さんの家へ行ってくれないか」

電話に出ないならば自宅に押し掛けるしかない。生徒会長として迂闊に学校を離れられない小鳥遊は、自らの代紋として千石を送り込もうとした。千石は快く快諾した。

「体調不良以外の理由で欠席したなら、遠慮はいらさない、二刀流で締め上げる」

「はは、そんなことに武術は使わないからな」

通学鞆を持ち上げ、そのまま生徒会室を後にする千石。入れ違いに戻ってきた九重が、どうかしたの、と聞いた。

「尾崎さんの家へ向かわせました。電話に出ないので」

「そうだったんだ。小鳥遊君たちは尾崎君と仲が良いんだね。家の場所を知っているなんて」

「家族ぐるみで古くから親交がありますから。まあ、家同士が対等になったのは戦後からです」

小鳥遊家の開祖は公家であり、室町中期に武士へと身分を変え、江戸時代には一万二千石の大名であった。明治維新から終戦までは子爵として華族の一角を構成した一族である。小鳥遊六徳はその末裔であり、千石や黒河、尾崎は武家時代の家臣の末裔。

一見すると華やかな家柄だと思われがちな小鳥遊家。だがその実態は決して美しくない。公家から武家になったところで所詮は素人戦では戦果を得られず、偶然勝ち馬に乗れたことで大名として生き

延びることができたにすぎない。大名としても貧窮を極め、何度も商人からの借金を踏み倒したことがある。子爵だった明治期になってようやく中央省庁で地位を築いただけの一族である（六徳の父は外務省の在スイス大使であり、祖父は元・在アイスランド大使）。そのため彼にも一族から大きな期待が寄せられている。東京大学を卒業して外務省に入省。小鳥遊家が二代続けたこの人生を彼も歩むものだ。家族は思っている。しかしそんなことに従うつもりなど彼には毛頭ない。

東京大学へは入学する。そして検察官として法務省へ入省。検事総長まで昇進。最終的には宰相となりこの日本の舵取りをする。そんなことを彼は本気で考えていた。

だからこそ高校時代に汚点を残すわけにはいかない。生徒会長として冥栄高校全盛期を築き、大手を振って卒業しなければならぬ。だからこそ『F組』などという負け犬集団になど負けることなど許されない。

小鳥遊は机の下で拳を握りしめた。

「九重さん」

「何、小鳥遊君？」

「俺は生徒会長として、この冥栄高校を国内最高の高校にしますよ。進学校という点だけでなく、入学することによって誰もが青春を謳歌できるような素晴らしい高校にします。それにはこの生徒会役員の方が不可欠です、これからもよろしくお願いします」

「え、あ、うん……」

いきなりの熱い台詞。普段は冷静な小鳥遊のものとは思えず、どもってしまった九重。どうしたんだらう、と首を捻り、愛想笑いを浮かべて資料に目を落とした。

すこし喋りすぎたな、と小鳥遊は反省した。余計なことを言うな、と念じるかのように舌先を少し噛み、それから机上の資料を取り上げる。学園祭における詳細がまとめられた冊子だ。三日間に渡って行われる学園祭は、今年最後の催し物である。生徒会長という身分

に関係なく、彼はこれを成功させたかった。

だからこそ尾崎の存在が欠かせない。『F組』との勝負は彼にかかっていると言っても過言ではない。しかし、彼が職務を疎かにするならばそれ相応の処分を下さなければならぬ。すでに小鳥遊はその処分についても検討していた。

尾崎の下宿先に着いた千石はインターホンを押した。扉が少し開き、隙間から尾崎の顔が見えた。

「ああ、千石くんでしたか。どうかされましたか？」

「どうかって……。尾崎さんが無断欠席だったからこうして来たんですよ」

まるで悪びれていない口調に、さすがの千石も語気が荒くなった。だが当の尾崎は平然とした様子で、そうでしたか、と短く答えた。

「とりあえず中に入れてもらえませんか？」

「そうですね。ちょっと待ってください」

尾崎は一度扉を閉じた。チェーンを外す音がした。

先日と同じようにお邪魔することになったが、明らかに部屋の雰囲気違っていた。尾崎を中心として部屋中にマイナスの空気が蔓延しているようだった。

千石は何も言わずに窓を開け、何があったんですか、と尾崎に正面から向き合って尋ねた。

「……嫌われてしまったんですよ、白石さんに」

「はっ？」

意味が分からず千石は首を傾げた。しばしの沈黙の後、その意味するところをようやく把握することができた。

要するに、意中の異性に嫌われたことがショックだったということだ。

「そんなくだらないことで……」

「自分にとってはくだらなくなっておりませんっ！」

声を荒げる尾崎。これには千石も言葉を失った。普段は何を考えているか分からない怖さがあるものの、その点を除けば温厚で人当たりのいい尾崎。その彼がここまで短絡的な反応を示すのは珍しいことだった。

尾崎は深く息を吐き、すみません、と頭を下げた。

「……自分でもよく分からないのですが、どうしてか白石さんに嫌われてしまったから身体に力が入らないのです。こう、なんと言えはいいのかわかりませんが、心ここにあらずという感じでしょうか」

「それって」

この人は何を言っているんだ、と千石は呆れた。すぐに尾崎の間違いを指摘しようとしたが何故か言葉が出なかった。意外な一面を垣間見たことで、無意識にもっと楽しみたいという好奇心が働いてしまったからであった。

尾崎は千石がいるにもかかわらず室内を落ち着き無く歩き回り、途中で何度か頭をかかえた。白石に対して特別な感情が芽生えているということに関してはずでに自覚がある。それでも彼は、好き嫌いの感情で自分が心乱されるなどは微塵も思っていなかった。すべては自分が同年代と比べて遥かに達観しているという驕りからであった。

無意識の好奇心に動かされて無言だった千石。彼の責任感が彼を正気にさせた。

「尾崎にはやることがあるじゃないですか。白石さんと仲直りすることは一先ず置いておくとして、やることをやりましょうよ」

「ですが……」

「自分の仕事を投げ出すような人に、白石さんがいい印象を抱くとは思いませんよ」

千石の言葉は尾崎の心に突き刺さった。それも相当痛いところに。白石は才能に胡坐をかいている傾向が強いが、それでもやることはやる。選挙管理委員長としての職務を、文句を漏らしながらも遂行

していることは尾崎も知っていた。

その白石が今の自分を見ればどう思うか　考えただけで尾崎は血の気が引いた。これ以上嫌われることになればそれこそ二度と会話もできなくなる。そうなれば残りの高校生活は完全に暗雲に包まれてしまう。

急いでハンガーに掛けていた制服を取り、部屋着を脱ごうとした。その手を千石が止めた。

「今日はもういいです。明日までに気持ちを整理して、それから再起してください。大丈夫、尾崎さんならできます」

「……分かりました」

千石の計らいを、尾崎はありがたく思った。やはり彼は同年代と比べて達観している。それは自分と違い、大人になっているという意味だ。

尾崎の下宿先を後にした千石はそのまま自宅に帰った。その途中、携帯電話で小鳥遊に連絡をした。尾崎さんは風邪だった、と嘘の報告をして、いくつか確認を済ませてから通話を終えた。

小鳥遊と尾崎にとって最大の幸福は、その間に入ってくれる千石が非常に優秀であるということに尽きる。彼の人間性がなければ、小鳥遊一派は今頃空中分解していないに違いない。千石以外は、個人としては有能でも我が強く、協調性に欠ける人間が多いからだ。もはや千石は何かしらのかたちで報われてもいい。しかし見返りを求めないことも彼の長所だった。

そんな彼が報われる日が、いつか訪れる。そう遠くない未来に。

第八話

十一月八日金曜日。

千石との約束を守り、尾崎は登校した。灰乃から昨日の欠席について、あれこれと尋ねられたが何とか誤魔化し、ようやく放課後になって開放された。

一日ぶりの生徒会室に入ると、そこには小鳥遊たかなしと千石だけが詰めていた。尾崎は開口一番に無断欠席を謝った。その間、小鳥遊は無言で彼を見ていた。睨んでいるわけではないが、いい感情を抱いていないことは一目瞭然だった。

一通りの謝罪の言葉を聞き、小鳥遊は腰を上げた。

「体調不良でしたか。それなら仕方ありません。俺はこれから校風委員長との打ち合わせがあるのでこれで失礼します」

小鳥遊が生徒会室から出て、しばらくしてから千石は今朝から気にしていたことを切り出した。

「白石さんとは話せましたか？」

この質問に尾崎は苦笑した。その表情だけで答えは予測できたが、それでも千石は返事を待った。

「今日は朝から灰乃さんに付きまとわれていたので、休み時間には自由がありませんでした。白石さんには近づくこともできませんでした」

「そう、ですか……」

皮肉だな、と千石は哀れに思った。

これが俗にいう三角関係というやつか。今でこそ問題は起きていないが、このままこの関係が続くとは考えにくい。どう転ぶにせよ、何らかの進展があるはずだ。千石にはそう思えてならなかった。

「まあ、気長にいきましょう。時間が解決してくれるってわけじゃないですけど、焦りは禁物ですよ」

「ええ、そのつもりです。自分としてはこのまま終われません」

そう言った尾崎の口調は力強かった。この調子なら大丈夫だろう、と千石は胸を撫でおろした。昨日見せた情けない姿は、あれも彼の一部だが滅多に見せない一面でしかない。

これまで尾崎のことを理解しかねていた千石だったが、年相応の振る舞いもできるのだと知り、わずかだが親近感が芽生えた。

「しかし小鳥遊くんは怒っていましたね」

「いいですよ、少しくらい。俺が後で適当にフォローしておきますから」

「いつもすみません。小鳥遊くんのフォローは自分や黒河くんの仕事でもあるのに、ほとんど千石くんに押し付けてしまつて」

「子供の頃からですから、もう慣れましたよ」

笑って答えた千石。その表情に尾崎は救われたような気がした。

尾崎は生徒会室を辞して、先日までと同様に『F組』からの連絡に備えて職員室に入った。しばらくすると八神が姿を見せた。尾崎の姿を見つけた彼は、おい、と声をかけた。

「珍しいですね。どうかされましたか」

「いや、連絡があつたかどうか様子を見に来ただけだ」

そう言つて八神は尾崎の隣のパイプ椅子に腰掛けた。水瀬の机に置かれた電話機を睨み、白石と喧嘩したそうだな、と彼は言った。

「廊下で灰乃と偶然会つた。お前が構つてやらないから機嫌が悪かつたぞ。そんなに白石がいいのか」

「好みは人それぞれですよ」

「中学の時には白石に言い寄る男はいなかつたけどな」

八神は、白石や灰乃と同じ中学を卒業している。だからこそあの二人についてはそれなりに詳しくかつた。生徒会役員として尾崎親しくなる以前から、あの二人とよく一緒にいた彼についてはその存在を知っていた。よく分からない奴だ、と。

「そついえば涼木くんも同じ中学でしたね」

「……ああ、そうだ」

八神の表情が曇った。あまり触れられたくない話題だということ
は尾崎にも分かったが、ここは情報を得るために追求を続ける。

「どんな人でしたか、涼木くんは？」

「あいつは とにかく人望のある男だった。腕っ節が強いだけじゃなく面倒見もいい性格だったから常に複数の取り巻きがいた。俺と違って面もいいから何もなくても女が言い寄ってきたくらいだ」
「なるほど。それほどの人なら、『F組』があそこまで勢力を拡大できたことにも頷けます。彼のためなら校舎でも占拠するということですか」

人にはそれぞれ生き方がある。不良が徒党を組んでいることも生き方の一つだ。それを否定する権利は誰にもない。だが悪事を働くとなれば話は別。全校生徒が心待ちにしている学園祭をぶち壊すような振る舞いをする連中には、たとえ彼らに何らかの主張があるとしても許すことはできない。

尾崎はパイプ椅子の下で右手を強く握った。

「あんな馬鹿じゃないはずだ」

「えっ、何ですか？」

右手に集中していた尾崎は聞きそびれてしまった。聞き返すと八神は今まで以上に深刻な表情になった。ゆっくりと彼は言葉を選びながら自分の意見を口にした。

「確かに、涼木は人望が厚い。あいつに命令されればそれこそ地獄まで付いていく奴もいるだろうよ。だがな、あいつは暴力や実力行使を何よりも嫌う男だ。自分よりも弱い奴には高圧的にならない。まして南校舎を占領するなんて信じられん」

「つまり？」

「本当にこの事件の首謀者が涼木かどうか怪しいってことだ」

この八神の見解に、尾崎は寒気がした。仮にそれが正しければ、これまでの努力は水泡に帰す。さらには一から対策を練り直さなけ

ればならない。学園祭はすでに二週間後に控えている。物理的に相
当厳しいと言わざるをえない。

「もしも、そうなら……、それは大事ですよ。ですが、電話の声は
確かに涼木くんのものでした」

「あいつが絡んでいることは間違いないとして、誰かがあいつを唆
した。それも考えられるだろ」

「いや、ですが……」

「あくまで俺の考えだ。根拠となるのは涼木の人柄だけだ。俺があ
いつを見誤っていたってこともある。証拠は無い」

言葉を濁す八神。しかし口調とは裏腹に、その表情は確信を得て
いるように見えた。物的証拠は無いが、直感や感覚で見抜いている
ようだった。

当然尾崎もそれを無視することはできない。今すぐにも小鳥遊
へ報告して指示を仰ぐべきだと思った。だがそれははばかりだった。

『F組』との交渉については自分が任されており、いちいち上に確
認するのは渉外としての名折れになる。そしてなにより、彼自身
は自覚していなかったが、心の底で手柄を得たいという願望が働い
ていた。

これで白石からの信頼を取り戻せるのではないかと。

尾崎は、このことは内密に、と八神に釘を刺した。少し戸惑った
八神だったが、意志の強さを感じさせる尾崎の眼差しに頷くしかな
かった。

その日も『F組』からの連絡は無かった。

第九話

十一月九日土曜日。

尾崎匠は生徒会室で読書をしながら寛いでいた。生徒会室に来る前に寄った図書室で、図書委員長から進められた本だったのだが、これが案外のめりこんでしまった。

ページをめくる手がとまらない。彼以外に誰も生徒会室にいないことが余計に読書欲を増幅させていた。気がつけばすでに正午。本は数ページを残すのみとなっていた。

このまま読破してしまうか、それとも昼食を先に済ませるか。そんなことを考えていると、生徒会室の扉を叩く音がした。どうぞ、と応答すると、珍しい男が姿を見せた。三年生の南波陽平だった。

「何だ、お前だけが、尾崎」

「その言い方は、誰かを探しているということですか？」

「ああ、そうだ。青島の奴を知らないか？」

これも久しく聞かない名前だった。先代の生徒会長にして、現在は特命係の代表を勤める女。そういえば先日、特命係の部屋を訪れた際にも姿を見なかった。

尾崎が、いえ、知りません、と返事をする、南波は渋い顔をした。

「実は、ここ最近家にも帰っていないらしくてな。親御さんから俺に連絡があつたんだ」

「それは心配ですね。自分も知り合いに尋ねてみます」

「いや、それは控えてくれ。上手く説明できないが、あいつが何も言わずにいなくなるなんて一度なかった。だからあまり騒ぎを大きくしたくない」

それならば何故、自分には聞いたのですか、と尾崎は不思議に思つて尋ねた。すると南波は、お前はよく分からない奴だからな、と答えた。

「毒にも薬にもならないって言うけど、お前の場合は、使い方次第で毒にも薬にもなる。どうだ、俺は『F組』の件について手伝う。その代わりに、お前は極秘に青島のことを探してくれ。もちろんお前はお前の仕事を優先してくれ。暇だったら探してくれればいい」

これは尾崎にとつて魅力的な提案だった。三年生でも五本の指に入る有力者たる南波を味方にすればいろいろと動きやすい。『F組』との交渉においては、いかに多くの校内組織を引き込めるかが重要となる。

これはまだ生徒会役員だけが知る情報だが、『F組』以外の非公認組織が怪しい動きを見せているのだ。それだけでなく、広報委員長・三条頼人が三年生最後の敵対勢力として潜伏しているという噂がある。

どちらも確たる証拠がないために何かしらの処置を施すことはできない。しかし特に後者については生徒会長・小鳥遊^{たかなし}としても警戒していた。三条は入学時から次期生徒会長候補の最右翼としてすでに頭角を現していた。同期に南波や青島がいなければ間違いなく生徒会長として一時代を築いたと今でも語り草になっている。

「まあ、そう深く考えるな。俺はこれで帰るから、適当にやってくれ。学園祭は俺として開催しなきゃ、命が危ないからお前の手伝いはするさ」

「なるほど、やはり竜崎さんは不機嫌ですか」

「そんな生易しいものじゃないって。昨日は化学室で小内刈りから袈裟固めだぜ。部員はびびって助けてくれないから、今日になつても背中が痛い」

情けない表情を装って背中を撫でる南波。尾崎は苦笑しながら、お大事に、と慰めの言葉をかけた。

そのまま生徒会室を後にしようとして扉に手をかけたところで振り返り、南波は言うべきか悩んでいたことを口にした。

「ああ、そう言えば」

「はい、どうしました」

「青島がどうしていなくなっただかについて心当たりがあるんだが
まあ、及川のことだ。お前も覚えているだろう。去年の今頃だっ
たからな」

「ええ、忘れるはずがありません」

ちようど去年の今頃であった。冥栄高校で一人の男子生徒がその
命を散らせた。生徒の名前は、及川繁。当時の生徒会長にして、青
島の恋人でもあった男だった。

死因は高所からの落下。南校舎屋上からだった。フェンスが取り
付けられたのはその後だった。

警察は事故死だとして片付けたが、青島はそれを認めなかった。
彼の意志を継ぐ。そう宣言して彼女は生徒会長となったのだ。

「気丈に振る舞っていてもあいつは相当心を病んでいたに違いない。
それが生徒会長の座から引きずり降ろされて、ヤケクソになったの
かもしれない」

「ですが今更という感じも否めません」

青島が小鳥遊によって生徒会長の座から引きずり降ろされたのは、
今年の五月。すでに半年が経とうとしている。尾崎としてはどうし
てもそのことに違和感を覚えざるを得なかった。

しかし南波はかぶりを振った。

「心の痛みっていうのはそうじゃないんだよ。平常心に戻ったと思
いきや、ある日突然にフラッシュバックする。薬物中毒者みたいな
ものさ。そうやって一生引きずることになるんだ」

淡々とした口調だったが南波は確実に憤っていた。それが自殺し
た及川に対する怒りなのか、それとも事故に見せかけて彼を死に追
いやった者に対する怒りなのか尾崎は判断できなかった。こればか
りは彼らによほど近い人間でしか判別できない、いや容易に判別
してはいけないことだった。

南波の横顔を見て、尾崎は何も言葉が出なかった。

電話が鳴ったのは、尾崎は昼食を済ませてすぐのことだった。

「もしもし、尾崎です」

水瀬から取り次いだ受話器を手に、尾崎はそう言った。すぐに返事があつた。

「しばらくだな。すまん、いろいろとこつちも混乱していてな」

「いえ、お気になさらず。涼木くんでも統率を乱すことがあるんですね」

混乱ということは『F組』も一枚岩ではないのだろうか。尾崎はこれに期待したが、すぐにそう考えるのは軽率だと思った。涼木のカリスマ性は『F組』に限られてはいるが絶大であり、例え彼の部下が混乱しといえどもそれは彼に対する反抗ではないだろう。

ならば混乱とはどういうことなのだろうか。それを探るには会話をするしかない。

「そつちはどうですか。生活は快適ですか」

一呼吸置いてから涼木は答えた。

「悪くない。事前に食料を準備していたから食うには困らない。寝袋もある。お湯はポットで湧かせる。難点は、シャワーが水だということ、見張りが夜中でも外せないということだな」

なるほど確かにその難点は仕方がないだろう。しかし事前に必要なものをすべて用意したことに関しては、尾崎としても涼木の手腕を認めざるを得なかった。

能力の使い方を間違ってますよ、と思いつながら尾崎は続ける。

「もう一週間を越えましたね。いつまで続けるつもりですか」

「こつちの要求が通るまでだ」
「それについては呑むことができないと以前にも説明したはずですが」

「強気だな。南校舎が解放されなければ学園祭は開催できないぞ」

「いざとなれば警察を頼りますよ」

「そんなことになれば冥栄は都内に恥をさらすことになるぞ。青春

できる進学校の看板がぶち壊しになってしまう」

他人事のように言う涼木。それを聞いて尾崎は彼の覚悟を知った。この男は本気で学校の仕組みを変えるつもりだと。そのために生徒会を乗っ取るつもりだと。そして成績至上主義をぶち壊すつもりだと。

冥栄高校は確かに素晴らしい学校である。どこよりも青春できるという評判は本当で、他校なら懲罰になるだろう行為も青春のためならば許される。それだけに毎年の入試倍率は都内最高をほこる。

しかしあくまで進学校。成績を残せない生徒に対する処遇は厳しい。特に普通科では成績によって毎年度のクラスが決められるので、何組かによって一目で成績が知られてしまうのだ。『F組』はその最底辺。おのずと劣等感に苛まれて退学する生徒も多い。

これは青春を疎外するものだとこれまでにも何度か問題になった。だが青春とは勉強と両立すべきものだという校風の前に、一度もそれが改変されたことはない。むしろ尾崎としてはそれが見向きもされない問題になっていると見えた。このまま風化する一方だとすら思っていた。

ならば涼木の行っていることはまるつきり間違いでもないだろう。現に彼ら『F組』の思想に賛同する生徒も存在する。小鳥遊たかなしが生徒会長となつてからはその勢力が拡大したとも言える。

「お前たちには悪いが、俺は負けられない。勉強ができないのは俺たちの自己責任だとしても、目に見えない差別とは戦わなければならない。今でこそ俺たちは左翼に見られても、これが将来は正義だと認識される」

仮に涼木が彼の理想通りに冥栄を変えれば、さらに生徒たちは青春を謳歌できるだろう。しかしそうなれば勉強が疎かになり、冥栄の二つ看板のうち一つが崩壊する。

今こそが至上とは思っていないが、尾崎は簡単にバランスを崩すべきではないと思っている。だからこそ止めなければならぬ。

「ですが涼木くんのアプローチの仕方は間違っています。短絡的で

す。改革とは本来、時間をかけるものです」

「その時間が足りないんだ。今しかないんだ」

受話器越しにも伝わる熱気。それに尾崎は妙な感覚を抱いた。

時間が足りないとはどういうことだろう。涼木は二年生。まだ一年を残している。先ほどの台詞は、まるで三年生のようだった。

尾崎はある仮定に辿り着いた。

「ちょっと待つてください。時間が足りないとはどういうことですか。まさか誰か三年生がいるのですか」

仮定に辿り着いた瞬間、それが口から漏れてしまった。しくじった、と思ったときはもう遅かった。

「……悪いが、今日はこれで終わりだ。また連絡する」

「待つてください」

必死に引き留めようとした尾崎。しかし無情にも相手は受話器を置いてしまった。待機音だけが聞こえる。

また失敗してしまった。これで二度目。学園祭までは残すところ十日と少し。事前の準備を考慮すれば、もう猶予はほとんどない。

これまでのことから考えて、残すチャンスはあと一回だろう。

尾崎は何も言わず受話器を置いた。教師たちは遠慮することなく彼を見ていた。中には、もう駄目だろう、と顔に書いてある者までいた。

頼むから止めてください、と尾崎は願った。自分はそんなプレッシャーに耐えられるほど強い人間ではない。

唯一の救いは、生徒会顧問の水瀬が何も言わずにそっとしてくれたことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3824m/>

フリーユニオン

2012年1月14日15時06分発行